青森県埋蔵文化財調査報告書　第258集

山下遺跡・上野尻遺跡

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う青森市宮田地区の遺跡発掘調査報告—

1999年3月

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会では新総合運動公園建設事業に伴い、平成７年度から青森市宮田地区の埋蔵文化財調査を進めて参りました。広大な運動公園建設用地内には、複数の遺跡が所在しており、遺跡の時期も縄文時代から古代、中世におよんでおり、当地域における人間活動の歴史が古くから継続していることを示しています。

本書はこれまで継続してきた、宮田地区の埋蔵文化財調査についての、初めての報告書です。収録しております上野尻遺跡は広大な面積のうち、ごく一部を調査したにすぎませんが、遺跡の概要を把握する上では重要な報告であります。また、もう一つの収録遺跡である山下遺跡は、平安時代の集落が沖積地の微高地上に営まれており、当時の低地開発のあり方を示す調査例といえましょう。

本書で明らかにされた事実をもとに今後更に多くの事実が明らかにされ、この地域の歴史が解明されることを期待しております。

最後に、今回の発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力を賜った関係各位に対して、厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

青森県教育委員会

教育長　松　森　永　祐

例　　言

1．　本報告書は、青森県新総合運動公園建設に伴い、平成９年度に発掘調査を実施した青森市宮田地区山下遺跡・上野尻遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は末尾に記した。ただし、遺構内出土遺物は、土器・土製品を中村哲也が、石器・石製品・木製品・鉄製品を杉野森淳子が執筆した。遺構に関するその他の記載は末尾の執筆者名による。

3．　出土した資料の自然科学的同定・分析等は下記の諸氏・諸機関に依頼した。

　　石器の石質鑑定　　松山　力（八戸市文化財審議委員）

　　木材・炭化材の同定　　パリノ・サーヴェイ株式会社

　　放射性炭素年代測定　　木越　邦彦（学習院大学教授）

4．　本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図の「浅虫」「青森東部」「折紙山」「東岳」である。

5．　本書を編集するに当たり次の方々・機関にお世話になった。

　　秋本信夫　　小笠原善範　　小田野哲憲　　鎌田勉　　工藤清泰　　高橋與右衛門　　中村直美　　羽柴直人　　藤井安正　　星雅之　　村木淳　　女鹿潤哉　　日下和寿　　角張淳一

凡　　例

1　遺構の表記は青森県埋蔵文化財調査センターで定めた略号と通常の呼称（たとえば、第１号住居跡、第３号土坑など）を併用している。当センターで定めた略号は以下の通りである。

ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝跡	ＳＥ　井戸跡	ＳＩ　住居跡
ＳＫ　土坑	ＳＮ　焼土遺構	ＳＱ　配石・集石遺構	ＳＲ　土器埋設遺構
ＳＴ　捨て場	ＳＶ　溝状土坑	ＳＸ　その他	

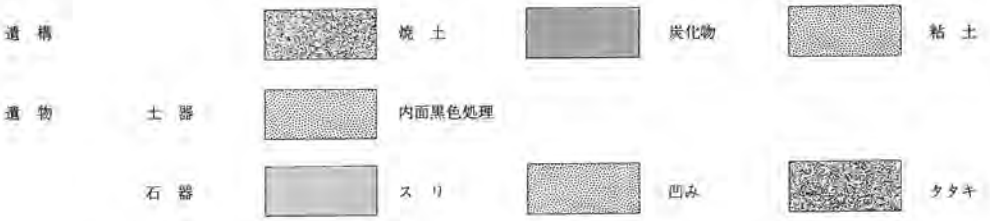
ただし、発掘調査の時点では、当センターの標準的な略号が定められておらず、現場独自の略号を用いていたため、注記については上記の略号と異なるものが混在している。上記略号との相違は次の通りである。

住居跡　Ｈ　　配石・集積　ＳＸ　　焼土遺構　ＳＦ　　土器埋設遺構　ＳＸ

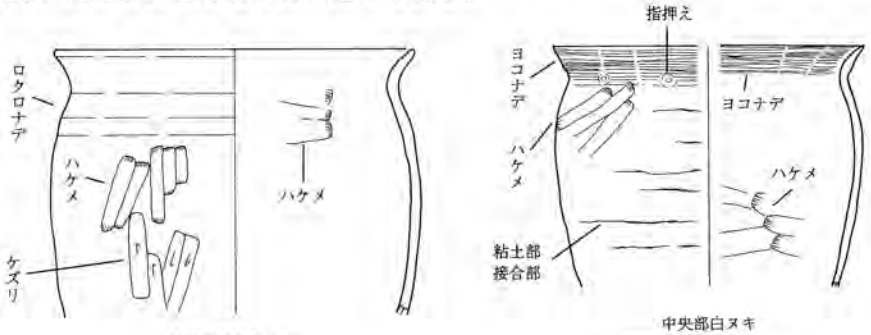
2　挿図中の北方位は、座標北である。

3　挿図の縮尺は、各挿図にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。

4　挿図中で用いたスクリーントーンの指示は次の通りである。これ以外は、各挿図で指示してある。



5　挿図中で用いた土器の表現は下図の通りである。



6　土師器・須恵器に用いられるヘラナデ・ケズリについては、砂粒の移動があっても粘土の移動痕が見られるものはヘラナデ、粘土の移動痕が無く砂粒の移動が認められるものはケズリとした。

7　本書における石器の分類は以下の通りである。

石器の分類

石鏃
- Ⅰａ　無茎石鏃、基部直線
- Ⅰｂ　無茎石鏃、基部に抉り
- Ⅱａ　有茎石鏃、基部直線
- Ⅱｂ　有茎石鏃、基部に抉り
- Ⅲ　棒状、尖状石鏃

敲磨器類
- Ⅰ類　主要痕跡が研磨のもの（磨り石）
  - ａ　礫の一部を平坦に磨ったもの
  - ｂ　礫全体を棒状に磨ったもの
  - ｃ　その他の形状
- Ⅱ類　主要痕跡が敲打のもの（敲き石）
- Ⅲ類　主要痕跡が凹みのもの（凹み石）
- Ⅳ類　使用痕跡が複合しているもの

二次加工剥片
- ａ類　定型石器に相当するもので器種が不確定なもの
- ｂ類　一定の刃部を有するもの（削器・掻器類）
- ｃ類　部分的に連続した加工が施されているもの
- ｄ類　不連続な加工が施されているもの

剥片
- ｅ類　定型石器の素材となりうるもの
- ｆ類　その他（ｅ・ｆ類以外）
- ｇ類　礫面を有する剥片

目　　次

第1編　調査の概要

第1章　調査要項 …… 3

第2章　調査に至る経緯 …… 4

第3章　調査方法と調査の経過 …… 4

第1節　調査の方法 …… 4

第2節　調査の経過 …… 7

第4章　地形・地質の概要と土層序 …… 8

第2編　山下遺跡

第1章　基本層序 …… 17

第2章　検出遺構と出土遺物 …… 17

第1節　縄文時代の遺構 …… 17

第2節　平安時代の遺構 …… 25

第3節　中世以降の遺構 …… 55

第4節　時期不明の遺構 …… 60

第3章　遺構外出土遺物 …… 65

第1節　土器 …… 65

第2節　石器 …… 70

第4章　まとめ …… 77

第1節　平安時代の土器について …… 77

第2節　遺構・遺物について …… 77

第3編　上野尻遺跡

第1章　基本層序 …… 85

第2章　検出遺構と出土遺物 …… 85

第3章　遺構外出土遺物 …… 88

第4章　まとめ ……108

第1節　B区出土土器について ……108

第2節　B区出土石器について ……109

付編　自然科学的分析

1．宮田地区山下遺跡から出土した木製品・炭化材の樹種　パリノ・サーヴェイ株式会社 ……117

2．放射性炭素年代測定　木越　邦彦 ……120

写真図版 ……121

抄録 ……141

第1編　調査の概要

第1編　調査の概要

第1章　調査要項

1　調査目的

平成9年度新青森県総合運動公園建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市宮田地区山下遺跡・上野尻遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施し、その記録保存を図り、地域の文化財の活用に資する。

2　発掘調査期間

上野尻遺跡

平成9年7月1日から平成9年8月31日

山下遺跡

平成9年8月25日から平成9年10月31日

3　遺跡名および所在地

上野尻遺跡（県遺跡台帳番号　01278）

青森市大字矢田字上野尻59、外

山下遺跡（県遺跡台帳番号　01277）

青森市大字宮田字玉水109、外

4　発掘調査面積

上野尻遺跡　3,800㎡　　山下遺跡　4,500㎡

5　調査委託者

青森県土木部

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

青森市教育委員会　東青教育事務所

9　調査員等

調査指導員　市川　金丸（青森県考古学会長）

調査協力員　池田　敬（青森市教育委員会教育長）

調　査　員　松山　力（八戸市文化財審議委員会委員　地質学）

遠藤　正夫（青森市教育委員会埋蔵文化財対策室長　考古学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課

課長　鈴木　克彦　　主事　中村　哲也　　杉野森　淳子

調査補助員　小田桐　良　　田村　富貴子　　本荘　瑞穂

葛原　絵里奈

第２章　調査に至る経緯

平成７年11月、県総合運動公園移転計画に伴い、青森市宮田地区が建設候補地となり、埋蔵文化財包蔵地の有無について県土木部より県教育委員会文化課に照会があった。これをうけて、文化課では分布調査を県埋蔵文化財調査センターに依頼した。

平成７年10月、当センターでは当該地域の分布調査を実施し、７箇所の埋蔵文化財包蔵地（下記５遺跡及び玉水（３）遺跡、玉水（４）遺跡）確認した。平成７年11月新総合運動公園建設予定地は宮田地区と決定した。この際、上記の玉水（３）・（４）遺跡は建設予定地範囲外となった。

これをうけて県土木部より県文化課に範囲確認調査の依頼があり、当センターが範囲確認調査を実施することとなった。平成８年10月28日から同年11月29日まで、新総合運動公園建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の範囲を確認するため試掘掘調査を実施し、玉水遺跡、山下遺跡の南半、上野尻遺跡の大半の遺跡範囲を確定し(下表参照)、それぞれ縄文時代前期、縄文時代後期・平安時代、縄文時代後期の遺跡であることが明らかとなった。この試掘調査の際、用地買収交渉の進行中であったが、地権者から調査の御承諾・御協力を頂いた。

平成９年度は、まず米山（１）遺跡・米山（２）遺跡の範囲確認調査、上野尻遺跡の一部範囲確認調査から着手した（下表参照)。この結果、米山（２）遺跡は縄文時代後期の集落であることが判明した。範囲確認調査が終了し次第、上野尻遺跡の市道矢田２号線付け替え道路部分の本調査、山下遺跡南半の本調査を実施した。山下遺跡北半部は平成10年度以降に範囲確認調査を行うこととなった。また、平成９年度の発掘調査終了時点での遺跡確定範囲・調査状況は図２の通りてある。

遺跡名	調査年度	調査期間	試掘対象面積	調査面積	遺跡面積
玉水（２）	平成８	10.28～11.29	28,000㎡	1,300㎡	3,600㎡
山下（南半）	平成８	10.28～11.29	62,000㎡	6,300㎡	4,200㎡
上野尻	平成８	10.28～11.29	93,600㎡	5,760㎡	17,100㎡※
米山（１）	平成９	4.27～ 6.30	合　計	1,224㎡	0㎡※※
米山（２）	平成９	4.27～ 6.30	135,060㎡	2,699㎡	61,200㎡
上野尻	平成９	4.27～ 6.30	93,600㎡	700㎡	30,800㎡※※※

※　平成８年度調査終了時点。　※※　範囲確認調査の結果、少なくとも用地内に遺跡本体は存在しないことを確認。　※※※　平成８・９年度調査結果の合計。

第３章　調査方法と調査の経過

第１節　調査の方法

グリッドの設定　新総合運動公園建設用地は東西約１kmの広大な地域で、この中に複数の遺跡が所在する。これらの遺跡の相互の位置関係を示すため、新総合運動公園用地全体に共通のグリッドを設定する必要があった。幸い、用地内にはⅡ級・Ⅲ級の測量基準点が複数箇所設定されていた。そこで、範囲確認調査開始時に、グリッドの軸を公共座標の軸にあわせることとした。グリッドは４m単位と

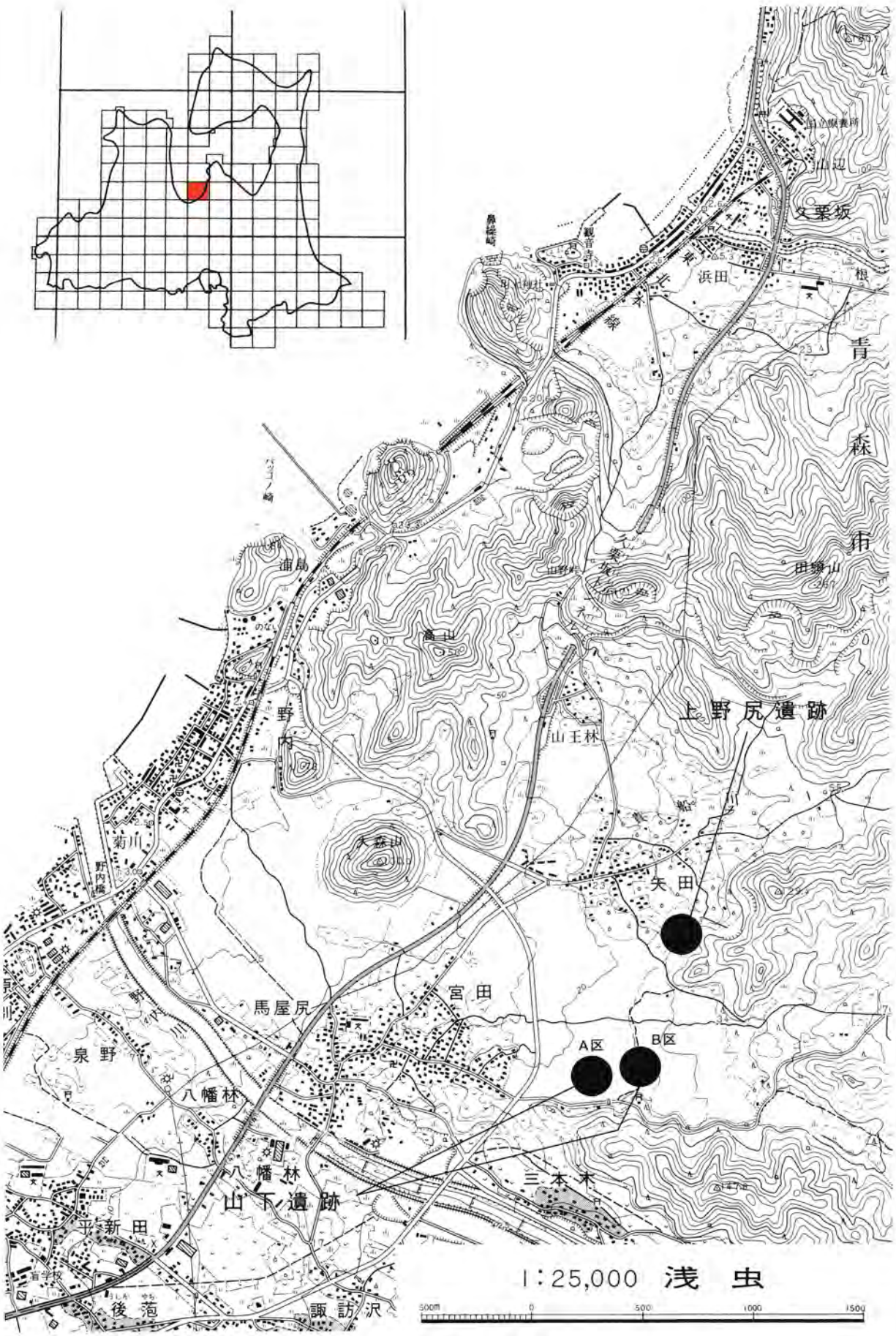


図1　遺跡位置図

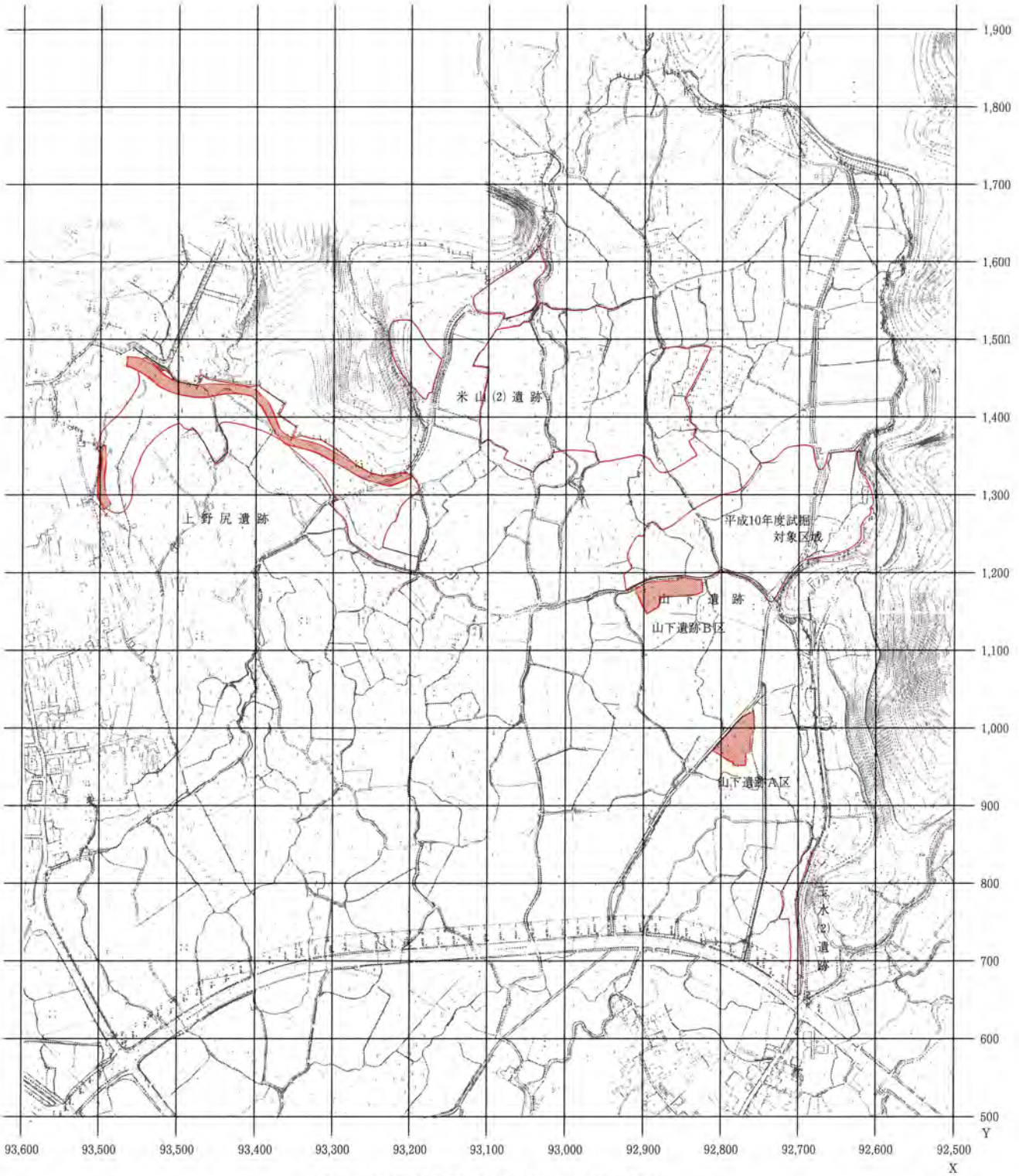


図２　宮田地区全体図（Ｓ＝1/7,500）

した。まず、平面直角座標第Ｘ系のＸ＝９２，６８０Ｙ＝６４４をⅡＡ—３０と呼称し、座標Ｘ軸はローマ数字とアルファベットＡ～Ｔの組み合わせで、Ｙ軸は算用数字で表した。Ｘ軸は正方向へ座標値が４ｍ増えるごとにＩＡ、ＩＢ…のごとくアルファベットが順次進み、ＩＴまで進行すると、次のグリッドはローマ数字が繰り上がりⅡＡとなる。Ｙ軸は正方向へ４ｍ進むごとに１増える。グリッドの呼称は南西隅のグリッドライン交点を用いて表した。

遺物包含層の掘進と遺物の取り上げ　表土・耕作土は重機により除去した。遺物包含増の掘進に当たっては分層発掘を基本とした。基本層序は基本的にローマ数字で表記した。ただし、水性堆積による土層は算用数字などを用いて別途表記した場合がある。遺物は基本的にグリッド単位・層単位でとりあげた。

遺構の調査　遺構の調査は土坑は2分法、住居跡は4分法を基本とし、その他の遺構は大きさによって適宜いずれかを選択した。遺構内の堆積土は算用数字を以て表記した。遺構名は種別ごと、検出順に付し、調査後攪乱と認められたものや別種の遺構となったものは欠番としてあつかった。遺物は層位ごとに取り上げることを基本とし、必要に応じて三次元の位置を記録して取り上げた。

実測図の作成　遺構実測は簡易遣り方法を採用した。実測図の縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10を採用した。ただし、山下遺跡ではトータルステーション（シン技術コンサル社製「遺跡管理システム」）による実測を実施し、簡易遣り方と併用した。

写真撮影　写真撮影は３５㎜モノクロフィルム（ＩＳＯ４００）と同リヴァーサルフィルム（ＩＳＯ１００）を使用し、補助的に３５㎜カラーネガフィルム（ＩＳＯ１００）を使用した。

第2節　調査の経過

５月２日、機材搬入。上野尻遺跡の前年度範囲確認できなかった区域の範囲確認調査を開始する。５月１５日、上野尻遺跡の範囲確認調査と並行して米山（２）遺跡の範囲確認調査を開始する。６月上旬、米山（２）遺跡の範囲が当初予想範囲より広がる可能性が認められる。６月１８日、米山（１）遺跡範囲確認調査開始。６月２４日、米山（１）遺跡の調査終了。遺構は検出されず、遺物も流れ込みと判断された。上野尻遺跡本調査開始まで米山（２）遺跡拡張範囲の調査を行う。７月１日上野尻遺跡付け替え道路部分本調査開始。Ａ区より調査を行うが遺構は検出されず、遺物も散在する程度。８月中旬、Ｂ区の埋没した沢が縄文時代後期の小規模な捨て場として利用されていることが判明。８月２５日、上野尻遺跡調査と並行して、山下遺跡の調査を開始する。８月３１日、上野尻遺跡調査終了。９月上旬、山下遺跡Ａ区で遺構検出。中世以降かと思われる溝、平安時代の住居跡を確認。９月下旬、遺跡範囲が広がることが判明。１０月上旬、重機により表土を除去し拡張範囲の調査を開始する。１０月中旬、さらに遺跡範囲が拡張することが判明し、再度重機により表土除去。１０月３１日、調査終了。　（中村　哲也）

第４章　地形・地質の概要と土層序

１．山下・上野尻遺跡の位置と周辺の地形

両遺跡は青森市役所庁舎付近から東北東へおよそ８（山下遺跡）～９（上野尻遺跡）㎞、直近の青森湾岸からは南東～東南東へ2.3～2.6㎞の区域に広がっている。山下遺跡の南南西端から上野尻遺跡の北北東端までの距離は約１㎞で、発掘調査はこの区間の幅200ｍ程度の範囲内で実施された。

西を津軽山地東麓、南から東を八甲田連峰を含む脊梁山脈中軸部の北西麓に限られた青森湾南岸には、東西およそ15㎞、奥行およそ９㎞の広い沖積平野が開け、青森平野と呼ばれる。両遺跡の立地する青森平野の東北端部は、砥取山山塊（図２内の諏訪沢付近まで南南西方からのびる山体の仮称）北部の稲山から北に延ばした線で、青森平野主部と分けられる。青森平野主部の後背地は、西縁を入内川に限られた北八甲田連峰山麓の丘陵地（洪積台地）である。一方、青森平野東北端部の後背地は野内川流域、およびその北方の小河川流域山地である。

図２は、上野尻遺跡と山下遺跡の中間地点をほぼ中央に置いた、東西5.5㎞、南北４㎞の地域の地域区分図で、青森平野東北端部の大部分が含まれている。区分は新旧の２万５千分の１地形図の読図によったが、台地・沖積地の人為的改変が著しく、確度を欠く部分があることを付言しておく。

沖積地を下位面・中位面・上位面の３面に分け、洪積台地は下位面・上位面の２面に分けた。洪積上位面には高度にかかわりなく、山地の急斜面下に続く谷底の緩傾斜地をも含めた。

沖積下位面は、高度（海抜）10ｍ以下の部分（野内低地帯とする）と、これに続く河川・沢沿いの低地帯である。野内低地帯は幅1.2～1.5㎞で、ほぼ縄文海進時に海面下にあった部分に相当すると思われる部分である。沖積中位面は、野内低地帯に接する部分では、下位面との間に明確な段丘崖をもっていないが、傾斜の遷移と、幾つかの谷の出口の位置、削剥の新しい谷頭などで区別した。沖積上位面は、野内川流域より北の宮田地区から貴船川南側の矢田地区までの間にあり、背後の沖積下位面に連続する小規模な複合扇状地性地形面である。その高度は末端部が15ｍ前後、洪積低位面との境界が25～30ｍで、沖積中位面より勾配がやや大きくなる。

沖積下位面は、扇状地性堆積物で構成されるが、沖積上位面との間に明確な段丘崖をもっていないが、その縁辺部の傾斜がやや大きいこと、一部に洪積世末期の降下火山灰を載せていることなどで区別した。洪積上位面は高度がほぼ50ｍ以下で、明瞭な段丘崖を欠くところがほとんどであるが、縁辺部の勾配はやや急になる。面高度が増すにつれ傾斜を増し、直接急傾斜の山体に接している。

貴船川流域とこれに続く野内低地帯の後背山地は、東方の東岳山塊、北方の片越山山塊とその西端部を取り巻くように錐状の孤立峰群（径150～500ｍ、標高40～130ｍ）で、いずれも急傾斜地である。野内川中流から支流の小川目沢・大清水沢と、北方の貴船川で囲まれた、東岳（頂上は両遺跡の東方ほぼ８㎞、標高684ｍ）を中心とする山地を東岳山塊。また、貴船川と根井川とに挟まれた、上野尻遺跡の北北東約4.5㎞の片越山（標高295ｍ）から田頭山（標高267ｍ）を経て、高山（標高153ｍ）へと続く稜線（尾根）を軸とする山地を、片越山山塊と呼ぶ。

東岳山塊の東縁からは、３つの山稜が西方の沖積地・台地に向かって突き出している。根元（幅がくびれる部分）から末端までは、北側の山稜が約３㎞、南側の山稜が3.5㎞、間に挟まれる山稜は２㎞たらずである。北側山稜の最大幅は1.5㎞、最高部は根元近くの石山（標高189ｍ）である。南側山

稜の幅は根元では200m（尾根の標高約30m）たらずであるが、最大幅は1.1kmと広がり、中央部の標高は147mにもなる。中間の山稜は最大幅が160mで３つの山稜の中ではもっとも狭いが、根元近くの峰の標高が140m余と高い。片越山山塊からも幾つかの短い山稜が南側の貴船川北岸の谷底平野に向けて突き出し、台地・沖積地を区切っている。

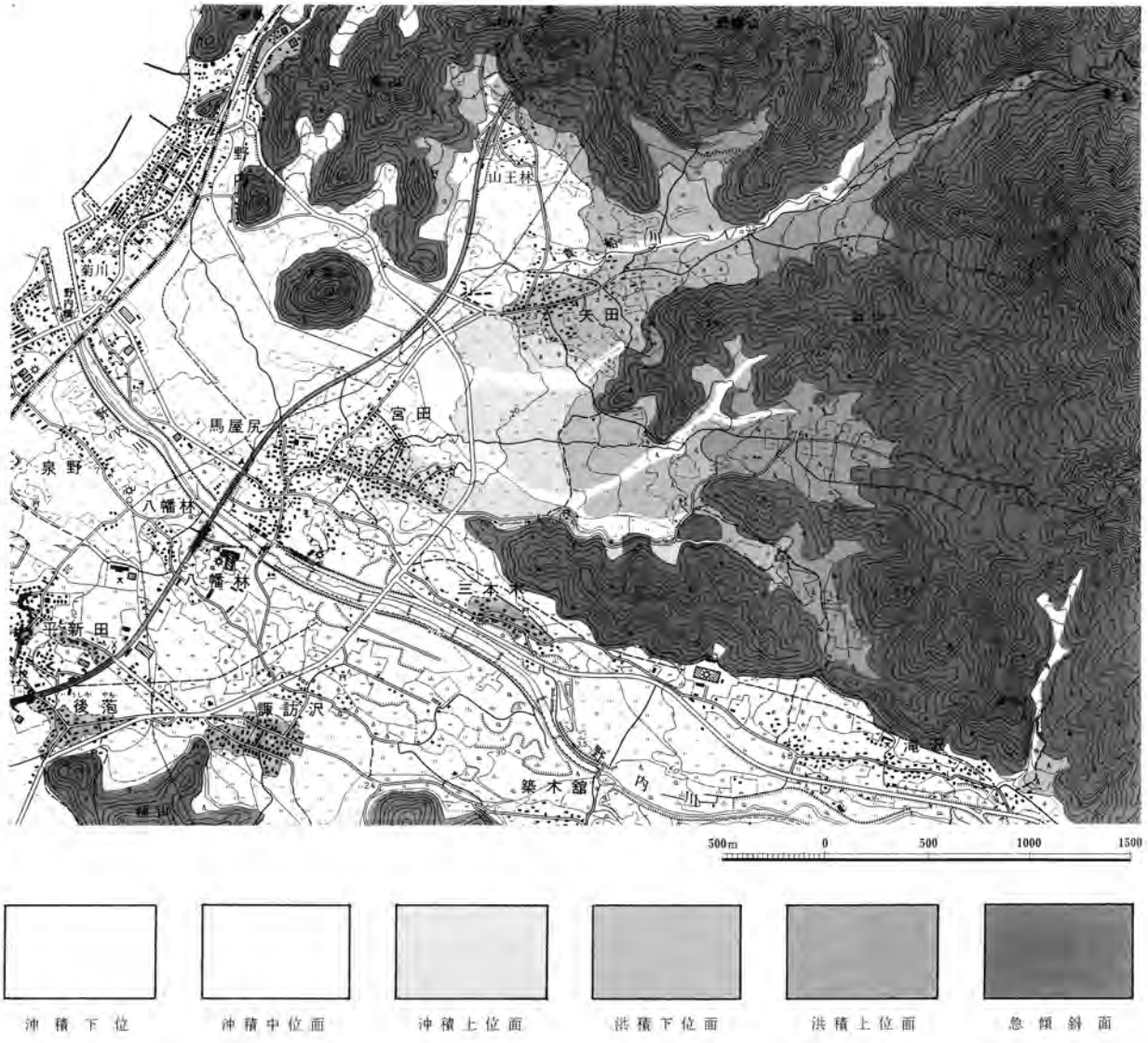


図３　遺跡付近の地形区分図

２．地質の概略

両遺跡周辺を取り巻く山地の大部分は、新第三紀の凝灰岩類・頁岩などを主とする堆積岩類や、流紋岩・安山岩などの火山岩類で、一部に先第三紀の堆積岩や花崗閃緑岩が分布する。

山塊ごとに見れば、南方の野内川南側の山塊群は頁岩・砂岩・凝灰岩類、東方の東岳山塊から西に突き出す山稜群は安山岩・凝灰岩類、東岳山塊はチャート・粘板岩・石灰岩・花崗閃緑岩などの先第三紀の岩石と第三紀の安山岩・凝灰岩類、北方の片越山山塊は泥岩・凝灰岩類などの堆積岩と安山岩類、片越山山塊の西端部の高山付近と西縁を取り巻く弧峰群は安山岩類で構成される。なお、根井川

北方の浅虫付近の海岸よりの山地末端部は流紋岩で、浅虫沖の湯ノ島は石英安山岩である。

沖積地は礫・砂・泥などの未固結堆積物が主体である。洪積下・上位面下の構成層は、礫・砂などで構成される土石流を主とする地層で、粘土質褐色風化火山灰層（いわゆるローム）が被覆し、地表直下には黒色土が発達している。

3．土層序と遺跡の基盤層

（1）上野尻遺跡

この遺跡の調査箇所は、A．矢田の洪積下位面の平頂部南半部、B．Aの南南東部の山地急斜面下で、野内低地帯に出口をもつ浅い小谷の谷頭の底部、C．Bの南南西方約150m付近の山地急斜面下の緩傾斜地の3箇所である。それぞれの土層序は、Aが洪積台地下位面を代表する層序を持つのに対し、Bはおもに水底堆積物、Cはほぼ直接に第三紀基盤岩にのる土層で、様相を異にしている。

Aの土層は上から、Ⅰ～Ⅳの4層に大別される。

Ⅰ層は、厚さ8～25cmのやや粘性に富む黒褐色(10YR2/3)土層である。

Ⅱ層は、厚さ16cm以下の、部分的に褐色（10YR4/4）ロームの小塊（径1cm±）が混入する黒色（10YR2/1）土層で、平頂部南側の調査区域の4分の1ほどに断続的に分布するに過ぎない。この土層は縄文時代晩期から奈良・平安期に形成されたものと思われる。

Ⅲ層はⅢａ～Ⅲｈの8層に区分される。

Ⅲａ層とⅢｂ層はⅢｃ層以下の土層が基盤の凹部に下がる部分を埋める土層で、側方に尖滅する。

Ⅲａ層は、厚さ10～16cmの灰黄褐色（10YR4/2）土層で、部分的に上位の黒色土塊を含み、また径1cm±のローム質土塊が散在している。

Ⅲｂ層は、厚さ20cmのにぶい黄褐色（10YR4/3）土層を基質とする礫層で、小石程度の円礫や角礫を含みよく締まっている。

Ⅲｃ層は、厚さ8～32cmの暗褐色（10YR3/3）礫層で、おもに粒径3～10cmの角礫が集まる。

Ⅲｄ層は、厚さ20cm以下の小礫を多量に含む砂礫層で、断続的に分布する。

Ⅲｅ層は、凹部のⅡｂ層とⅢｆ層の間に挟まれるローム質褐色（10YR4/4）土層で、粒径1～5cmの角礫が混じっている。

Ⅲｆ層は、厚さ15～45cmの暗褐色（10YR3/3）土層で、粒径1～3cmの小礫が混じっている。

Ⅲｇ層は、厚さ20～30cmのローム質褐色（10YR4/4）土層でやや砂質である。

Ⅲｈ層は、厚さ25cm以下のにぶい黄褐色（10YR4/3）土層で、Ⅲｆ層とⅢｇ層の間にレンズ状に挟まれている。

以上の土層の合計層厚は120～125cmに達し、その下位に基盤の礫層がある。礫層は厚さは2m以上で、細～大礫までの礫が集まり、最大粒径は50cmにも及ぶ。

Bの土層は上から、Ⅰ～Ⅵの6層に大別され、さらに厚さ最大60cmの谷底堆積物には、Ⅳ層とⅥ層の間に数枚の間層が挟み込まれている。

Ⅰ層からⅡ層までは谷底堆積物から北西部の平坦地までを覆う土層である。

Ⅰ層は、上から黄褐色土、混合土、黒褐色土の順で重なる厚さ55～72cmの盛り土と表土である。

Ⅱ層は、厚さ12～25cmのシルト質黒褐色土層で、縄文時代晩期から奈良・平安期の土層と思われる

が、攪乱されて現代の陶磁器片やガラス片なども混入している。

Ⅲ層は、上からⅢａ～Ⅲｃ層の３層に区分される。

Ⅲａ層は、谷部に局所的に見られる薄い黒色（10YR2/2）シルト質である。

Ⅲｂ層は厚さ15cm以内のレンズ状に挟まれる黒色（10YR1.7/1）土層、Ⅲｃ層は厚さ12～18cmの黒褐色（10YR2/3）土層で、双方に縄文時代の土器片が包含されている。

最大層厚約60cmの谷底堆積物は、Ⅲ層・間層４層とⅣ～Ⅵ層との間にあり、上から間層１～Ⅲｅの５層に区分される。間層１層は間層２層と間層３ａ層以下を切り、間層２層は間層４層と間層３ａ層以下を切っている。さらにⅢｅ層は、間層４層とⅣ層以下の土層を約90cmほどの深さに切り込む。このことは下流方からの浸食が、間層４層とⅣ層の堆積後の時期にここまで及んだことを意味する。

間層１層は最大層厚27cmの褐灰色（10YR4/1）砂質シルト層、間層２層は台地側谷壁部に存在する厚さ36cm以下の黒褐色（7.5YR3/1）粘土層、間層３ａ層は厚さ6～17cmの褐灰色（7.5YR5/1）のシルト層、間層３ｂ層は厚さ6cm以下の褐灰色（7.5YR4/1）シルト層で、３ａ層と３ｂ層には多量の粗粒砂が混入する。Ⅲｅ層は間層３ａ層同様に側方で間層２層に接する黒褐色（10YR3/1）シルト層で、その厚さは南西側の山際で最大38cmとなるが中央部付近では14～25cmである。

間層４層は、最大層厚45cmのにぶい黄褐色（10YR5/4）ローム状粘土層で、粗粒砂質が混じる。

Ⅳ層は、厚さ最大18cm以上の褐灰色（10YR4/1）ローム状粘土層で、細粒砂が混じる。

Ⅴ層は、厚さ12cm以下の灰白色（10YR7/1）粘土層で、粗粒砂大の同色軽石が散らばり、基盤の凝灰岩に由来するものと思われる。

Ⅵ層は厚さ5～35cm以上の灰黄色（2.5Y6/2）粘土層で、粗粒砂が混じり、上部は谷底堆積物の直下にあるため、酸化して赤味がかった褐色帯となっている。

Ｃの土層は上から、Ⅰ～Ⅴの５層に区分される。

Ⅰ層は、厚さ16～21cmの黒色（10YR2/1）土層である。

Ⅱ層は、褐色（10YR4/4）土と暗褐色（10YR3/4）土との混合土層で、黄色火山灰粒子が多量に含まれ、褐灰色（10YR4/2）と黒褐色（10YR3/1）の混合土塊が随所で土層を切断している。

Ⅲ層は、砂質の褐色（10YR4/6）粘土化火山灰が主であるが、薄いところでは全体がしまって硬い黄褐色（10YR5/6～5/8）砂質火山灰層で、粒径が粗粒砂大～数mmの同色軽石や黒色火山砂が混入している。厚いところでは径数～20cm程度の同様の火山灰塊が下部により多く含まれる。Ⅲ層の層相は、青森西部から浪岡付近に分布する女鹿沢火山灰や上北の千曳浮石層に酷似し、これら火山灰に相当することは間違いない。Ⅱ層とⅢ層の層厚はそれぞれ10～35cm、9cmから40cmで厚さの変化に富むが、両層の境界が踊るように屈曲し相互に補完しあっているためで、その合計層厚は40～50cmである。

Ⅳ層は、厚さ18～32cmの褐色（10YR4/6）砂質粘土化火山灰層（ローム）である。Ⅵ層は厚さ20cm以上の黄褐色（10YR5/8）粘土層で、しまって硬い粒径数cm±の灰白色～浅黄橙色（10YR8/2～4）の塊状～斑状の粘土塊が混入する。この粘土塊は直下の第三紀凝灰岩に由来するものと思われる。

（２）山下遺跡

山下遺跡は、宮田地区の沖積上位面の基部付近の、浅い谷の両側に広がっている。浅い谷の南側がＡ区、北側がＢ区である。

Ａ区の土層は、上からⅠ～Ⅴの５層に分けられる。

Ⅰ層は、砂質シルト状の耕作土でⅠａ、Ⅰｂの２層に分けられる。上位のⅠａ層は厚さ5～15㎝の暗褐色（10YR3/3）～黄褐色（10YR4/3）土層で、厚さ3～4㎝以下の褐色（10YR4/6）帯が断続的に挟まれる。下部は厚さ3～8㎝の黄褐色（10YR5/6）土層で、ところどころに酸化による厚さ2㎝以下のにぶい橙色（7.5YR6/4～6/6）の酸化帯がレンズ状に挟まれる。

Ⅱ層は、厚さが16～32㎝の褐灰色～にぶい黄褐色（10YR4/1～3）シルト質粘土層で、色調は下方へ明るくなる。粒径2～8㎜の灰白色～黄橙色（10YR8/2～8）火山灰塊がところによってまばらに、ところによって密に混入する。厚さ20㎝以上の部分は下部が一層明るい灰褐色（10YR5/2）で、にぶい赤褐色（5YR4/4）～明褐色（7.5YR5/8）の酸化鉄化した斑状土塊が随所に入っている。Ⅱ層の下部には奈良・平安期の遺物が包含されている。

Ⅲ層は、厚さ12～22㎝の褐灰色（10YR4/1）～灰黄褐色（10YR4/2）粘土層（グライ土）で、厚さ2㎝、横幅3～5㎝程度の橙色（7.5YR6/8）～明褐色（7.5YR5/8）～黄褐色（10YR5/8）の斑紋が目立つ。下部には下位層の間に、レンズ状の黒褐色（10YR3/2～2/3）土層を挟むところがあり、縄文時代後期の土器などの遺物を包含する。また、最大層厚35㎝の、遺物を多量に包含する黒色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土が累積する廃棄土層が含まれる。

Ⅳ層は、厚さ24～50㎝の粘土層（グライ土）で、暗褐色（10YR3/4）～褐灰色（10YR4/1）のⅣａ層と、灰黄褐色（10YR4/2）～褐灰色（10YR5/1）のⅣｂ層に分けられる。Ⅳａ層にはⅢ層中の斑紋と同様の斑紋が散らばり、円筒式土器を包含している。Ⅳｂ層は砂質で、ところどころにレンズ状あるいは塊状（厚さ2～3㎝、横幅3～6㎝）のにぶい黄橙色（10YR6/3）シルト塊が含まれる。また、太さ約1㎝、長さ10～15㎝の、明褐色（7.5YR5/8）の垂直斑紋が目立つ。

Ⅴ層は、厚い砂礫層で、細礫層や砂層、大小の半円礫・円礫が密集する砂礫層などの互層で構成されている。上部の基質は砂質～砂礫質の暗褐色（7.5YR3/3）～褐色（10YR4/4）土に漸移する。

Ｂ区の土層は、上からⅠ～Ⅵの６層に分けられる。

Ⅰ層は、調査区域内が剥土されていて観察できなかったが、区域直近で厚さ10～20㎝の暗褐色（10YR3/3）土層となっている。

Ⅱ層は厚さ2～10㎝の黒褐色（10YR2/2）シルト状土層（グライ土）で、ところどころに酸化による径2㎝前後のにぶい赤褐色（5YR4/4）～赤褐色（5YR4/6)の斑紋が散らばる。

Ⅲ層～Ⅴ層は、粗粒砂の混じるシルト状土層（グライ土）である。

Ⅲ層は厚さ30㎝以内の黒褐色（10YR3/1）土層、Ⅳ層は厚さ35㎝以内の黒褐色（10YR3/2）土層である。Ⅲ層とⅣ層は厚さを補完し合うように重なり、合計層厚は30～40㎝である。

Ⅴ層は褐色（10YR4/4）土層で、厚さは下限不明で確認できなかったが、少なくとも15～32㎝以上である。

Ⅵ層は、粒径19～20㎝の礫を含む厚さ70㎝以上の砂礫層である。この砂礫をⅢ層以下の土層が切り込んでいるので、ところによって砂礫層の上面はⅢ層上面と同一面になっている。

第2編　山下遺跡

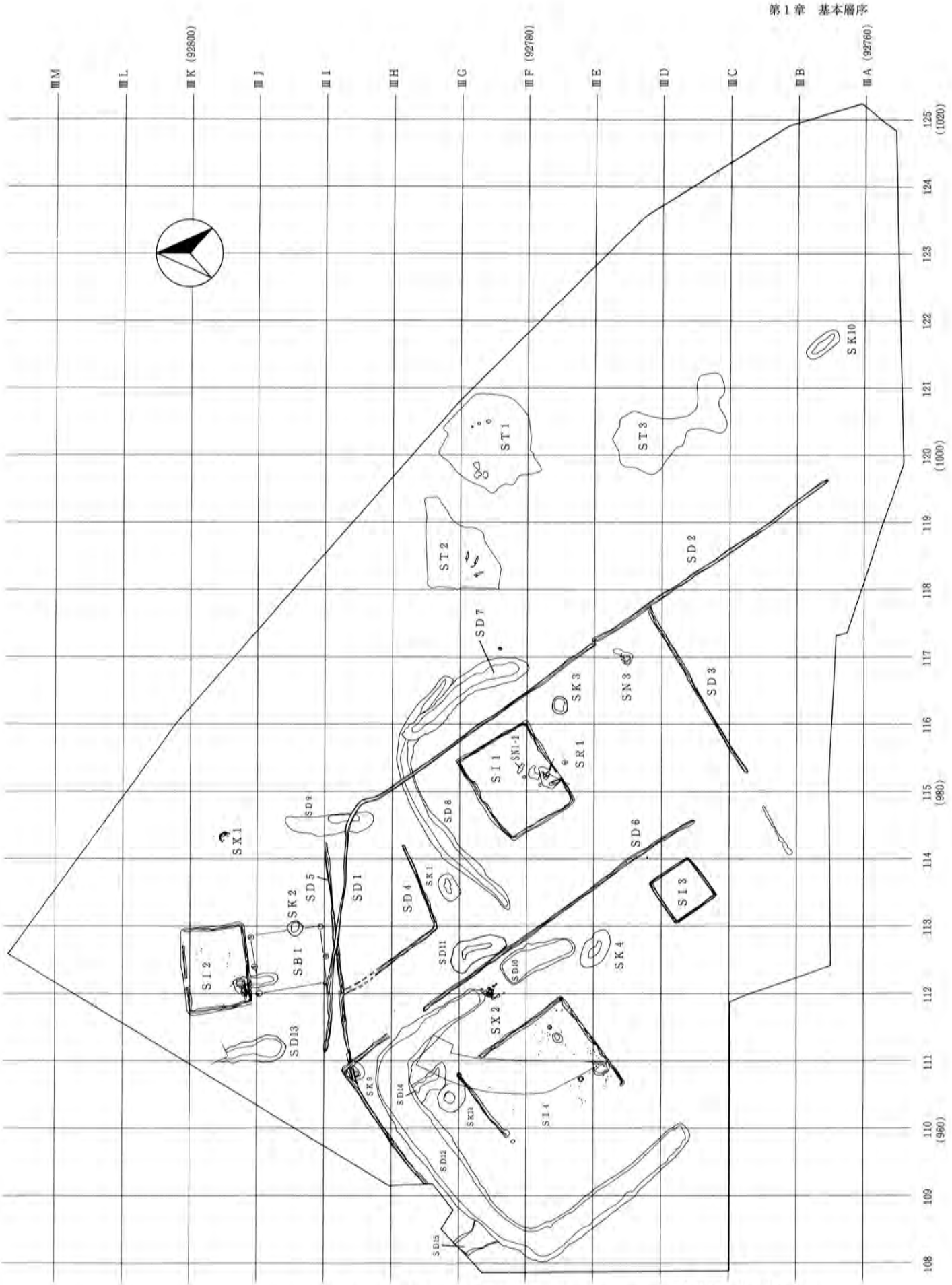
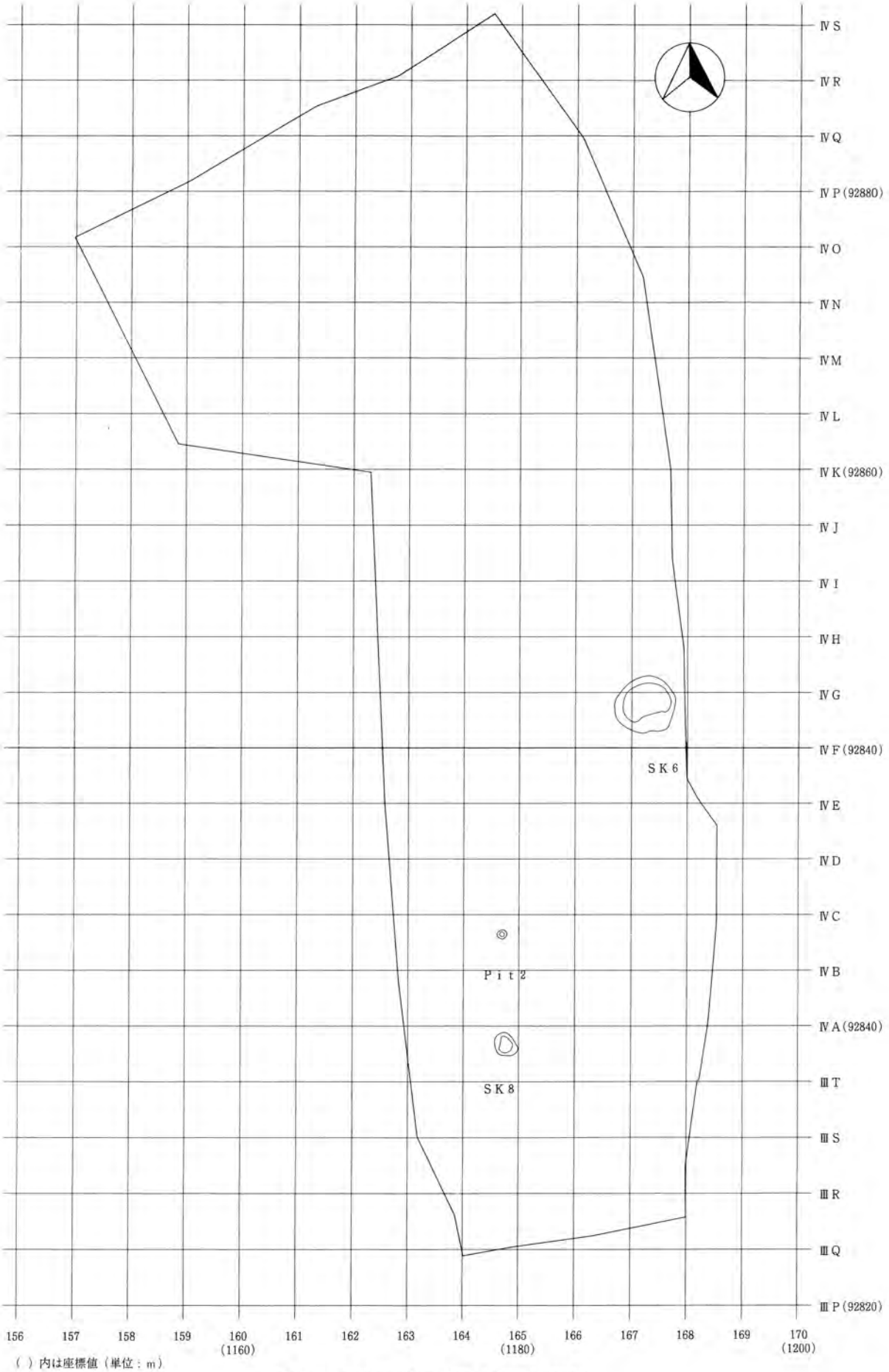


図４　Ａ区遺構配置図（Ｓ＝1/30

（ ）内は座標値（単位：ｍ）



( ) 内は座標値（単位：m）

図5　B区遺構配置図（S＝1/400）

第2編　山下遺跡

第1章　基本層序

山下遺跡の南半部は、平成8年度の試掘調査の結果、大半が水田の拡張に伴って削平され、飛び地状に遺構・遺物包含層が残されていると判断された。この飛び地状に残された2地点のうち、西側をA区、東側をB区と呼称した。土層の詳細な説明は第1編第4章に譲り、ここでは地形について簡単に述べたい。

A区は八幡社西側付近から北西方向にのびる微高地とその両側の微低地からなっている。図6に示した土層図は、この微高地にあたる地点のものである。後述する廃棄ブロックはこの微高地の北東側の微低地に至る小規模な斜面にある。

B区は、調査区内は開田により削平を受けており、微地形はとらえ得なかった。全体に河川により堆積したシルト・礫層が南西方向に傾斜を持って堆積していた。そのため、場所により、下位層が最上面に現れている場合もある。第Ⅱ層が縄文時代の包含層である。

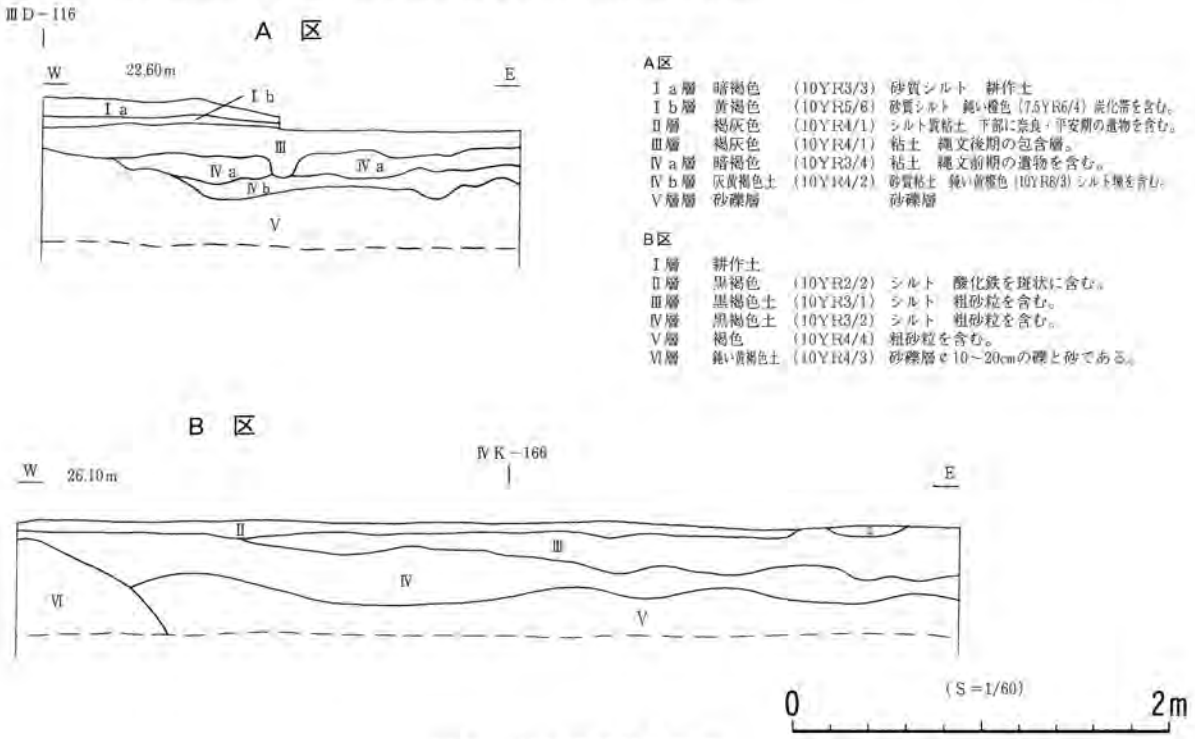


図6　山下遺跡基本層序

第2章　検出遺構と出土遺物

山下遺跡では縄文時代後期・平安時代・平安時代以降の各時期、および時期不明の遺構が検出された。縄文時代後期の遺構は土坑と捨て場で、住居域は確認されなかった。平安時代の遺構は住居跡・溝・土坑が検出された。平安時代以降の遺構は溝とカマド状遺構かと思われるものが検出された。時期不明の遺構は土坑・配石がある。土坑1基と小穴1基をのぞいてすべてA区から検出された。

（中村　哲也）

第1節　縄文時代の遺構

第8号土坑〔ＳＫ8〕（図7、図版4－1・2、図版7）

［位置］ⅢT—164に位置する。［確認］第Ⅲ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。［平面形］やや不

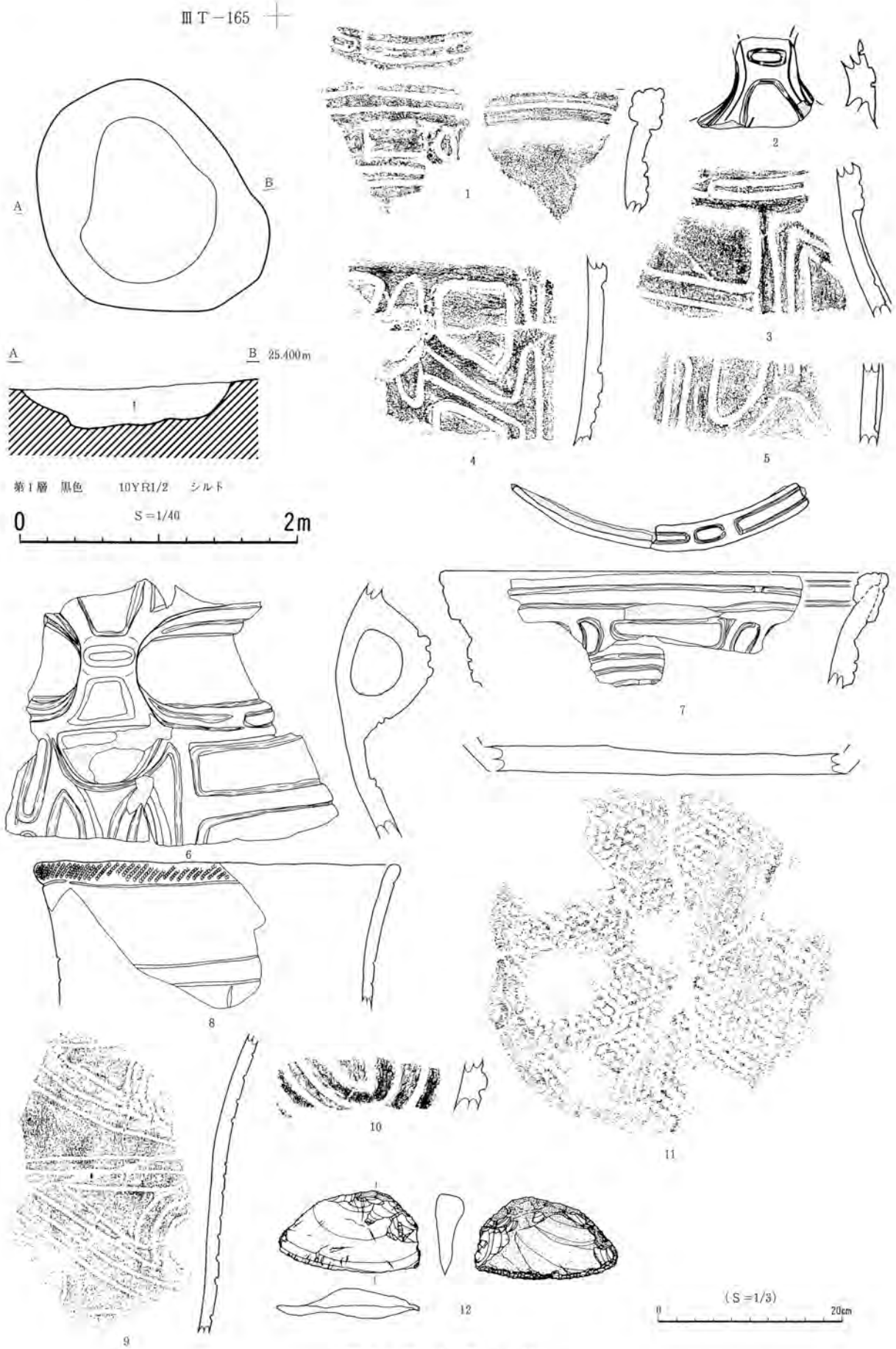

ⅢT－165
A
B
A
B 25.400m
1
第1層 黒色 10YR1/2 シルト
0 S＝1/40 2m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
(S＝1/3)
0 20cm

図7 第8号土坑

整な円形を呈する。[規模] 1m82cm×1m49cmを計る。深さ27cm。[底面・壁] 西壁はやや開き気味に立ち上がる。[堆積土] 黒褐色土の単層である。[出土遺物] 確認面・堆積土中から土器片が出土した。堆積土中でも比較的上位から出土したものが多い。１は壺型土器の口縁部である。口縁部内外面とも隆帯を施し、外面・上面・内面とも並行沈線を巡らせる。２は壺型土器の橋状把手である。３から６は壺型土器の頸部～胴部破片である。3～5は半隆帯と沈線で曲線的な文様を描出する。1～6は同一個体の可能性が高い。8は口縁直下に幅の狭い縄文帯を施して以下を無文とし、頸部に二条の並行沈線を巡らせている。9は三角形と弧線を組み合わせた曲線文様が施される。10は半隆帯と沈線を用いて、曲線的な文様を描き出している。いずれも十腰内Ⅰ式に比定される。石器は二次加工剥片１点、剥片６点が出土している。[時期] 出土した遺物から、縄文時代後期前葉十腰内Ⅰ式期と考えられる。

（中村　哲也）

廃棄ブロック〔ＳＴ１～３〕（図８～13、図版４－５～７）

[位置] グリッドライン118から東側に続く緩斜面に位置する。[形状・規模] 斜面の中でも、急斜面または窪地部分に遺物が集中し、ブロックとして３カ所確認できた。廃棄ブロック1は南から北方向の急斜面に、ブロック2・3は窪地に堆積している。[遺物] 土器・石器とも118ラインから121ラインの間に分布する。ブッロク1では多量の土器が重なって出土し、ブロック3では窪地であるⅢＤラインにまとまりがみられる。ブロック2では第4層から自然木が5点出土した。石器は廃棄ブロック3と廃棄ブロック2の南側に集中し、石鏃・石錐・石匙・磨製石斧が各1点、石皿3点、敲磨器類10点、扁平打製石器・半円状扁平打製石器各１点、石核4点、二次加工剥片32点、剥片77点、使用痕を有する剥片16点の計148点が出土した。主に谷の緩斜面に定形石器・礫石器が、窪地や底部付近に剥片類が分布している。二次剥片では連続加工（ｂ・ｃ類）と不連続加工（ｄ類）の比率が半々で、剥片では加工を施していない（ｆ類）大きさ２～４cmのものが６割を占める。石材は礫石器には石英安山岩・安

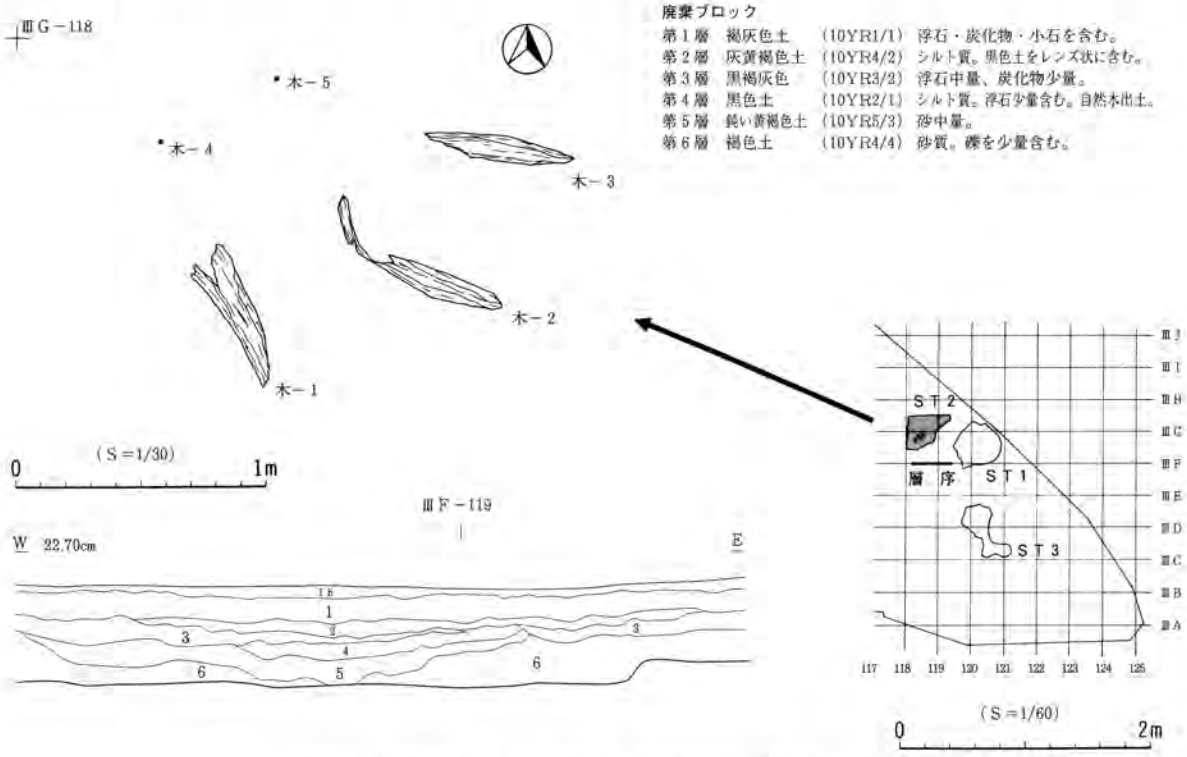


図８　廃棄ブロック断面図・自然木出土状況

図9　廃棄ブロック出土土器(1)

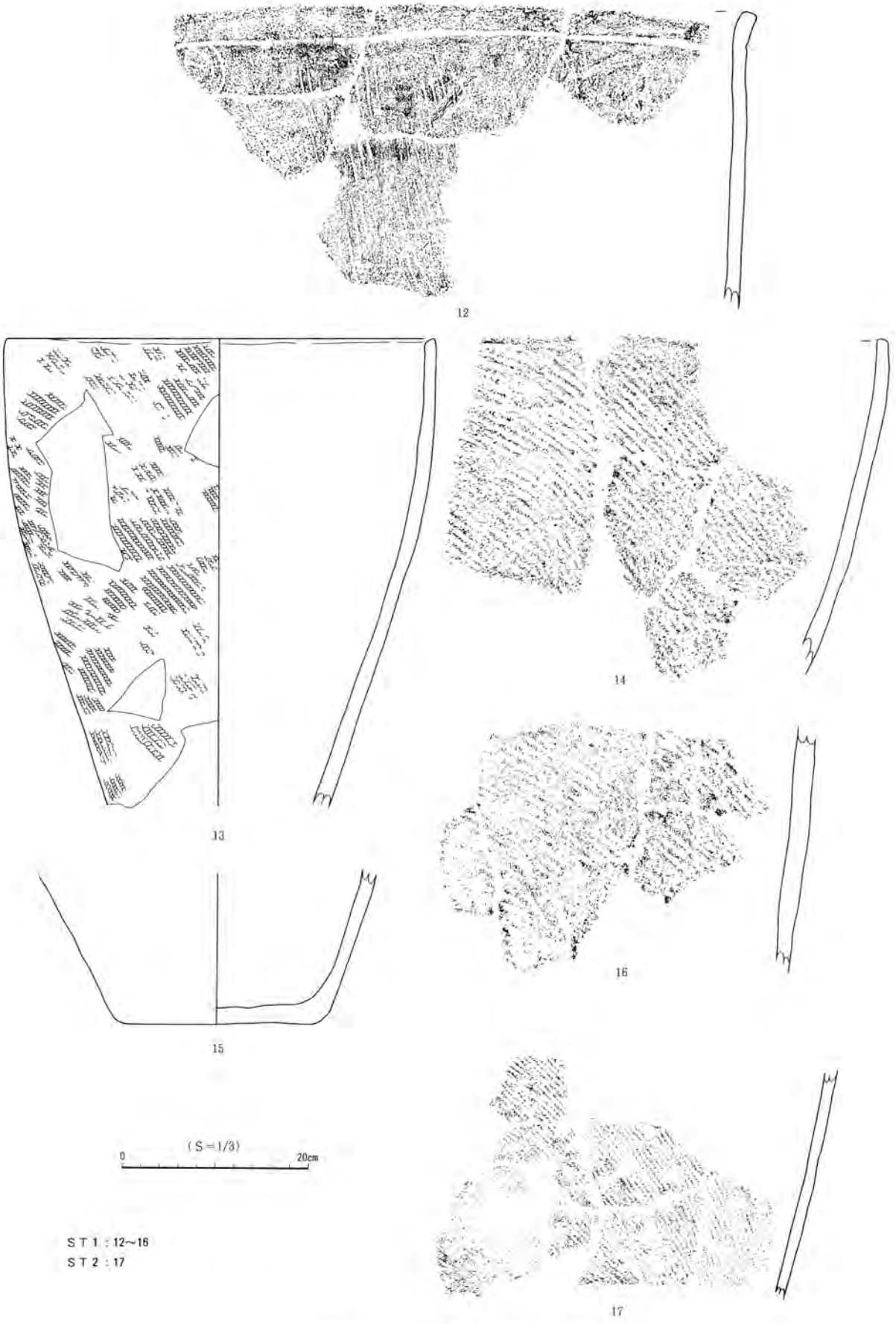


図10　廃棄ブロック出土土器(2)

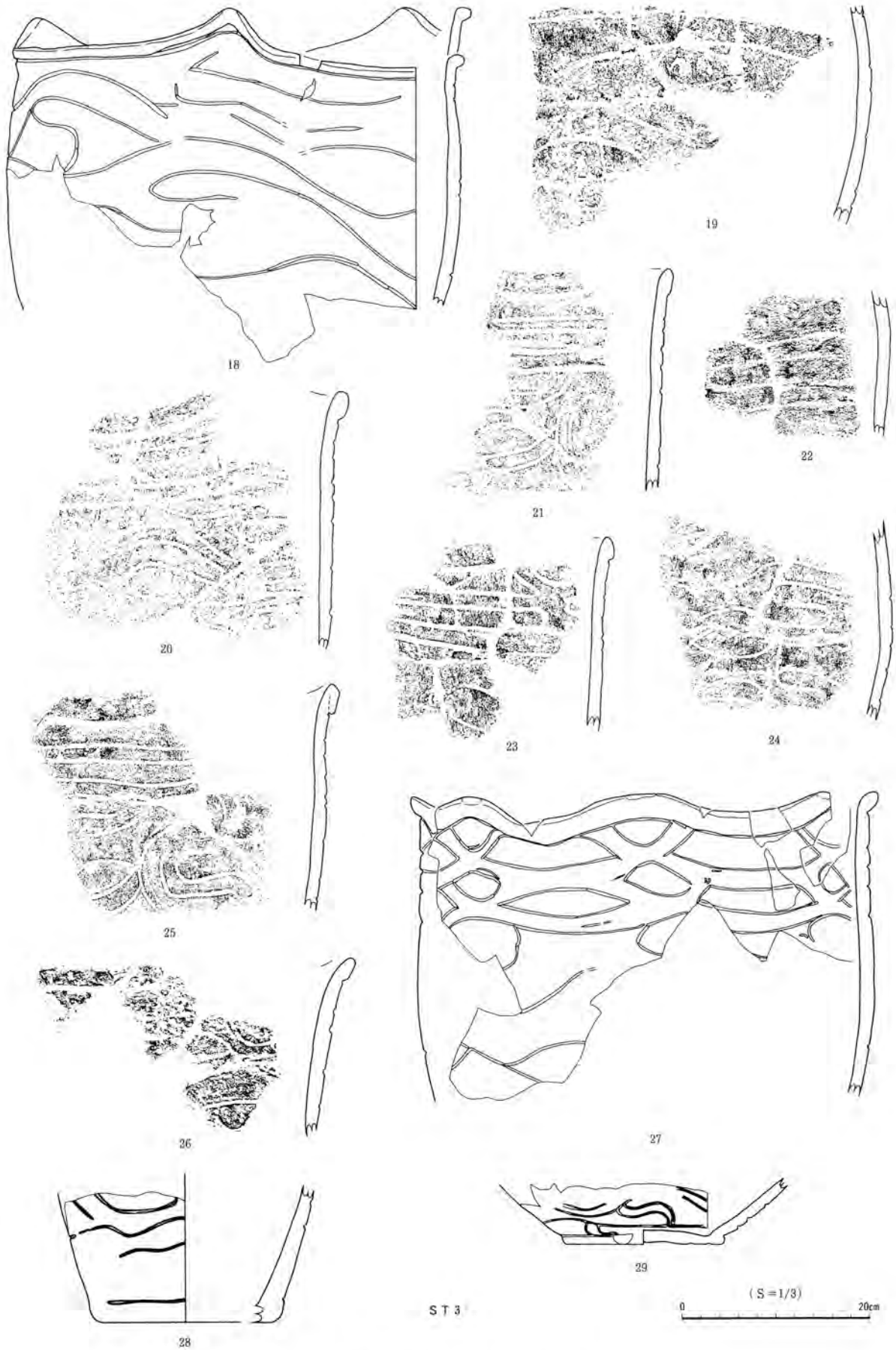


図11　廃棄ブロック出土土器(3)

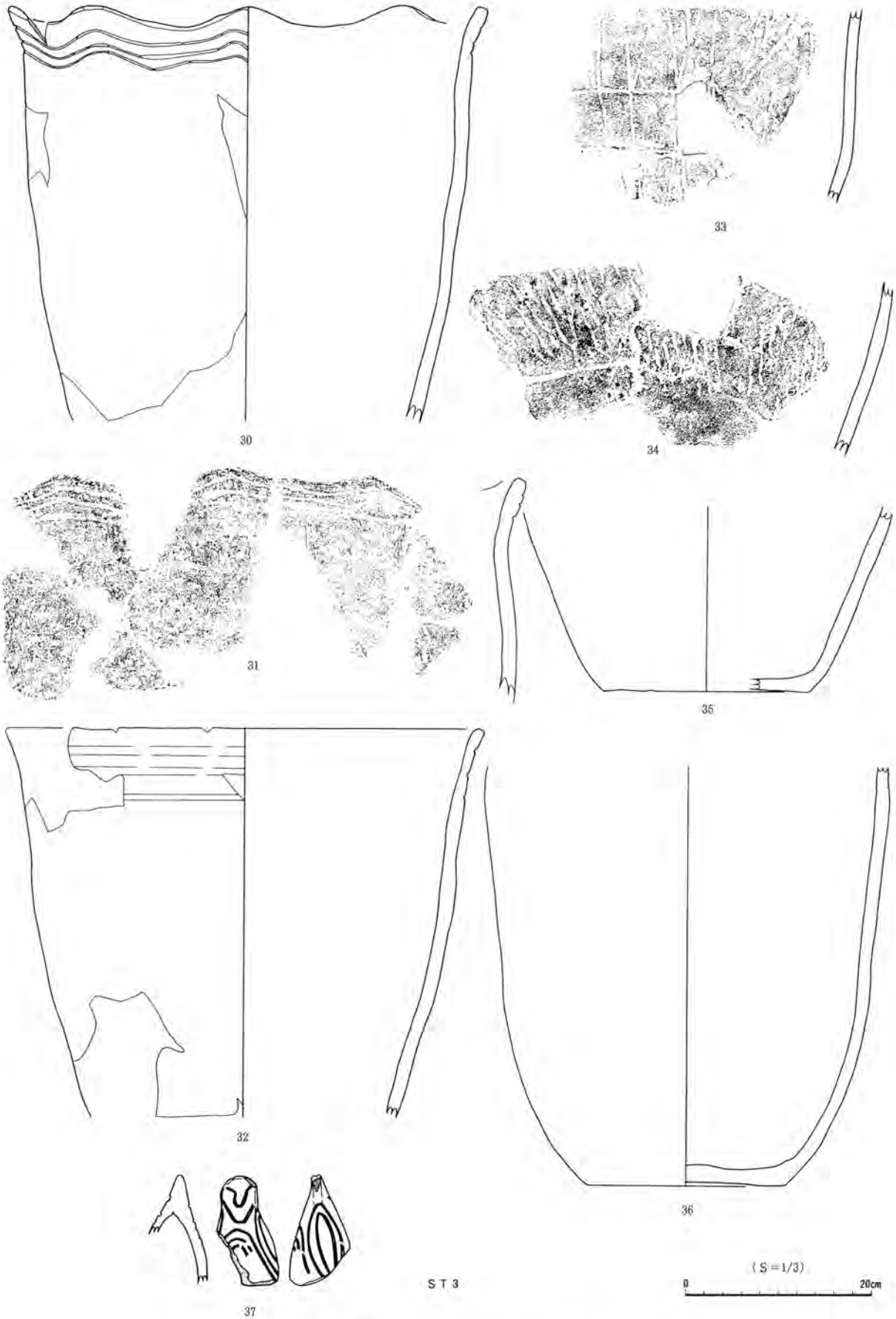


図12　廃棄ブロック出土土器(4)・土製品

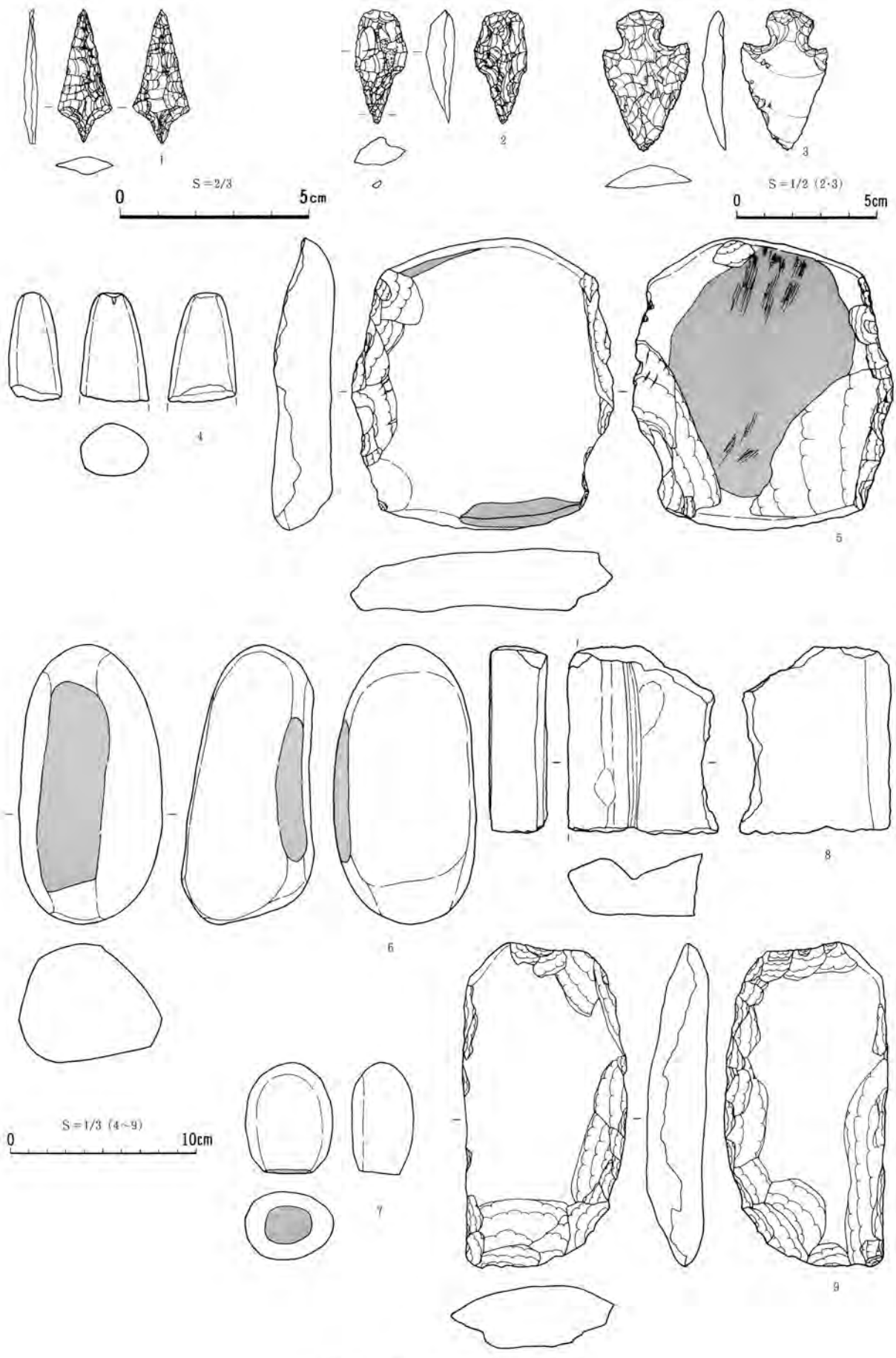


図13　廃棄ブロック出土石器

山岩を用い、石核・剥片類には珪質頁岩を使用している。[時期] 縄文後期（3500～4000年前）を主体とする。（杉野森　淳子）

廃棄ブロック出土土器（図9～12、図版4－6）

廃棄ブロックから出土した土器は、浸水のため風化が激しく、その出土状態に関わらず復元できないものが多かった。

廃棄ブロック1（図9・10、図版7・8）

1は波状口縁をなし、半隆帯と沈線で窓枠状の文様を描く。波頂部には粘土紐が巻き付けられいる。2は口縁直下を無文とする。一条の頸部並行沈線を巡らし、胴部に曲線文を施す。3～5は胴部に曲線文を施している。8・9・11は同一個体の可能性がある。口縁を折返して無文とし、胴部にはヘラ状工具による斜沈線を施している。11は波状縁として復元したが、口縁部のゆがみの可能性もある。7は口縁を折り返して無文とし、無文帯下限に沈線を区切る。胴部には沈線による斜格子文を施す。13はやや開き気味の胴部から、口縁部でやや内湾して立ち上がる。器面には口縁部直下からLR縄文を縦位回転で施文する。14・16は13と同一個体の可能性がある。いずれも十腰内Ⅰ式に比定される。

廃棄ブロック2（図10－17、図版8）

17は胴部破片で、外面にはRL縄文を横位回転で施文する。 縄文時代後期に比定される。

廃棄ブロック3（図11・12、図版8・9）

18は口唇部を膨隆させ、胴部に沈線により曲線文を施している。並行沈線や窓枠状の文様による文様帯の区分は無い。20・21・23・25～27は並行沈線や窓枠状の文様による文様帯区分を持ち、胴部には曲線文が施される。30は波状口縁に沿って3条の並行沈線を施す。31は同一個体の可能性がある。32は口縁下に3条の並行沈線を施す。33は斜格子沈線を施す。34は単軸絡状体が施される。37は鐸型土製品である。頂部には貫通孔が認められない。沈線による曲線文が施されている。廃棄ブロック3から出土した土器はいずれも十腰内Ⅰ式に比定される。（中村　哲也）

第2節　平安時代の遺構

平安時代の遺構は、八幡宮西側より北西方向へとのびる微高地上にあたるA区に集中する。

第1号住居跡〔ＳＩ１〕（図14～17、図版4－8、5－12、9）

[位置] ⅢＥ～Ｆ―114～115グリッドに位置する。[重複] 本住居跡堆積土中に第1・2号カマド状遺構が構築されており、本住居跡が古い。[平面形・規模] 長軸5.6m、単軸4.9mの長方形である。長辺にカマドが築かれている。床面積は23.9㎡をはかる。[壁・床面] 第Ⅳ層・第Ⅴ層を床面とする。Ⅳ・Ⅴ層の堆積は水平ではなく、うねりがあるため、第Ⅳ層を床面とする部分は比較的硬いが、第Ⅴ層は硬化の度合いは低く、床面全体の硬化部分の分布は不明である。北東隅には扇形に貼床が施されていた。[周溝] 幅約10cm、深さ約20cmの周溝が全周する。[ピット] 検出されたピットは2個である。溝の東・南隅に検出され、主柱穴と思われる。北西・北東隅にも本来ピットが存在したと思われるが、検出できなかった。[カマド] 住居堀片の南東辺（長辺）に検出された。南隅よりに構築されている。粘土・焼土が平面的に広がり、その上に土器が集中する状態で検出された。住居廃絶時に意図的に壊されたものと考えられる。平成8年度調査の試掘トレンチにより一部を失っており、煙道部の形状は不明である。仮に煙道が1m前後の長さを持っていたとすれば、煙道に重なりうる部分に埋

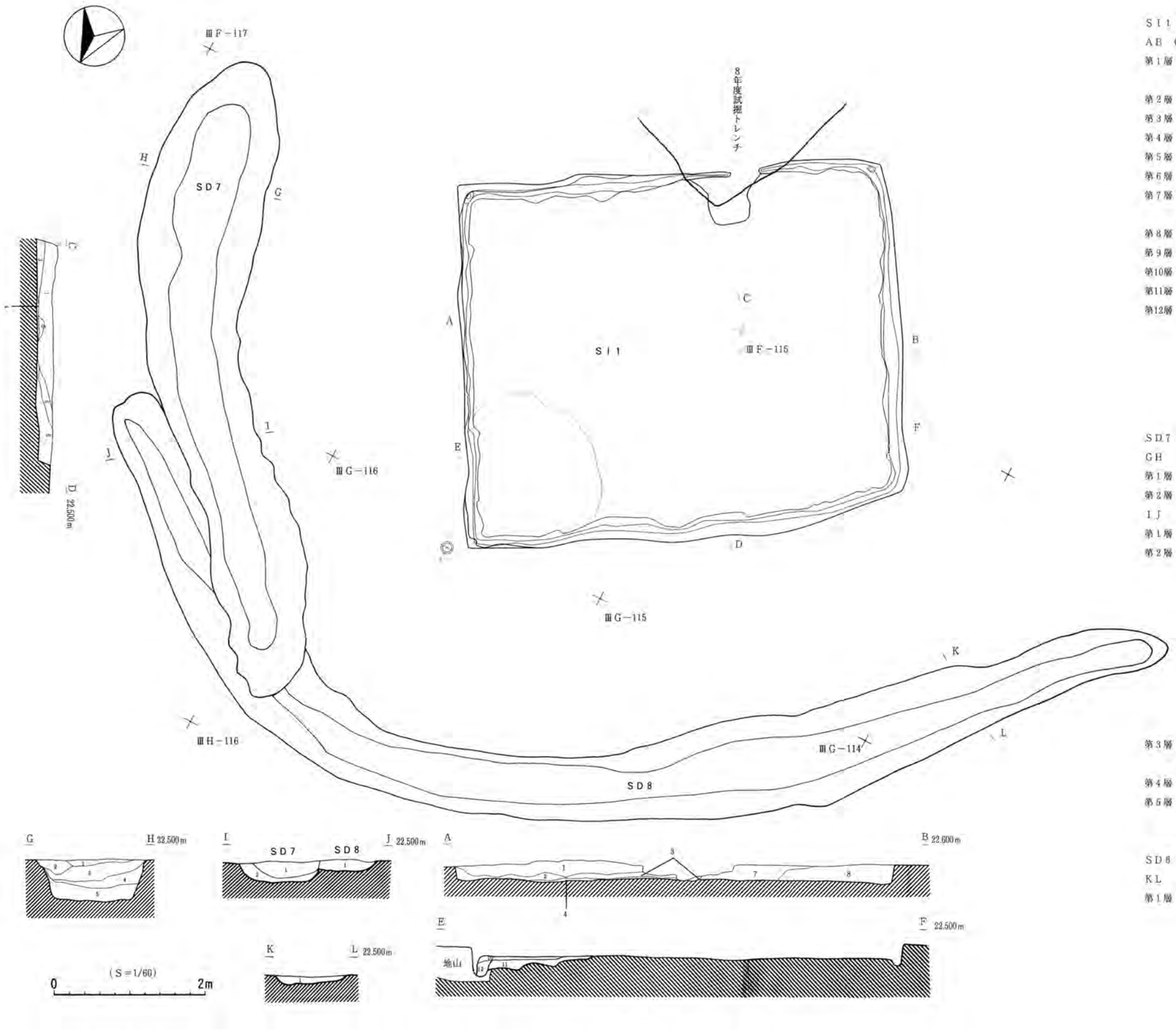
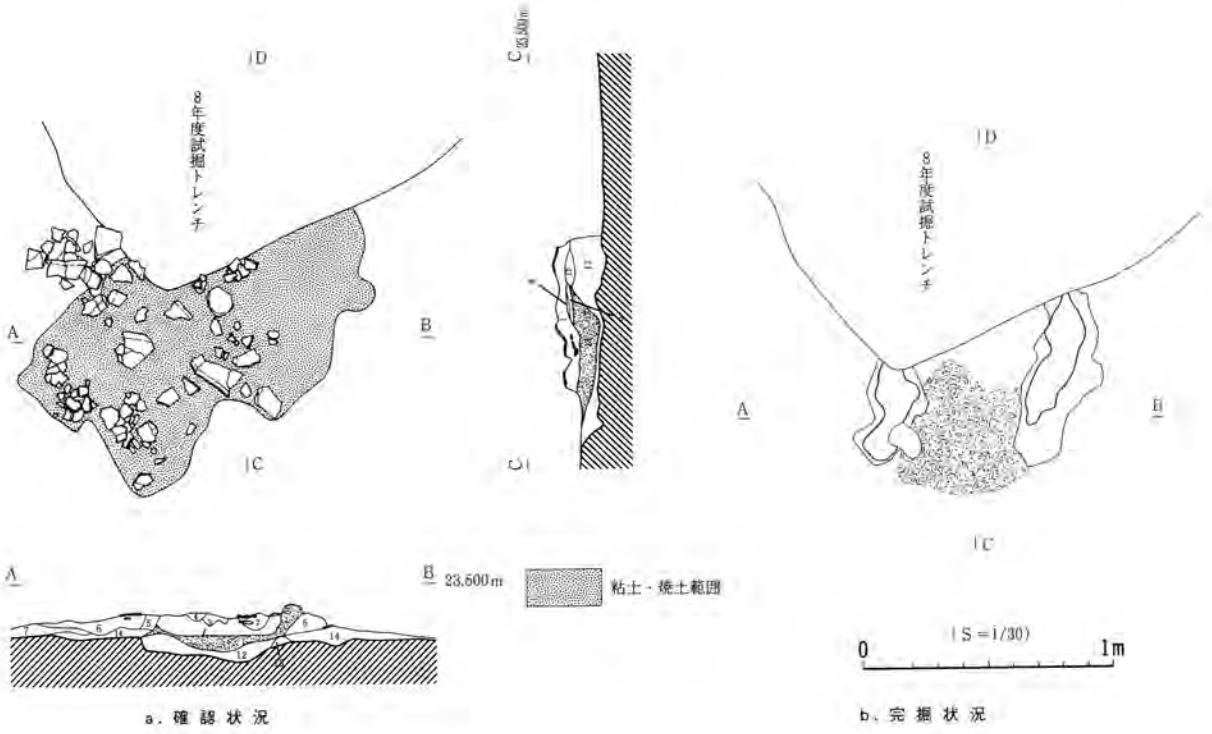


図14　第１号住居、第７・８号溝

SI1
AE　CD　EF
第１層　黒 褐 色（10YR2/3）シルト　粗粒砂含む。炭化物微量。しまり悪い。φ２㎝～５㎝の礫含む。
第２層　鈍い黄褐色（10YR4/3）シルト　中粒砂含む。しまっている。
第３層　褐　　色（10YR5/3）シルト　中砂含む。しまっている。
第４層　炭化物層
第５層　暗 褐 色（10YR3/3）シルト　粗粒砂微量含む。しまっている。
第６層　黒 褐 色（10YR3/2）シルト　粗粒砂含む。φ５㎝～20㎝の礫含む。
第７層　黒 褐 色（10YR3/2）シルト　粗粒砂、黄褐色粘土ブロック含む。にぶい黄褐色シルト粒状に分布。
第８層　暗 褐 色（10YR3/3）シルト　粗粒砂含む。しまっている。
第９層　黒 褐 色（10YR3/2）シルト　粗粒砂含む。しまっている。φ３㎝～５㎝の礫含む。
第10層　褐　　色（10YR4/4）細粒砂
第11層　黒　　褐（10YR3/2）色シルト　粗粒砂多量含む。
第12層　褐　　色（10YR4/4）シルト　粗粒砂多量含む。

SD7
GH
第１層　黒褐色土（10YR2/3）シルトブロック（φ１～３㎝）を全面に含む。
第２層　暗褐色土（10YR4/3）焼土・シルト・砂・炭化物少量。
IJ
第１層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物（φ２～５㎜）全体に含む。
第２層　黒褐色土（10YR3/2）炭化物（φ２～５㎜）まばらに含む。シルトブロック全体に含む。小石（φ１～３㎜）まばらに含む。
第３層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物（φ２～φ５㎜）全体に含む。シルトブロック・小石（φ１～３㎜）まばらに含む。
第４層　暗褐色土（10YR3/3）炭化物（φ１～φ３㎜）微量に含む。
第５層　黒褐色土（10YR2/2）炭化物（φ２～φ５㎜）微量、シルトブロック含む上部に鉄分層状に堆積。

SD8
KL
第１層　黒褐色土（10YR2/2）小石（φ３～φ５㎜）を全体に含む。褐色土（10YR）を少量含む。粘性弱く、しまり強い。



第１層　黒褐色　(10YR3/2)　シルト　焼土含む。
第２層　褐色　(10YR4/6)　シルト　細流砂含む。
第３層　黄褐色　(10YR5/8)　粘土
第４層　暗褐　(10YR3/4)　色シルト　焼土粒含む。
第５層　褐色　(10YR4/6)　粘土　しまっている。
第６層　にぶい　(10YR4/4)　黄褐色シルト　焼土粒含む。
第７層　暗褐色　(10YR3/3)　シルト
第８層　暗赤褐色　(5YR3/6)　シルト　焼土。
第９層　暗褐色　(10YR3/4)　シルト　しまり弱い。
第10層　褐色　(10YR4/6)　粘土　しまっている。
第11層　赤褐色　(5YR4/8)　粘土　細粒砂多量含む。焼土。
第12層　暗赤褐色　(7.5YR3/2)　シルト　しまっている。
第13層　にぶい黄褐色　(10YR5/3)　粘土
第14層　黒褐色　(10YR2/3)　シルト　粗粒砂微量含む。

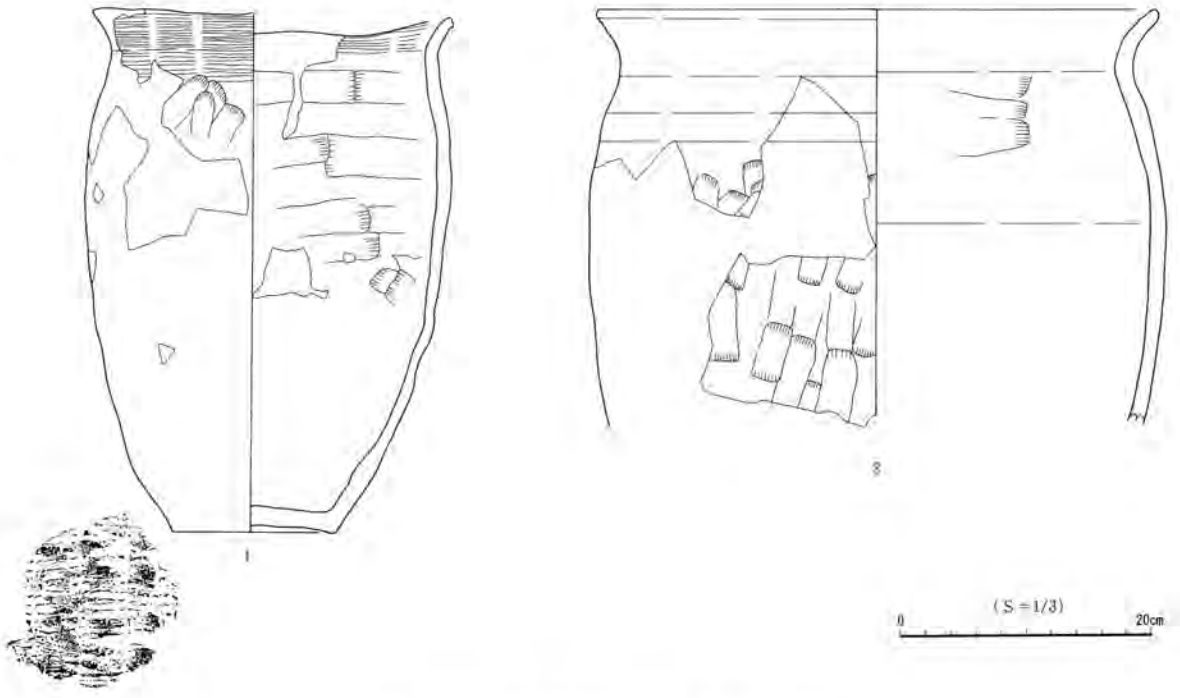


図15　第１号住居跡カマド・出土遺物(1)

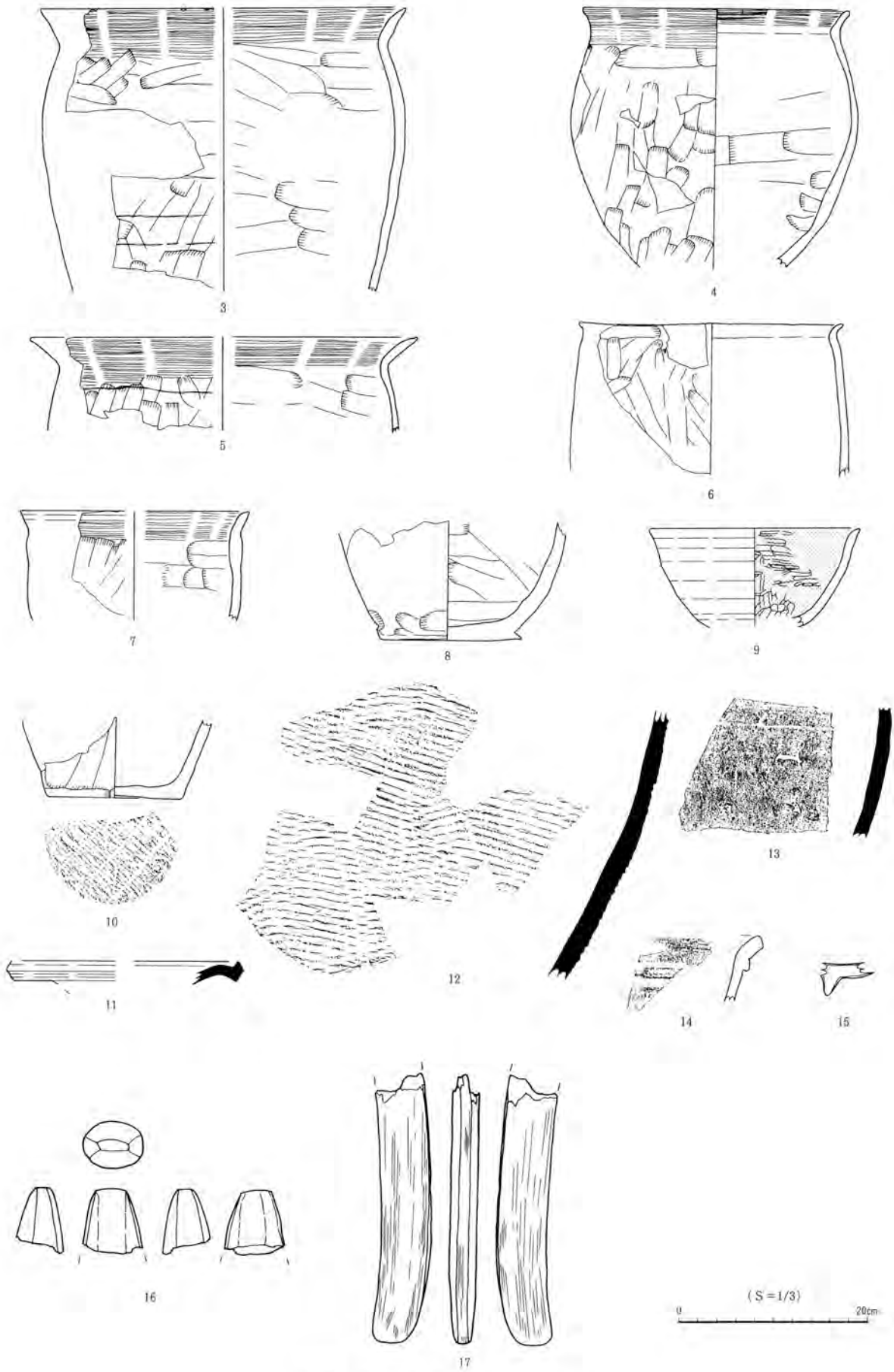


図16　第１号住居跡出土遺物(2)

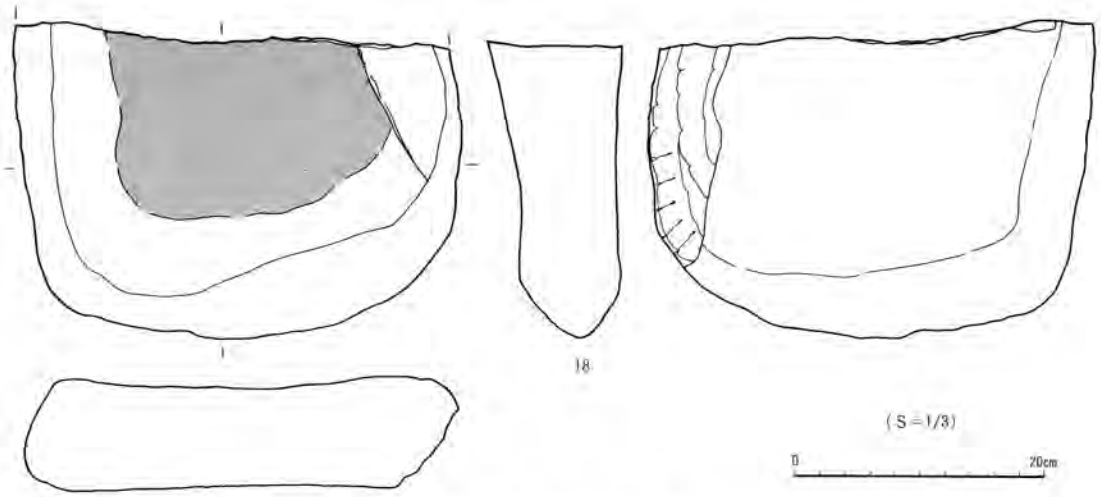


図17　第１号住居跡出土遺物(3)

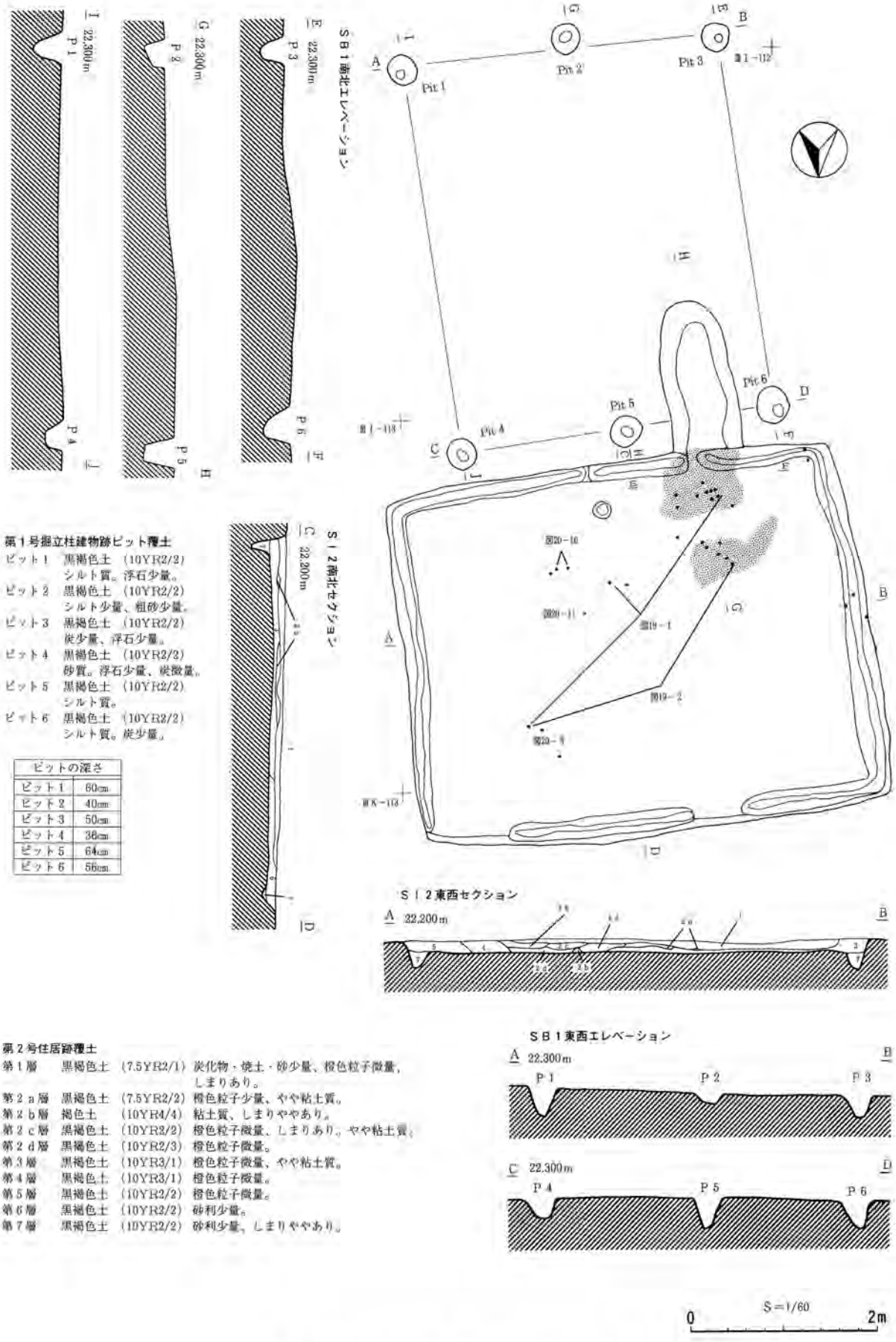
設土器が設置されていた事になるが、詳細は不明である。堆積土はレンズ状の堆積を示しており、周囲から中心部へと土砂が流れ込んだ可能性が高い。第１層は締まりの悪いシルトである。第７層中には黄褐色の粗砂混じりの粘土質火山灰土が、粒状に認められ、本住居跡の埋没過程でカマド状遺構が構築された可能性の高いことを示している（第1･2号カマド状遺構（SN1･2）の頁参照）。また、本住居跡の検出面において、堆積土を大きく掘り返した痕跡は確認できず、作業等に必要な一定の面積を確保するための掘り込みが存在したかどうか不明である。従って、本住居跡の堆積過程は住居の廃絶→土砂の流入→窪地を利用したカマド状遺構の構築・使用→カマド状遺構の機能停止→土砂の流入・埋没という過程をたどったものと考えられる。

［出土遺物］出土遺物の大半はカマドの廃絶時に廃棄されたものと考えられる。堆積土中や床面からは小片が出土したに過ぎない。１・３～７・８・10は非ロクロの土師器甕である。内面体部は横方向のヘラナデ、口縁部はヨコナデ、外面体部は縦方向のヘラナデ、口縁部はヨコナデが施される。頸部に横方向のヘラナデが施される場合がある（４・６）。底部は直上を横方向に再調整する例がある。14は近世の陶磁器と思われる。15は青磁皿片である。年代的には15から16世紀とみられる。14･15は、本住居跡の堆積土中にカマド状遺構（SN1）が構築されており、これの構築時ないしはそれ以後に流れ込んだ可能性が高い。石器類は磨製石斧・石刀・敲磨器・二次加工剥片各１点、石皿２点、剥片３点が出土している。［外周溝］住居掘方の北東辺～北西辺にかけて外周溝（SD7･8）が検出された。詳細は第７・８号溝の項を参照されたい。［時期］出土遺物の特徴から見て、９世紀代と考えられる。

（中村　哲也）

第２号住居跡〔ＳＩ2〕（図18～20、図版5－4・5、10）

［位置］ⅢＪ－111、ⅢＩ・Ｊ・Ｋ－112グリッドに位置する。［平面形・規模］南壁4.8m、北壁５m、東壁3.7m、西壁3.8mの東西方向に広がる長方形をなす。床面積は16.1㎡である。主軸はＮ－11°－Ｗである。［壁・床面］壁高は南壁高15cm、北壁高10cm、東壁高10cm、西壁高15cmである。床面はほぼ平らである。住居北側は礫層を、南側は礫混じりの暗褐色土を床面としている。［周溝］幅20～30cm、深さ５～20cmの周溝が北側の一部を除いてほぼ一巡する。［ピット］カマドの東側に直径15cm、深さ15cmの小ピットが１つ検出された。用途は不明である。［カマド］住居南壁の西寄りに



第1号掘立柱建物跡ピット覆土

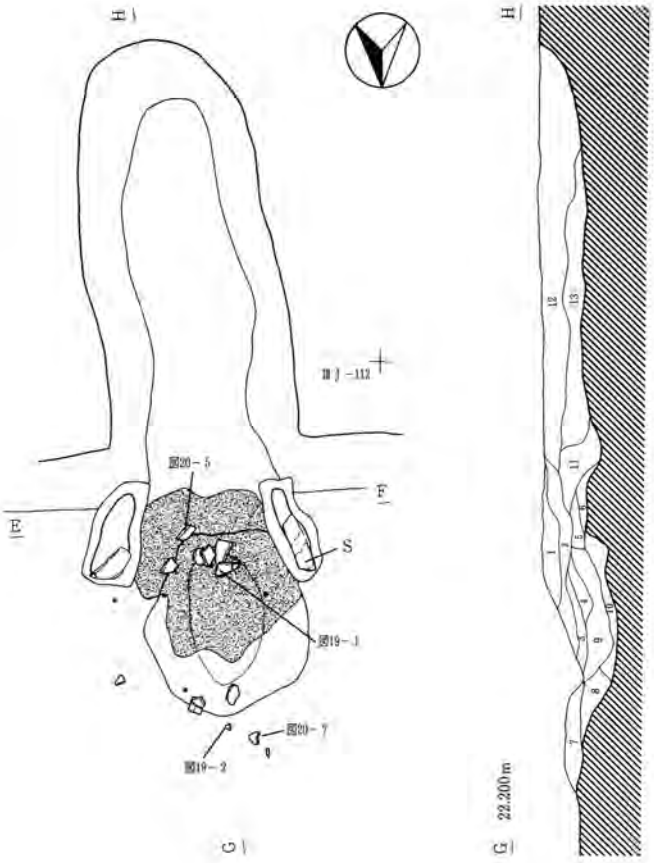
ピット1　黒褐色土　(10YR2/2)
シルト質。浮石少量。
ピット2　黒褐色土　(10YR2/2)
シルト少量、粗砂少量。
ピット3　黒褐色土　(10YR2/2)
炭少量、浮石少量。
ピット4　黒褐色土　(10YR2/2)
砂質。浮石少量、炭微量。
ピット5　黒褐色土　(10YR2/2)
シルト質。
ピット6　黒褐色土　(10YR2/2)
シルト質。炭少量。

ピットの深さ	
ピット1	60cm
ピット2	40cm
ピット3	50cm
ピット4	36cm
ピット5	64cm
ピット6	56cm

第2号住居跡覆土

第1層　黒褐色土　(7.5YR2/1)　炭化物・焼土・砂少量、橙色粒子微量、しまりあり。
第2a層　黒褐色土　(7.5YR2/2)　橙色粒子少量、やや粘土質。
第2b層　褐色土　(10YR4/4)　粘土質、しまりややあり。
第2c層　黒褐色土　(10YR2/2)　橙色粒子微量、しまりあり。ややや粘土質。
第2d層　黒褐色土　(10YR2/3)　橙色粒子微量。
第3層　黒褐色土　(10YR3/1)　橙色粒子微量、やや粘土質。
第4層　黒褐色土　(10YR3/1)　橙色粒子微量。
第5層　黒褐色土　(10YR2/2)　橙色粒子微量。
第6層　黒褐色土　(10YR2/2)　砂利少量。
第7層　黒褐色土　(10YR2/2)　砂利少量、しまりややあり。

図18　第2号住居跡、第1号掘立柱建物跡



第２号住居跡カマド

第１層	黄褐色土	(10YR5/6)	粘土、浮石中量。しまりあり。
第２層	赤褐色土	(５YR4/4)	焼土、炭中量。しまりあり。
第３層	褐 色 土	(7.5YR4/4)	シルト質。
第４層	褐 色 土	(7.5YR4/3)	シルト質。粗砂粒・焼土少量。
第５層	暗褐色土	(10YR3/4)	砂質。焼土微量，粘性あり。
第６層	褐 色 土	(10YR4/4)	細砂粒微量。しまりあり、粘性ややあり。
第７層	黄褐色土	(10YR5/8)	粘土主体。しまりあり。
第８層	黒 色 土	(10YR3/2)	炭化物中量、焼土・浮石・粘土少量。
第９層	赤褐色土	(５YR4/8)	焼土・シルトをレンズ状に含む。しまり弱い。
第10層	暗褐色土	(7.5YR3/3)	砂質。黒色土・炭・焼土少量。しまりなし。
第11層	暗褐色土	(10YR3/4)	砂微量。粘性あり、しまりややあり。
第12層	黒褐色土	(10YR2/2)	しまりややあり。
第13層	褐 色 土	(10YR4/4)	粘性あり、しまりややあり。

(S＝1/30)
0　1m

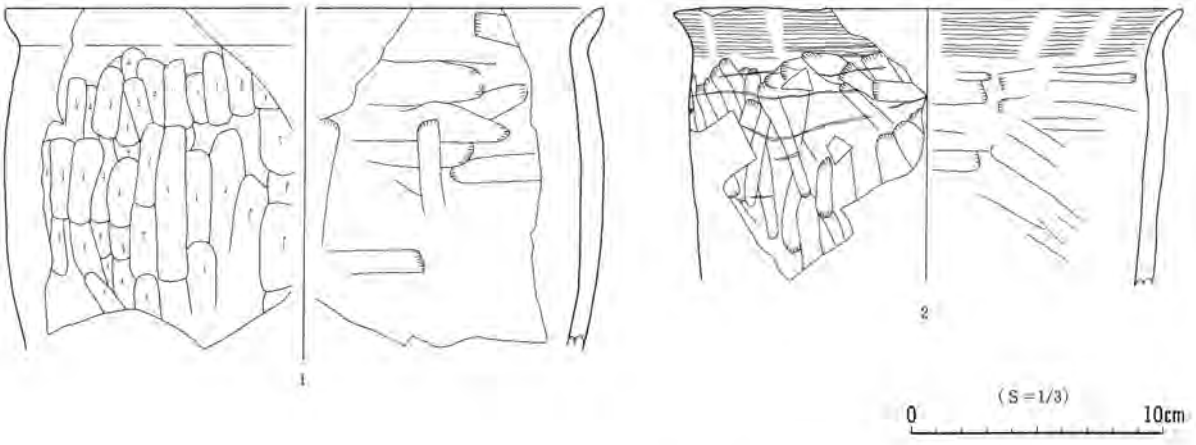


図19　第２号住居跡カマド、出土遺物(1)

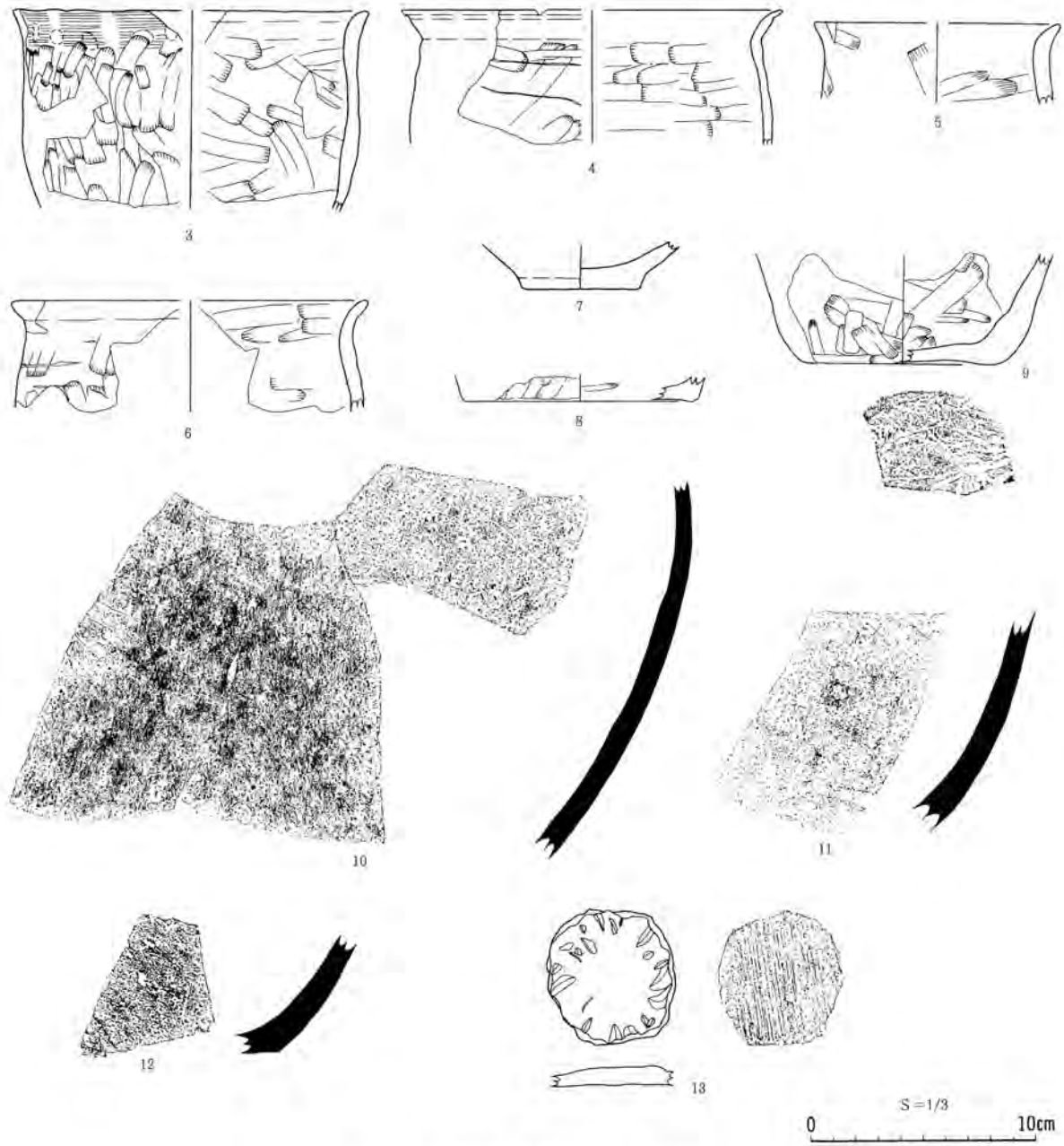


図20　第2号住居跡出土遺物(2)

位置する。主軸は住居と同一である。かまどは廃絶時に壊されたもので、袖が一部残るのみである。袖に使用したと思われる礫が2点出土している。袖は粘土を付き固めたものの上に礫を乗せた作りである。煙道部は、住居跡上部が削平されているため構造は明確ではないが、煙道底部の形状から地下式の可能性が高い。［堆積土］全体に橙色粒子や浮石が混じる砂質土である。［出土遺物］1~6・8・9は非ロクロ土師器甕である。口縁部は外面をヨコナデ後、体部から頸部までヘラナデしたものが多い。内面は体部~頸部まで横方向のヘラナデを施している。底部は体部の調整後、横方向の再調整を施しているものがある（9)。10~12は須恵器甕の胴部下半~底部である。外面ケズリ、内面ナデが施される。色調は内外面・器肉とも灰色を呈し、胎土には粗粒の石英と凝灰岩質かと思われる軟質の白色粒子を含んでいる。石器は二次加工剥片、スリ石、石皿が各1点出土している。（杉野森　淳子）

第１号掘立柱建物跡〔ＳＢ1〕（図18）

［位置］ⅢＩ・Ｊ－112グリッドに位置する。［規模・柱穴］東西２間、南北１間の建物跡である。南北柱列の中間に柱穴は確認されなかった。規模は北側柱列3.4m、東側柱列4.15m、南側柱列3.4m、西側柱列４mの南北方向にのびる長方形である。柱穴寸法は北側柱列と南側柱列とも西から1.65m、1.75mである。主軸はＮ－10°－Ｗと第２号住居跡と一致する。［堆積土］シルト質の黒褐色土が主体である。ピット３・６は炭化物を少量含む。［時期］第２号住居跡に伴う可能性が高いので、平安時代と思われる。（杉野森　淳子）

第３号住居跡〔ＳＩ3〕（図21、図版5－6、７）

［位置］ⅢC—113グリッドに位置する。［平面形・規模］2.9m×3.15mのほぼ正方形である。床面積は7.5㎡で、本遺跡で検出された住居跡の中ではもっとも小さい。［壁・床面］検出面が低く、壁は数cmしか残存していない。床面は軟弱である。［周溝］幅5～10cm、深さ約4～6cmの周溝が検出された。南西辺には認められない。［ピット］床面上に長径1m25cm、短径70cm、深さ10cmのピットが検出された。用途は不明である。柱穴と思われるものは検出されなかった。住居掘方外にも柱穴は検出されなかった。［カマド］検出されなかった。南東隅付近に粘土を含む土が堆積しており、これを掘り下げたところ、炭化物が検出され、また、掘り込みも検出されたことから、南東隅付近にカマドがあったと考えられる。煙道は検出されなかった。［堆積土］１層である。［出土遺物］2は非ロクロの土師器甕である。石器類は二次加工剥片１点、磨り石１点が出土している。［時期］出土遺物から見て９世紀代と考えられる。（中村　哲也）

第４号住居跡〔ＳＩ4〕（図22～25、図版3、5－7・8、10）

［位置］ⅢＥ・Ｆ－109～111、ⅢＤ－110･111グリッドに位置する。［平面形・規模］南壁6.44m、東壁7.70m、北壁残存長4.8mの南北方向に伸びる長方形である。推定床面積は44.8㎡である。主軸方向はＮ－36°－Ｗである。［壁・床面］砂混じりの暗褐色土を床面としている。南東に比べ北西側がやや高い。［周溝］幅約20cmの溝が巡る。溝の北角には深さ26cm、東角には深さ30cmの柱穴と思われるピットが伴う。［土坑］床面から３つ確認された。ピット１・ピット３は底面に多量、ピット２は覆土中に少量の炭化物を含む。［カマド］南東壁の南寄りに位置する。粘土や焼土・炭化物が混在した褐色土・暗褐色土が検出された。かまどの遺存状態は悪く、住居廃絶時に壊されたものと思われる。芯材として使用されたと思われる羽口が覆土中から、周辺からは礫が出土している。燃焼部と思われる位置に直径１m弱、深さ10cmの浅い掘り込みが残り、焼土を含んでいる。削平により煙出し部は不明である。［堆積土］シルト質の暗褐色土が主体である。床面中央から東側には炭化物が広がる。さらに、床面東側隅には黄褐色土の粘土が堆積している。［出土遺物］1・2・4～7・9・12は非ロクロの甕。外面は体部下半にヘラケズリを施し（6・9・11）、あるいはヘラナデを施す（1）。体部上半はヘラナデを施す（1・2・4～7）。頸部に横方向のナデを施すもの（7）、あるいは頸部を強く押さえるもの（6）もある。底部は横方向の再調整を施すもの（11）がある。石器類は全面に擦痕がみられる円盤状石製品(19)・加工礫各１点、剥片・石皿類２点が出土している。［時期］出土遺物から平安時代の焼失住居跡と考えられる。（杉野森　淳子）

第７号溝〔ＳＤ7〕（図14、図版3・10）

［位置］ⅢG-115・116、ⅢF-116グリッドに位置する。第１号住居跡の東側に位置する外周溝である。

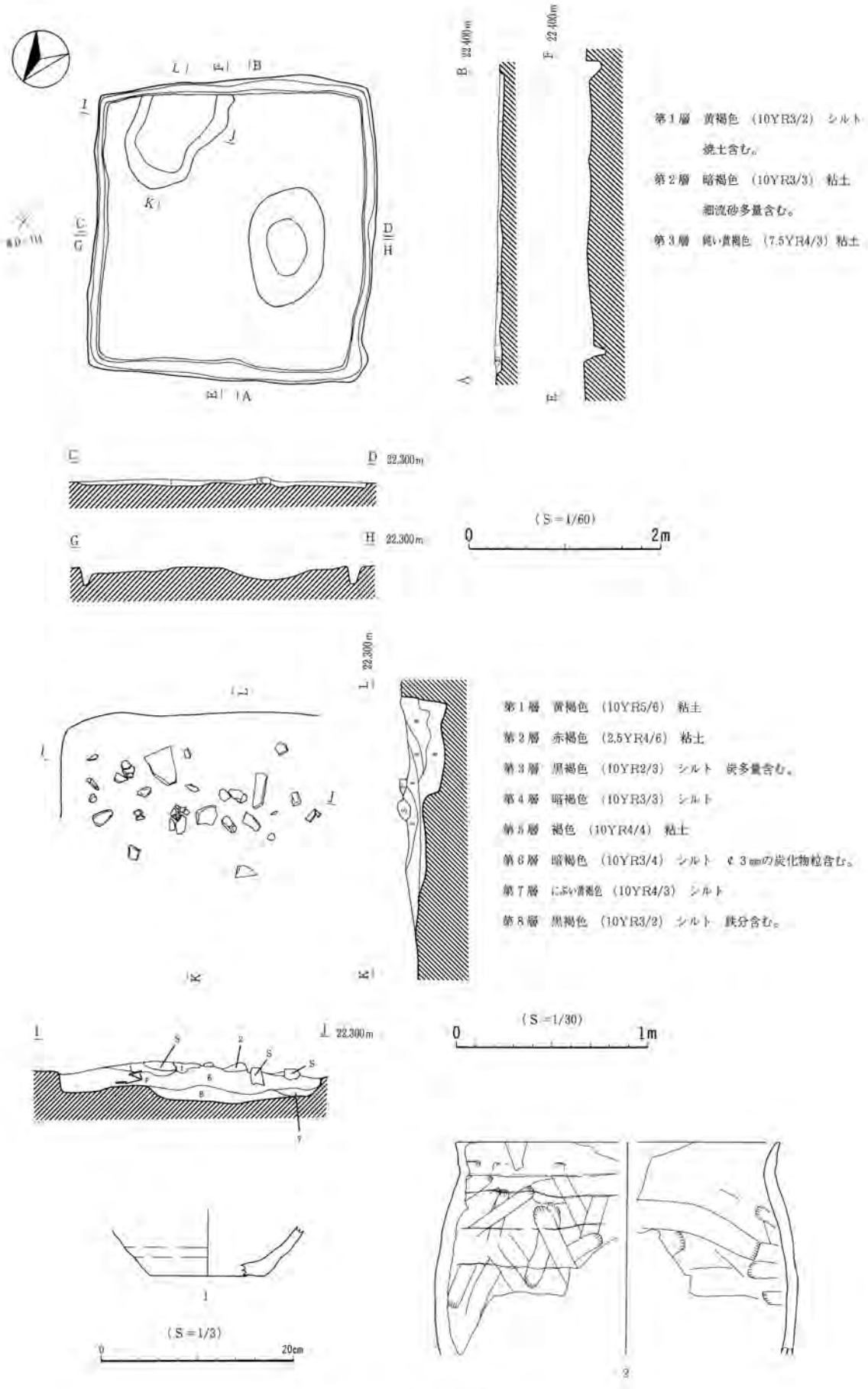

第1層　黄褐色　(10YR5/6)　粘土
第2層　赤褐色　(2.5YR4/6)　粘土
第3層　黒褐色　(10YR2/3)　シルト　炭多量含む。
第4層　暗褐色　(10YR3/3)　シルト
第5層　褐色　(10YR4/4)　粘土
第6層　暗褐色　(10YR3/4)　シルト　φ3㎜の炭化物粒含む。
第7層　にぶい褐色　(10YR4/3)　シルト
第8層　黒褐色　(10YR3/2)　シルト　鉄分含む。
(S=1/60)
0
2m
(S=1/30)
1m
(S=1/3)
20cm

図21　第3号住居跡

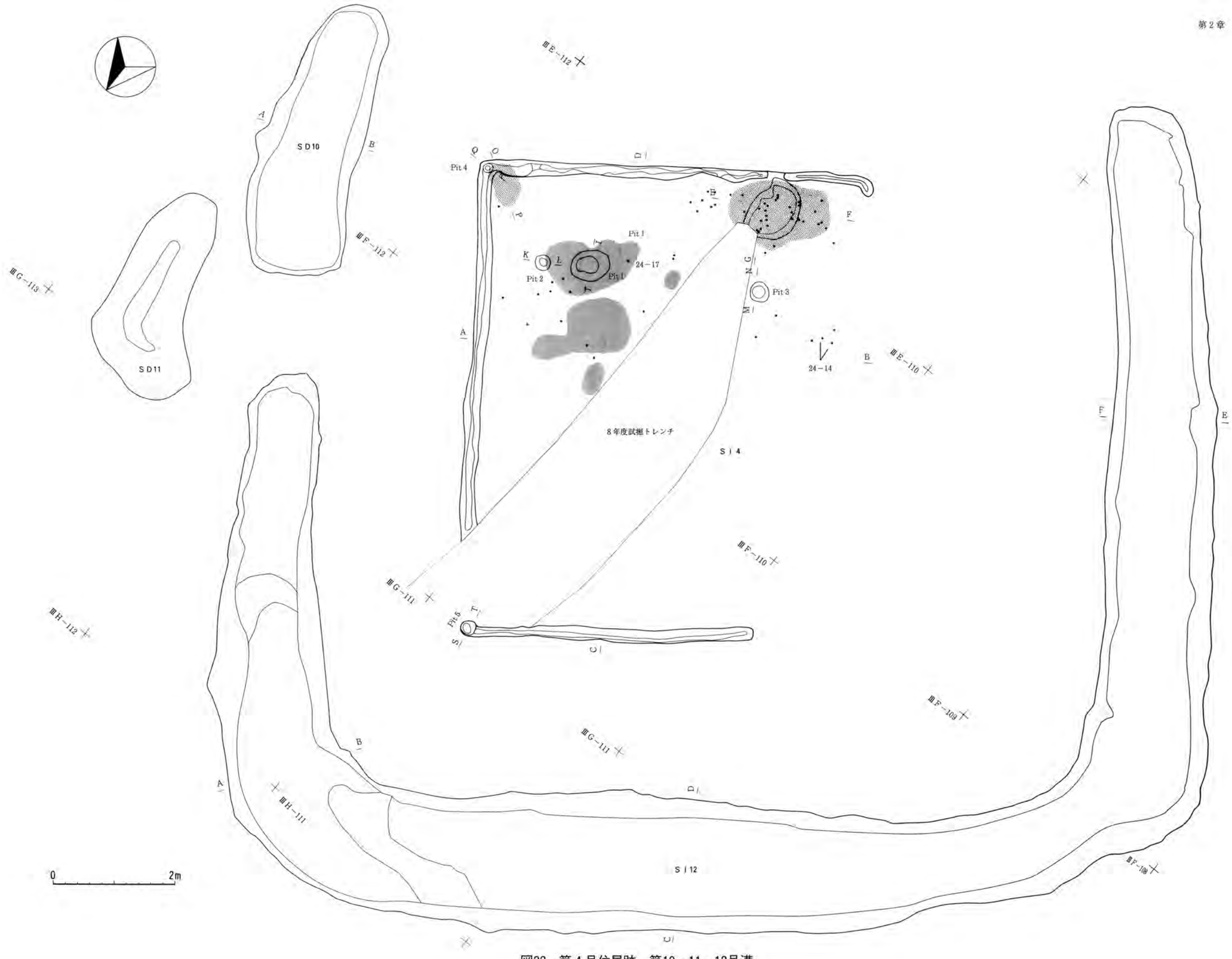
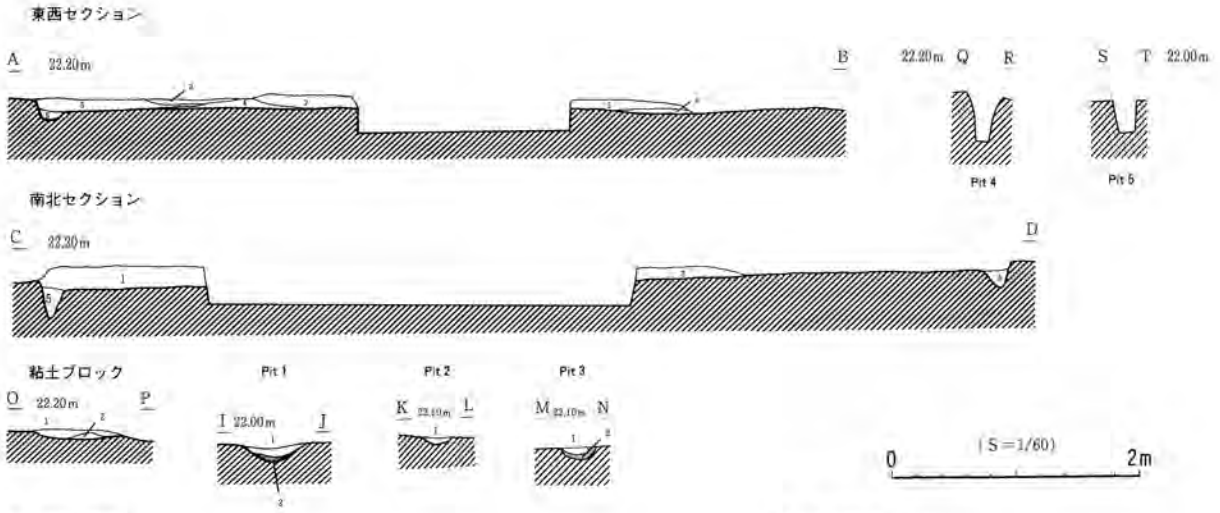


図22　第４号住居跡、第10・11・12号溝



第４号住居跡覆土
第１層　褐 色 土　(10YR5/4)　粗砂粒・浮石中量含む。
第２層　暗褐色土　(10YR3/3)　浮石・炭化物・粘土・小石をまばらに含む。
第３層　黒褐色土　(10YR2/3)　浮石・小石少量含む。
第４層　暗褐色土　(10YR3/3)　浮石・小石少量含む。
第５層　暗褐色土　(10YR3/4)　(床溝覆土)

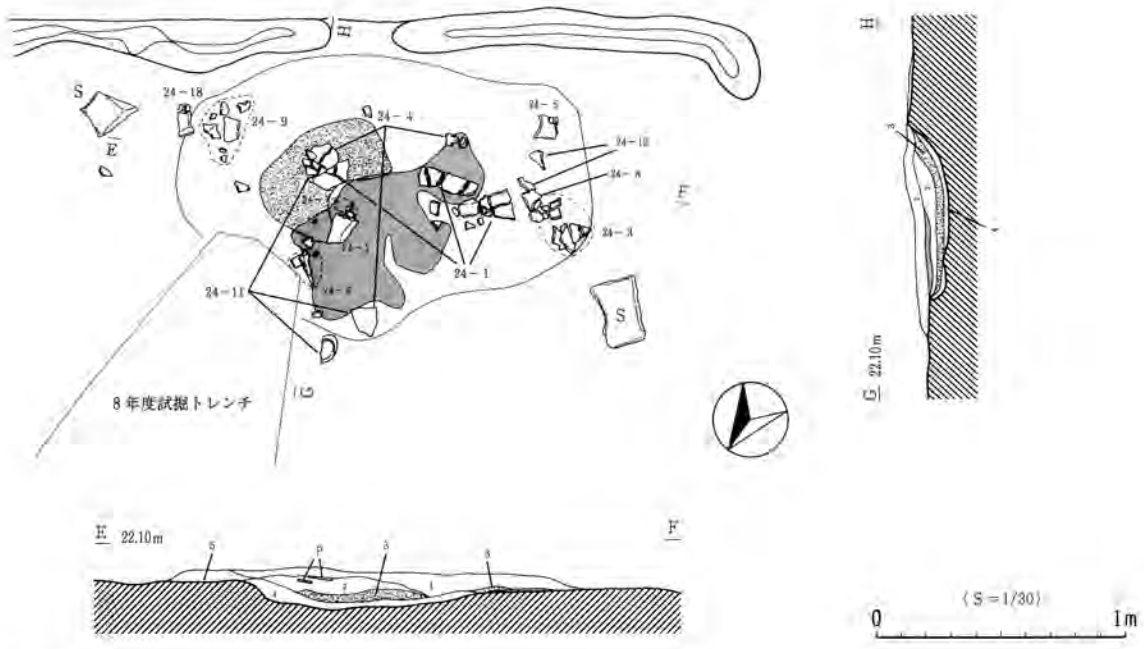
第４号住居粘土ブロック
第１層　黄褐色土　(10YR5/6)　粘土多量。
第２層　暗褐色土　(10YR3/3)　ローム粒・粘土中量。

第４号住居跡ピット１
第１層　暗褐色土　(10YR3/3)　炭化物少量。
第２層　炭化物層

第４号住居跡ピット２
第１層　黒褐色土　(10YR2/2)　浮石・炭化物少量。

第４号住居跡ピット３
第１層　暗褐色土　(10YR3/3)　砂・礫少量。
第２層　炭化物層。

S１４カマド



第４号住居跡カマド
第１層　褐 色 土　(10YR4/4)　粘土中量。砂少量。層状の焼土・炭化物を部分的に含む。
第２層　褐 色 土　(10YR4/4)　焼土・粘土少量。炭化物微量
第３層　赤褐色土　(５YR4/8)　焼土
第４層　暗褐色土　(7.5YR3/3)　粘土・浮石微量。しまりややあり。
第５層　暗褐色土　(10YR3/4)　粘土多量。炭中量。浮石少量。
第６層　褐 色 土　(10YR4/4)　粘土多量。

図23　第４号住居跡(2)

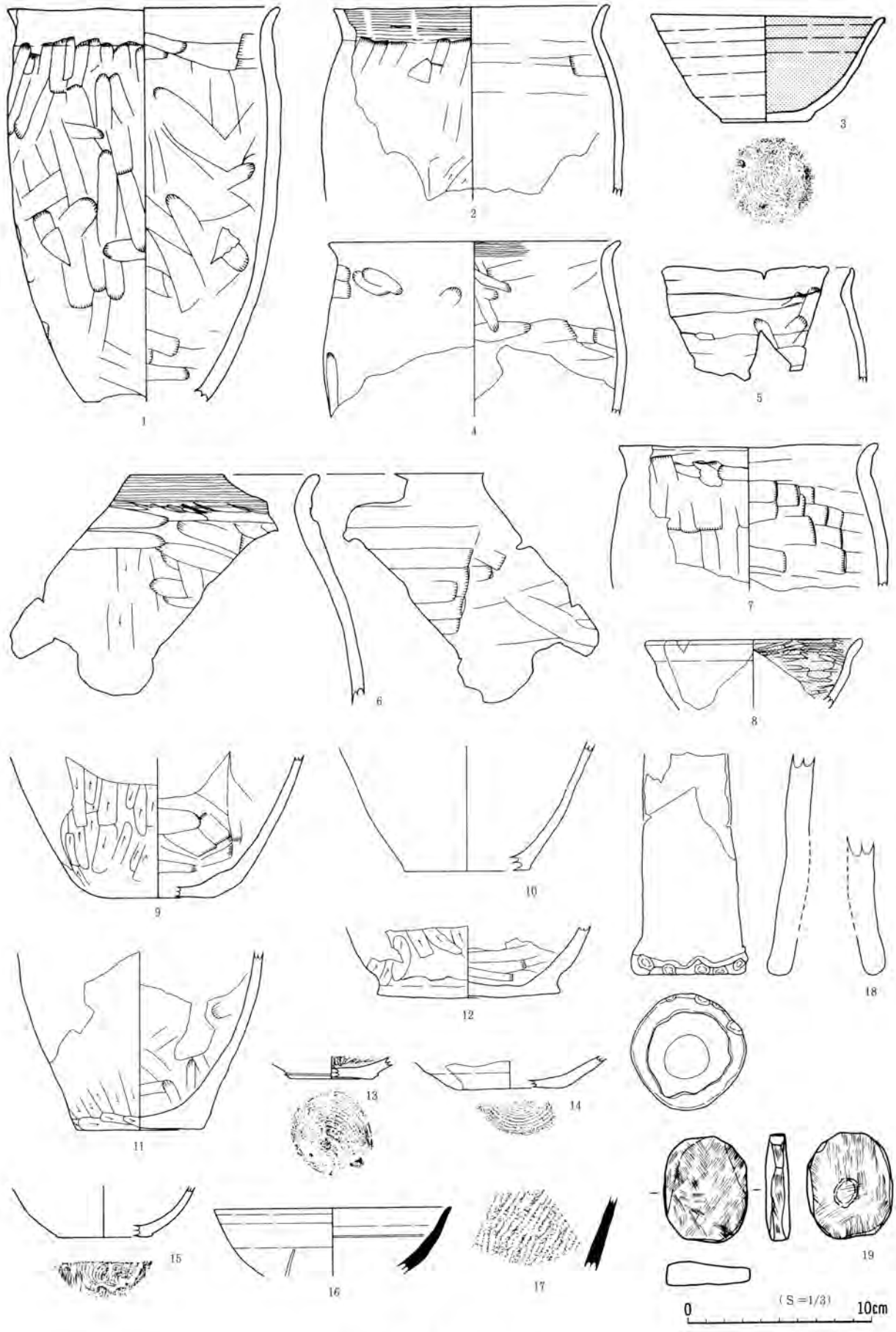


図24　第4号住居跡出土遺物

［重複］第８号溝東側と重複し、第８号溝を掘り込んでいる。［形状・規模］長さ8.5ｍ、幅1.1～1.8ｍ、深さ20～60cmである。北側から南側に向かって深く掘り込まれ、溝北側から中央部までは深さ24cm、南側では54cmと深くなる。底面はほぼ平坦で、底面幅も北側から中央部までは30cm、南側では45cmまで広がる。［堆積土］北側の浅い部分で２層、南側の深い部分で５層に分層される。南側上面には火山灰をブロック状に少量含む。自然堆積と思われる。［出土遺物］羽口は本遺構と第12号溝から出土したものが接合した（図25-2、図27）。本遺構出土部分は出土層位を押さえていないため、第12号溝と本遺構の時間的関係は不明である。石器は凹み石１点、磨り石３点、加工礫１点、二次加工剥片１点、剥片６点が出土している。［時期］平安時代の遺構である。　（杉野森　淳子）

第８号溝〔SD8〕（図14・25、図版3）

［位置］ⅢF-113・114・116、ⅢG-113・114・115・116グリッドに位置する。第１号住居跡の北側と東側に巡る外周溝である。［重複］第７号溝と重複し、第７号溝に切られている。［形状・規模］長さ16.2ｍ、幅70～130cm、深さ10～30cmの浅い溝である。［堆積土］小石混じりの黒褐色土で、自然堆積と思われる。［出土遺物］磨り石１点、剥片２点、釘と思われる鉄製品が出土している。［時期］平安時代の溝である。　（杉野森　淳子）

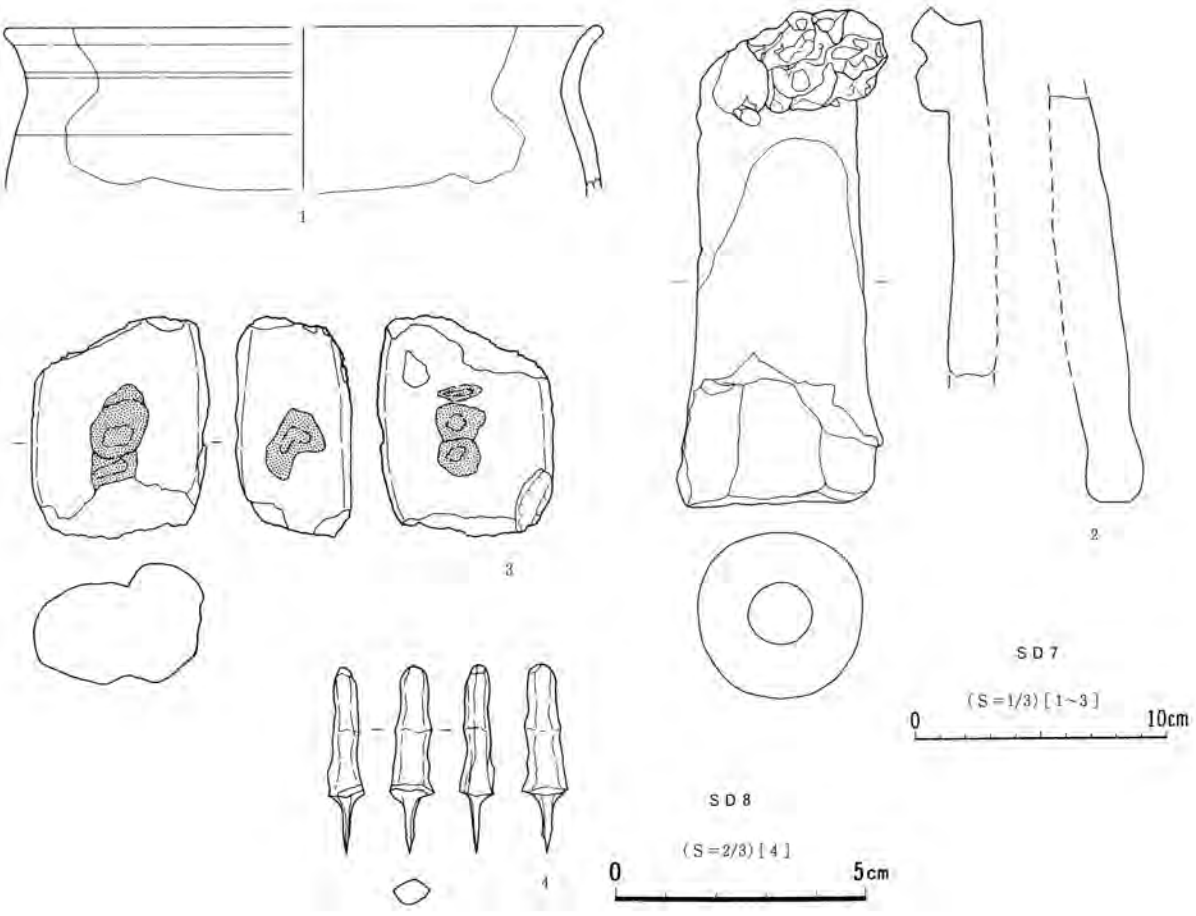


図25　第７・８号溝出土遺物

第9号溝〔SD9〕（図26）

［位置］ⅢH・Ⅰ－114グリッドに位置する。［形状・規模］長さ4.8m、幅1.1m、深さ50～67cmである。底面は長さ1.8m、幅50cmと狭く、底面から北側はなだらかに立ち上がる。［堆積土］4層に分層される。全体的に黒色で、砂質土である。自然堆積と思われる。［出土遺物］剥片4点、磨り石1点が出土している。［時期］平安時代の溝と思われる。（杉野森　淳子）

第10号溝〔SD10〕（図22・28、図版3－1）

［位置］ⅢE・F—112グリッド、第4号住居跡（SI4）の東、第11号溝の南に位置する。［重複］第11・12号溝と一部作り替え・重複が認められる（詳細は第11号溝参照）。［平面形・規模］長さ4.3m、幅1.5m、深さ30cmを計る。［堆積土］3層に細分された。いずれも黒褐色～暗褐色のシルトである。［出土遺物］羽口片が出土した。石器は剥片が5点出土している。［時期］検出された位置、第11・12号溝との関係から第4号住居跡の外周溝と考えられ、9世紀代と思われる。（中村　哲也）

第11号溝〔SD11〕（図22・28、図版3－1）

［位置］ⅢF・G—112グリッド、第4号住居跡（SI4）の南東に位置する。［重複］第10・12号溝と一部作り替え・重複が認められ、新旧3段階の変遷がある。新段階以外は第12号溝の記載後に改めて述べることにする。［平面形・規模］新段階は長さ3.3m、幅1.2m、深さ40cmである。［堆積土］新段階は3層に分層された。いずれも黒褐色～暗褐色のシルトである。［出土遺物］遺物は出土しなかった。［時期］検出された位置から見て第4号住居跡の外周溝と考えられ、9世紀代と思われる。

（中村　哲也）

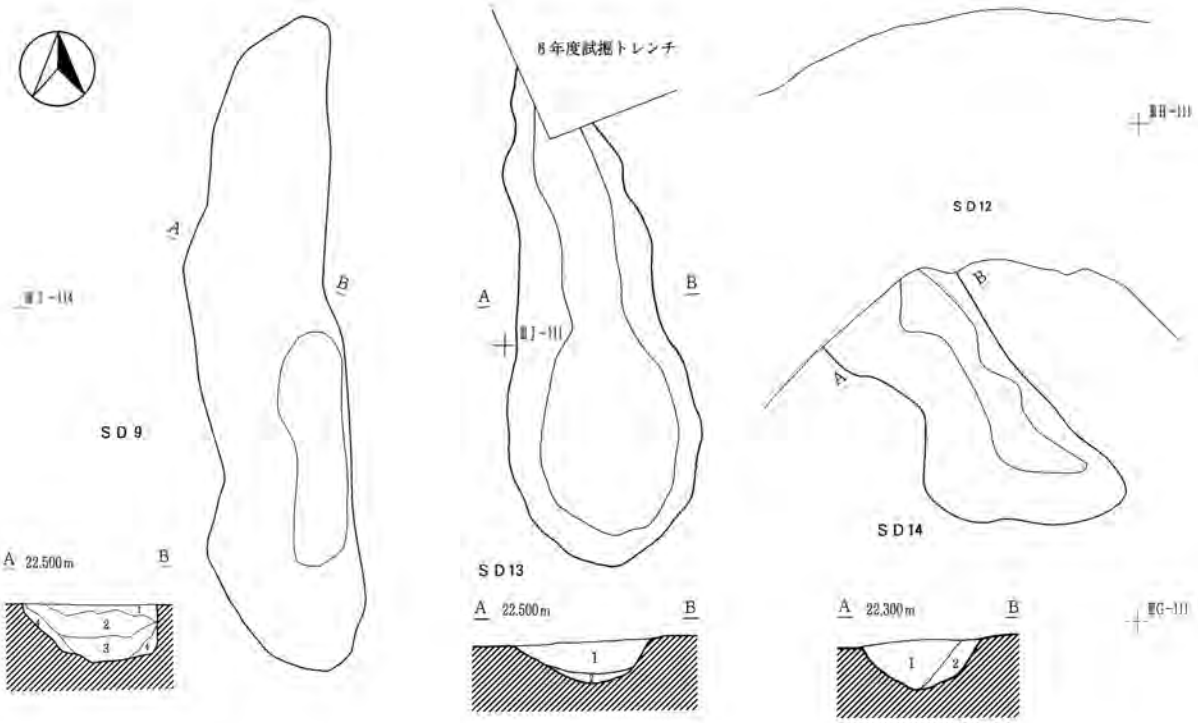
第12号溝〔SD12〕（図22・27・28、図版3－1、6－1～3）

［位置］ⅢC～Ⅰ—108～113グリッド、第4号住居跡の北東辺～北西辺～南西辺に位置する。［重複］第14号溝・第15号溝と重複し、本遺構が新しい。また第10・12号溝と一部作り替え・重複が認められる。［平面形・規模］総延長31.6m、平面形はU字形を呈する。深さは最深部で約60cmである。北東辺～北西辺～南西辺へと深くなる。［堆積土］黒色シルトを主体とする。砂を主体とする層は認められず増水などの理由で一度期に埋没したものではない。また、シルトも極めて粒子の細かいもので、自然堆積の様相を呈する。［出土遺物］土師器・木製品等が出土した。土師器は図29—6の小壺ように非実用的なものも出土したが、ほとんどが破片で、祭祀的な要素を抽出するのは困難である。南西端を中心に木製品が13点出土した。木材の長軸に対して横方向からの削り加工が主体で、さらに先端部を削ったものもある。明確な用途は不明であるが、建築または組立用の部材と考えられる。中には外面が焼け焦げたものもある。木製品は堆積土下位から出土しており、廃棄されたものと考えられる。図30—1・31—3は流れ込みの可能性もある。石器は石匙・磨製石斧・石核各1点、敲磨器類4点、剥片5点が出土している。［時期］検出された位置から考えて、第4号住居跡の外周溝と考えられ、9世紀代である。出土遺物もこれと矛盾しない。（中村　哲也）

第10・11・12号溝の関係について（図28b）

第10・11・12号溝は作り替えが行われており、土層断面の検討により3段階の変遷が把握される。

第1段階　第10・12号溝が一つの溝として機能していた段階（図28b平面図赤実線）。第11号溝は構築されていない。



第９号溝

第１層　黒褐色土　(10YR2/3)　小石(2～5mm)全体に含む。
　　橙色粒子少量含む。
第２層　黒褐色土　(10YR2/2)　小石(2～5mm)全体に含む。
第１層　黒褐色土　(10YR2/3)　小石(1～3mm)まばらに含む。
　　シルトブロック含む。
第４層　黒褐色土　(10YR2/3)　粘土ブロック・砂全体に含む。

第13号溝

第１層　黒褐色土　(10YR2/2)　シルト・炭化物少量。
　　浮石・礫全体に含む。
第２層　暗褐色土　(10YR3/3)　砂質。

第14号溝

第１層　黒褐色土　(10YR3/1)　浮石混入，やや砂質。
第２層　暗褐色土　(10YR3/4)　浮石、シルト混入。

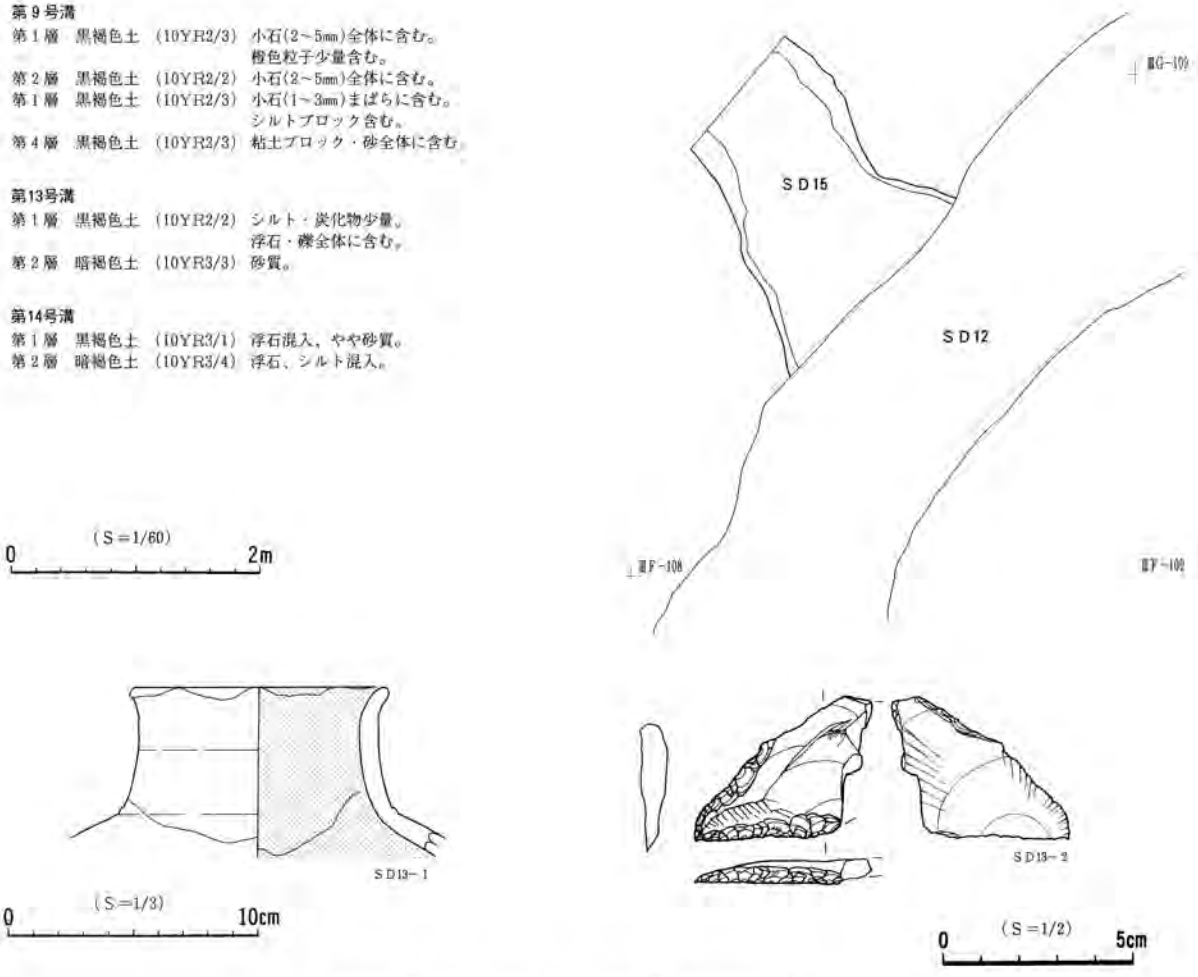


図26　第９・13・14・15号溝及び出土遺物

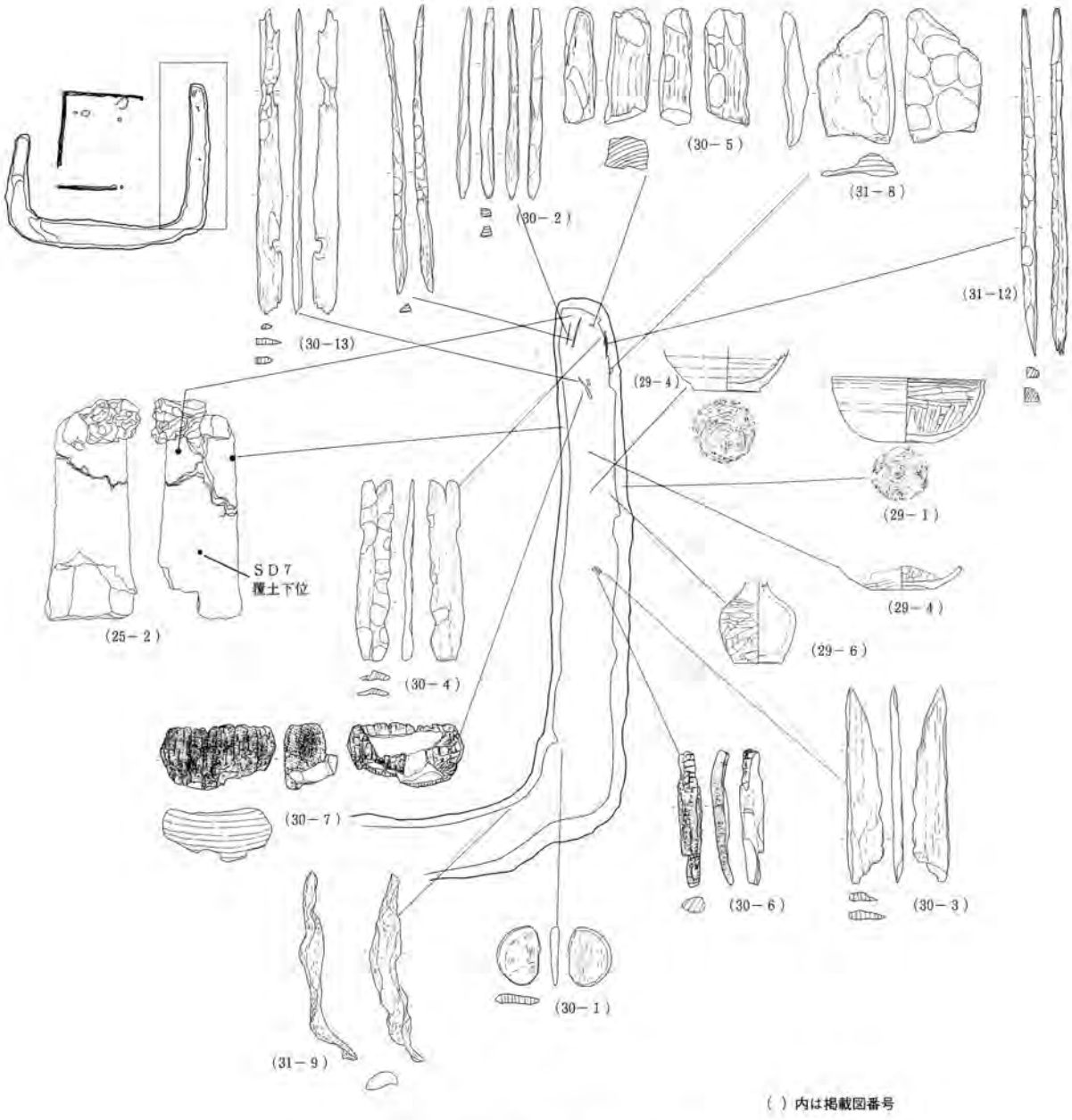
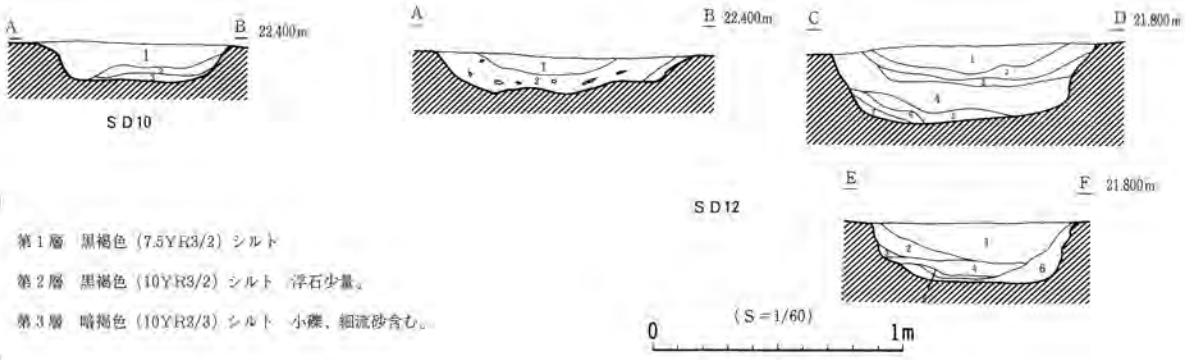


図27　第12号溝遺物分布図

第２段階　　第10・12号溝が一部埋め戻され分離する（図28b平面図黒実線）。第11号溝が築かれる（西側は赤破線まで）。

第３段階　　第10・12号溝は分離したままである。第11号溝は一部が埋め戻される（図28b平面図黒実線。セクションは4・５層上面ラインが底面となる。）。

以上のような関係は、それぞれを個別の遺構として調査した後、第11号溝底面に一部黒色シルト（土層断面図第5層）を検出したため遺構本来の掘方が埋め戻されたものと判断した。10・12号溝の作り替えを示す土層断面図は作図していないが、第11号溝と同様のあり方を示していた。そのため作り替えと判断したものである。最終的に第10・11・12号溝が三者で第4号住居跡の外周溝として機能していたと考えられる。　　（中村　哲也）



SD10

第１層　黒褐色（7.5YR3/2）シルト

第２層　黒褐色（10YR3/2）シルト　浮石少量。

第３層　暗褐色（10YR3/3）シルト　小礫、細流砂含む。

SD12

AB

第１層　暗褐色（7.5YR3/4）シルト　炭化物含む。浮石少量。

第２層　黒褐色（10YR2/1）シルト　浮石、砂少量。

第３層　暗褐色（10YR3/3）シルト　粗粒砂含む。

CD

第１層　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　粗粒砂含む。φ２～５mmの浮石含む。

第２層　黒褐色（10YR3/2）シルト　粗粒砂含む。

第３層　灰黄褐色（10YR4/2）シルト　粗粒砂含む。

第４層　黒褐色（10YR2/2）シルト　粗粒砂含む。

第５層　黒褐色（10YR2/2）灰色（7.5Y4/1）シルト　斑状に含む。

第６層　黒褐色（2.5YR3/1）シルト

第７層　灰色（7.5YR4/1）シルト

EF

第１層　褐灰色（10YR4/2）粘土　粗粒砂、φ５mmの礫含む

第２層　灰黄褐色（10YR4/2）粘土

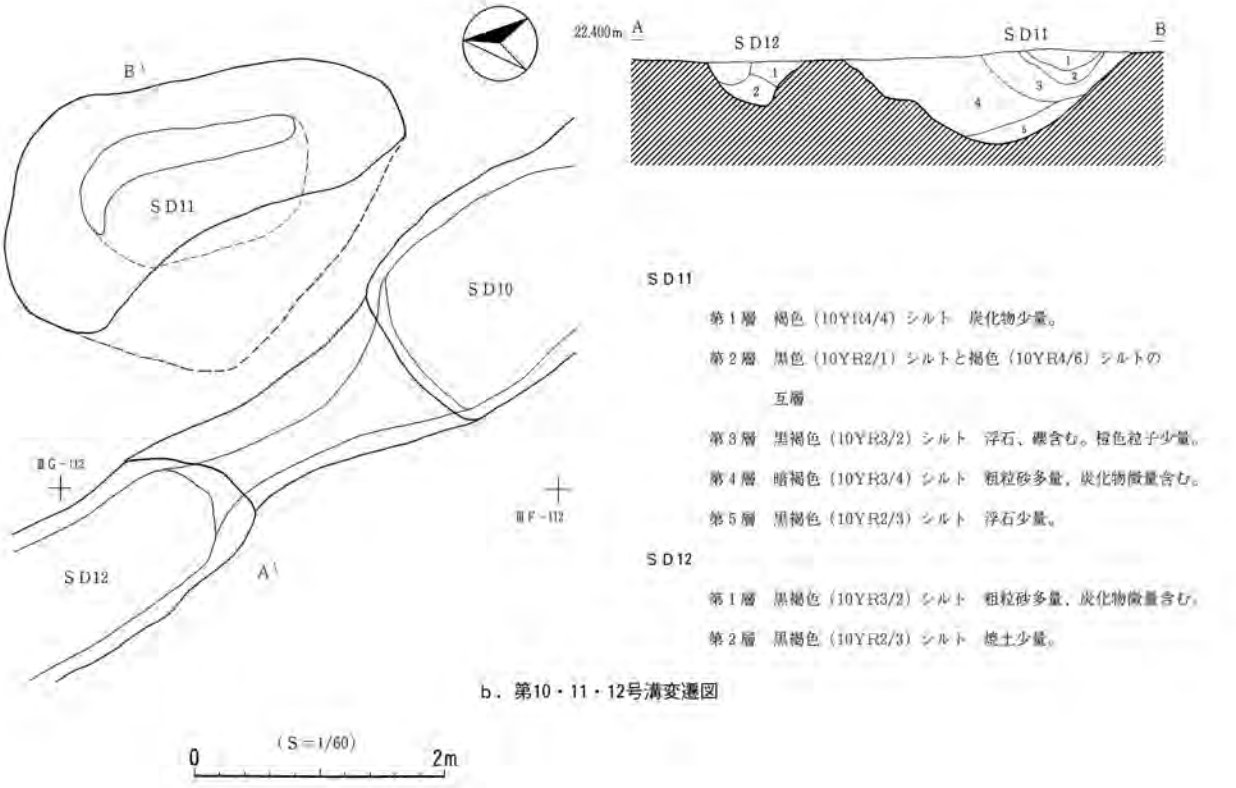
第３層　褐灰色（10YR4/1）粘土

第４層　灰黄褐色（10YR5/2）粘土　荒粒砂含む。

第５層　黒色（10YR2/1）シルト　有機質多量。

第６層　褐灰色（10YR4/1）粘土　φ３mmの小礫含む。

a．第10・12号溝土層断面



SD11

第１層　褐色（10YR4/4）シルト　炭化物少量。

第２層　黒色（10YR2/1）シルトと褐色（10YR4/6）シルトの互層

第３層　黒褐色（10YR3/2）シルト　浮石、礫含む。橙色粒子少量。

第４層　暗褐色（10YR3/4）シルト　粗粒砂多量，炭化物微量含む。

第５層　黒褐色（10YR2/3）シルト　浮石少量。

SD12

第１層　黒褐色（10YR3/2）シルト　粗粒砂多量，炭化物微量含む。

第２層　黒褐色（10YR2/3）シルト　焼土少量。

b．第10・11・12号溝変遷図

図28　第10・11・12号溝

第13号溝〔SD13〕（図26）

［位置］ⅢＩ・Ｊ－111グリッドに位置する。第２号住居跡西側に平行して位置する。［形状・規模］長さ約3.8m、幅70～160cm、深さ20～40cmである。南側に向かい幅が広く、南側の底面形状はほぼ円形である。［堆積土］２層に分層される。自然堆積と思われる。［出土遺物］壺の口縁部～頸部が１点、二次加工剥片ｂ類が出土している。［時期］平安時代のものと思われる。

（杉野森　淳子）

第14号溝〔SD14〕（図26）

［位置］ⅢＧ－110グリッドに位置する。［重複］第12号溝と重複し、第12号溝より古い。［形状・規模］幅80～110cm、深さ50cm前後、残存長2.3mの溝である。［堆積土］２層に分層される。自然堆積である。［時期］第４号住居跡に伴う外周溝（第12号溝）に切られていることから、平安時代9世紀代の溝である。

（杉野森　淳子）

第15号溝〔SD15〕（図26）

［位置］ⅢＦ―108で検出された。［重複］第12号溝跡と重複し、本遺構が古い。［平面形・規模］極めて浅く、5cm内外である。［堆積土］暗褐色シルトの単一層である。断面図は作図していない。［出土遺物］遺物は出土しなかった。［時期］第12号溝より古い。規模や検出位置からは平安時代のものと考えられる。

（中村　哲也）

第3号カマド状遺構〔SN３〕（図32、図版32）

［位置・確認］ⅢＤ－116・117グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で確認したため、かまどの掘り込みを確認することができなかった。［形状・規模］1.3m×0.7mの範囲に粘土が広がる。［堆積土］焼土・炭・粘土がまばらに入ることから、使用後、壊したものと思われる。［出土遺物］焼土・粘土中から土師器が出土した。1は非ロクロ、2はロクロの甕である。［時期］第１・２号カマド遺構のように掘り込みがないことと、カマドの廃棄状態から住居のカマドの可能性が高い。さらに、出土遺物からも平安時代の住居跡のカマドと思われる。

（杉野森　淳子）

第1号埋設土器〔SR1〕（図33、図版12）

［位置・確認］ⅢＥ－115グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。［形状・規模］掘方は長軸30cm、短軸20cmの楕円形で、第Ⅳ層を掘り込んでいる。［堆積土］掘方覆土は炭化物混じりの黒褐色土である。土師器内堆積土は暗褐色でローム粒・炭化物が含まれている。［土器］埋設された土器はロクロ整形の広口壺で、胴部中位から下位に向かってケズリを施し、その後胴部中位に横方向のケズリを施している。底部は回転糸切りで、体部下端のケズリによって、多角形をなしている。胴部上位には「王」がヘラ状の工具により刻まれている。刻書の大きさは約2.5×3.7cm、工具先端の幅約１mmである。

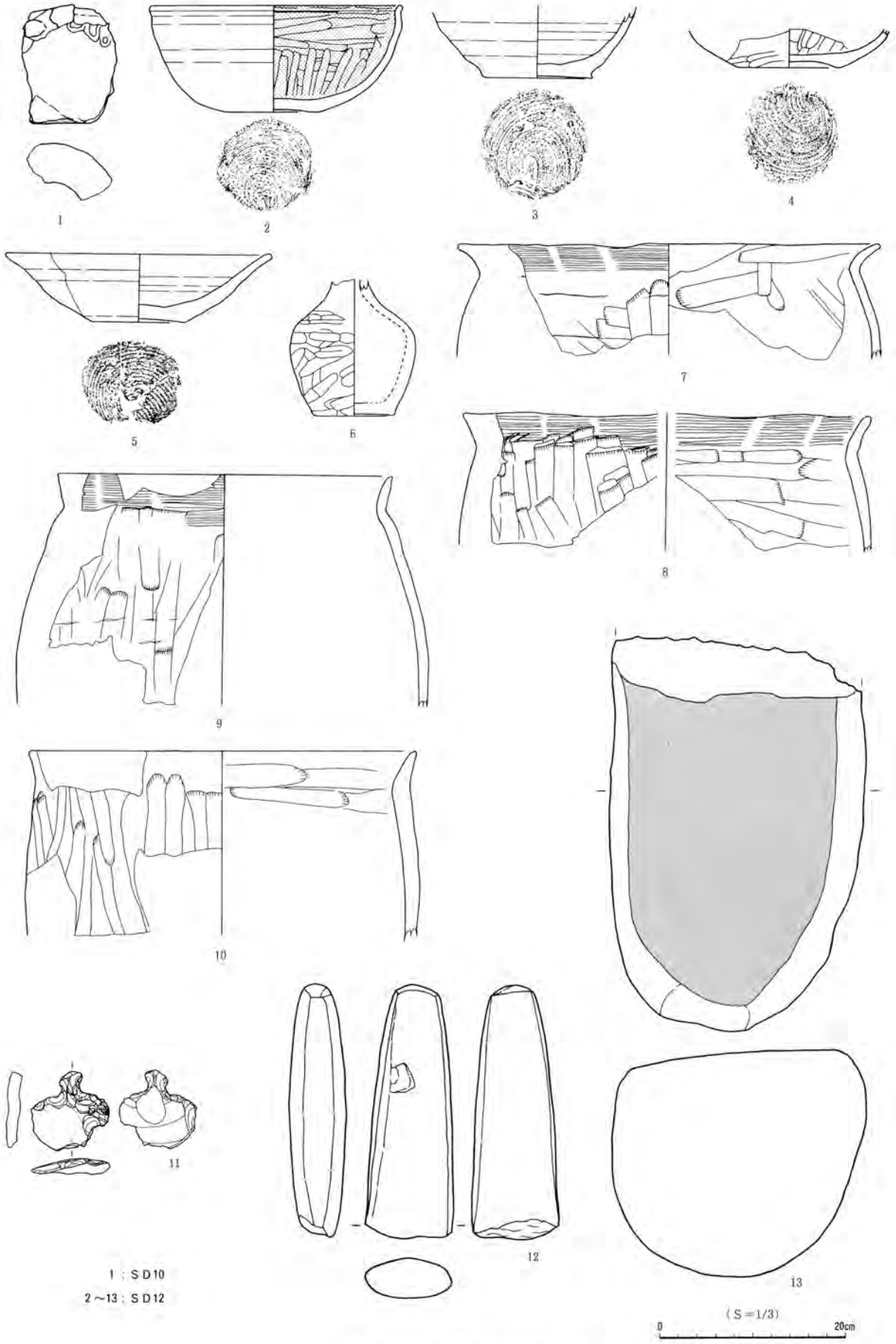


図29　第10・12号溝出土遺物(1)

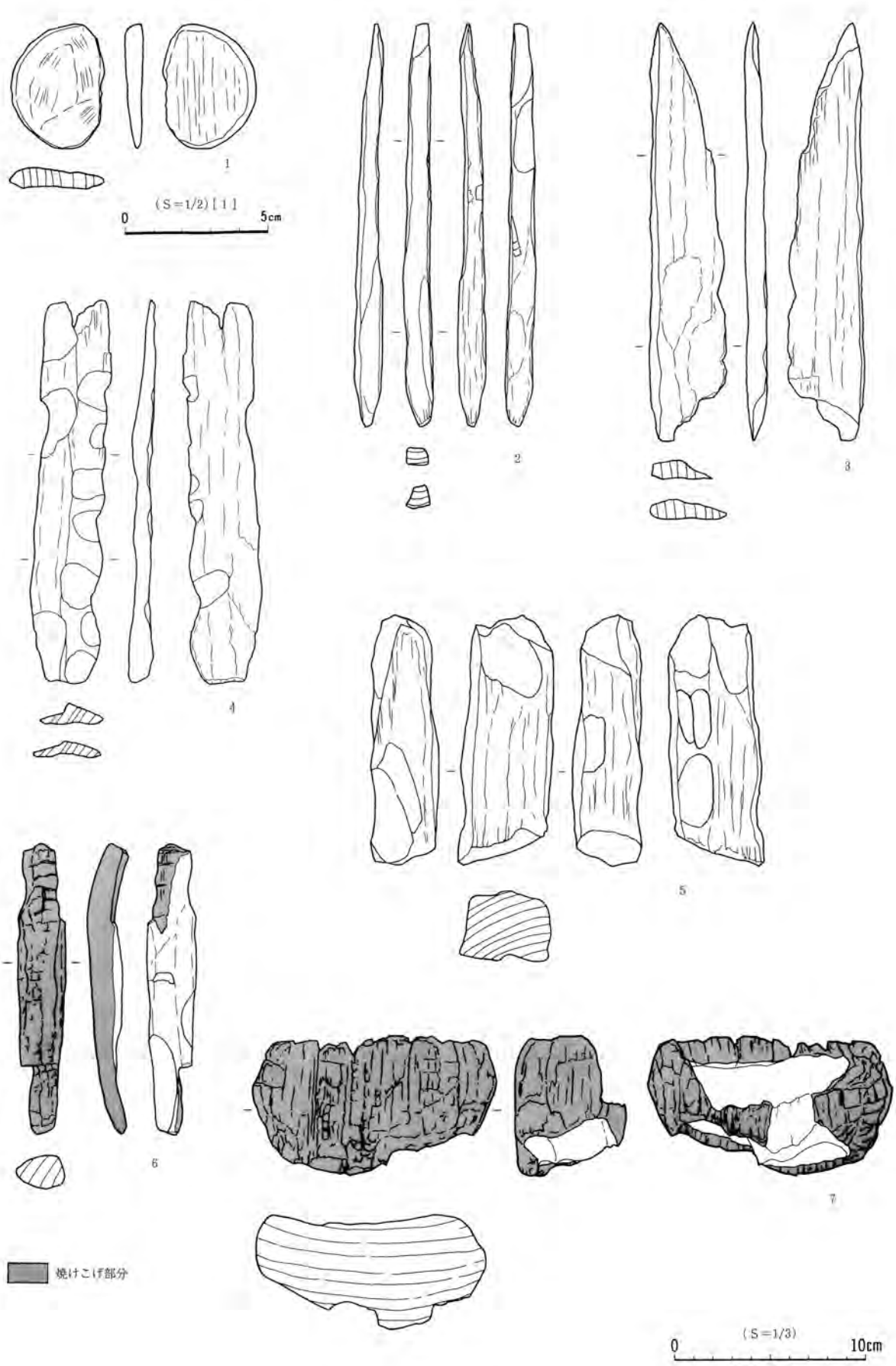


図30　第12号溝出土遺物(2)

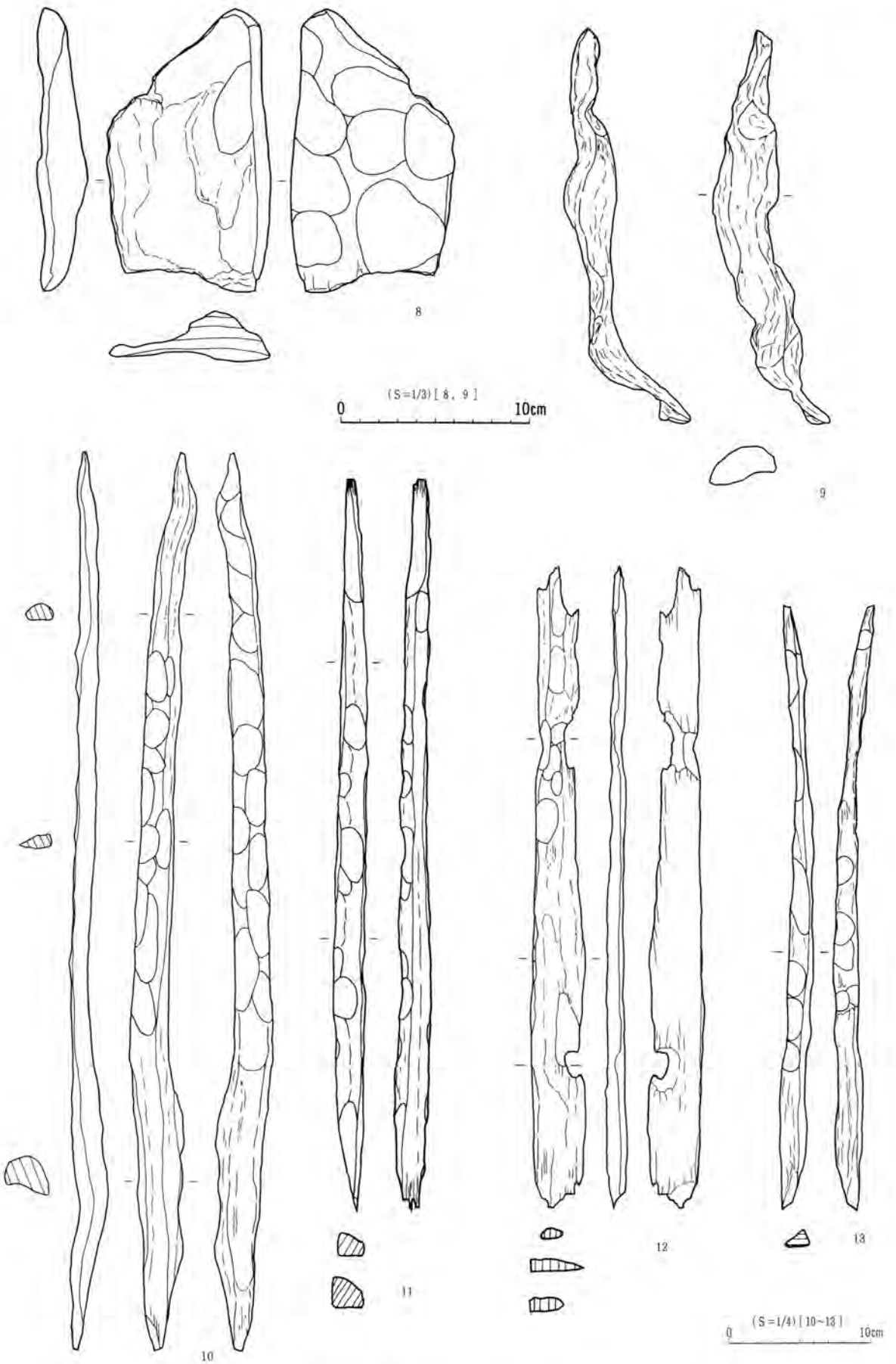


図31　第12号溝出土遺物(3)

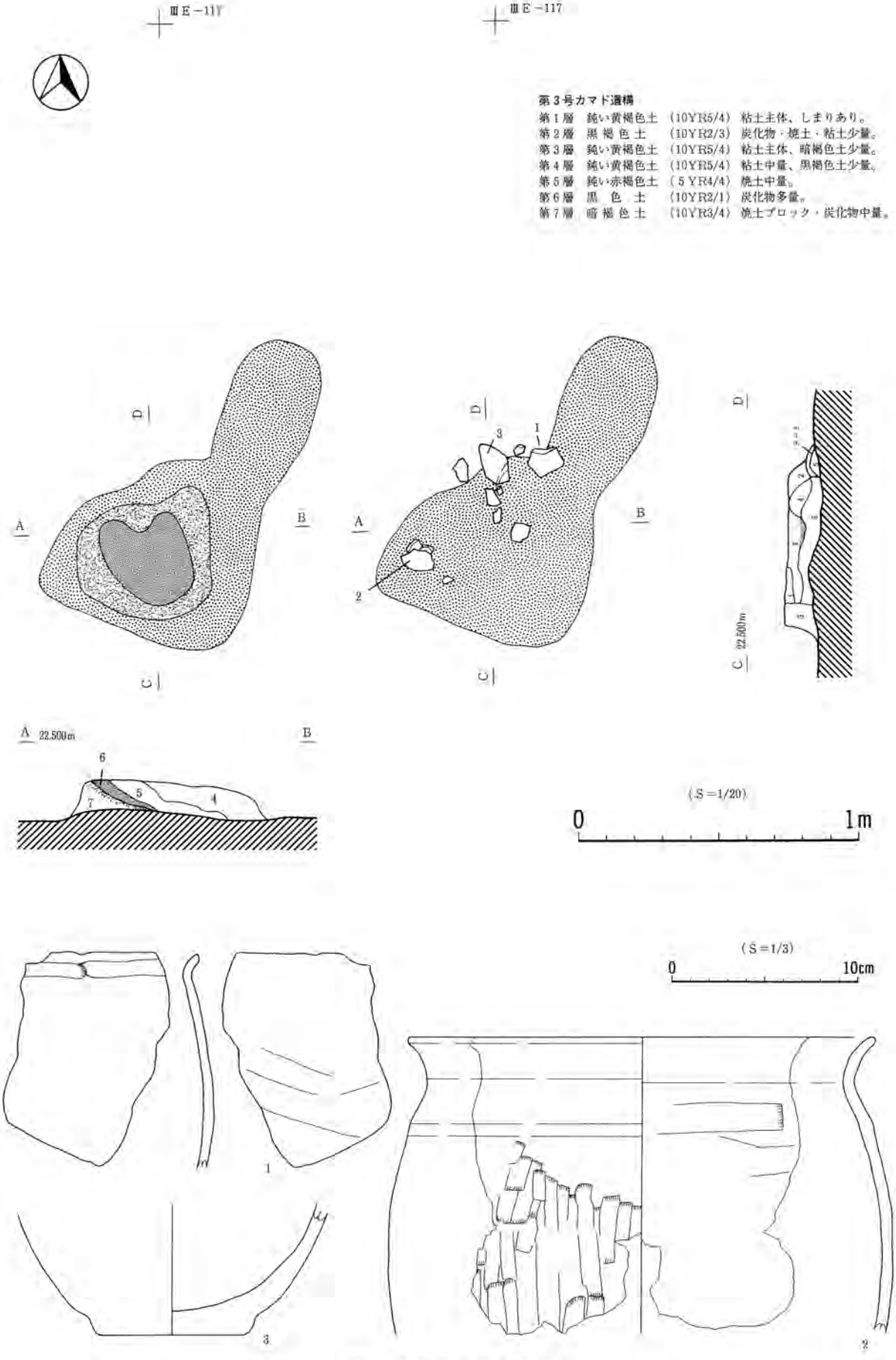


図32　第3号カマド遺構

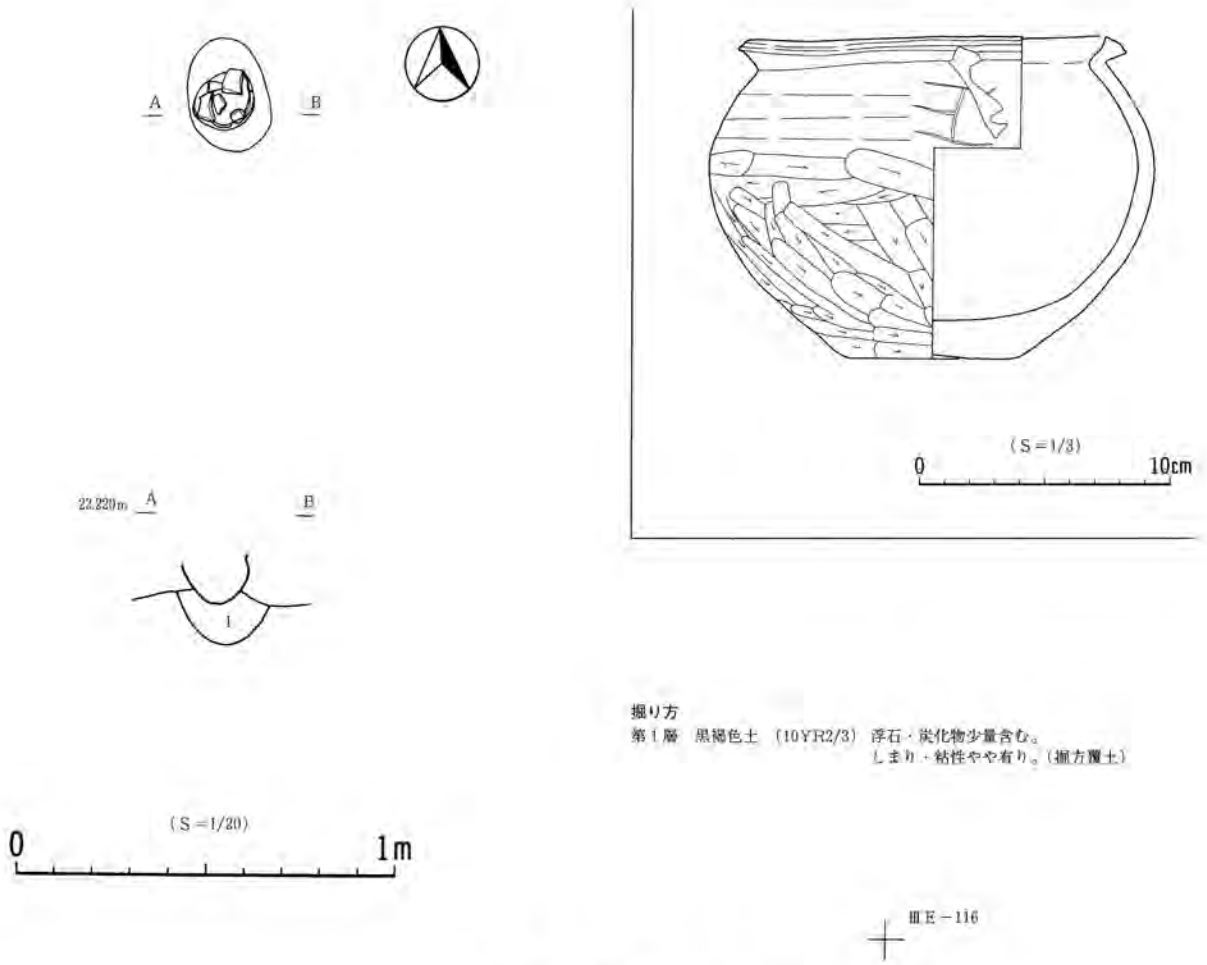


図33　第１号埋設土器

第３節　中世以降の遺構

第１・２号カマド状遺構〔SN1・2〕(図34、図版6－6)

［位置］ⅢＥ・Ｆ―114・115グリッド、平面的には第１号住居跡の掘り方内に位置する。［確認］第１号住居跡精査中に、黄褐色粘土質火山灰土の塊を確認し、面的にこれを追ったところ、砂を多量に含んだシルトと、この上にカマド状遺構を確認した。また、第1号住居跡堆積土7層中に黄褐色粘土ブロックが含まれており、住居堆積土が堆積中に本遺構が築かれ、廃絶されたものと判断された。［形状等］相当部分を平成８年度の試掘調査により破壊されていたため、カマド壁体の下部のみが残されていた。下部構造としての掘り込みは認められず、残された壁体の下部のみが被熱により赤化していた。火床面は認められなかった。西側に認められる壁体（セクションＡ―Ａ'を中心とする）一対を第1号とし、さらに南西方に壁体と同様の粘土が見られたことからこれを第2号としたが、赤化部分が認められず、壁体の一部が散乱したものとも解釈できる。本来1基の遺構であった可能性が高い。［時期］平安時代の住居跡埋没過程に築かれており、平安時代以降である。また、屋外にカマド状遺構が一般的に築かれるのは館跡にしばしば見られる現象であり、本遺構も中世ないしはそれ以降の遺構として把握される可能性が考えられる。　（中村　哲也）

第１号溝〔SD1〕(図35)

［位置］ⅢＥ～Ｈ―111～117グリッドで検出された。［重複］第5・8・9号溝と重複し、本遺構が新しい。［形状・規模］総延長32m、幅最大20cm、深さ約20cmで、断面形はほぼ箱形である。底面の高さは、22.2mを数cm前後する高さで傾きは認められない。主軸方位はＮ―58°―Ｅである。［堆積土］１～２層に分層される。堆積土は黒褐色シルトが主体である。［出土遺物］遺物は出土しなかった。［時期］平安時代の溝と重複し、これより新しいことから中世ないしはそれ以降の溝である可能性が高い。

（中村　哲也）

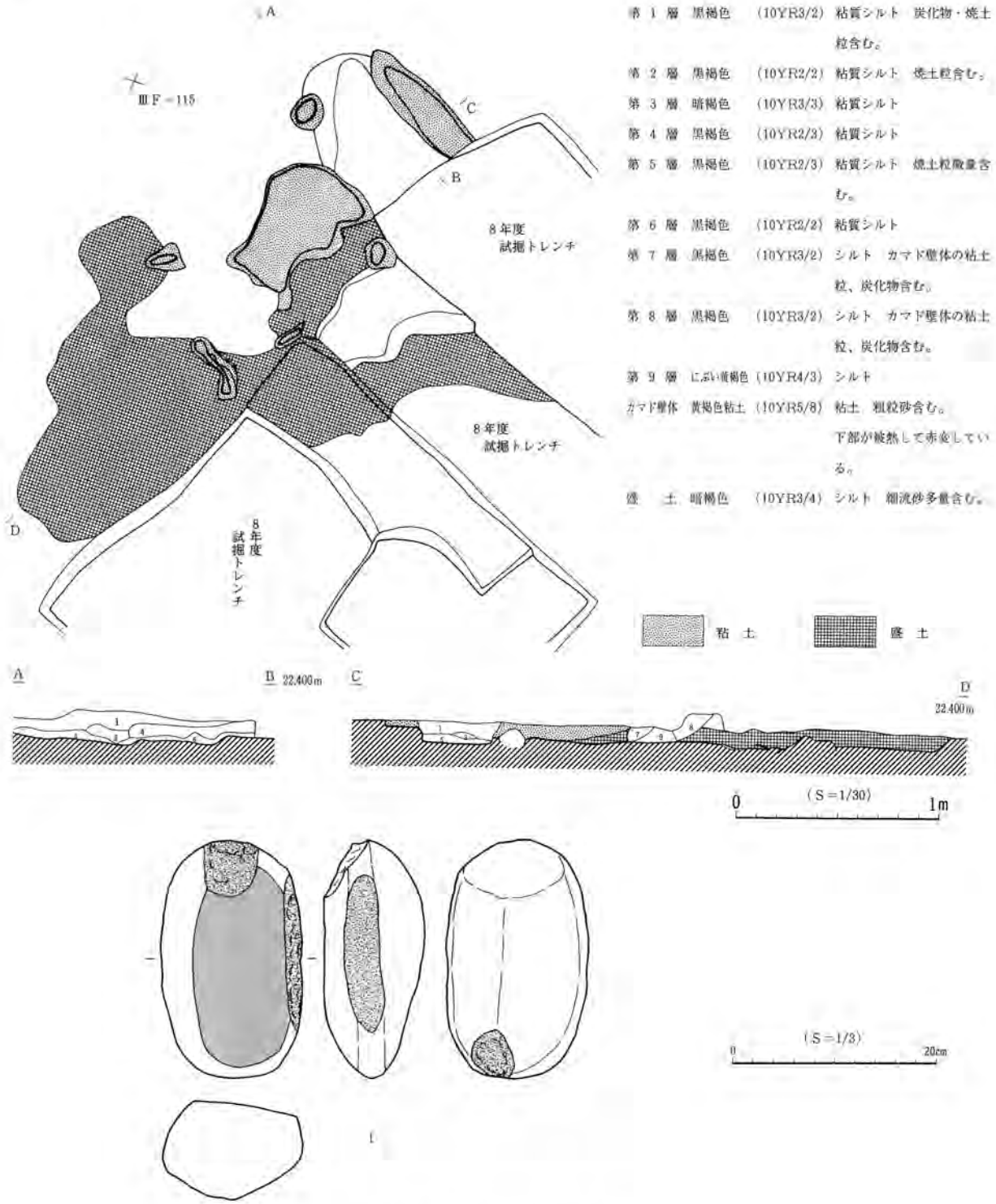


図34　第１・２号カマド状遺構

第２号溝〔SD2〕（図35）

［位置］ⅢＡ～ＥⅢ—117～119で検出された。［形状・規模］総延長16.9m、幅約30㎝、深さ約15㎝を計る。断面形は若干丸みを帯びる。底面の高さは22.3mを数㎝前後する程度で、傾きは認められない。主軸方位はN—35°—Wである。［堆積土］１～２層に分層される。堆積土は黒褐色シルトが主体である。［出土遺物］本遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。［時期］第１号溝と主軸が同一方向であり、同時期と考えられる。（中村　哲也）

第３号溝〔SD3〕（図36）

［位置］ⅢＢ～Ｅ—114～118グリッドで検出された。［形状・規模］総延長14.5m、幅約20㎝、深さ約20㎝である。底面の高さは22.3mを数㎝前後する程度で傾きは認められない。主軸方位はN—35°—Wで、第２号溝にほぼ直交する。［堆積土］1～2層に分層される。黒褐色シルトが主体である。［時期］位置、形状から第１号溝と同時代と考えられる。（中村　哲也）

第４号溝〔SD4〕（図36）

［位置］ⅢＧ～Ｈ—110～114グリッドで検出された。［重複］5号溝と重複し、本遺構が新しい。［形状・規模］総延長9m、幅約30㎝、深さ約20㎝を計る。底面高は東端が22.15m、西端が22.00m程度で、西に傾いている。主軸方位はN—84°—Eである。［堆積土］暗褐色シルトである。［時期］形状や検出位置から第１号溝と同時代と考えられる。（中村　哲也）

第５号溝〔SD5〕（図36）

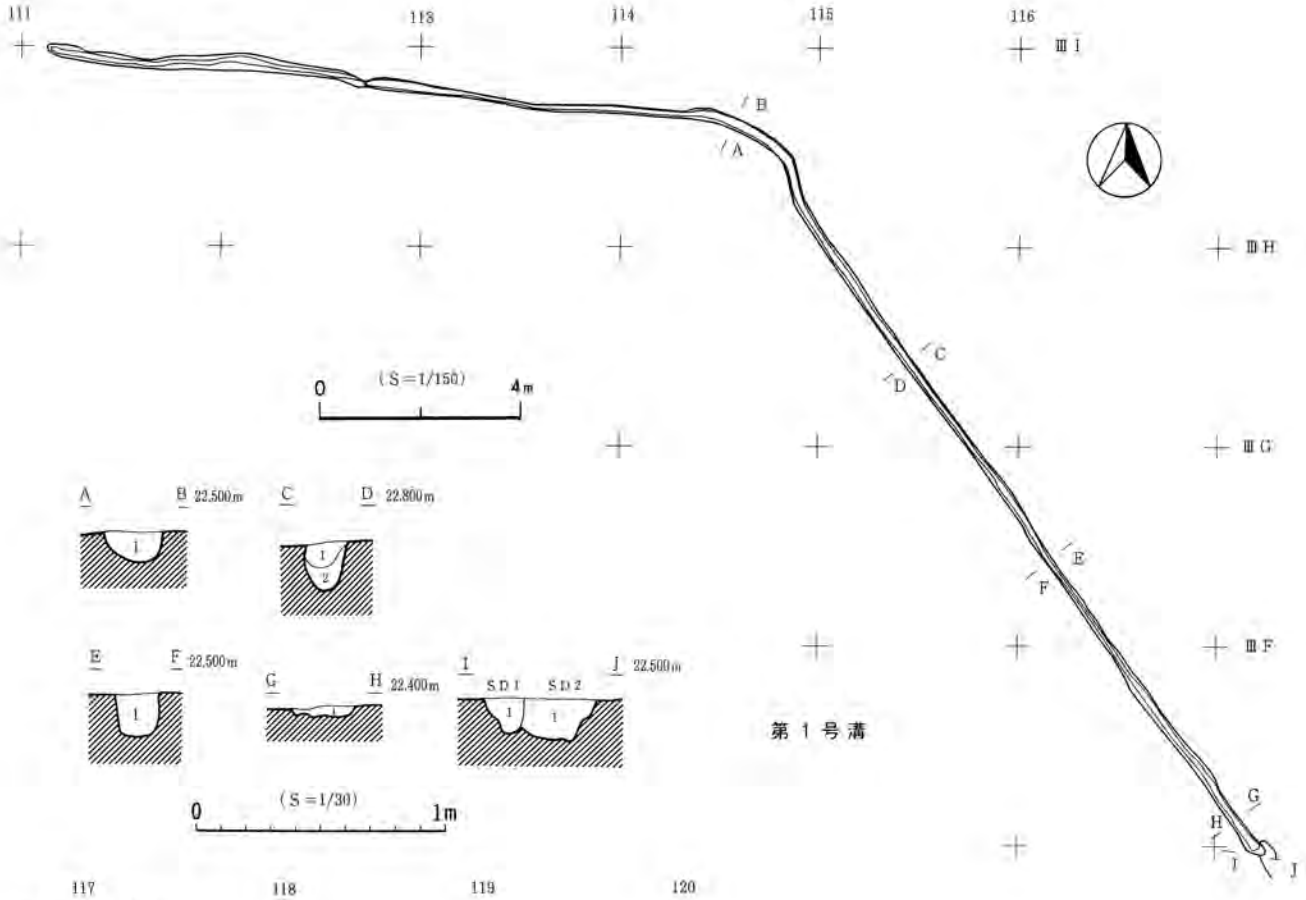
［位置］ⅢＨ—110～114グリッドで検出された。［重複］第1・4号溝と重複する。第1溝より本遺構が古い。第４号溝との関係は不明である。［形状・規模］総延長17.8m、幅20㎝、深さ10㎝を計る。底面高は西端付近がおよそ21.65m、東端付近がおよそ22.1mを計り、西側ほど低くなる。主軸方位はN—70°—Eで屈曲してN—40°—Wとなる。［堆積土］黒褐色シルトである。［時期］1号溝より古く、第9号土坑より新しいが、形状から考えて、第1号溝と同時代と考えられる。（中村　哲也）

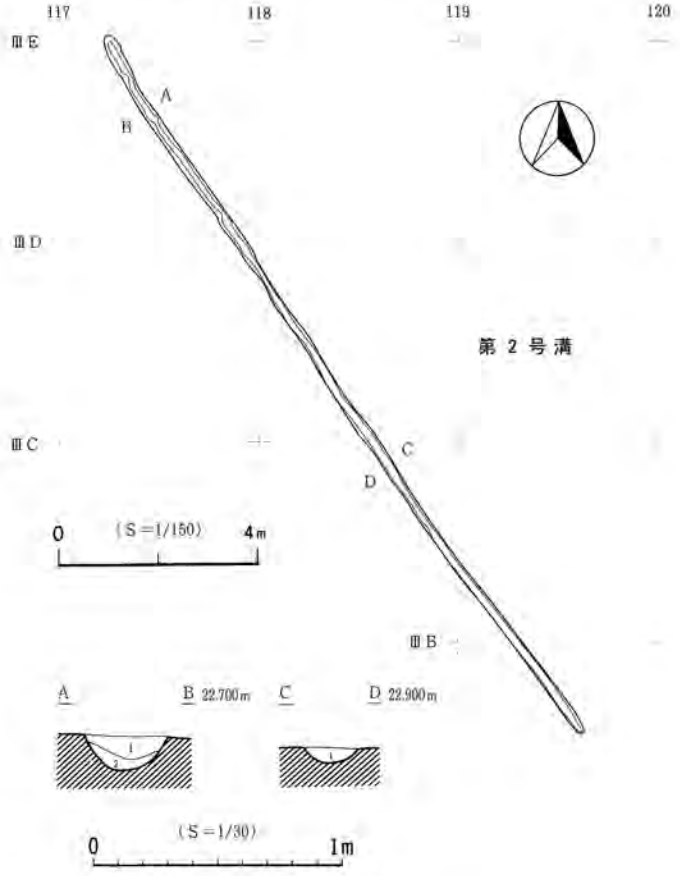
第６号溝〔SD6〕（図37）

［位置］ⅢＣ～Ｉ—109～114グリッドで検出された。［重複］第4号溝と重複し、本遺構が古い。［形状・規模］総延長30m、幅約20㎝、深さ約25㎝を計る。底面高は北西端が21.6m、屈曲点が21.7m、南東端が22.1mを計り、南東～北西へ向けて傾斜している。主軸方位はN－35°－W、屈曲してN—56°—Eである。［堆積土］1～2層に分層され、黒褐色シルトが主体である。〔出土遺物〕本遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。［時期］形状・位置から考えて第1号溝と同時代と考えられる。（中村　哲也）

付記

中世ないしそれ以降と考えられる溝については、重複関係が認められた。しかし、遺構配置を検討した限り、その重複関係の捉え方に疑問が残される部分があった。それは第4号溝と第５号溝の関係である。直接の調査者は第4号溝西端部分を第5号溝より新しい、第4号溝の一部としてとらえているが、遺構配置から見る限り、第５号溝としてとらえる方が妥当であるように見える。報告者も現場担当の一人として発掘調査に当たったのであり、こうした疑問を抱くこと自体本来あってはならないのだが、切り合いを示す図面・写真もなく、疑問を捨てきれなかった。そこで、第4・5号溝についてはその関係を不明として報告した次第である。（中村　哲也）





SD1

AB

第1層 暗褐色 (7.5YR3/3) 炭化物、軽石微量。

CD

第1層 黒褐色 (10YR2/2) シルト

第2層 黒褐色 (10YR3/2) シルト 炭化物微量。

EF

第1層 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト 軽石微量。

GH

SD1 第1層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト

SD2 第1層 黒褐色 (10YR3/2) シルト

IJ

第1層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト

SD2

AB

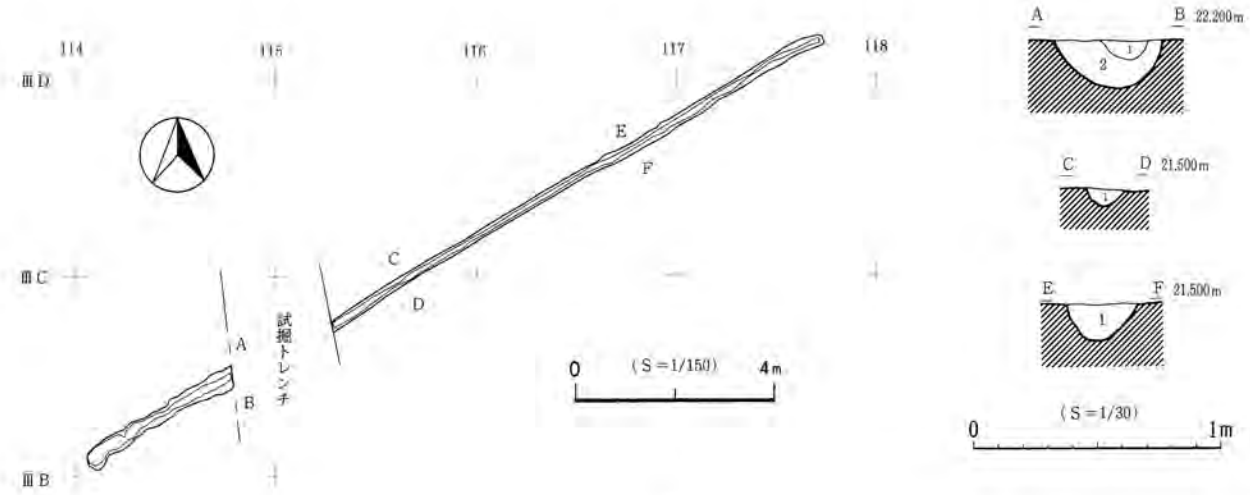
第1層 黒褐色 (10YR2/3) シルト

第1層 黒褐色 (10YR2/2) シルト 炭化物少量。

CD

第1層 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 炭化物、小礫、軽石少量含む。

図35 第 1 ・ 2 号溝



A B

第１層　黒褐色　(10YR2/2)　シルト　炭化物少量含む。

第２層　暗褐色　(10YR3/3)　シルト　白色粒子少量含む。

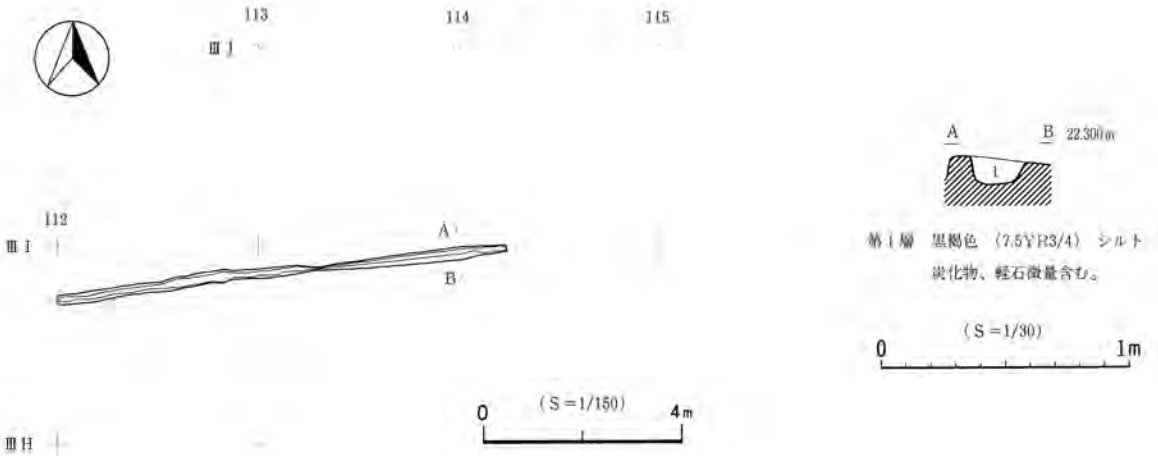
C D

第１層　黒褐色　(10YR3/2)　シルト　小礫、軽石少量、炭化物微量含む。

E F

第１層　黒褐色　(10YR2/2)　シルト

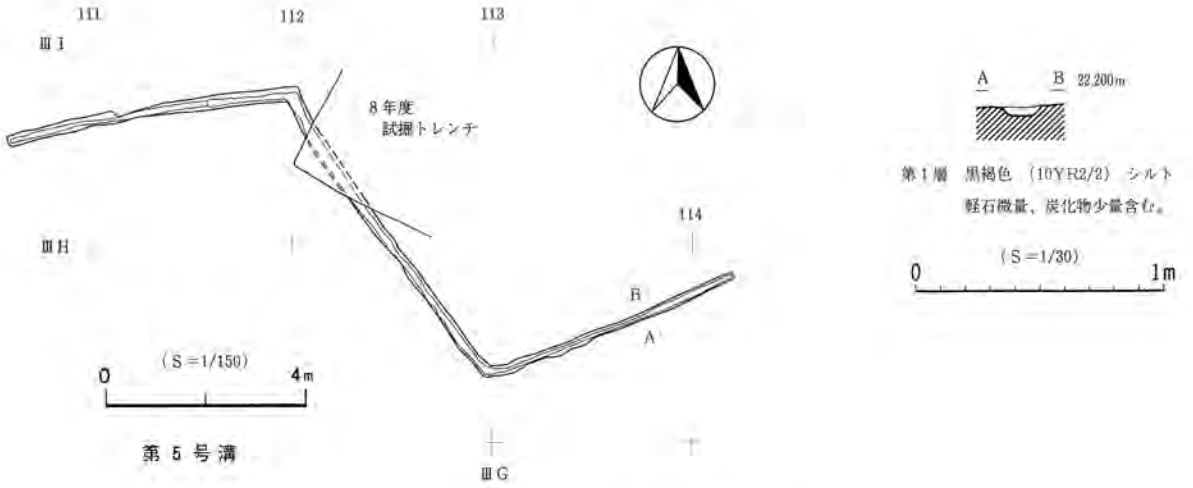
第３号溝



第１層　黒褐色　(7.5YR3/4)　シルト

炭化物、軽石微量含む。

第４号溝



第１層　黒褐色　(10YR2/2)　シルト

軽石微量、炭化物少量含む。

第５号溝

ⅢG

図36　第３・４・５号溝

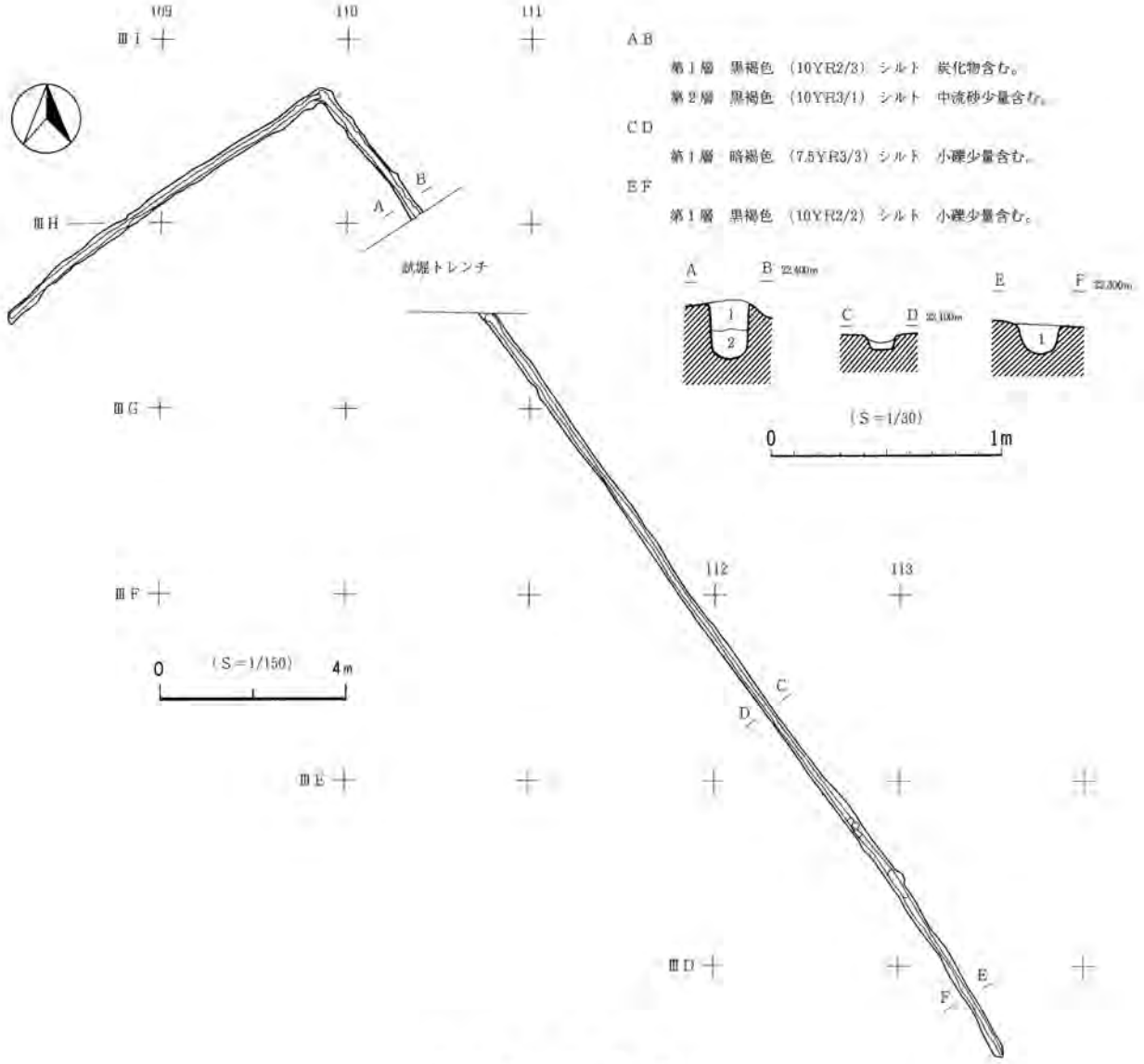


図37 第 6 号 溝

第4節 時期不明の遺構

第1号土坑〔 ＳＫ１ 〕（図38、図版7－1）

［位置］ⅢＧ－113グリッドに位置する。［平面形・規模］長軸1.6m、短軸１ｍの楕円形である。深さは55cm前後である。［堆積土］浮石混じりの砂質土で、５層に分層される。自然堆積と思われる。［壁・底面］底面は不整形で、平坦部が少ない。壁は外傾し立ち上がるが、部分的に内傾する摺り鉢状である。［時期］形状から縄文時代以降の土坑と考えられる。 （杉野森 淳子）

第2号土坑〔 ＳＫ８ 〕（図38）

［位置］ⅢＩ－113グリッドに位置する。［平面形・規模］ 直径90cm、深さ15cmの浅い円形の土坑である。［堆積土］炭化物が混じった砂質黒色土である。自然堆積である。［壁・底面］底面に平坦な部分は少ない。壁は緩やかに外傾するが、一部はほぼ垂直に立ち上がる。［時期］平安時代以降の土坑と思われる。 （杉野森 淳子）

第3号土坑〔 ＳＫ３ 〕（図38）

［位置］ⅢＥ－116グリッドに位置する。［平面形・規模］直径１ｍのほぼ円形の土坑である。深さは

約20cmである。[堆積土] ２層に分層され、底面全体に厚さ５cm程の炭化物が堆積している。自然堆積である。[壁・底面] 底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。[出土遺物] チャート製剥片が１点出土している。[時期] 平安時代以降の土坑と思われる。　（杉野森　淳子）

第４号土坑〔ＳＫ４〕（図38）

[位置] ⅢＤ・Ｅ－112グリッドに位置する。[平面形・規模] 長軸2.5m、短軸1.4mの楕円形である。深さ20cmの浅い皿状の土坑である。[堆積土] ２層に分層されるシルト質土である。自然堆積と思われる。[壁・底面] 底面は平坦部が少なく、壁はなだらかに外傾しながら立ち上がる。[時期] 平安時代以降の土坑と思われる。　（杉野森　淳子）

第6号土坑〔ＳＫ６〕（図39）

[位置] ⅣＧ－167グリッドに位置する。[平面形・規模] 径4.42m×4.28mのほぼ円形を呈する。深さ約37cmである。[堆積土] 6層に分層された。砂が堆積していた。[壁・底面] 底面には不整な盛り上がりが認められたが、地山に礫を多量に含むため、掘削し得なかったものと考えられる。

（中村　哲也）

第９号土坑〔ＳＫ９〕（図38）

[位置] ⅢＨ－110グリッドに位置する。[重複] 第５・６号溝と重複し、溝より古い。[平面形・規模] 溝に切られているため、全体の形状は不明である。直径約１m、深さ20～40cmの円形土坑である。[堆積土] ２層に分層される。浮石混じりのシルト質土である。自然堆積である。[壁・底面] 底面はほぼ平坦で、底部に直径40cmほどの浅い凹みがみられる。壁は外傾しながら立ち上がる。[時期] 中世以降の溝に切られていることから、中世以前の土坑である。　（杉野森　淳子）

第10号土坑〔ＳＫ10〕（図38、図版7－2）

[位置] ⅢＡ－121グリッドに位置する。[平面形・規模] 長軸2.2m、短軸１mの長楕円形の土坑である。深さは10～15cmである。[堆積土] 自然堆積と思われる黒褐色の砂質土が堆積している。[壁・底面] 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。[出土遺物] 剥片が３点出土している。[時期] 時期不明の土坑である。　（杉野森　淳子）

第11号土坑〔ＳＫ11〕（図39、図版7－3）

[位置] ⅢＦ・Ｇ－110グリッドに位置し、第14号溝と隣接する。[平面形・規模] 長軸推定1.8m、短軸1.6mの楕円形である。深さは40cm前後である。[堆積土] ２層に分層される。自然堆積と思われる。[壁・底面] 底面は平坦部が狭く、壁はなだらかに立ち上がる。[時期] 不明である。

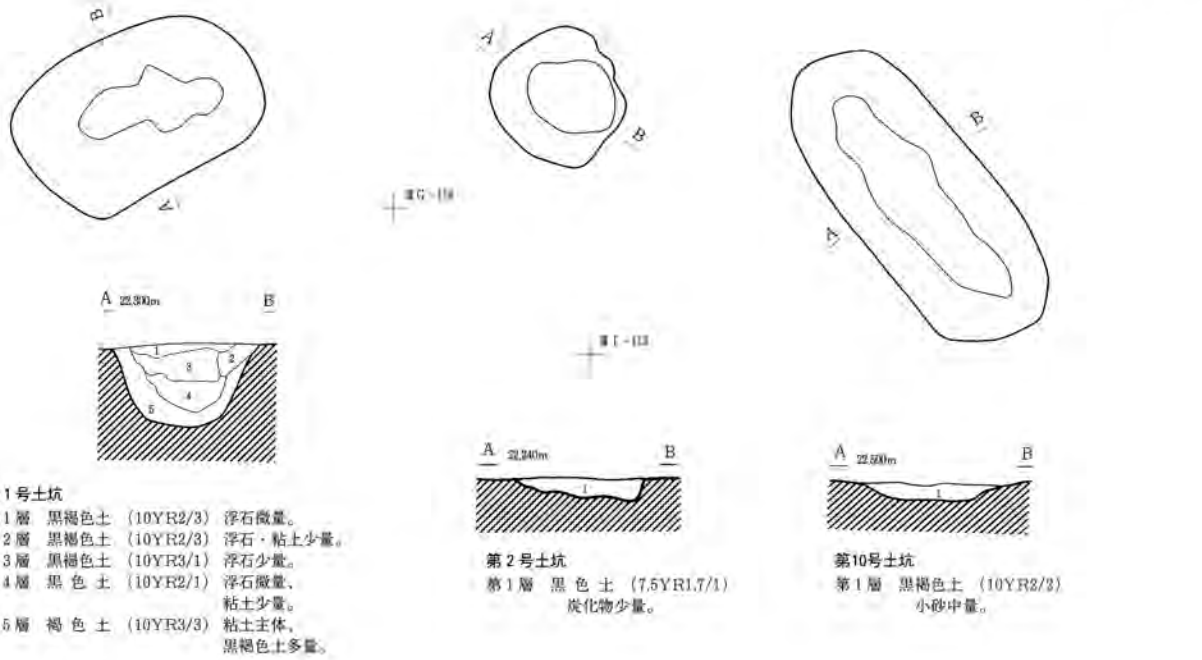
（杉野森淳子）

第１号配石遺構〔ＳＸ１〕（図40）

[位置] ⅢＪ－114グリッドに位置する。[形状と規模] ７個の礫が最大長70cmの弧状に配置されている。長さ20～10cm、重さ3900～1000ｇの円礫が使用されている。加工痕がみられる礫を２点転用している。配石の内側には小礫が散布している。石材は凝灰岩・安山岩・石英安山岩・頁岩である。[施設・遺物] 配石に伴う土坑などの下部施設や遺物は存在しなかった。[時期] 構築状況から縄文時代以降のものと考えられる。　（杉野森　淳子）

第２号配石遺構〔ＳＸ２〕（図40、図版7－4）

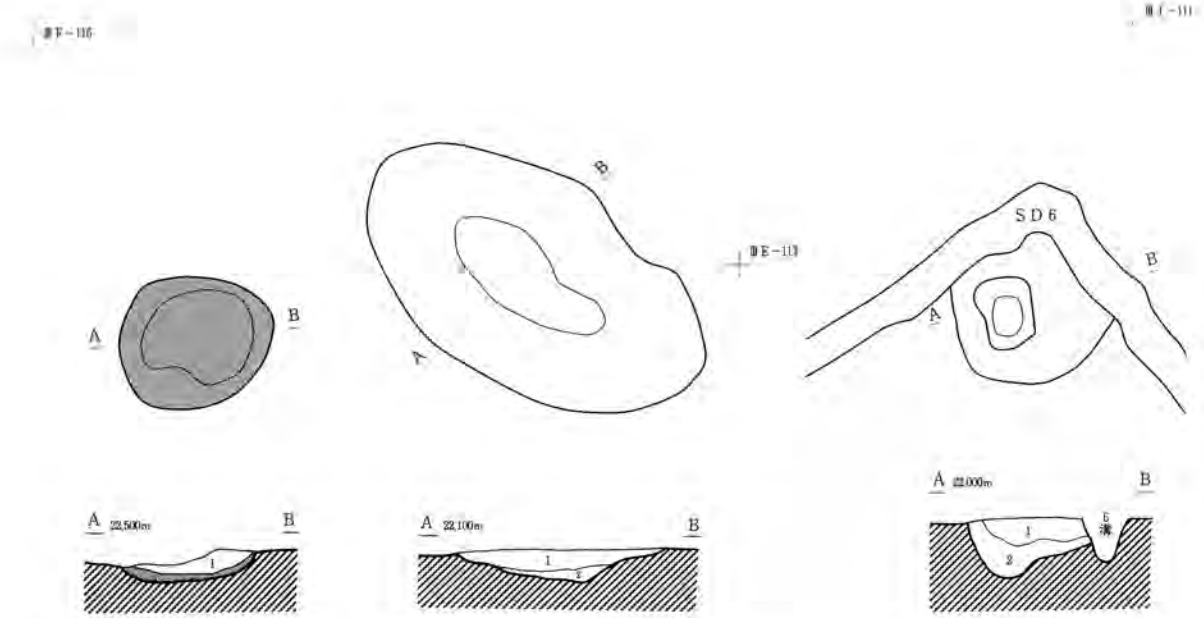
[位置] ⅢＦ－110・111グリッドに位置する。[形状・規模] 16個の礫の集合として確認された。



第1号土坑
第1層　黒褐色土　(10YR2/3)　浮石微量。
第2層　黒褐色土　(10YR2/3)　浮石・粘土少量。
第3層　黒褐色土　(10YR3/1)　浮石少量。
第4層　黒色土　(10YR2/1)　浮石微量、粘土少量。
第5層　褐色土　(10YR3/3)　粘土主体、黒褐色土多量。

第2号土坑
第1層　黒色土　(7.5YR1.7/1)　炭化物少量。

第10号土坑
第1層　黒褐色土　(10YR2/2)　小砂中量。



第3号土坑
第1層　黒褐色土　(10YR2/2)　炭化物少量。
第2層　黒色土　(10YR7.5/1)　炭化物層。

第4号土坑
第1層　黒褐色土　(10YR2/3)　炭化物少量。
第2層　黒色土　(7.5YR4/4)　シルト質。浮石少量。

第9号土坑
第1層　黒色土　(10YR1.7/1)　浮石少量。
第2層　暗褐色土　(10YR3/3)　シルト質。細砂粒少量。

(S=1/50)
0　2m

図38　第1・2・3・4・9・10号土坑

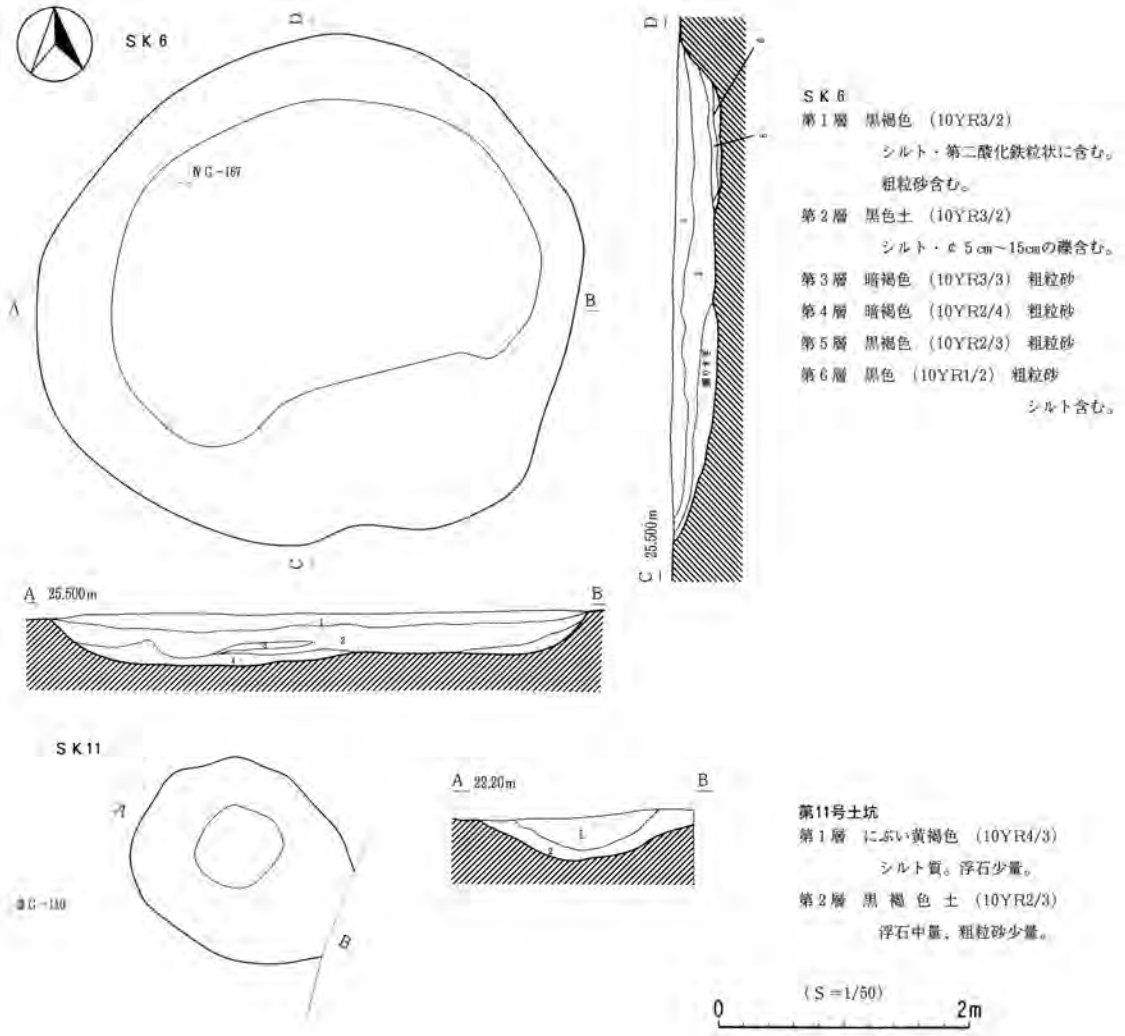


図39　第６・11号土坑

礫は平らな面をもつものが多く、中には磨面を持つ礫もみられる。S-6･7･9･12は同一個体であり、分割された後に捨てられたものである。明瞭な配置構成は不明で、礫の多くが移動したものと思われる。石材は凝灰岩・安山岩・石英安山岩・流紋岩である。［施設・遺物］配石に伴う土坑などの下部施設は存在しなかった。遺物も出土していない。［時期］配石は12号溝の上に位置することから、溝が埋まりきった平安時代以降のものと思われる。　（杉野森　淳子）

第２号小穴〔pit2〕（図40）

ⅣA―164に位置する。第Ⅲ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。円形を呈し、54cm、深さ約20cmを計る。堆積土は黒褐色土の単層である。　（中村　哲也）

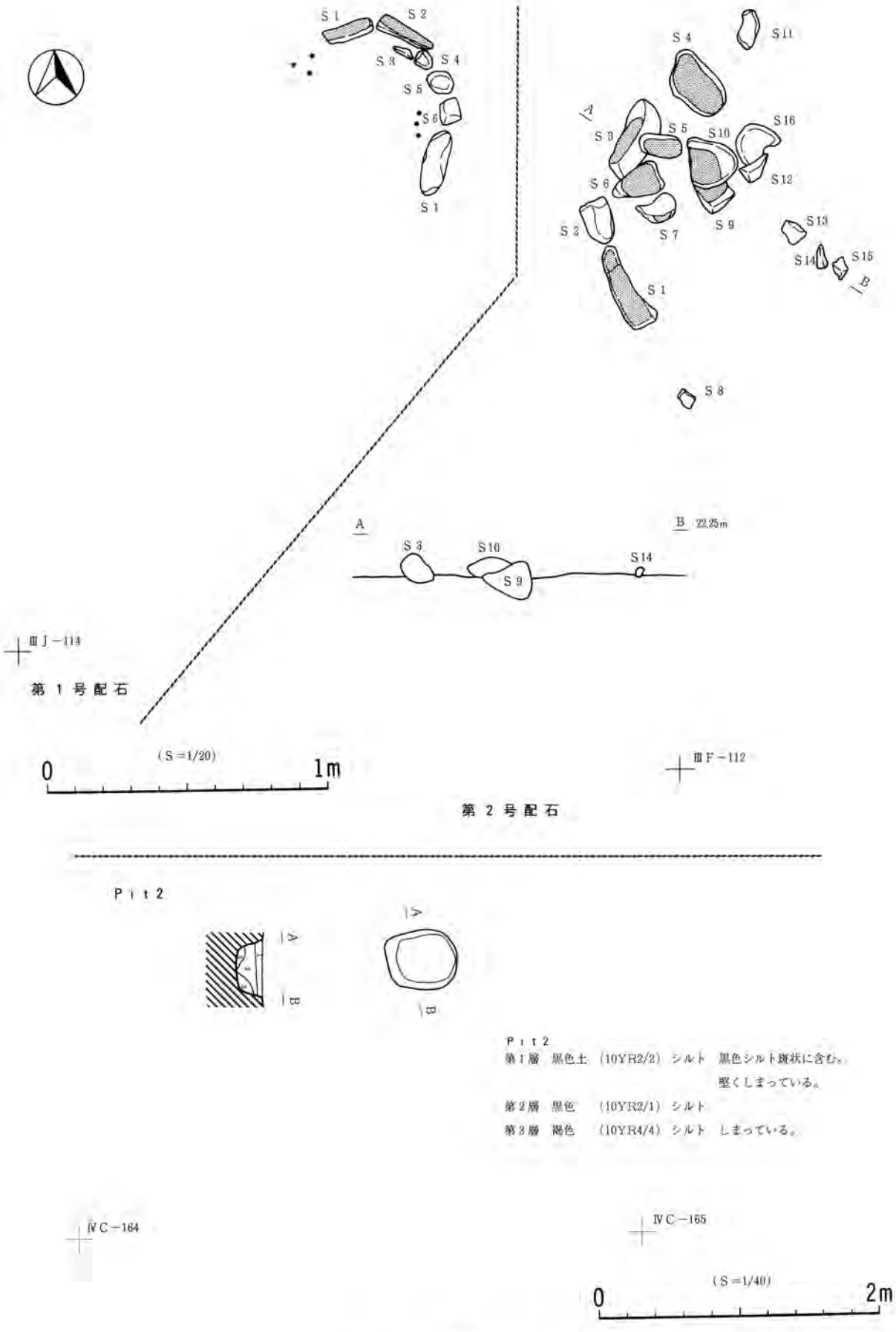


図40　第１・２号配石、第１号小穴

第3章　遺構外出土遺物

第1節　土器

A区（図41～43、図版12・13）

縄文時代前期末の土器（1～4）　1～4は縄文時代前期末円筒下層ｄ式土器である。1・2は口縁部に撚糸側面圧痕を3段並行に施す。胴部は1が多軸絡状体、2が単軸絡状体1A類である。3は口縁部に波状に撚糸側面圧痕を施し、屈曲部に水平に撚糸側面圧痕を施す。胴部には多軸絡状体が施される。

縄文時代中期末の土器（5）　5は、曲線的な磨消縄文の一部に鰭状突起が施される。大木10式平行期の土器である。

縄文時代後期初頭の土器（6～13）　6～9は同一個体の可能性がある。口縁部には二条一対の素文の隆帯を施し、胴部には縦位の矢羽状の文様を描出する。狩猟文土器の手法に類似する。10～12は地文縄文に曲線文を施している。10～12の縄文は縦位回転である。蛍沢式（本間　1984）、馬立式（鈴木　1998）に相当しよう。

縄文時代後期前葉の土器（14～18・24）　14は緩い波状口縁直下に沈線を施し、波頂部から粘土紐を貼り付けている。15・17は曲線的な文様を描いている。16は窓枠状の文様を描く浅鉢である。18は波状口縁直下に沈線を一条巡らし、頸部に窓枠状の文様、体部に弧線を基調とした文様を描く。21は二本の沈線間に鍵の手状の沈線を連続させる。24は平行沈線の間に連続した鍵手状の文様を施す。胴部上位と胴部下位の二つの文様帯がある。いずれも十腰内Ⅰ式である。

縄文時代後期初頭～前葉の土器（19～23）　19は直線的な縄文帯を斜めに配する。本来無文部であるべき部分にも消し残した縄文が残っている。沈線は幅が広く、沈線の両側が微妙に盛り上がり気味である。比較的器面の柔らかい段階で施文したものと思われる。こうした特徴からは後期初頭の土器（蛍沢式、馬立式）とも考えられるが、類似する文様モチーフを見いだすのが困難であり、初頭～前葉としておきたい。20～23は縄文の縦位回転により施文するものである。縄文の縦位回転は後期初頭・十腰内Ⅰ式いずれにもみられる手法であり、判別は困難である。

平安時代の土器（25～29）　27・28は坏。底部は回転糸切りによる。27は回転糸切り後、底部に「の」字状のヘラ記号が刻まれている。28は土師器のロクロ甕である。口縁部が短く外反し、端部を面取りする。26・29は土師器の非ロクロ甕。

中世の土器（30）　30は瓦質土器である。火鉢の底部近くの破片と思われる。算木状とU字状のスタンプ文が施されている。同種のスタンプ文の類例は、管見によれば本県では青森市尻八館出土の1例である。　（中村　哲也）

B区（図44、図版14）

B区から出土した土器は縄文時代のもののみである。

縄文時代中期の土器（1・2）　1は口縁部に隆帯により幅の狭い文様帯を作出し、文様帯内部に撚糸側面圧痕を施す。円筒上層ａ式に比定される。2は三単位の波状口縁をなし、3本1単位の沈線を口縁部直下と頸部に巡らす。波頂部下には2本1組の沈線で下向きの弧線が配される。榎林式に比定される。

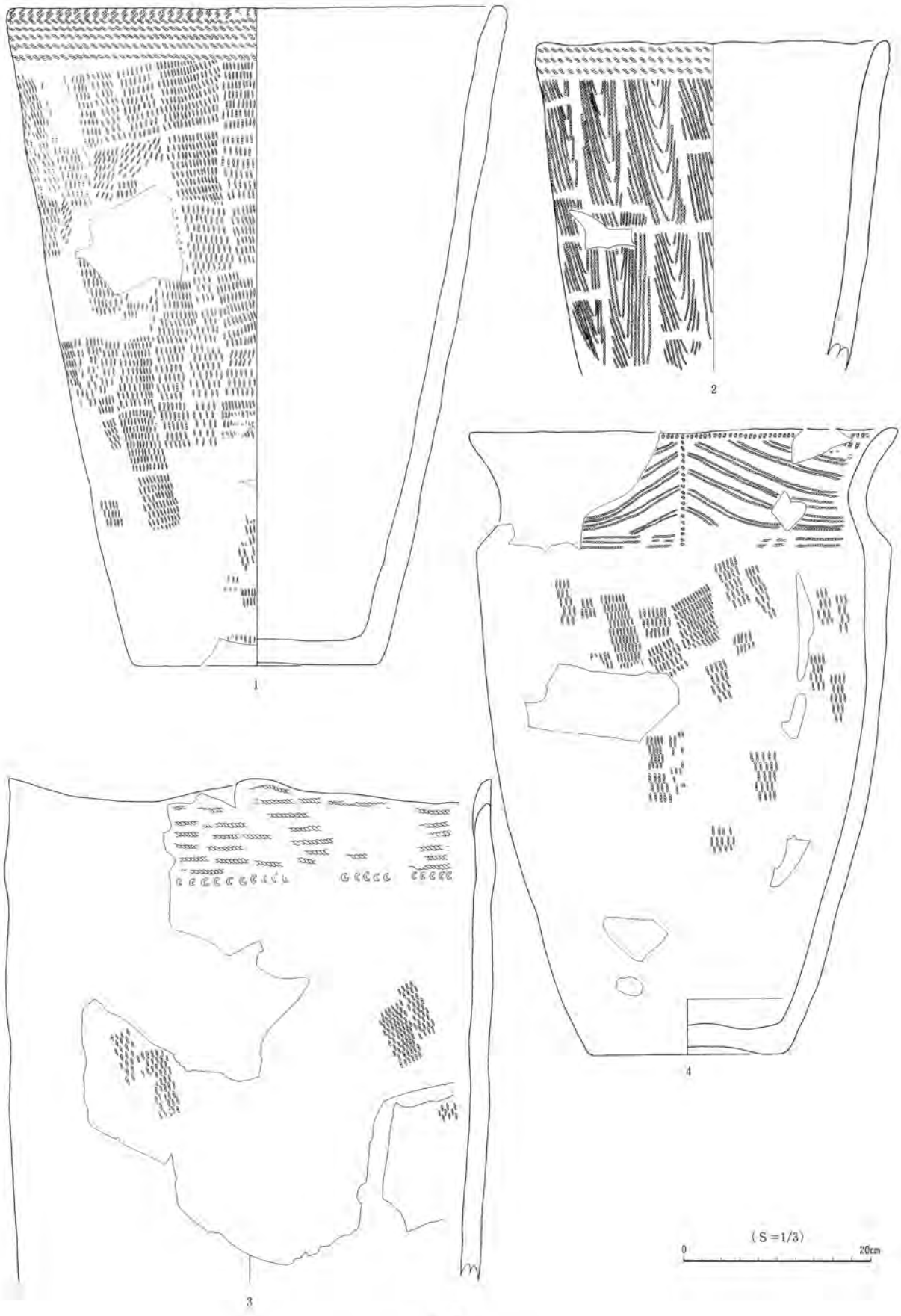


図41　遺構外出土土器(4)

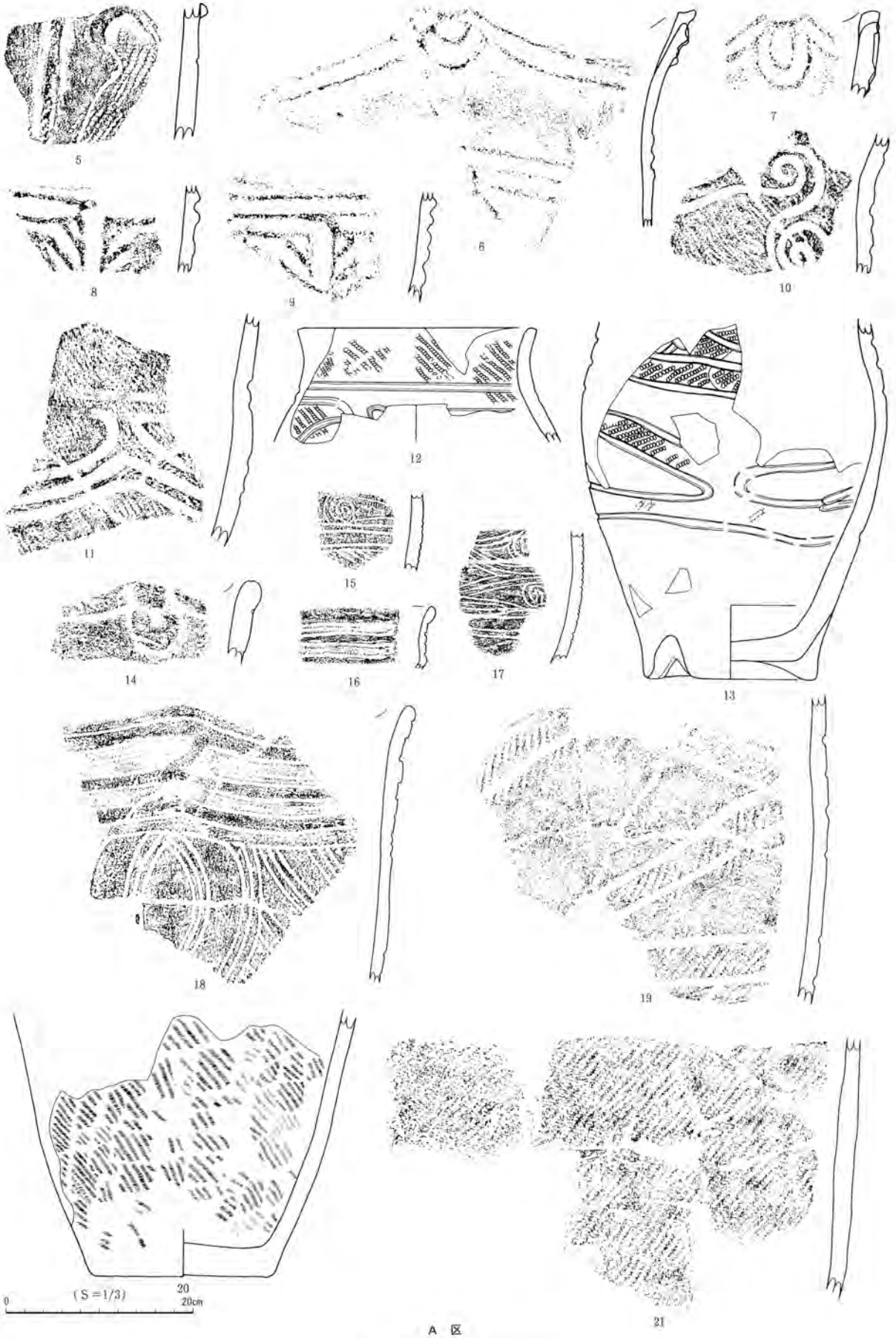


図42　遺構外出土土器(2)

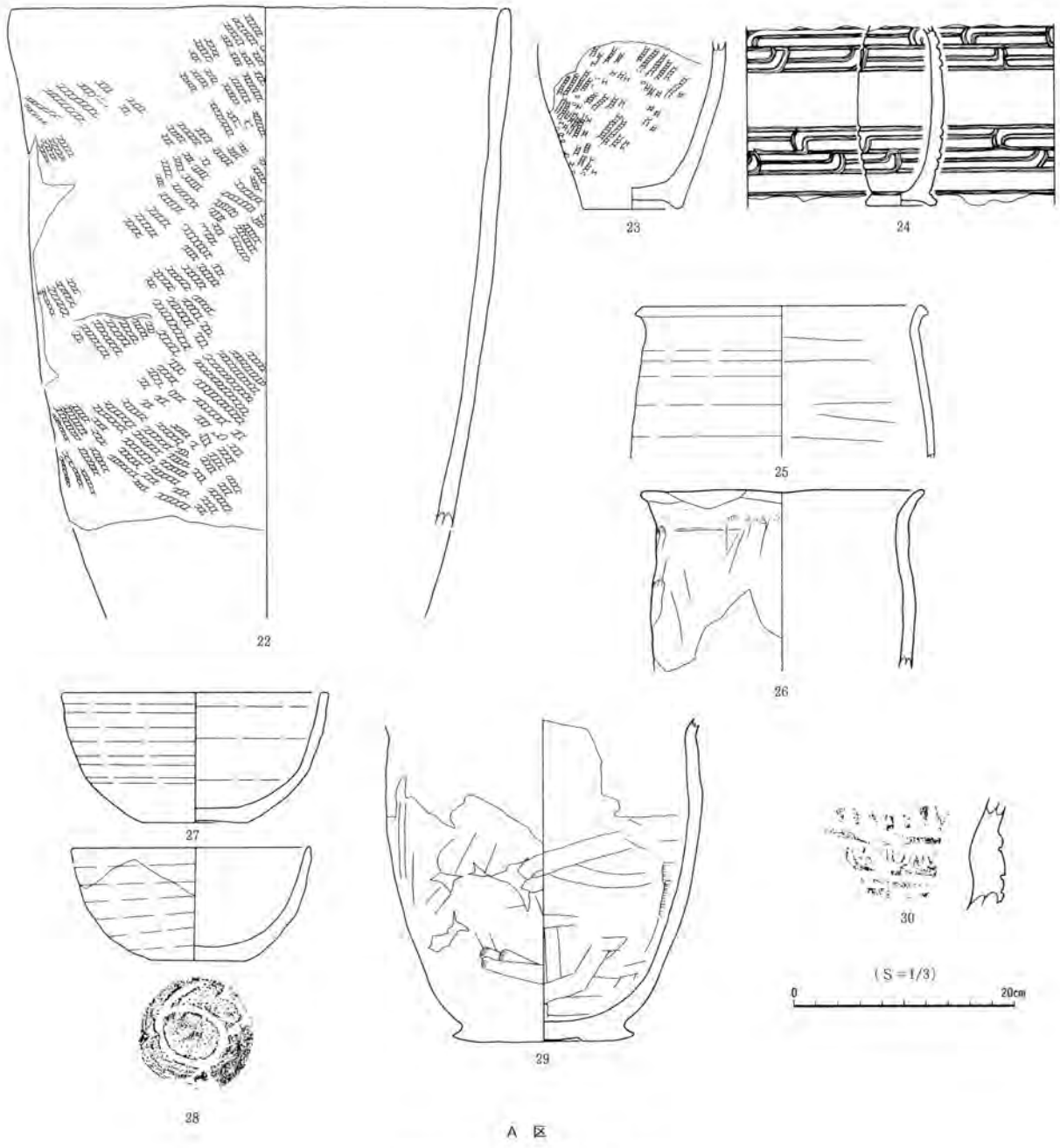


図43　遺構外出土土器(3)

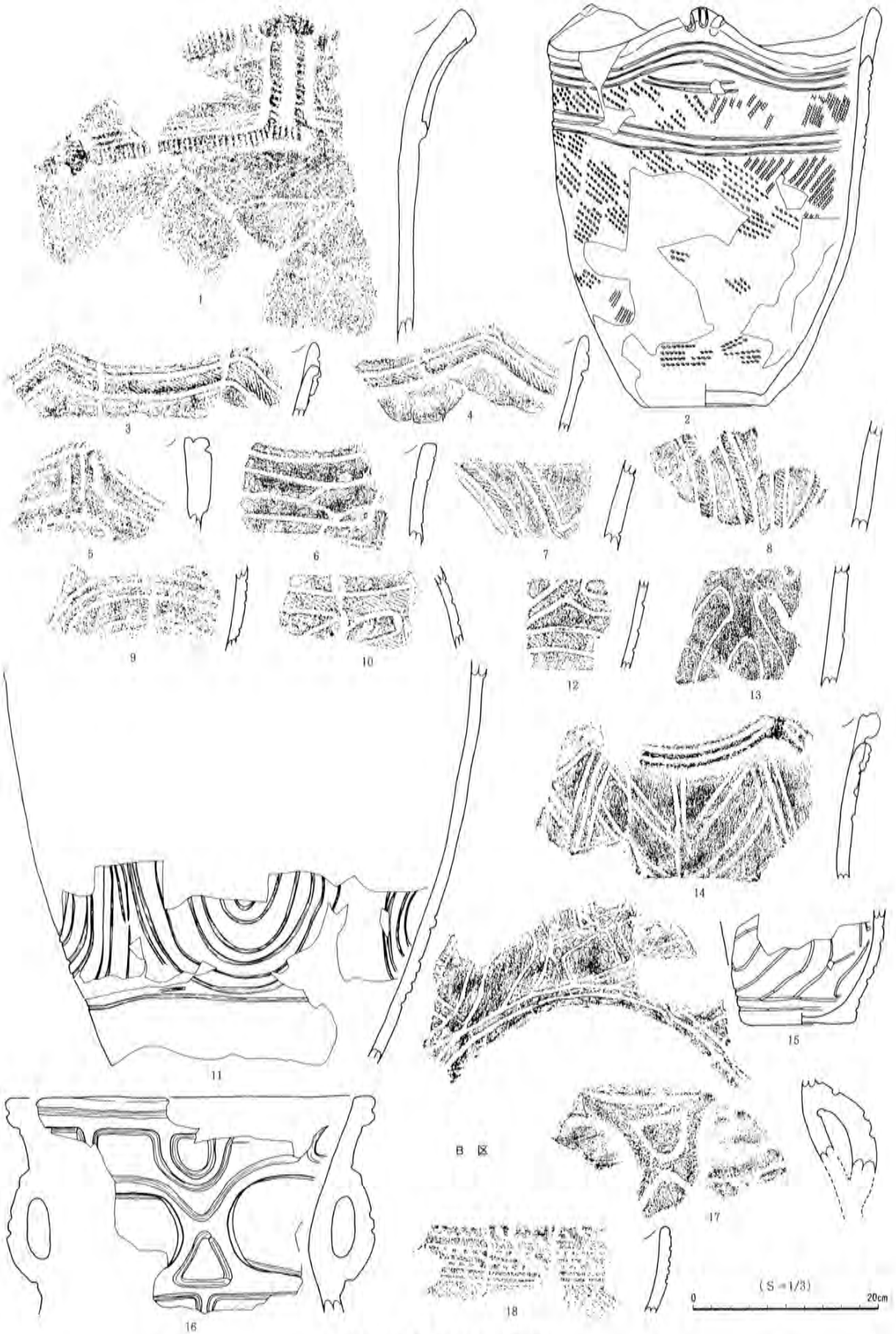


図44　遺構外出土土器(4)

縄文時代後期の土器（3～17）　3・4は口縁部に一条幅広の隆帯を施す。隆帯上には縄文が施される。5・6・9・10は沈線による曲線文が施される。7・8・11は半隆帯と沈線の組み合わせにより曲線的文様が描かれる。14は膨隆した口唇部に楕円状のモチーフを施し、体部には曲線文が縦位方向に展開する。16は壺形土器である。隆帯と沈線によって文様が形成される。頸部に橋状把手が施される。17は壺型土器の橋状把手である。十腰内Ⅰ式に比定される。

縄文時代晩期の土器（18）　18は口縁部に羊歯状文が施される。大洞ＢＣ式に比定される。

（中村　哲也）

第２節　石器（図45～49）

定形石器15点、不定形石器223点（二次加工剥片59点・使用痕のある剥片12点・剥片152点）、石核10点、礫石器54点の合計302点が出土している。出土層位は第Ⅲ層を主体とする。不定形石器は調査区全体から出土している。その他は調査区周辺から出土し、中央の微高地からは出土していない。

石鏃（図45－1）　柳葉形に近似するものが１点出土している。左右の形は非対称である。器面成形は表全面に行われているが、裏面には素材面が残り、裏面基部では素材の厚さが除去できていないなど成形が不十分である。

石匙（図45－2～4）　横型が３点出土した。2・3は素材剥片の打面が刃部側にきており、非調整のまま打面部分が残されているため、刃部形状が乱れている。2は基部加工のみで、刃部および打面調整が行われていない。

石篦（図45－5～7・9～11）　小形のもの３点、長さ５～７cmのものが３点出土した。厚めの素材の表裏両面を、やや軟質のハンマーによる直・間接打撃で成形し、部分的な仕上げに押圧剥離が用いられている。撥形形状のものの刃部は直線形、棒状のものは半円形となり、刃形と石器の幅厚は対応するようである。

磨製石斧（図45－12～15・17）　片刃１点、両刃４点である。片刃のものは裏面を意図的に剥離している。器面成形は長軸方向の研磨が主体で、側面より表裏面が丁寧に磨かれている。13は刃部両面とも刃部に斜交する擦痕が明確に残る。

二次加工剥片（図46）

a類（18～21）　４点出土している。刃をもち、欠損によって形状が不明なものを一括した。18・19は端部から器面中央にやや急角度の平行剥離がみられることから、石篦の刃部の可能性がある。20・21は素材の尖端部に両面から調整を施し、石錐状の刃部をもつ。

b類（22～27）　掻器・削器類に相当するものを一括した。12点出土している。22は素材打面部分に連続調整を行い刃部を形成している。23は素材剥片腹面に連続調整を施し、24は素材剥片腹面端部に急角度の剥離を施している。左側縁両面には使用痕と思われる微細剥離痕が見られる。25は縦長の素材剥片の側縁に押圧剥離を行って刃部を整形し、刃部形成後、腹面側を素材剥片軸方向に剥離している。26は横長剥片の両面に、ソフトハンマーによる直接打撃が行われている。27は素材腹面腹面側縁に急角度の調整が行われている。

c類（28～30・32）　18点出土している。32は背面側に連続調整が行われている。29・30は両面器面成形後に刃部調整が行われ、29は刃部に急角度の剥離が施されている。30は背面側縁に錐状の加工部分がみられる。

ｄ類（31）　30点出土し、刃部に不連続な細部調整が行われ、刃部が一定でいないものを一括した。

剥片

ｅ類　素材となりうるものが18点出土している。長軸短軸比が1.5：1.0で、単節打面のものが多い。

ｆ類　二次加工が施されていない剥片が98点出土している。打面形状は珪質頁岩が単節または複節打面、玉髄質珪質頁岩とチャートは単節または礫打面が多くみられる。

ｇ類　礫面を残す剥片は35点出土している。礫面を打面にしたチャート製小形剥片が多い。

石核（図153～162）　調査区北端とグリッドラインⅢＥから南側で出土している。５cm以下の残核が４点、10cm以下の石核４点、礫面を６割以上残したものが２点出土している。

敲磨器

Ⅰ－ａ類（図47－34～36）　側面にすり面があるものが７点（34）、表裏・側面にすり痕があるもの５点（35・36）が出土している。素材は長軸短軸比２：１の円礫を多用している。磨り石の断面形状は楕円形が多い。

Ⅰ－ｂ類（図47－37）　断面が円形・楕円形の棒状のすり石が９点（37）、明確な稜をもつ角棒状のすり石が４点出土した。最長19.4cm～8.6cmと大きさは多様である。長さと幅の比率は３：１である。

Ⅰ－ｃ類（図48－38）　球状に全面を研磨したものが４点、中央にすり痕が残るもの１点が出土した。38は研磨によって複数の平らな面をもつ多面体である。

Ⅱ類（図48－39・40）　礫の一部に敲打痕のみみられるものが２点出土した。

Ⅲ類（図48－41・42）　扁平の礫の両面に複数の浅い凹みがあるものが３点出土した。42は表面に明瞭な研磨痕がみられる。

Ⅳ類（図48－44～図49－49）　敲打痕と研磨痕をもつもの（46・48）、側面を研磨し表裏面に凹みがあるもの（45）、側面を研磨し、中央に浅い凹みと周囲に敲打痕をもつもの（44）が出土した。47は片面にすり面のみ、一方にすり面と敲打痕が残る。49の片面は研磨により皿状に窪み、もう片面には全面に研磨痕が見られ、端部に剥離痕が残っている。

打製石器（図49－50）　三角形の厚みのある珪岩を素材とし、一側面を打ち欠いている。刃部側面の対角にはすり面がみられる。大きさ８cm、厚さ3.6cmの石冠に近い形状である。

石皿（図49－51・52）　９点出土している。平坦な磨り面をもつものが７点、中央がやや浅く窪んだものが１点（52）、明瞭な縁をもつものが１点（51）が出土している。石材は凝灰岩・安山岩・流紋岩である。　（杉野森　淳子）

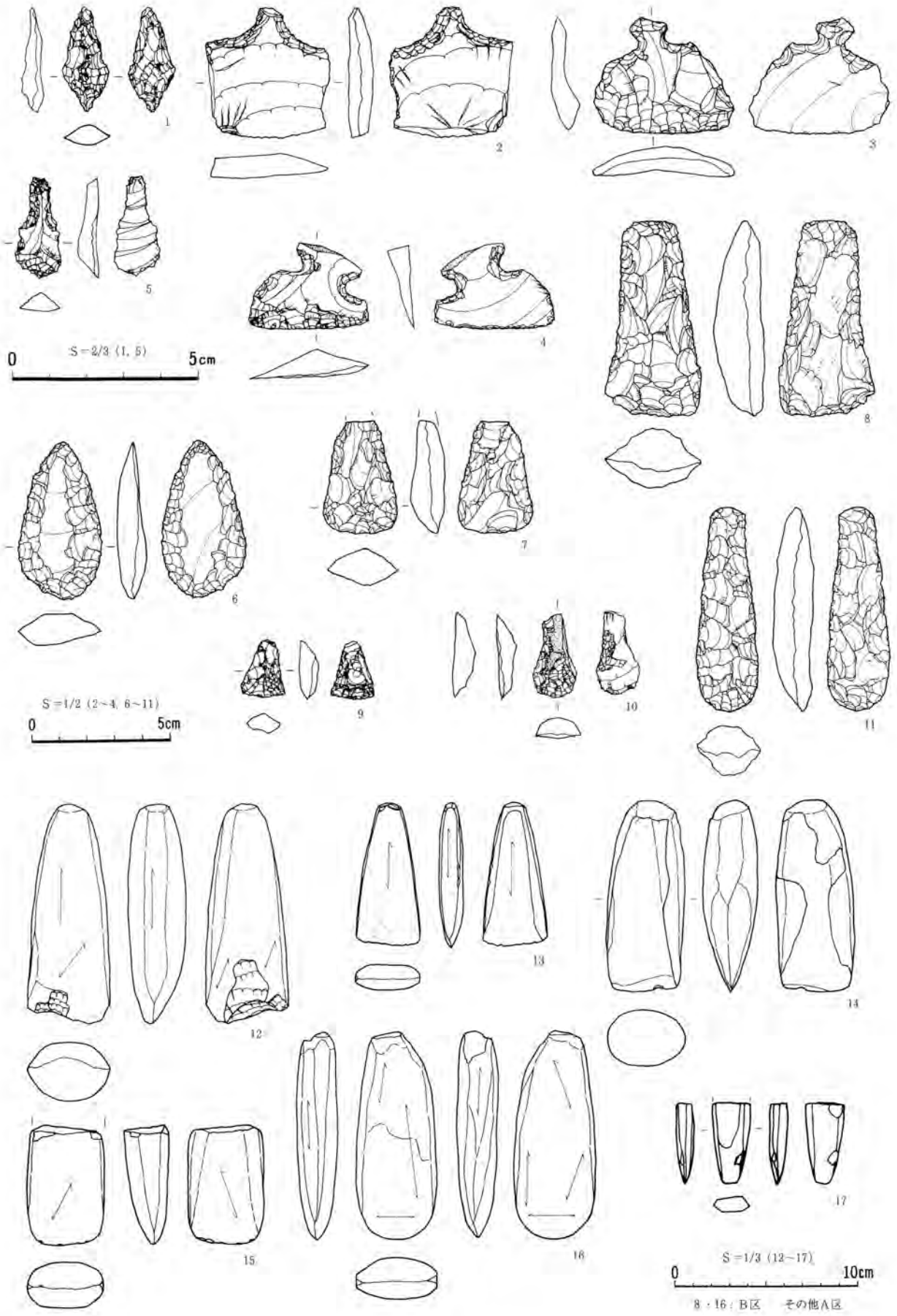


図45　遺構外出土石器(1)

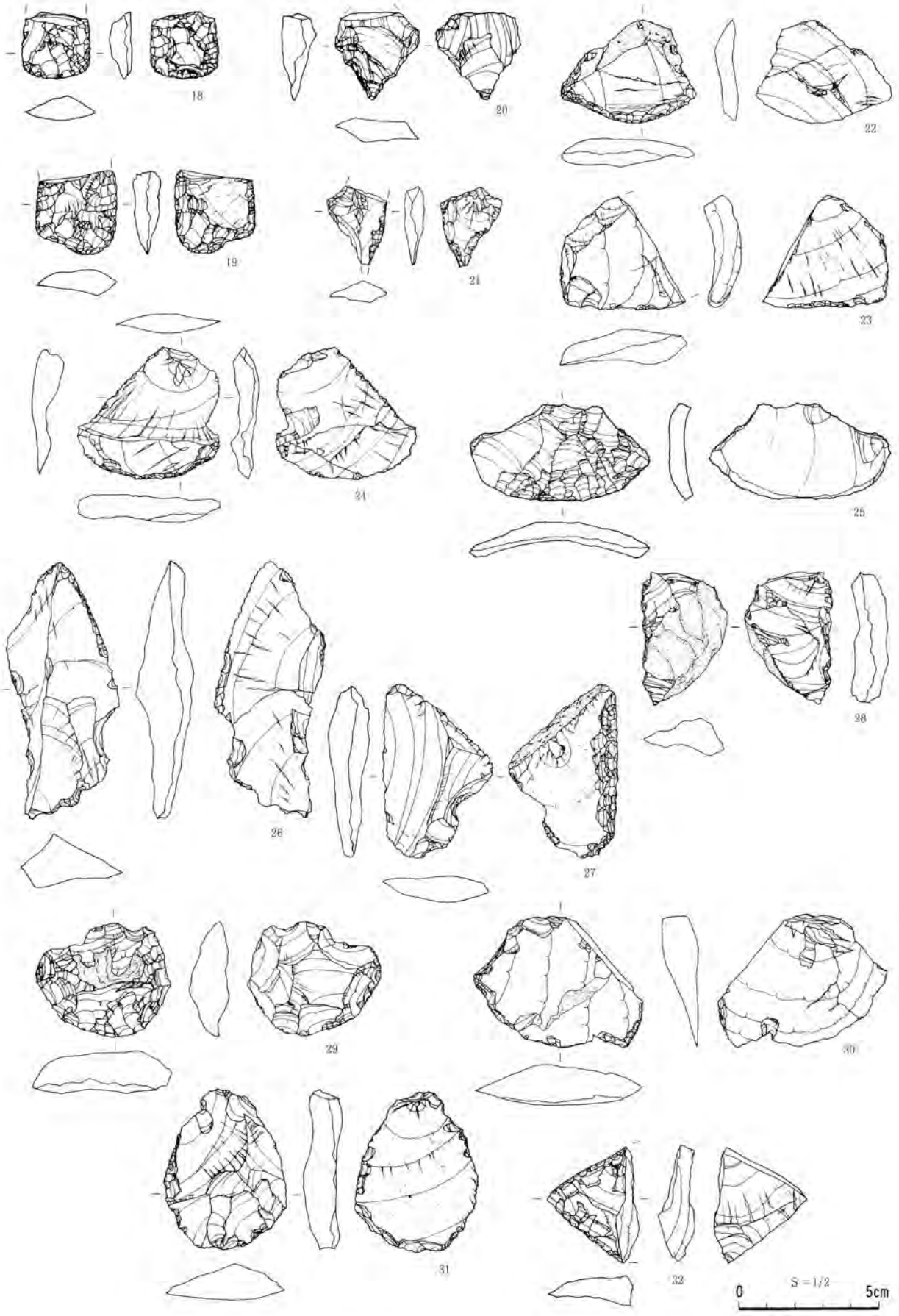


図46　遺構外出土石器(2)

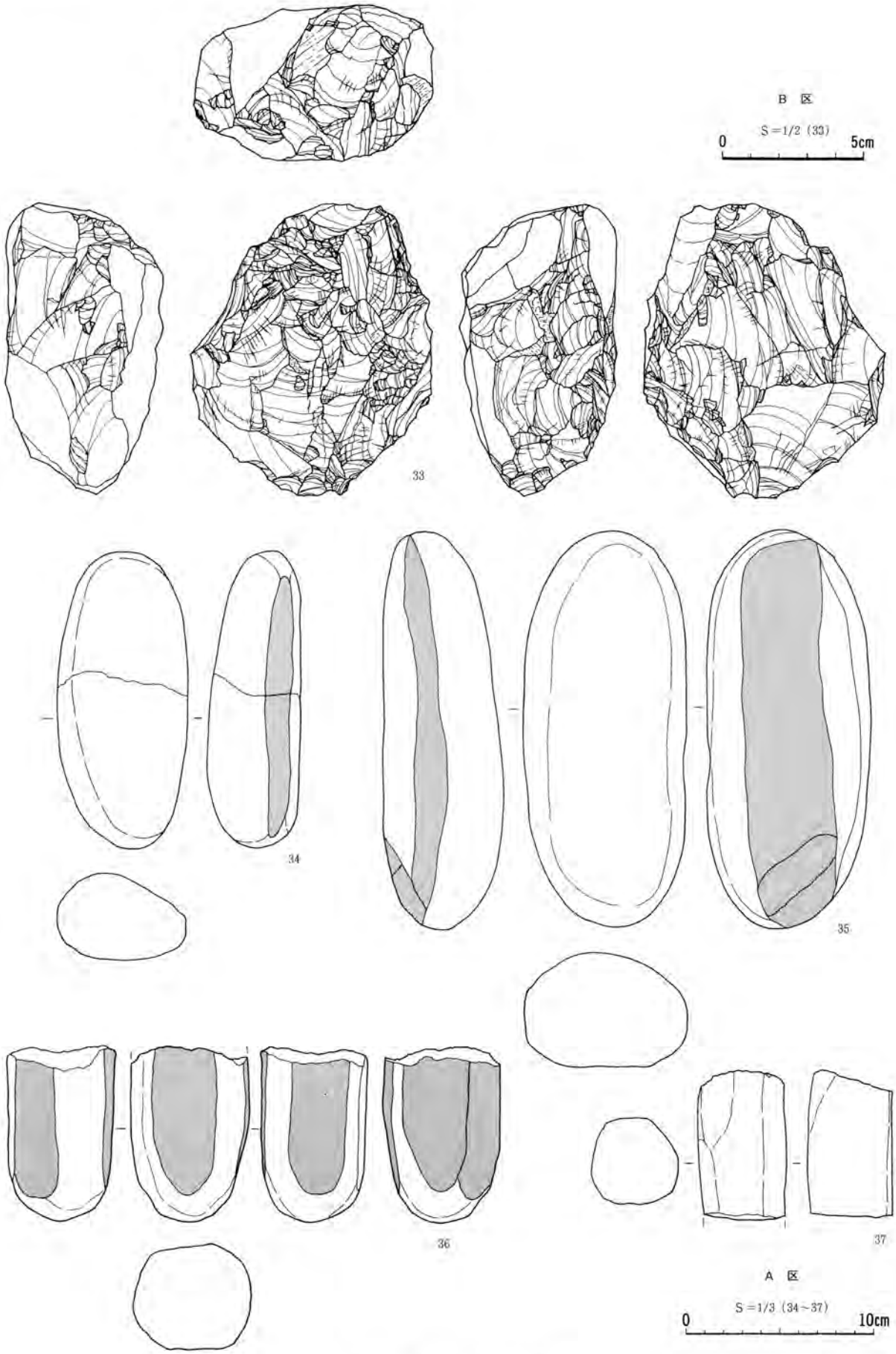


図47　遺構外出土石器(3)

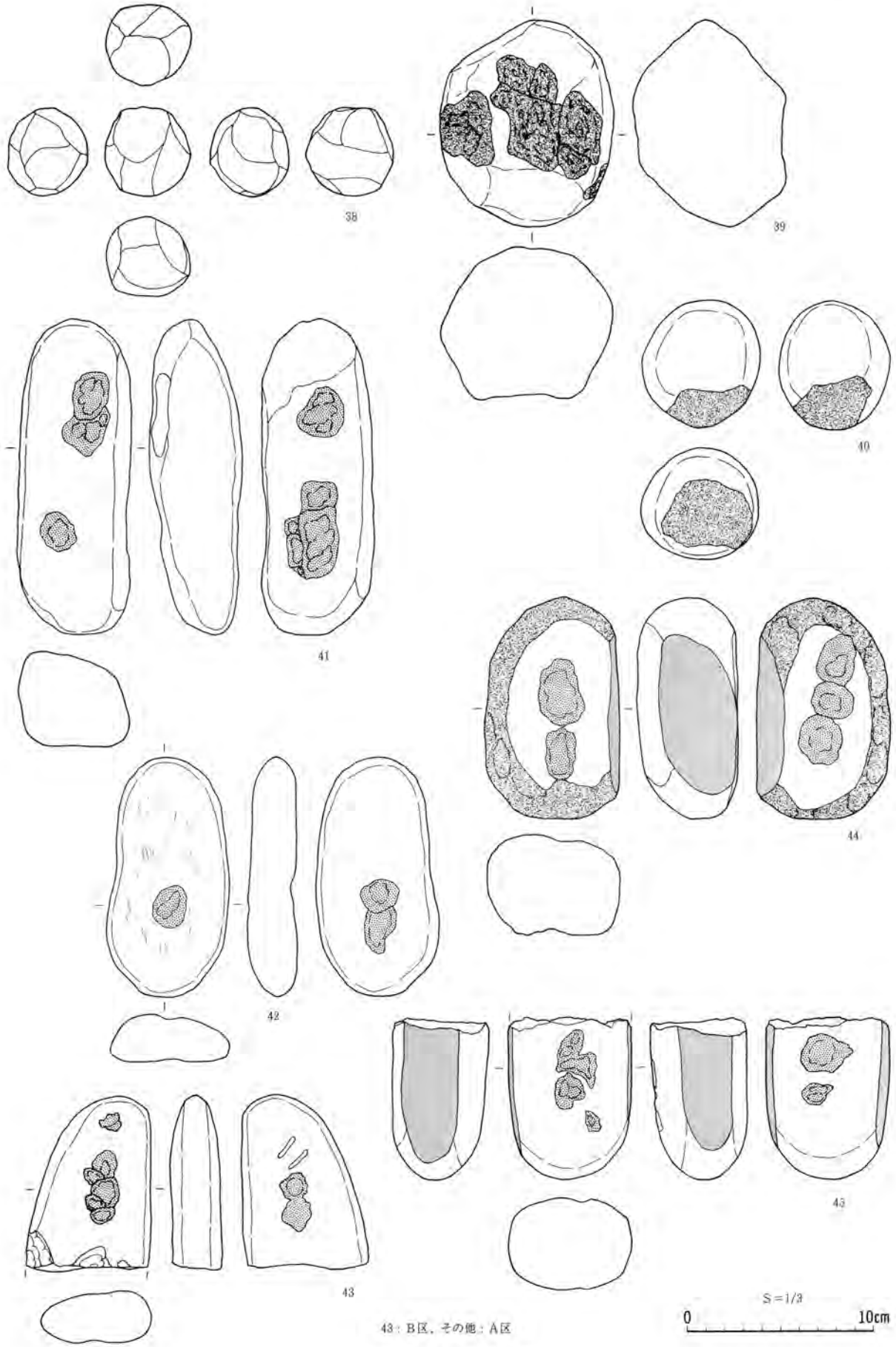


図48　遺構外出土石器(4)

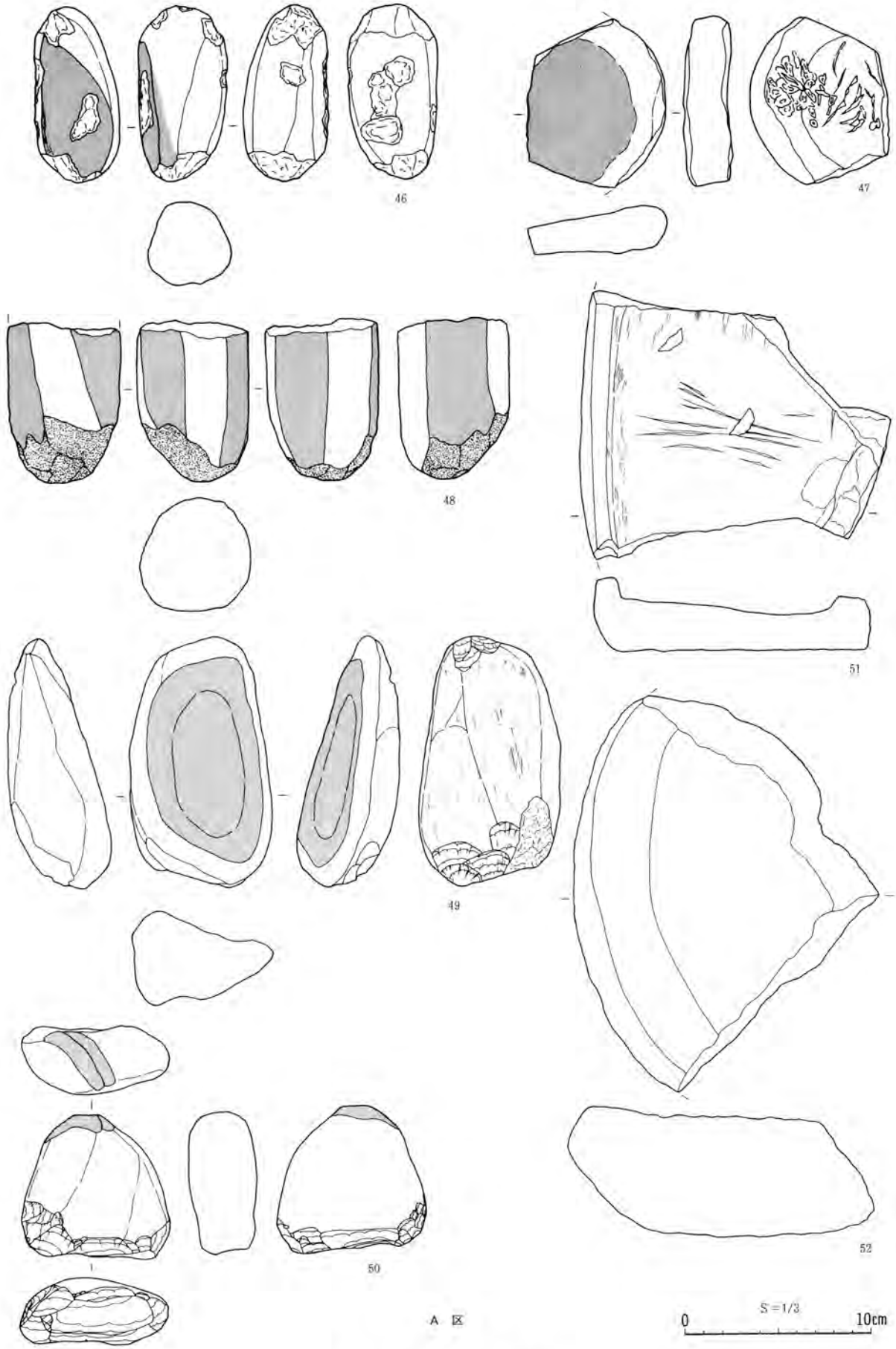


図49　遺構外出土石器(5)

B区

第Ⅲ層から定形石器2点、石核2点、礫石器4点（敲磨器Ⅰa・b・c、Ⅲ）各1点、二次加工剥片10点（b類4点・c類1点・d類5点）、剥片6点（f類4点・g類2点）の計24点が出土している。石器はグリットﾞラインⅣMから北側の部分とグリットﾞラインⅣEから南側の部分に分布し、中でも第8号土坑の周囲に集中する。

石篦（図45－8）　撥形で基部が直線的な石篦である。

磨製石斧（図45－16）　刃部に短軸方向の磨きが行われている。

石核（図47－33）　打面を頻繁に転位をさせながら剥離作業を行った石核である。節理が多いため、不規則な剥離をしている。同一個体と思われる剥片が4点出土している。

敲磨器（図48－43）　扁平な長円礫を分割後、折れ面に打撃加工を施し、凹み石として使用したものである。両面中央に浅い凹みが残る。第Ⅲ類に属する。この他、礫の中央が研磨により皿状に窪んだものが出土している。

（杉野森　淳子）

第4章　まとめ

第1節　平安時代の土器について

本遺跡から出土した平安時代の土器のうち、セット関係を捉えられるものは第1号住居跡・第2号住居跡・第4号住居跡出土土器である。

第1号住居跡出土土器は、坏（内面黒色処理）、ロクロ甕、ロクロを使用しない甕、須恵器長頸壺、須恵器大甕からなる。須恵器は堆積土中のものが多く、共伴とはとらえがたい。黒色処理の坏は比較的器高が高く、体部もやや丸みがある。無調整坏が伴うかどうかははっきりしない。甕は口頸部は比較的長く伸びるものが多い。調整はヘラナデを主体とする。第4号住居跡出土土器は内面黒色処理の土師器坏、無調整坏、ヘラナデ・ケズリを施す土師器甕、須恵器坏よりなる。土師器甕はロクロ製のものは出土しなかった。口縁部は第1号住居跡のものに比べてやや短いものが多いが、製作の上で差は見出せない。第3号住居跡についてもほぼ同様である。これらの土器は三浦圭介氏の編年のにおける古代後期Ⅱ期（9C後半～10C初頭）に相当するものと思われる。外周溝を持つ住居跡がこれまで概ね9C代～10C前葉に位置づけられてきたこととも大きくは矛盾しないであろう。ただし、第12号溝からは、器高が低く、体部上半が外反する無調整坏（図29－5）や、内面にロクロ目を残す無調整坏（図29－3）が出土している。これらはロクロ水挽きによる整形と思われ、遺跡自体は上記年代以後まで継続した可能性がある。

（中村　哲也）

第2節　遺構・遺物について

本遺跡は青森市に広がる平野の水田地帯に位置する。現在は掘削により、平坦な水田面であるが、当時は貴船川に注ぐ小河川が宮田地区一帯に巡り、その間に小規模な扇状地が広がっていた地形である。遺跡は扇状地の谷頭の標高20～25mの沖積世中位面に立地している。

検出遺構は、A区からは縄文時代の廃棄ブロック、平安時代の住居跡4軒、溝9基、カマド遺構1

基、埋設土器１基、中世以降のカマド遺構２基、溝６基、時期不明の土坑７基、配石２基が検出された。Ｂ区からは縄文時代の土坑１基、時期不明の土坑１基と小穴１基が検出している。

出土遺物は縄文時代前期から後期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・木製品・鉄製品・石器（石皿・台石、敲磨器）が出土している。

縄文時代に、Ａ区では調査区全体に遺物が分布し、東側斜面には前期と後期の土器がブロック状に集中している。住居跡は検出されている。また、Ｂ区では縄文時代の土坑と遺物が出土している。この時期、生活の場は南側の丘陵地にあり、山下遺跡全体を活動の場としていた。その中で、Ａ区は捨て場として利用されていたと考えられる。

平安時代の住居跡は４軒検出し、その内３軒は主軸方向が一致している。外周溝を備えるものが２軒検出している。２軒とも住居の軸方向とカマドの位置および外周溝の位置がほぼ一致している。カマドのない側に溝を巡らし、溝は傾斜の低い方向に向かって深くなっている。両外周溝は作り替えが行われている。第１号住居跡では、最初に住居跡北西側に８号溝を設置し、その後北東側に７号溝を構築している。第４号住居跡の溝は初めは第10号溝と第12号溝は一続きの溝であった。その後、河川の反乱により埋まり、再度掘り込んで、第10号溝・第11号溝・第12号溝が構築されている。第10号溝と第12号溝の間は出入口の可能性がある。外周溝の機能としては周囲に河川が多いことや溝の位置・深さから排水の機能が想定される。また、出土遺物から第12号溝は捨て場であったことが窺える。また、掘立柱建物を伴う住居が１軒検出されている。カマド側に位置している。ここからは遺構や遺物が検出されなかった。掘立柱建物跡の明確な機能は不明であるが倉庫が想定される。

中世以降のものは、幅の狭い溝とカマド遺構が検出された。この時期になると、屋外カマドと、区割りとして機能した溝が残る。生活の場であった可能性もあるが、生産の場も考えられる。

本遺跡は縄文時代前期から後期、平安時代、中世までの広い時間幅を持つ遺跡である。主体時期は平安時代で、沖積地の小規模な扇状地に立地する小集落である。市内おいて外周溝や掘立柱建物跡を伴う住居跡が少なく、近野遺跡、朝日山遺跡に次ぐものである。また、これまで市内で発見された平安時代の遺跡は主に洪積世下位面の台地または丘陵に立地し、沖積地の青森平野で確認されているのは細越遺跡のみである。当遺跡の発見で平安時代（９世紀～10世紀初頭）には青森平野東部まで居住域を広げていたことがわかった。

（杉野森　淳子）

遺構内土器

図版	遺構名	出土位置	外面調整等	内面調整等	胎　土	備　　考
7－1	ＳＫ8	1層	半隆帯　沈線	口縁部隆帯　沈線	砂礫含　骨針無	
7－2	ＳＫ8	確認面上	沈線　赤彩痕		砂礫含	
7－3	ＳＫ8	確認面上	半隆帯　沈線　赤彩痕	ナデ	砂礫含　骨針無	
7－4	ＳＫ8	確認面上	半隆帯　沈線　赤彩痕	ナデ	砂礫含　骨針無	
7－5	ＳＫ8	確認面上	半隆帯　沈線　赤彩痕	ナデ	砂礫含　骨針無	
7－6	ＳＫ8	確認面上	半隆帯　沈線　赤彩痕		砂礫含　骨針無	
7－7	ＳＫ8	確認面上	沈線	沈線　ミガキ	砂礫含　骨針無	
7－8	ＳＫ8	1層	口唇部ＬＲ横位回転		砂含　骨針無	
7－9	ＳＫ8	確認面上	沈線	ナデ	細砂含　骨針無	
7－10	ＳＫ8	1層	隆帯　沈線　漆様の黒色物質付着	ナデ	砂礫含　骨針無	
7－11	ＳＫ8	確認面1層	底面網代圧痕　1本越1本潜り1本送り		砂礫含　骨針無	
9－1	ＳＴ1	4層	沈線　隆帯		砂礫多　骨針無	
9－2	ＳＴ1	1層	沈線		砂礫多　骨針無	
9－3	ＳＴ1	3層	沈線		海綿骨針無	
9－4	ＳＴ1	3層	沈線		砂礫多　骨針無	
9－5	ＳＴ1	6層	沈線	ナデ	海綿骨針含	
9－6	ＳＴ1	5層	ヘラ描　斜沈線　網目状燃糸文	ナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－3
9－7	ＳＴ1	5層	斜格子沈線　折返し口縁　網目状燃糸文	ナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－3
9－8	ＳＴ1	5層	折返し口縁　ヘラ描斜沈線		砂礫多　骨針無	
9－9	ＳＴ1	5層	ヘラ描沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
9－10	ＳＴ1	5層	網目状燃糸文　斜格子沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－3　底部
9－11	ＳＴ1	5層	折返し口縁　ヘラ描沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
10－12	ＳＴ1	5層	折返し口縁　斜沈線　曲線文		砂礫多　骨針無	
10－13	ＳＴ1	6層	ＲＬ縦位回転	ナデ	砂礫多　骨針無	
10－14	ＳＴ1	5層	ＬＲ縦位回転	ナデ	砂礫多　骨針無	
10－15	ＳＴ1	4層		ナデ	石英粒多	
10－16	ＳＴ1	6層	ＬＲ縦位回転	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	
10－17	ＳＴ2	6層	ＬＲ縦位回転		砂礫含　骨針無	
11－18	ＳＴ3	3層	入組文	ナデ	砂礫多　骨針無	
11－19	ＳＴ3	3層	沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
11－20	ＳＴ3	4層	折返し口縁　沈線	ナデ	骨針微量	
11－21	ＳＴ3	4層	沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
11－22	ＳＴ3	4層	沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
11－23	ＳＴ3	4層	折返し口縁　沈線		砂礫多　骨針無	
11－24	ＳＴ3	4層	沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
11－25	ＳＴ3	4層	折返し口縁　沈線	ナデ	砂礫多　骨針極微	
11－26	ＳＴ3	3層	波状口縁　窓枠状文　沈線	ナデ	砂礫多　骨針無	
11－27	ＳＴ3	4層	窓枠状文　波状口縁　折返し口縁	ミガキ	砂礫含　骨針無	
11－28	ＳＴ3	3層	沈線		砂礫多　骨針無	
11－29	ＳＴ3	4層	入組文	ナデ	砂礫多　骨針無	
12－30	ＳＴ3	4層	波状口縁　口縁真下に沈線一条		砂礫多　骨針無	
12－31	ＳＴ3	3層	波状口縁真下に沈線一条　ナデ	ナデ	砂礫多　骨針無	
12－32	ＳＴ3	3層	平行沈線		砂礫多　骨針無	
12－33	ＳＴ3	4層	斜格子沈線	ナデ	砂多　骨針無	
12－34	ＳＴ3	3層	絡状体回転文	ナデ	砂礫多　骨針無	
12－35	ＳＴ3	4層	無文（ナデ）	ナデ	砂礫多　骨針無	
12－36	ＳＴ3	4層	ナデ	ナデ	骨針なし	
12－37	ＳＴ3	3層	沈線		砂礫多　骨針無	鐸形土製品
15－1	ＳＩ1	カマド覆土	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ　剥落多	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多	P-12、33 廉状圧痕　SD12確認面　SI1床面P7
15－2	ＳＩ1	カマド	口頸部ロクロ　体部ロクロ→ヘラナデ	ロクロ　ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－1、3、9、15
16－3	ＳＩ1	カマド	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－13、17、30、32
16－4	ＳＩ1	カマド	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－1
16－5	ＳＩ1	カマド	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－38
16－6	ＳＩ1	カマド	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ		砂礫多　骨針無	
16－7	ＳＩ1	カマド	口縁部ロクロ　ヘラナデ	ヨコナデ　ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－21
16－8	ＳＩ1	床直	ヘラナデ　剥落多	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－5
16－9	ＳＩ1	床直6層	ロクロナデ	黒色処理　ミガキ	砂礫少　骨針無	Ｐ－12
16－10	ＳＩ1	カマド	ヘラナデ	不明	砂礫多　骨針無	Ｐ－9、27　廉状圧痕
16－11	ＳＩ1	床直4層	ロクロナデ	ロクロナデ	砂微量	P-16　断面色調明黄褐色と暗灰色の互層
16－12	ＳＩ1	床直7層	平行タタキ	当て具痕	砂礫含　骨針無	Ｐ－3
16－13	ＳＩ1	覆土	ナデ	ナデ	骨針無	
16－14	ＳＩ1	カマド			骨針無	Ｐ－22　水洗・注記時のミス
16－15	ＳＩ1	3層				Ｐ－22　水洗・注記時のミス
19－1	ＳＩ2	カマド4層	口縁部一　体部ケズリ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－2、9、30
19－2	ＳＩ2	3層	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－9
20－3	ＳＩ2	覆土	口縁部指押え　ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	

図版	遺構名	出土位置	外面調整等	内面調整等	胎土	備考
20－4	ＳＩ２	覆土	口縁部ロクロ　体部ヘラナデ	口縁部ロクロ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	
20－5	ＳＩ２	カマド４層	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－23
20－6	ＳＩ２	覆土	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	
20－7	ＳＩ２	カマド１層			砂礫少　骨針無	Ｐ－17
20－8	ＳＩ２	３層	ヘラナデ	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－８　簾状圧痕
20－9	ＳＩ２	覆土	ヘラナデ	ヘラナデ	砂礫含　骨針無	底面葉脈圧痕
20－10	ＳＩ２	５層	縦方向のヘラナデ	上半部ロクロ　下半部ヘラナデ	砂礫含　骨針無	Ｐ－４、５
20－11	ＳＩ２	１層	ヘラナデ（上半横方向、下半縦方向）	横方向のヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－１
20－12	ＳＩ２	覆土	ロクロ後ヘラナデ（横方向）	ヘラナデ（斜方向）	砂礫多　骨針無	
20－13	ＳＩ２	覆土	ヘラナデ再調整	工具痕	砂礫含　骨針無	底面ハケメ
21－1	ＳＩ３	１層		ミガキ	砂礫少　骨針無	
21－2	ＳＩ３	カマド６層	体部ヘラナデ　頸部横方向ヘラナデ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	覆土１層　Ｐ－８
24－1	ＳＩ４	カマド	口縁部一　体部ヘラナデ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－16、20、22
24－2	ＳＩ４	カマド	口縁部ヨコナデ　体部上半ヘラナデ　下半ケズリ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－17
24－3	ＳＩ４	カマド	ロクロ	ロクロ　黒色処理	砂礫少　骨針微量	Ｐ－23、24　回転糸切　炭化物付着
24－4	ＳＩ４	カマド	口縁部一　体部ヘラナデ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－19、25、48
24－5	ＳＩ４	カマド	口縁部一　体部ヘラナデ		砂礫多　骨針無	Ｐ－25
24－6	ＳＩ４	カマド	口縁部ヨコナデ　体部上半ヘラナデ　下半ヘラケズリ	口縁部一　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－18、Ｐ－50
24－7	ＳＩ４	カマド	口縁部横方向ヘヘラナデ　体部ヘラナデ	口縁部ヘラナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－25、55　底面ヘラ切り
24－8	ＳＩ４	カマド	ロクロ	黒色処理ミガキ	砂礫少　骨針無	Ｐ－23
24－9	ＳＩ４	カマド	ケズリ	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－15　底面ケズリ再調整
24－10	ＳＩ４	カマド			砂礫多　骨針無	Ｐ－52、32
24－11	ＳＩ４	カマド	ヘラナデ	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－19、48　底面ヘラナデ
24－12	ＳＩ４	カマド	ケズリ	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－25、55　底面ヘラナデ
24－13	ＳＩ４	カマド		黒色処理　ミガキ	砂礫含　骨針無	Ｐ－３・５　回転糸切
24－14	ＳＩ４	カマド			砂礫含　骨針無	Ｐ－54　回転糸切
24－15	ＳＩ４	覆土	ロクロ	ロクロ	砂礫含　骨針無	回転糸切　端部にヘラによる再調整痕
24－16	ＳＩ４	覆土	ロクロ　火襷あり	ロクロ	砂礫含　骨針無	火襷あり
24－17	ＳＩ４	カマド	タタキ	ナデ	砂礫含　骨針無	Ｐ－９　断面赤褐色を呈する
24－18	ＳＩ４	覆土				Ｐ－50　端部指押え
25－1	ＳＤ７	覆土	ロクロ	ロクロ	砂礫含	
25－2	ＳＤ７	覆土				12号溝　覆土下位　Ｐ－５と接合
26－1	ＳＤ13	覆土	口縁部ロクロ　体部ケズリ	口縁部ミガキ　体部一　黒色処理	砂礫含　骨針無	
29－1	ＳＤ10	覆土				
29－2	ＳＤ12	覆土下位	ロクロ	黒色処理　ミガキ	砂微量　骨針無	Ｐ－16　回転糸切後再調整
29－3	ＳＤ12	覆土下位	ロクロ	ロクロ	粗砂含　骨針無	Ｐ－18　回転糸切
29－4	ＳＤ12	覆土下位	ロクロナデ　底面付近ナデ	黒色処理ミガキ	砂礫含　骨針無	Ｐ－６　回転糸切
29－5	ＳＤ12	覆土	ロクロナデ	ロクロ	粗砂微量　骨針無	回転糸切
29－6	ＳＤ12	覆土下位	ミガキ		砂礫含　骨針無	Ｐ－10　底面未調整
29－7	ＳＤ12	覆土	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	ヘラナデ	砂礫多　骨針無	
29－8	ＳＤ12	覆土	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	
29－9	ＳＤ12	覆土	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	磨滅	砂礫含	
29－10	ＳＤ12	覆土	口縁部一　体部ヘラナデ	ヘラナデ	砂礫多	
32－1	カマド３	覆土	頸部ヘラナデ　体部一	体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－８
32－2	カマド３	覆土	ロクロ　ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	砂礫多　骨針無	Ｐ－６　Ｐ－×
32－3	カマド３	覆土			砂礫多　骨針無	Ｐ－１
33－1	ＳＲ１		口縁～体部上半ロクロ　下半ヘラケズリ	ロクロ	砂礫含　骨針無	底面回転糸切

廃棄ブロック出土石器

図版	器種	出土地点	層位	石材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備考
13－1	石鏃	ＳＴ：ⅢＣ－119	１層	珪質頁岩	36.0	15.0	4.0	1.5	有茎
13－2	石鏃	ＳＴ：ⅢＢ－120	３層	玉髄質珪質頁岩	40.5	18.5	10.0	5.4	
13－3	石匙	ＳＴ３	３層	珪質頁岩	50.5	31.5	9.0	8.5	縦型
13－4	磨製石斧	ＳＴ：ⅢＦ－118	６層	花岡閃緑岩	(59.0)	37.0	29.0	82.9	刃部欠損、研磨痕有り
13－5	扁平打製石器	ＳＴ：ⅢＣ－120	１層	凝灰岩	158.0	141.0	31.0	911.8	研磨痕有り
13－6	敲磨器Ｉａ類	ＳＴ１：ⅢＦ－119	１層	石英安山岩	152.0	78.0	72.0	1159.8	側面にすり痕有り
13－7	敲磨器Ｉａ類	ＳＴ２：ⅢＦ－118	４層	安山岩	60.0	475.0	34.0	154.4	
13－8	石皿	ＳＴ３：ⅢＣ－120	３層	凝灰岩	(102.5)	(83.0)	38.0	291.4	縁付、縁内側に溝有り
13－9	半円状扁平打製石器	ＳＴ：ⅢＢ－120	３層	石英安山岩	175.0	88.0	32.0	678.4	

遺構内出土石器

図版	遺構名	器種	出土地点	層位	石材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備考
7－12	８ＳＫ	二次加工剥片ｂ	ⅢＴ－164	１層	チャート	77.0	45.0	16.0	38.6	削器・掻器
17－16	１Ｈ	磨製石斧		７層	閃緑岩	(34.7)	32.0	25.5	33.9	下部欠損、磨斧基部
17－17	１Ｈ	石刀		８層	粘板岩	(143.0)	27.0	14.5	98.2	擦痕顕著、上部欠損
17－18	１Ｈ	石皿		１層	安山岩	(129.0)	179.0	54.0	1862.3	表面にすり痕
24－19	４Ｈ	石製品		床面	凝灰岩	58.0	45.0	13.0	44.7	全面研磨、裏面中央に浅い凹み

図版	遺構名	器　種	出土地点	層　位	石　材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備　考
25－3	7SD	敲磨器Ⅲ類	ⅢG－116	覆土	安山岩	(88.5)	71.0	47.0	369.5	両面に凹み痕
26－2	13SD	二次加工剥片b		覆土	珪質頁岩	38.5	47.5	7.0	9.5	基部欠損
29－11	12SD	石匙		覆土	珪質頁岩	43.0	42.0	7.6	7.1	下部欠損、横型石匙
29－12	12SD	磨製石斧	ⅢF－108	覆土	凶緑岩	137.5	48.0	21.8	319.4	擦痕顕著
29－13	12SD	敲磨器Ⅰb類	北側	覆土	石英安山岩	21.3	14.0	12.3	5300.2	片面すり
34－1	カマド2	敲磨器Ⅳ類		覆土	安山岩	(117.5)	71.0	49.0	537.9	研磨痕と敲打痕

第8号溝出土鉄製品

図　版	名　称	層　位	長：cm	幅：cm	厚：cm	重：g	備　考
25－4	釘	覆土	37.5	9.0	5.0	1.7	

第12号溝出土木製品

図　版	名　称	層　位	長：cm	幅：cm	厚：cm	木取り	備　考
30－1	薄板状木製品	覆土	4.9	3.4	0.7	柾目	
30－2	棒状木製品	覆土	21.5	1.4	1.4	柾目	ケズリ
30－3	板状木製品	覆土	21.9	4.0	1.1	柾目	
30－4	板状木製品	覆土	21.0	3.8	1.2	柾目	ヨコケズリ
30－5	棒状木製品	覆土	13.3	5.0	3.4	1/4分割材	ヨコケズリ
30－6	棒状木製品	覆土	15.2	2.6	13.5	柾目	焼けこげ、ヨコケズリ
30－7	丸太半割材	覆土	74.0	128.0	53.5	丸太	焼けこげ
31－8	板状木製品	覆土	152.0	87.0	25.0	柾目	ヨコケズリ
31－9	棒状木製品	覆土	21.5	3.6	1.8	不明	
31－10	棒状木製品	覆土	63.4	3.3	2.3	柾目	両面ヨコケズリ
31－11	棒状木製品	覆土	56.7	2.2	2.2	柾目	ヨコケズリ、先端部加工
31－12	棒状木製品	覆土	42.7	2.0	1.3	柾目	ヨコケズリ
31－13	板状木製品	覆土	45.1	3.8	1.5	柾目	ヨコケズリ、抉り加工

遺構外出土土器

図版	出土位置	出土層位	外面調整等	内面調整等	胎　土	備　考
41－1	ⅢC－112	Ⅳ層	口縁部撚糸側面圧痕(RL)　胴部多軸絡状体(R)		砂礫含　骨針無	
41－2	ⅢD－113	Ⅳ層	口縁部撚糸側面圧痕　体部単軸絡状体ⅠA類		砂含　骨針無	白色の凝灰岩と思われる軟質の粒子含む
41－3	ⅢC－112	Ⅳ層	口縁部撚糸側面圧痕(L)　頸部竹管状刺突　胴部多軸絡状体(L)		砂礫含　繊維微量	
41－4	ⅢD－113	Ⅳ層	口縁部撚糸側面圧痕(R,LR)　胴部多軸絡状体		砂礫含　骨針無	
42－5	ⅢI－117	Ⅲ層	磨消縄文(RL縦位)　隆帯　蛸状突起		砂礫多　骨針無	
42－6	ⅢH－117	Ⅲ層	隆帯		砂礫多　骨針無	
42－7	ⅢH－117	Ⅲ層	隆帯	磨滅	砂礫多　骨針無	
42－8	ⅢH－117	Ⅲ層	隆帯		砂礫多　骨針無	
42－9	ⅢH－117	Ⅲ層	隆帯		砂礫多　骨針無	
42－10	ⅢC－115	Ⅲ層	沈線　LR	ナデ	砂礫多　骨針無	
42－11	ⅢI－117	Ⅲ層	沈線　LR縦位		砂礫多　骨針含	
42－12	ⅢF－116	Ⅲ層	沈線　LR縦位		砂多　骨針無	
42－13	ⅢA－116	Ⅲ層	沈線　LR	ナデ	砂礫多　骨針無	
42－14	ⅢC－116	Ⅲ層	隆帯		砂礫多　骨針無	
42－15	ⅢE－112	Ⅲ層	沈線		粗砂多　骨針無	
42－16	ⅢE－112	Ⅲ層	沈線　赤彩痕		砂礫多　骨針無	
42－17	ⅢE－112	Ⅱ層	沈線		粗砂多　骨針無	
42－18	ⅢI－116	Ⅲ層	沈線	ミガキ	砂礫多　骨針無	
42－19	ⅢJ－117	Ⅲ層	沈線　縄文　再調整		砂礫多　骨針無	
42－20	ⅢD－116	Ⅲ層	L縦位回転		砂多　骨針無	
42－21	ⅢL－117	Ⅲ層	RL縦位		砂礫多　骨針無	
43－22	ⅢJ－117	Ⅳ層	LR縦位回転		砂礫少　骨針無	
43－23	ⅢG－113	Ⅲ層	RL縦位	ナデ	砂礫多　骨針微量	
43－24	ⅢE－112	Ⅲ層	沈線	ナデ	砂礫微量	ミニチュア土器
43－25	ⅢF－118	Ⅱ層	ロクロ	体部ナデ　口縁部ヨコナデ	砂礫多　骨針無	
43－26	ⅢE－110	Ⅲ層	ヘラナデ		砂礫多　骨針無	
43－27	Ⅲ?－115	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロ	砂礫少　骨針無	
43－28	ⅢE－115	Ⅲ層	ロクロ	ロクロ	砂含	底面ヘラ切り後「の」記号
43－29	ⅢJ－117	Ⅲ層	体部上半ヘラナデ　下半ヘラナデ	体部上半ヘラナデ　下半ヘラナ	砂礫多　骨針無	底面再調整
43－30	ⅢE－120	Ⅰ層	スタンプ文	ナデ	砂少量　黒雲母含	瓦質土器
44－1	ⅣD－168	Ⅲ層	口縁部　隆帯　撚糸側面圧痕		砂礫多　骨針無	
44－2	ⅣN－163	Ⅲ層	沈線・LR・RLR横位	ナデ	砂礫多　骨針無	
44－3	ⅣM－160	Ⅲ層	隆帯　RL　沈線		砂多　骨針無	
44－4	ⅣM－160	Ⅲ層	口縁部半隆帯		粗砂多　骨針無	
44－5	ⅣC－166	Ⅲ層	隆帯　沈線　LR	ミガキ	砂多　骨針無	
44－6	ⅣI－163	Ⅲ層	沈線　黒色塗膜状物質付着	ミガキ	砂多　骨針無	
44－7	ⅣC－164	Ⅲ層	隆帯　LR　沈線　ミガキ	ミガキ	砂含　骨針無	
44－8	ⅣC－164	Ⅲ層	半隆帯　沈線　RL	ミガキ	砂礫含　骨針無	

遺構外出土土器

図版	出土位置	出土層位	外面調整等	内面調整等	胎土	備考
44－9	ⅣM－159	Ⅲ層	沈線 縄文	ミガキ	砂多 骨針無	
44－10	ⅣM－160	Ⅲ層	RL充填		砂多 骨針無	
44－11	ⅢC－164	Ⅲ層	半隆帯 沈線 隆帯上RL	ミガキ	砂含 骨針無	
44－12	ⅣM－160	Ⅲ層	沈線 RL	ミガキ	砂多 骨針無	
44－13	ⅣC－164	Ⅲ層	沈線	ミガキ	砂多 骨針無	
44－14	ⅣA－163	Ⅲ層	口縁部 隆帯 沈線		砂多 骨針無	
44－15	ⅣN－164	Ⅲ層	沈線	ミガキ	砂礫多 骨針微	
44－16	ⅣA－164	Ⅲ層	橋状把手 隆帯	ミガキ	砂含 骨針無	
44－17	ⅣA－163	Ⅲ層	沈線	ナデ	砂多 骨針無	
44－18	ⅣM－160	Ⅲ層	羊歯状文 下半RL		砂少 骨針無	

遺構外石器

図版	器種	調査区	出土地点	層位	石材	長：㎜	幅：㎜	厚：㎜	重：g	備考
45－1	石鏃	A区	ⅢC－114	Ⅱa層	玉髄質珪質頁岩	29.0	13.0	6.0	1.4	Ⅲ
45－2	石匙	A区	ⅢJ－116	Ⅲ層	頁岩	48.0	46.0	10.0	18.9	横型、礫打面
45－3	石匙	A区	表採	表採	チャート	42.5	51.5	11.5	16.0	横型、刃部片面調整
45－4	石匙	A区	ⅢC－114	Ⅲ層	珪質頁岩	31.0	43.0	8.0	7.7	横型、礫打面
45－5	石篦	A区	ⅢC－111	Ⅲ層	玉髄質珪質頁岩	28.0	12.0	5.0	1.3	
45－6	石篦	A区	ⅢD－111	Ⅰ層	珪質頁岩	57.0	30.5	11.0	16.4	棒状、丸刃
45－7	石篦	A区	ⅢD－113	Ⅲ層	玉髄質珪質頁岩	(51.0)	27.5	12.5	13.3	鉢形、直刃
45－8	石篦	B区	ⅣN－164	Ⅲ層	珪質頁岩	71.0	35.0	18.5	40.9	撥形、直刃
45－9	石篦	A区	ⅢB－113	Ⅱa層	珪質頁岩	21.0	16.0	7.0	1.3	
45－10	石篦	A区	ⅢE－117	Ⅱa層	珪質頁岩	31.0	16.0	7.0	2.5	
45－11	石篦	A区	表採	表採	珪質頁岩	74.0	23.0	15.5	23.4	棒状、丸刃
45－12	磨製石斧	A区	ⅢB－116	Ⅲ層	安山岩	120.0	45.5	31.5	244.3	
45－13	磨製石斧	A区	ⅢD－111	Ⅲ層	緑色細粒凝灰岩	78.5	35.0	13.0	60.9	擦痕顕著
45－14	磨製石斧	A区	ⅢD－117	Ⅲ層	閃緑岩	104.0	41.6	33.0	210.1	研磨痕
45－15	磨製石斧	A区	ⅢE－109	Ⅲ層	閃緑岩	(65.0)	42.0	25.0	110.4	研磨痕、上部欠損
45－16	磨製石斧	B区	ⅣA－165	Ⅲ層	頁岩	113.5	44.0	23.2	202.6	研磨痕
45－17	磨製石斧	A区	ⅢH－117	Ⅱa層	閃緑岩	(44.5)	21.0	9.0	14.3	研磨痕、上部欠損
46－18	二次加工剥片a	A区	ⅢK－114	Ⅱa層	珪質頁岩	(24.0)	31.0	13.0	4.5	篦の刃部、上部欠損
46－19	二次加工剥片a	A区	排土中	－	珪質頁岩	(31.0)	30.0	9.0	8.1	篦の刃部
46－20	二次加工剥片a	A区	ⅢK－114	Ⅱa層	珪質頁岩	(32.0)	31.0	13.0	8.3	篦の刃部、上部欠損
46－21	二次加工剥片a	A区	ⅢK－114	Ⅱa層	珪質頁岩	(29.0)	22.0	7.0	3.5	錐の刃部
46－22	二次加工剥片b	A区	ⅢE－110	Ⅳ層	珪質頁岩	38.0	49.0	10.0	11.3	削器・掻器
46－23	二次加工剥片b	A区	ⅢJ－117	Ⅲ層	珪質頁岩	(41.0)	(46.0)	9.5	18.0	削器・掻器
46－24	二次加工剥片b	A区	ⅢG－116	Ⅲ層	珪質頁岩	48.0	51.0	10.0	16.8	削器・掻器
46－25	二次加工剥片b	A区	ⅢD－110	Ⅰ層	珪質頁岩	35.0	65.0	6.5	19.1	削器・掻器
46－26	二次加工剥片b	A区	ⅢF－113	Ⅲ層	珪質頁岩	92.0	40.0	18.5	41.2	削器・掻器
46－27	二次加工剥片b	A区	ⅢI－111	Ⅲ層	珪質頁岩	62.0	40.0	15.0	28.7	削器・掻器
46－28	二次加工剥片c	A区	ⅢD－116	Ⅲ層	珪質頁岩	47.0	31.0	11.5	17.2	
46－29	二次加工剥片c	A区	ⅢD－115	Ⅱa層	珪質頁岩	41.0	49.0	13.5	24.9	
46－30	二次加工剥片c	A区	ⅢE－115	Ⅲ層	珪質頁岩	47.0	60.0	12.3	29.6	表先端部加工
46－31	二次加工剥片d	A区	ⅢH－117	Ⅱa層	珪質頁岩	58.0	44.0	13.0	27.7	
46－32	二次加工剥片c	A区	ⅢB－116	Ⅲ層	珪質頁岩	(42.0)	(33.0)	13.0	11.1	
47－33	石核	B区	ⅣC－164	Ⅲ層	珪質頁岩	105.0	86.0	54.5	537.7	
47－34	敲磨器Ⅰa	A区	96ⅢB－117	Ⅲ層	凝灰岩	159.5	70.0	48.5	653.3	片側にすり面
47－35	敲磨器Ⅰa	A区	ⅢE－112	Ⅲ層	石英安山岩	212.5	88.0	65.0	1626.5	片側・片面にすり面
47－36	敲磨器Ⅰa	A区	ⅢA－116	Ⅲ層	石英安山岩	93.5	80.0	56.0	478.1	研磨痕
47－37	敲磨器Ⅰb	A区	ⅢA－116	Ⅲ層	流紋岩	(80.0)	47.0	47.0	273.4	前面研磨
48－38	敲磨器Ⅰc	A区	ⅢC－111	Ⅰ層	礫岩（チャート）	48.0	46.5	43.5	126.6	前面研磨
48－39	敲磨器Ⅱ	A区	ⅢI－115	Ⅲ層	砂岩	111.5	98.0	82.0	1141.0	表面・側面に敲打痕
48－40	敲磨器Ⅱ	A区	ⅢK－114	Ⅲ層	石英蛹緑岩	70.5	64.0	60.0	358.3	端部に敲打痕
48－41	敲磨器Ⅲ	A区	96ⅢA－117	Ⅲ層	凝灰岩	169.0	61.0	51.0	721.8	両面に凹み痕有り
48－42	敲磨器Ⅲ	A区	ⅢE－116	Ⅲ層	凝灰岩	129.0	56.0	26.0	265.9	両面に凹み痕、表面すり痕有り
48－43	敲磨器Ⅲ	B区	ⅣN－159	Ⅲ層	蛹緑石	(94.5)	68.0	28.0	261.0	下部半割り後成形
48－44	敲磨器Ⅳ	A区	ⅢJ－116	Ⅱa層	安山岩	120.0	73.0	53.0	652.9	研磨・敲打・凹み痕有り
48－45	敲磨器Ⅳ	A区	ⅢK－114	Ⅳ層	石英安山岩	87.5	67.0	52.0	426.7	研磨・凹み痕有り
49－46	敲磨器Ⅳ	A区	ⅢB－115	Ⅲ層	安山岩	95.0	48.0	45.0	279.5	敲打・研磨痕有り
49－47	敲磨器Ⅳ	A区	96表採	表採	砂岩	(90.5)	(74.5)	24.0	247.1	研磨・敲打痕有り
49－48	敲磨器Ⅳ	A区	ⅢH－116	Ⅰb層	安山岩	(87.0)	60.0	61.0	405.6	研磨・敲打痕有り
49－49	石皿	A区	ⅢE－115	Ⅲ層	流紋岩	135.0	76.0	50.0	530.9	擦痕顕著
49－50	打製石器	A区	ⅢA－117	Ⅲ層	珪岩	78.0	80.0	36.0	291.2	研磨・剥離痕有り
49－51	石皿	A区	96：トレンチ24	Ⅲ層	凝灰岩	(144.0)	177.0	40.0	809.8	縁付、擦痕顕著
49－52	石皿	A区	96：トレンチ30	Ⅲ層	凝灰岩	(210.0)	(165.0)	64.0	2163.4	中央に浅い凹み有り

第3編　上野尻遺跡

第3編　上野尻遺跡

第1章　基本層序

平成9年度調査区は市道矢田2号線の付け替え道路部分に当たり、南北に狭長な調査区であった。そこで便宜上調査区をA区・B区・C区の3区にわけて呼称した（図50）。遺跡一帯は地形の変化に富み、土層も調査区ごとに異なる状態であった。詳細は第1編第4章に述べているので、調査区ごとに土層について簡単に述べることにする。

A区　丘陵裾部にあたる。火山灰土を地山とする。Ⅱ層が縄文時代の包含層である。

B区　丘陵裾部～沖積地にあたる。丘陵斜面を供給源とする二次堆積の火山灰土と矢田方面の谷筋から供給された礫層が地山となり、この上に黒色土が堆積している。

C区　矢田の谷筋から供給された礫層が数mにわたり堆積している。表層に黒色土が堆積している。

（中村　哲也）

第2章　検出遺構と出土遺物

A区北寄りで土坑が、B区で遺物廃棄ブロックが検出された。C区では遺構は検出されなかった。

A区

第1号土坑〔SK1〕（図51、図版15－2・3）

［位置］ＸＩＢ―227に位置する。［平面形・規模］1.30m×1.19mのほぼ円形を呈する。［壁・底面］底面は平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。［堆積土］5層に分層された。一部に焼土の投げ込みが認められた。［出土遺物］遺物は出土しなかった。周辺からは縄文時代後期後葉の土器片が出土している。［時期］周辺から出土した土器から見て縄文時代後期後葉の可能性が高い。

第3号土坑〔SK3〕（図51）

［位置］ＸＩＡ～Ｂ―228に位置する。［平面形・規模］0.98m×0.70mの不正な卵形を呈する。［壁・底面］底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。［堆積土］3層に分層された。［出土遺物］遺物は出土しなかった。周辺からは縄文時代後期後葉の土器片が出土している。［時期］周辺から出土した土器から考えて、縄文時代後期後葉の可能性が高い。

第4・5号土坑〔SK4・5〕（図51、図版15－3～5）

［位置］ＸＩＤ―227に位置する。［重複］第4号土坑が第5号土坑より新しい。［平面形・規模］第4号土坑は土層断面で径1.81mを計る。第5号土坑は土層断面で0.82m残存している。［壁・底面］底面は凹凸があり、不正な平面形である。［堆積土］第4号土坑は8層に、第5号土坑は3層に細分された。堆積土上位に十和田ａ・白頭山火山灰を検出した。第5号土坑廃絶後の埋まりきらない窪地に堆積したものと思われる。［出土遺物］堆積土中から縄文時代後期後葉の土器片が出土した。流れ込んだ可能性が高い。また、φ20cm程度の礫が堆積土中から出土した。埋没過程で投げ込まれたものと考えられる。［時期］十和田ａ・白頭山火山灰の存在から、10世紀前葉には廃絶されていたものと考えられるが、上限は不明である。

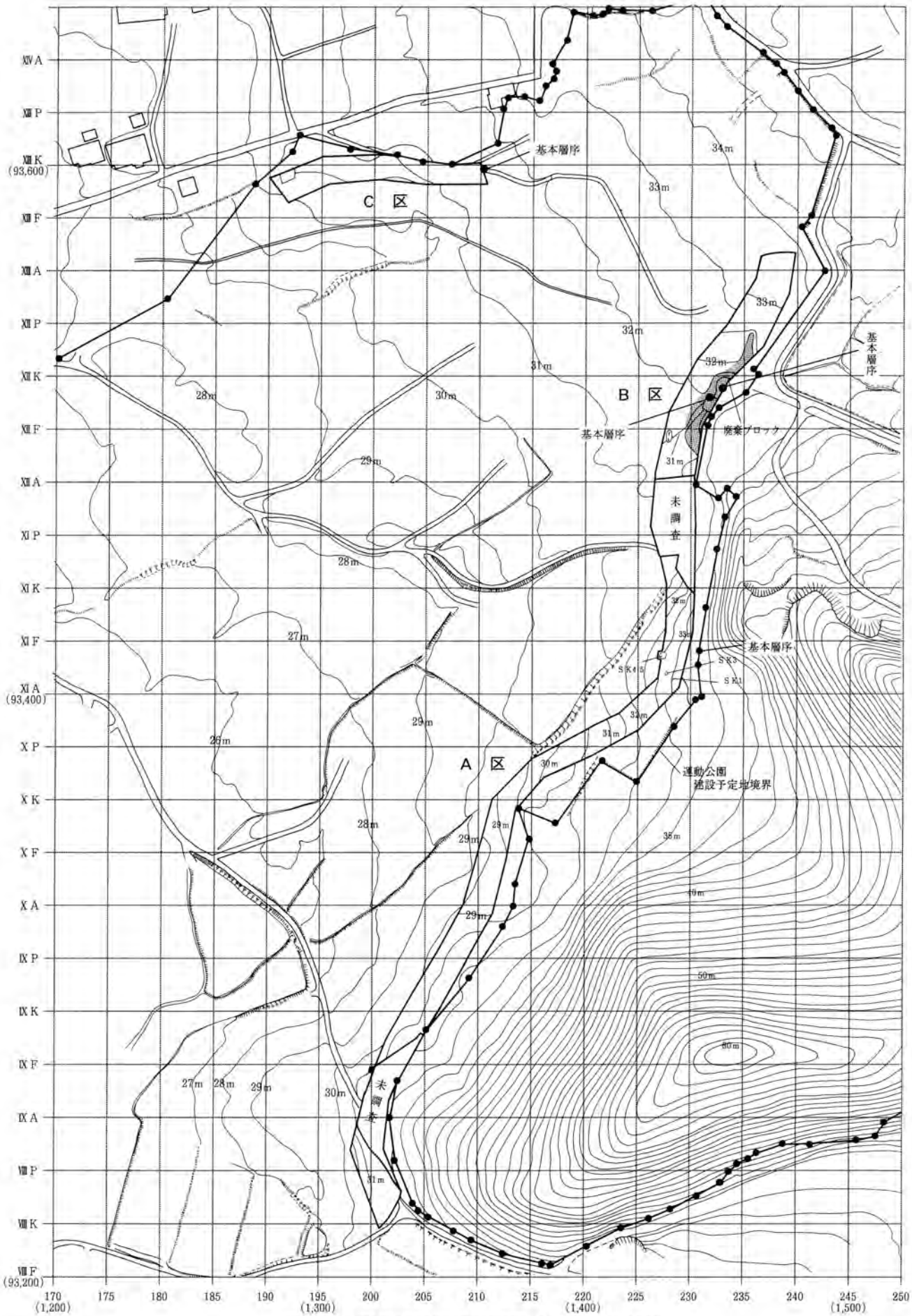
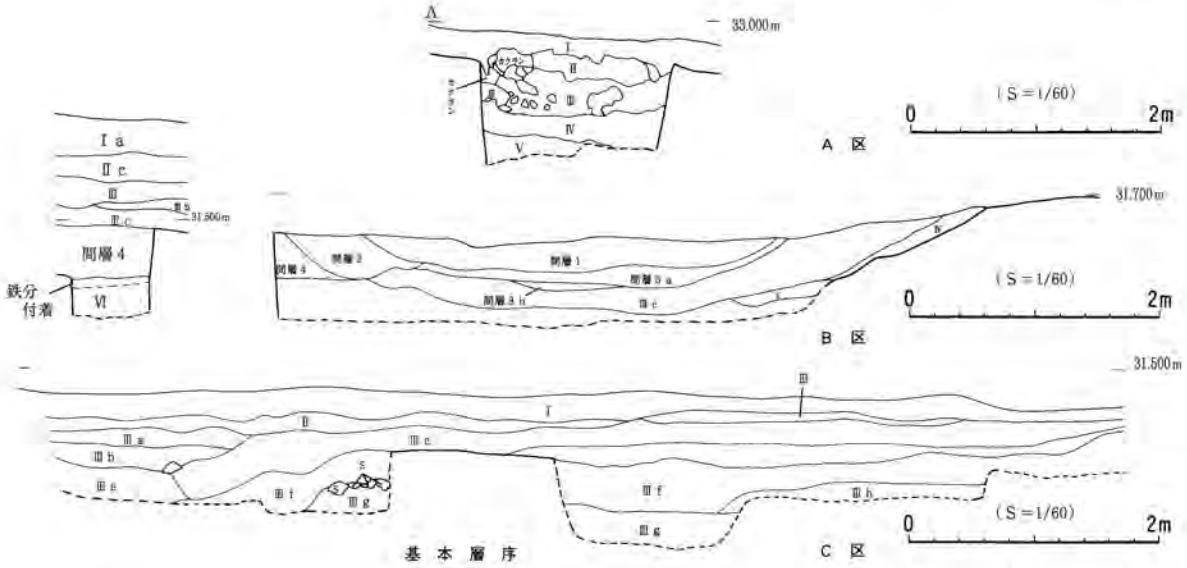
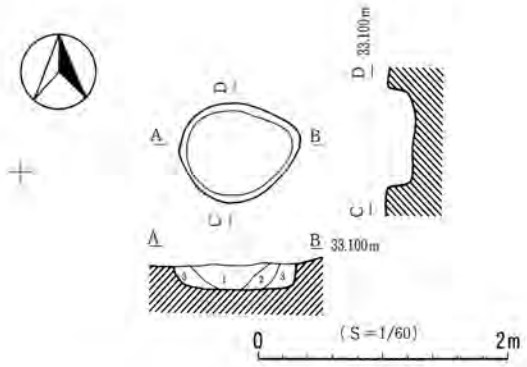


図50　上野尻遺跡遺構配置図（S＝1/2,000）

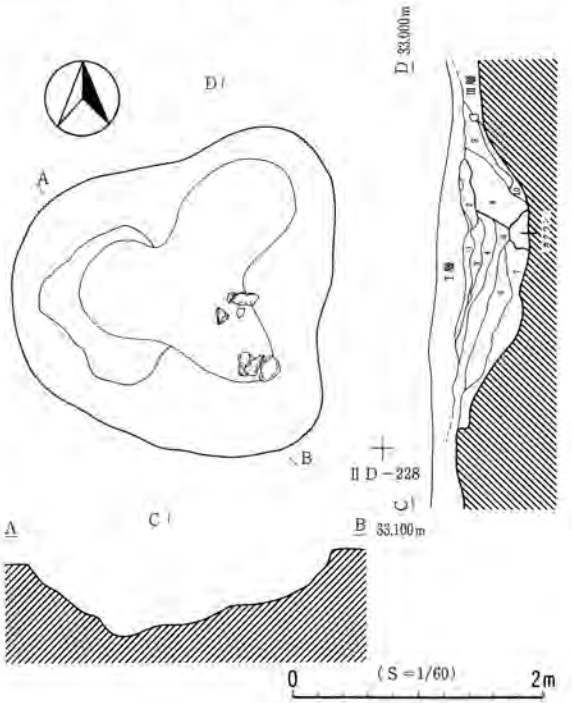


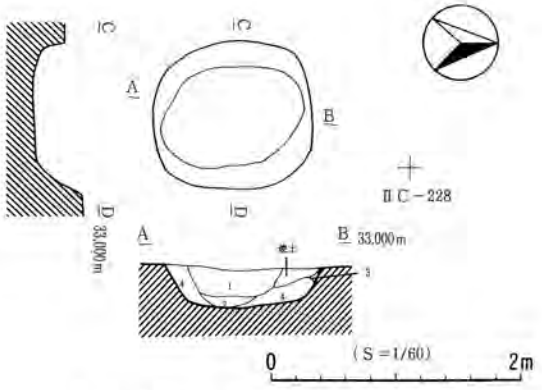
基 本 層 序



第１層　黒色土　（10YR2/1）　炭化物、火山灰土粒少量。
第２層　黒色土　（10YR2/1）
第３層　暗褐色土（10YR3/4）　火山灰土粒含む。焼土少量。炭化種子少量。
第４層　黒褐色土（10YR2/3）　火山灰土粒少量。
焼　土　褐色土　（7.5YR4/6）

第 1 号 土 坑





第１層　黒色土　（10YR2/1）
第２層　黒褐色土（10YR2/2）
第３層　暗褐色土（10YR3/4）　火山灰土φ１～３㎝少量。

第 3 号 土 坑

第4号土坑
第１層　黒褐色　（10YR2/2）　シルト
第２層　黒褐色　（10YR2/2）　シルト　白頭山火山灰少量含む。
第３層　明褐色　（7.5YR5/8）　火山灰土　白頭山火山灰。
第４層　黒褐色　（10YR2/2）　シルト
第５層　黒褐色　（7.5YR2/1）　シルト
第６層　黒褐色　（10YR2/1）　シルト
第７層　黒褐色　（10YR2/1）　シルト

第5号土坑
第８層　黒褐色　（10YR2/1）　シルト
第９層　黒褐色　（10YR2/2）　シルト
第11層　黒褐色　（10YR2/3）　シルト

第４・５号土坑

図51　基本層序、第１・３・４・５号土坑

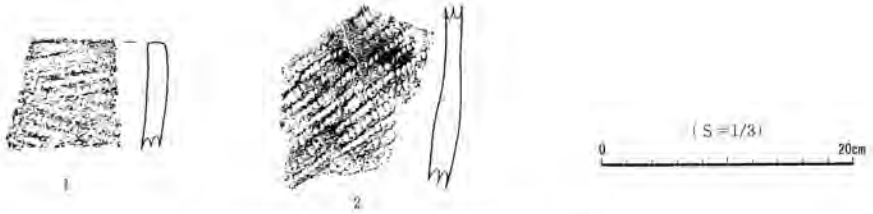


図52　第４・５号土坑出土遺物

B区

遺物廃棄ブロック（図50・51図版15－7・8）

B区XⅡC～XⅡO—229～236にかけて遺物廃棄ブロックが検出された。丘陵斜面から流出した二次堆積の黄灰色火山灰土を地山として小規模な沢が形成されており、これに遺物が廃棄されていた。遺物の出土状況は層位的にとらえるべくつとめたが、層序が細かく変化するためその関係をつかみきれなかったし、遺物は遺構外の遺物と区別して取り上げることはしなかった。そのため、遺物は遺構外の遺物として報告する。B区ではこれ以外の遺物はほとんど出土せず、ほとんどが廃棄ブロック出土ととらえて差し支えない。

第３章　遺構外出土遺物

A区出土土器（図53）

A区から出土した土器は、整理箱１箱分、重量にして約6.6kgである（試掘調査分除く）。

縄文時代前期末の土器（1）　1は波頂部から垂下する隆帯を施す。頸部にも1条の隆帯を巡らすようである。隆帯で区画された口縁部文様帯内には撚糸側面圧痕が施される。円筒下層ｄ２式に比定される。

縄文時代中期の土器（3～7）　3はボタン状貼付と撚糸側面圧痕が施される。4は撚糸側面圧痕が施される。円筒上層ａ式に比定される。5・6は羽状縄文結束第1種を施す。7はRL縄文を横位回転するもの。円筒上層ａ～ｄ式に比定される。

縄文時代後期の土器（2・8・9・11・17～19）　2・8・9・11・17～19は縄文時代後期の土器である。2は肉厚で丸みを帯びる口縁部直下から羽状縄文が施される。後期中葉～後葉の土器と思われる。8は波状口縁に沿って幅の狭い縄文帯を施す。十腰内Ⅰ式に比定される。11は口唇部内面と上面をナデて、内面・上面の境界が明確な稜をなしている。上面～外面は丸みを帯びている。体部にはL縄文を縦位回転により押捺している。口唇部のつくりは後期中葉的な要素であるが、縄文の縦位回転は初頭～前葉的な要素である。17～19は結束しない羽状縄文を横位回転により押捺している。後期後葉の土器に比定される。

縄文時代晩期の土器（10）　10は眼鏡状凸帯が施される大洞C2式の浅鉢である。

縄文時代後期～晩期の土器　（12～16・20～27）　12～14・16は比較的粗い縄文が施される。13は口縁部がやや内湾気味で、口唇部内面・上面をナデつけ、境界が明瞭な稜をなし、上面は平坦である。後期後葉的な要素が多い。15は口唇部下数㎜～1㎝を無文とし、以下にLR縄文を施す。20は器厚2～3㎜、外面には細かい縄文が施される。21は内外面とも粗雑なミガキが施される。口唇部内面はやや内傾し、後期後葉的な様相を示す。22・23は幅広の条痕が横位に施される。条痕の原体は放射肋の粗い

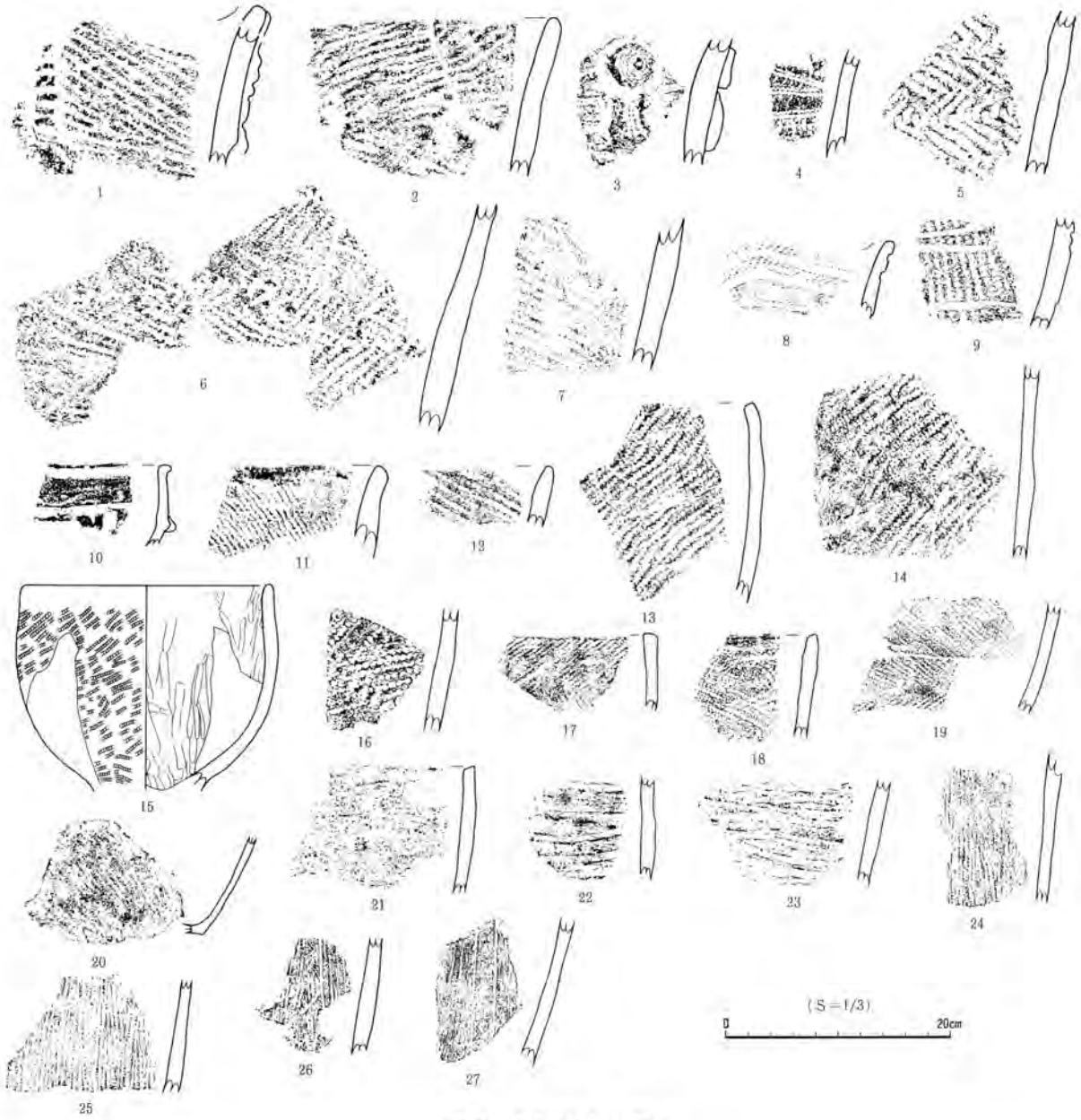


図53　Ａ区出土土器

二枚貝である可能性が高い。24～27は細かい条痕が縦位に施される。原体は木材の木口など、植物質の可能性が考えられる。胎土は晩期的である。　（中村　哲也）

A区出土石器（図54・55）

Ａ区からは定形石器９点、不定形石器67点（二次加工剥片７点、剥片50点、使用痕を有する剥片10点）、礫石器８点（Ⅰｂ４点・Ⅰｃ１点・Ⅱ２点・Ⅲ１点）の計84点が出土している。主に第Ⅱ層から出土している。分布はⅨＫラインからＸＩＮライン間に散在し、特別集中する部分はみられない。

石鏃（図54－１）　第Ⅱ層から１点出土している。有茎で、基部の角が丸みを帯びた石鏃である。表面全面に二次調整が施され、裏面には素材面が残る。製品の長軸と素材剥片主軸との角度は20度ずれ、素材を斜めに用いている。両面とも基部から器面中央にかけてアスファルトが付着している。

石匙（図54－２～６）　縦型２点、横型３点出土している。細長い連続調整で刃部を形成するものが多い。最も厚くなる素材剥片の打点まわりを刃部の端にくようにして石器を作り上げている。周縁

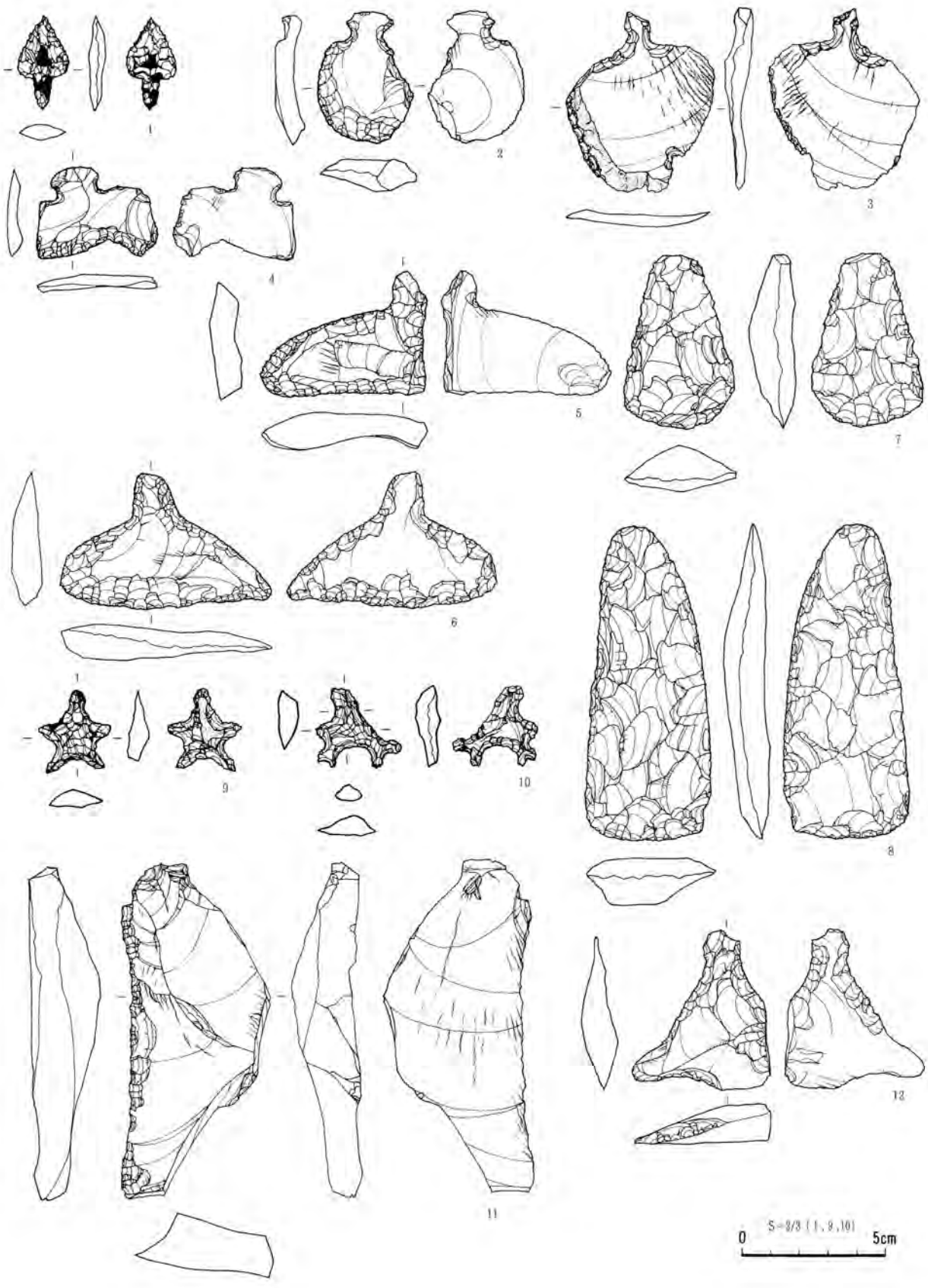
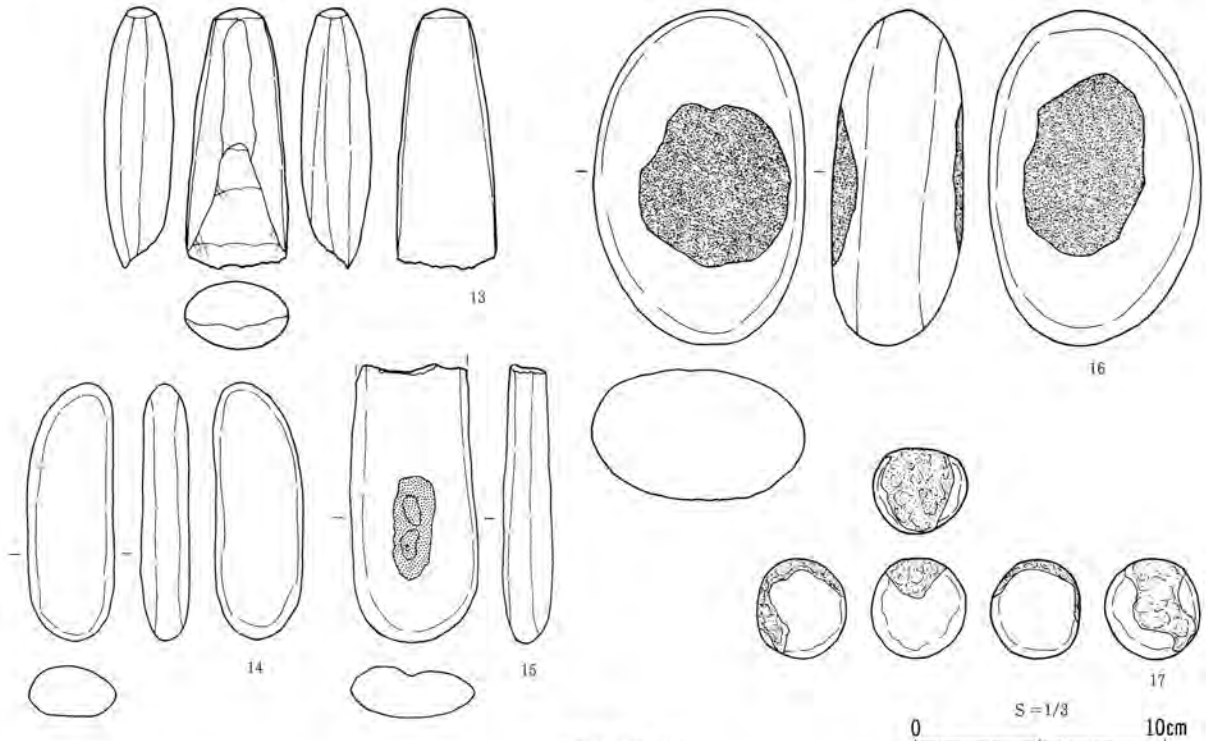


図54　A区出土石器(1)



A区出土石器(2)

B区出土石器分布図

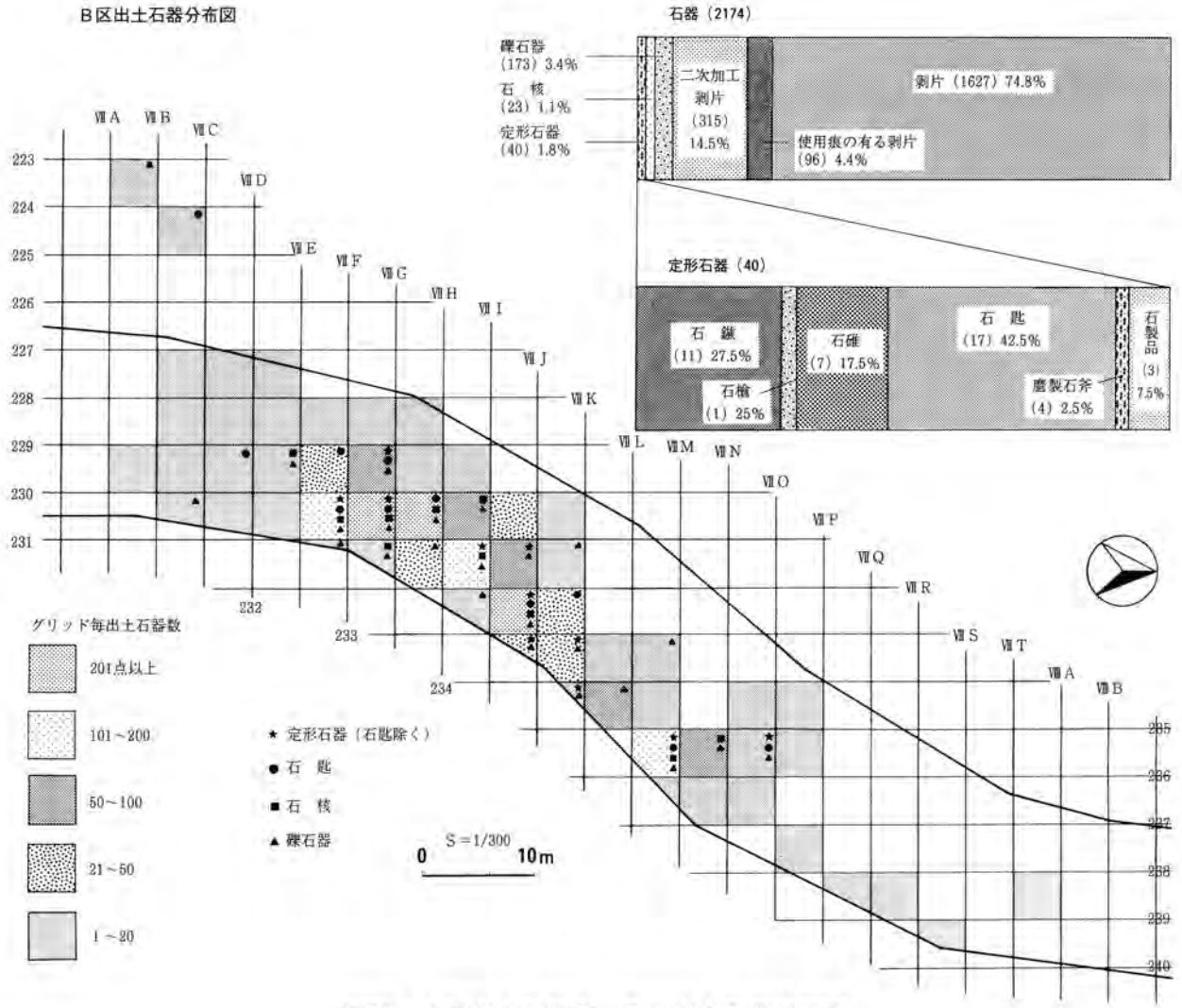


図55　A区出土石器(2)　B区出土石器分布図

加工が中心で、平坦剥離が施されている。刃部調整は片面４点、両面１点である。また、つまみ部分は小形で、成形は簡略的である。調整は背面側と同様、やや軟質の工具による押圧である。

石篦（図54－７・８）　７は刃部両面に急角度剥が施され、器面中央部から刃部にかけて厚手となる石篦である。８は厚さ８mmと大きさに対し薄手で、刃部の調整角度も大きく平坦剥離が行われてる。

磨製石斧（図55－13）　縦方向の研磨を主体とし、表面中央が丁寧に研磨された片刃石斧である。

二次加工剥片（図54－９～12）

ａ類（９・10・12）　９・10は多角形の異形石器に類するものである。12は素材剥片の用い方と調整方法から石匙の未製品と考えられる。

ｂ類（11）　縦長剥片の片側縁を刃部とし、連続した平坦剥離を行ったものである。本遺跡の中で最も大型の削器・掻器類である。

この他ｃ類２点、ｄ類１点が出土している。

使用痕を有する剥片　10点出土している。大きさ５cm以上の幅広の剥片の背面に連続した微細な剥離痕が残るものが多い。

剥片　ｅ類３点、ｆ類41点、ｇ類６点が出土している。大きさ３～７cmの剥片が多く、２cm以下の剥片はみられない。ｇ類にはチャート、瑪瑙（めのう）が含まれている。

敲磨器（図55－14～17）

Ⅰｂ類　研磨により棒状に加工され、断面が円形や角形となるもので、５点出土している（14）。

Ⅱ類　敲打痕があるものが２点出土している（16・17）。円礫を素材としている。

Ⅲ類　15は薄手の扁平な長円礫を素材とし、片面中央にの浅い凹みがみられる。

Ｂ区出土土器（図56～58、図版17・18）

Ｂ区から出土した土器は、整理箱15箱分、重量にして約74.5kgである（試掘調査分除く）。土器は水に浸かった状態で脆弱であったため、出土時は復元可能と思われた個体でも、取り上げ時に崩れ、復元が困難なものが多かった。その他小片はほとんど復元できなかった。

縄文時代前期の土器（1）　1は口縁部に撚糸側面圧痕を施し、胴部に単軸絡状体1類を施す。磨滅が著しい。円筒下層ｄ式である。

縄文時代後期中葉の土器（2）　2は大型の波状口縁部に刻みを施した隆帯を貼り付けている。口唇部内面が肥厚する。後期中葉に比定されよう。

縄文時代後期後葉の土器（3～50）

深鉢・鉢　3～8・15は精製の深鉢・鉢である。3～5は左下がりの帯状の入り組み文が施される。入り組み文の屈曲点に瘤が貼付される。入組文の一単位内にスリット状に沈線を施し、単位を上下に二分割するものが認められる。6～8は二条一組の平行沈線を重畳させ沈線間に瘤を貼付する。瘤は数cm間隔で貼り付けられる。15は文様帯の下端に沈線を巡らせる。10～13・14・16～18は粗製の深鉢・鉢である。9～13はいずれも結束しない羽状縄文を施す。9は口唇部に二個一対の小突起を施す。突起は口唇内面にも盛り上がっている。

壺・注口　19～43は有文の壺・注口である。19・38・39は連続した眼鏡状のモチーフを磨消縄文に

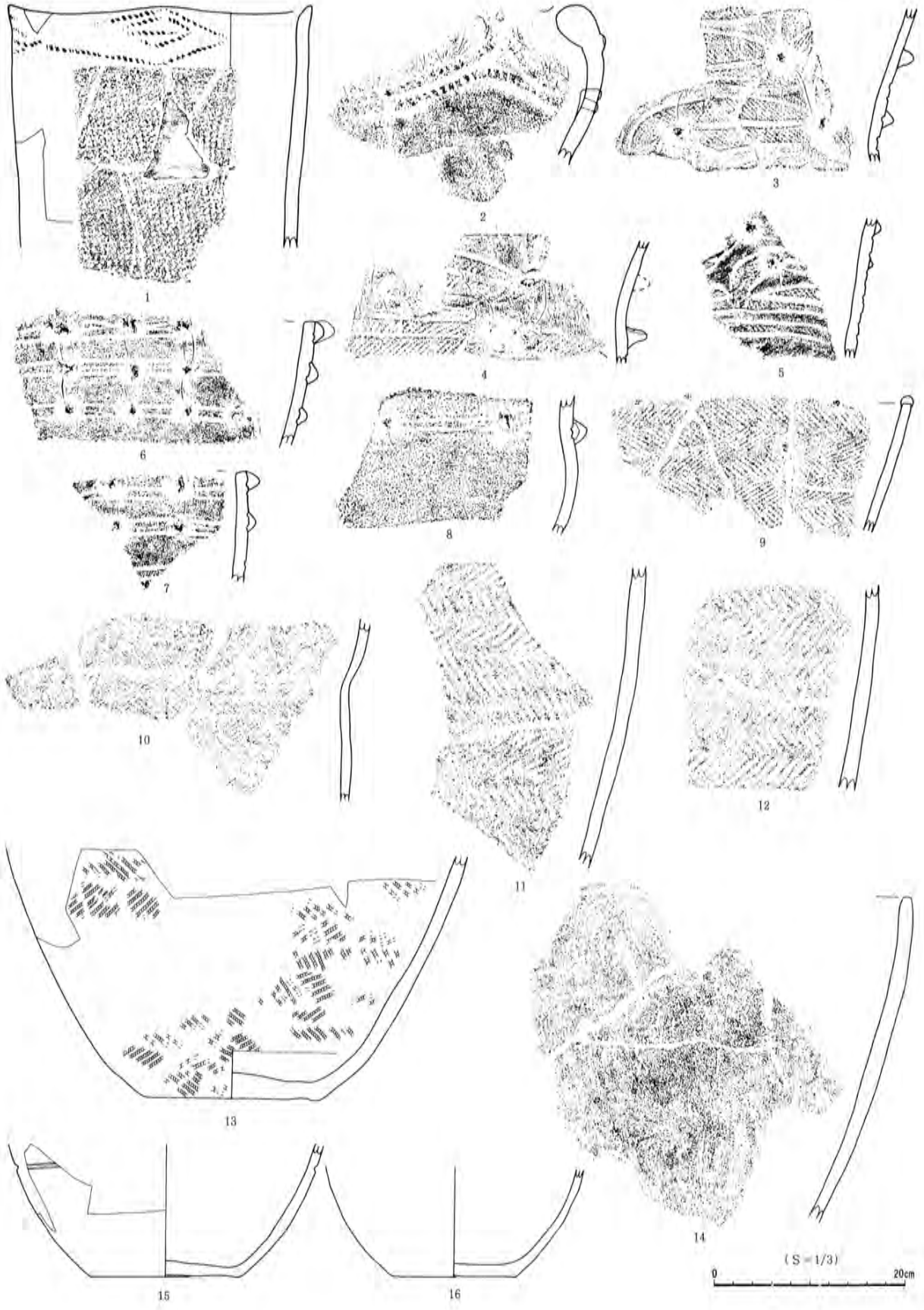


図56　Ｂ区出土土器(1)

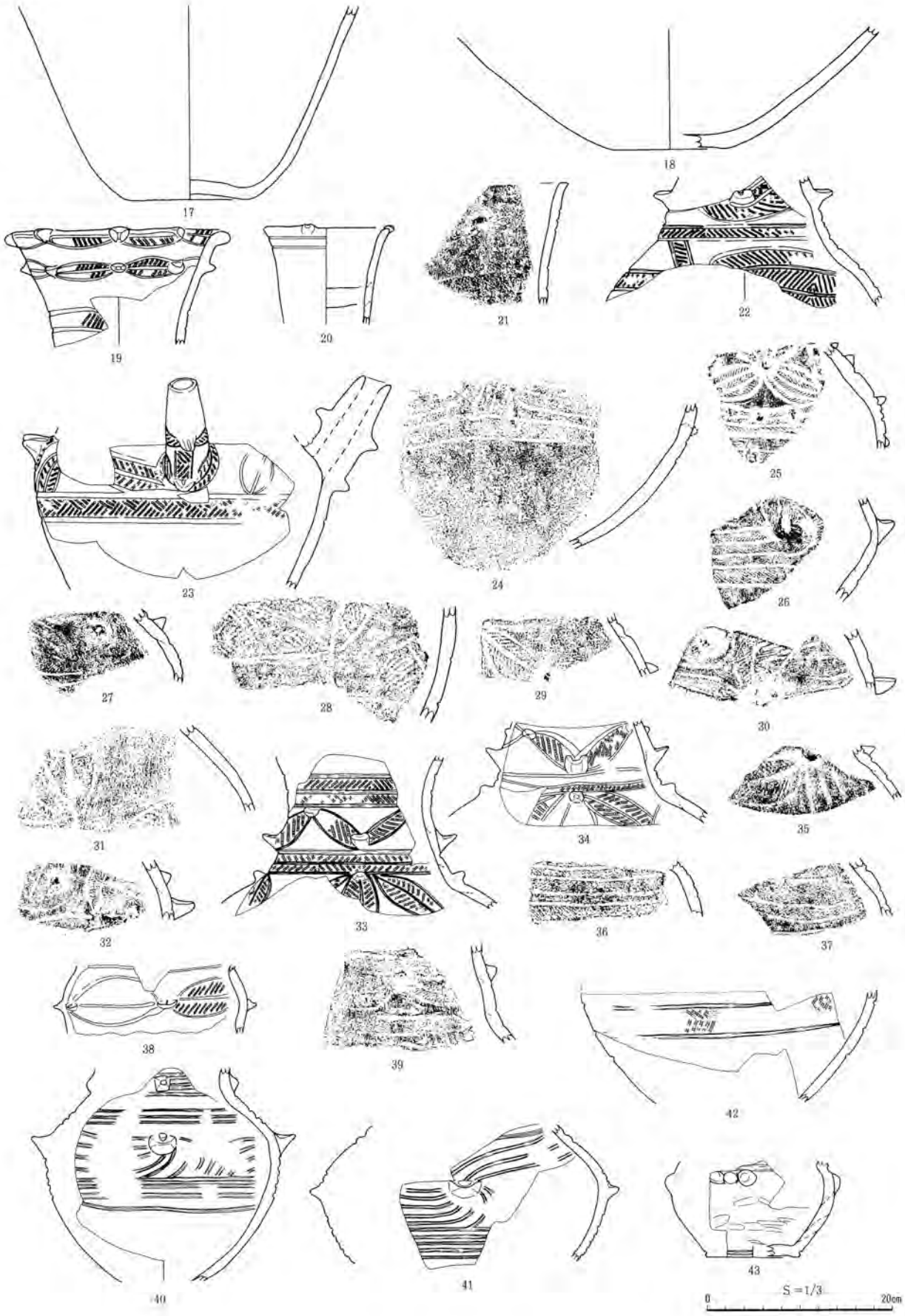

17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
S＝1/3
0
20cm

図57　B区出土土器(2)

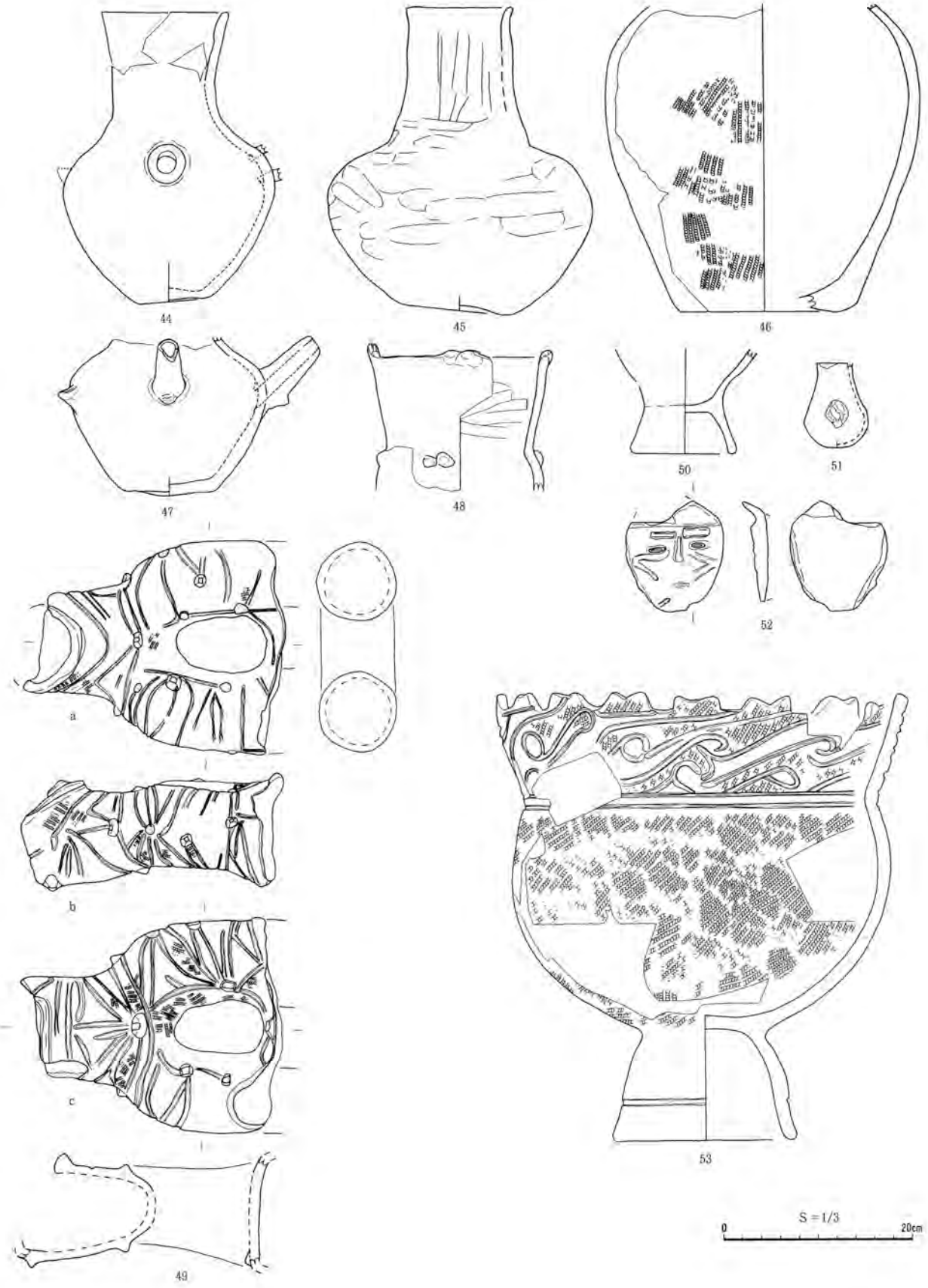


図58　Ｂ区出土土器(3)・土製品

より描き、その接点に瘤を貼付している。ただし、19・38は上下に向き合う弧線の中には一条の沈線が施されるだけで、二条の沈線により空白部を描出するものと異なる。22～24・26～28・31は磨り消し縄文による入組文を描出している。入組文の屈曲点には瘤の貼付されるもの（22・26・27・32）とされないもの（28・31）がある。貼付されるものは入り組み文の一単位の帯の中にスリット状に沈線が施され、一単位の帯が上下2帯で一対の効果を与えている。屈曲点に瘤の見られないものはスリット状の沈線が認められない。

25～29・30・33～35は磨消縄文により木葉状の文様を描くものである。胴部の一単位の帯中にスリット状の沈線が施される。頸部文様ははスリット状の沈線を施さないようである（33・34）。瘤は上面には刻みが施される。

40・41は複数条の沈線により入組文を描くものである。沈線の起点には瘤が付される。

44・45・47・48は無文の壺・注口である。外面はミガキが施されている。

49は異形の注口土器と思われる。体部が二股に分岐し、管状になっている。下半は欠失している。磨り消し縄文による入組文が施され、結節点には瘤が貼付される。口縁部は一部を欠失するが、実測図aを上面とするなら、上面に向かって開口する。下面の口縁部下には一条の隆起帯が施されるが、全周しないようである。これまで知られている類例は、実測図左手を上として、管状部の下に球形の注口体部が付くが、上面開口部のあり方が本例とは異なっている。本例の開口部にはあるいは52のような人面が付されていた可能性も考えられる。

縄文時代後期の小型土器・土製品（50～52）　50は小型の台付き土器である。器壁は全体に薄いが、均一ではない。51はミニチュアの壺形である。52は人面土製品である。土偶頭部としては極端に薄く、何らかに貼り付けられた人面であったと考えたい。実測図裏面側縁部付近に若干の凹みが認められ、この凹み部分が接合部分であった可能性が考えられるが、磨滅のため剥離痕の認定は難しい。

縄文時代晩期の土器（53）　53は口縁部に三叉状の入組文を施す台付鉢である。口唇部には比較的大振りなB字状突起が付される。（中村　哲也）

B区出土石器（図59～63）

定形石器40点、石核23点、礫石器73点、不定形石器2038点の総数2174点が出土している。全体の72％は第Ⅲ層から出土している。その中でも、第Ⅲe層からの出土割合が高い。

石鏃（図59－1～12）

有茎鏃9点、無茎鏃1点、棒状2点の計12点が出土している。有茎のものでは茎部と基部の境が明瞭ではない菱形のものが主体である。片面に全面調整を行い、裏面には一次剥離面を残して周縁調整を行うのが特徴である。素材の用い方は斜め、縦方向、横方向と多様で一定してない。9は茎部両面にアスファルトが付着している。

石槍（図59－14）

素材の周縁を先端の尖ったやや軟質のハンマーでの押圧によって整えた石槍で、剥離角度は素材形状に影響されて多様なものの、正面の先端から中位にかけては平坦な剥離で覆われている。

石錐（図59－13・15～20）

7点出土している。縦長剥片を素材とし、剥片の一端を加工し錐部を作出したものである。刃部は

素材剥片の長軸上末端にほぼ位置している。17は細長い剥片の末端部両側に大きな急角度剥離を入れ錐部を作り出している。つまみとなる部分は急斜度の片面調整で成形し、右縁は特に調整後に縁辺を鈍らせている。一方、左縁は大きな急角度剥離を行い、上部には大きな浅いノッチが入る。15は逆三角形の素材剥片の末端両側に急角度の調整を加えて錐部としており、裏面に現れた微細な平坦剥離や先端に生じた大きなねじれ剥離によって石錐に区分したものである。16は破損した縦形石匙からの転用品で、先端部に15と同様の破損が認められる他、先端から下位１／３までにかけての欠損面と腹面とがなす稜に顕著な磨耗が観察できる。

石匙（図59－21～図60－37）

縦型が12点、横型が５点である。Ａ区同様、素材剥片の用い方が特徴的で、横型石匙によく現れている。打面部分が刃部の端にくるようにして石器を作り上げているため（27・33～35）、刃部が突然分厚くなったり、折損品のような形状を呈するものがある（33・34）。刃部調整は両面に施される例が多く、形態を問わず細長い連続調整を行うものが多い。腹面には奥にまで達する平坦剥離が施されている（24・34～36）。調整はやや軟質の工具による押圧である。全体的に石匙の加工は周縁部が中心である。また、つまみ部分の成形も入念なものは少なく、作り出しも簡略的で、29のような片面調整のものや、26の片面のように１枚の浅いノッチで済ませているものもある。32は器面の摩耗が激しく、使用による痕跡と思われる。

磨製石斧（図61－52）

１点出土している。刃部両面に斜方向の擦痕が明確に残る両刃石斧で、両面中央部は摩耗している。

石製品（図61－51・53）

51は石斧と同様の形状と作りをし、丁寧に研磨されたものである。刃部には使用痕跡は無く、くびれ部周辺には横方向の擦痕があることから紐等が巻き付けられた可能性がある。非実用的道具と思われる。53は端部に敲打加工を施した棒状の石製品である。このほか、欠損品であるが、凝灰岩製の直径1.2cmの棒状磨製石製品が第Ⅲ層から１点出土している。

不定形石器

二次加工剥片（図60・61）

ａ類（38～41）　４点出土している。石鏃の未製品（40）、欠損して用途不明のもの（38、39）、両面の片側縁に連続した平行剥離を施し刃部を形成したもの(41)が出土している。

ｂ類（43～46）　削器・掻器類に相当するものが42点で出土している。総じて軟質ハンマーによる片面押圧で刃部が作られ、硬質ハンマーの直接打撃と認定できるのは、46の左縁辺への急角度調整のみである。また43を除けば、石器の外形全体を整えようとする意図はうかがえない。42、44、45、の刃部は明確なスクレイパーエッジとなり、43はそれらよりも調整角度が鋭角である。46は腹面にやや急角度となる連続した微細調整が施されている。

ｃ・ｄ類　ｃ類が81点、ｄ類が186点出土している。石材は珪質頁岩の他にチャートが３割を占める。チャート製のものは３cm以下の礫面を有する剥片（ｇ類）を素材として縁辺を加工したものが多い。この他、厚みのある剥片の縁辺に細部調整を施したものがみられる。

使用痕の有る剥片

96点出土している。微細剥離痕が背面側に残るものが大半で、腹側に残るものが19点、両面のものが

14点である。素材剥片は薄手のものや肉厚のもの、大きさは2cm～10cmのものと多様である。

剥片

e類　素材となりうる剥片は少なく14点を数えるのみで、、石材は珪質頁岩に限定される。

f類　1474点出土し、その石材は珪質頁岩・チャート・玉髄質珪質頁岩の順で多い。打面形状は平坦打面が大半で、切子打面は2割程度である。黒色珪質頁岩については小打面の割合が他の石材より大きい。また、珪質頁岩は1.5cm以下の小剥片が多くみられる。

g類　137点出土している。チャート製の5cm以下の剥片が大半を占め、礫面を打面としたものや背面に礫面を残したものが多い。この類に珪質頁岩はとても少ない。

石核（図61－47～50）

第Ⅲ層を中心に25個の石核が出土している。50は打面を固定して打面調整が行われたものである。47、49は打面と作業面を頻繁に転位したもので、双方とも剥片生産は終段階に入り残核とみなされる。いずれの石核でも、剥片生産は打面に対して概ね垂直に近い加撃によってなされている。48は原石で、打ち割りが一カ所認められる。この他に、3～5cmの残核が6点、礫面を残す10cm程のチャート製石核が1点出土している。石材は珪質頁岩が主体で、頁岩2点、チャート2点、鉄石英1点である。

礫石器

敲磨器（図61～63）

Ⅰa類（54～56）　スリ加工により器面に平坦面を形成したもので、9点出土している。

Ⅰb類（57）　棒状の礫を素材とし、全面にすり痕が残るものが15点出土した。厚さ3～5cmで、断面形は円形・楕円形が多く、角形が4点である。中には石棒の一部もしくは未製品と思われるものがある。石材は流紋岩6点、石英安山岩5点、安山岩3点、凝灰岩1点が使用されている。

Ⅰc類（58）　円礫または角礫の形状をかえず、一部にすり痕がみられるものが18点出土した。58のような小形の円礫を磨いたものが4点出土している。

Ⅱ類（59～61）　敲打痕のあるものが9点出土した。全体を敲打によって棒状に成形したものが2点出土し（59）、円礫の側面や端部に敲打を行ったものが大半を占める（60・61）。59は形状から石棒の未製品の可能性がある。棒状に加工したものには流紋岩が、その他には安山岩を使用している。

Ⅲ類（62）　器面中央に深さ5mm以下の浅い凹み痕を残すものが9点出土している。長さ13cm以下で厚さ5～7cmの厚い円礫と厚さ5cm以下の扁平礫の2つを素材としている。両面を使用し、一面に複数の痕跡を残すものが特徴である。石材は62が凝灰岩を、その他は安山岩を利用している。

Ⅳ類（63～65）　凹み痕と敲打・すり痕が残るものと、敲打痕とすり痕のみのものにわけられる。特に凹み痕を有するものは他の使用痕跡の上に凹みがみられることから、他の目的に使用したものを凹み石に転用した可能性がある。

砥石（71）

扁平礫の両面に長さ1.5～2cm、幅4mmの溝状の痕跡が数カ所みられ、その中に擦痕がみられる。

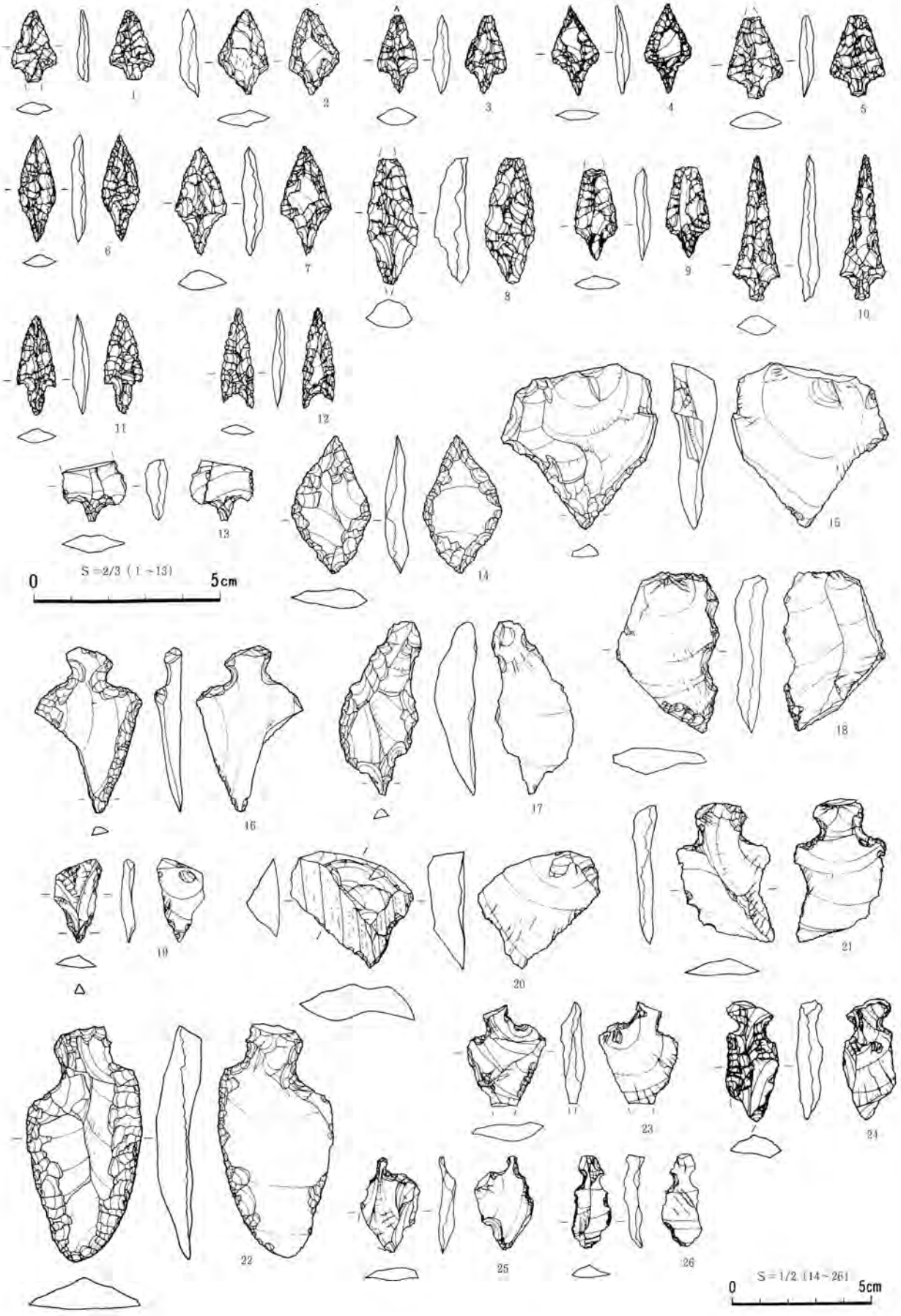

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
S＝2/3（1～13）
0
5cm
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
S＝1/2（14～26）
0
5cm

図59　B区出土石器(1)

図60　B区出土石器(2)

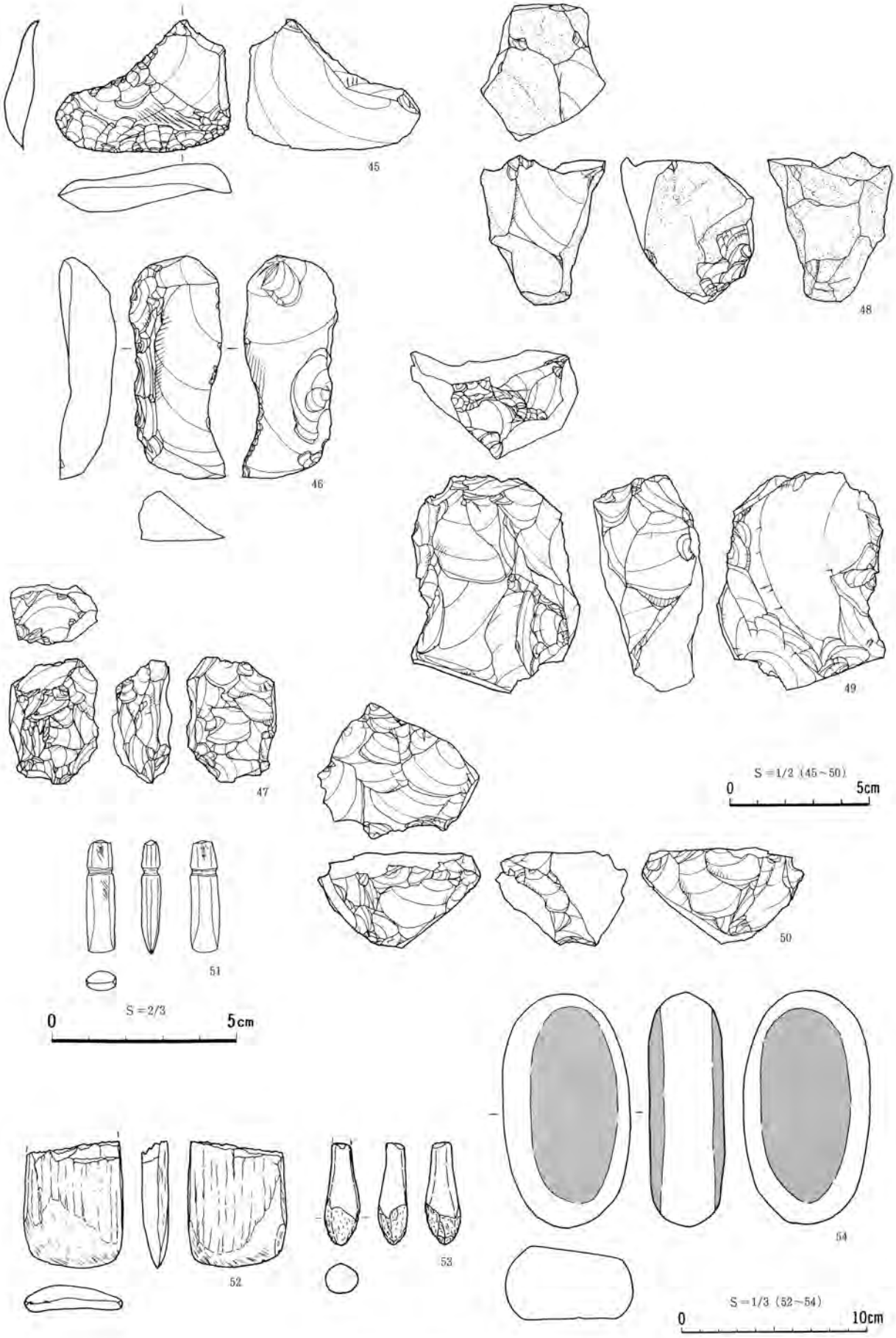

45
48
46
49
47
S＝1/2（45～50）
0
5cm
50
51
S＝2/3
0
5cm
52
53
54
S＝1/3（52～54）
0
10cm

図61　B区出土石器(3)

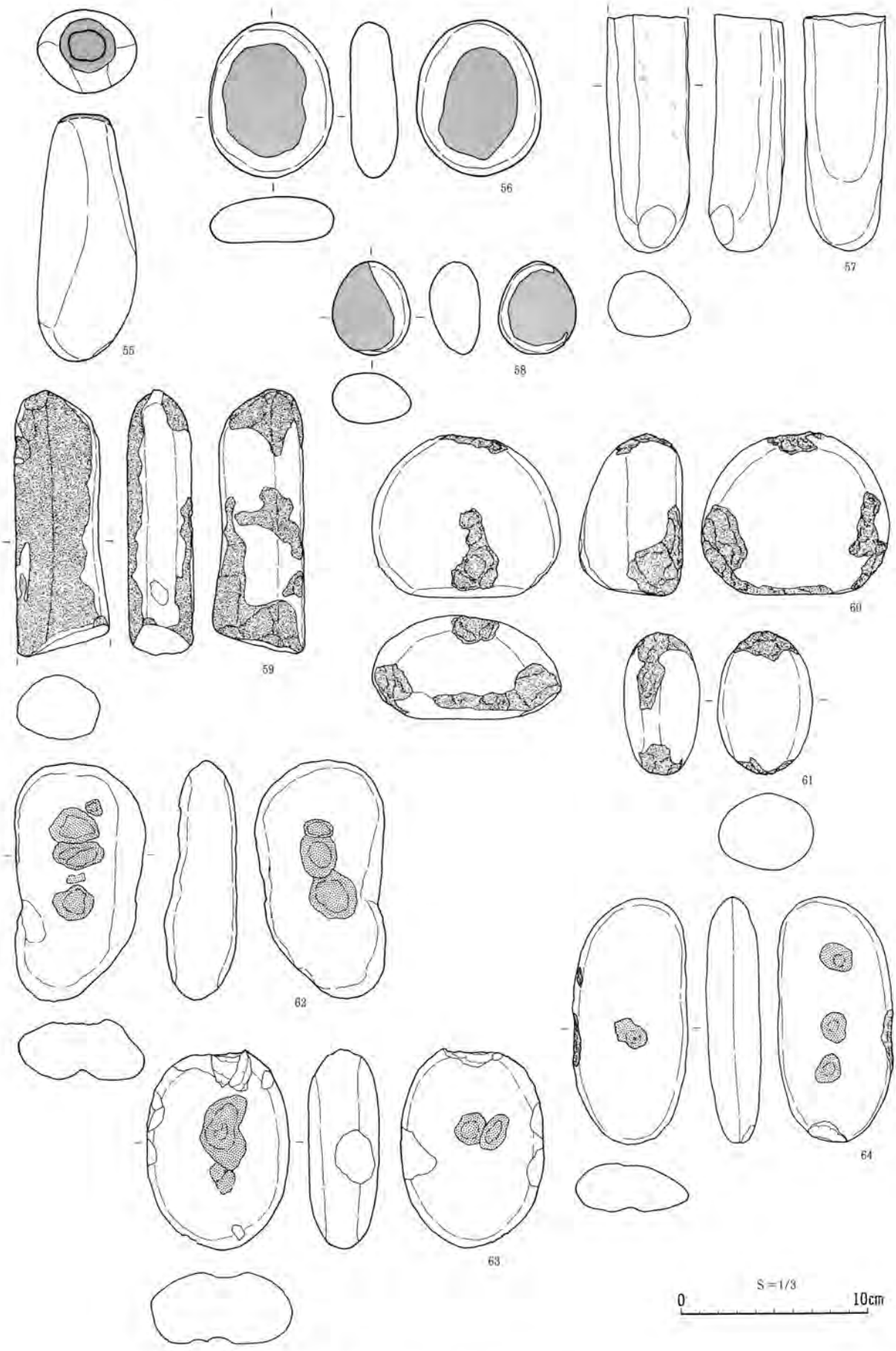


図62　B区出土石器(4)

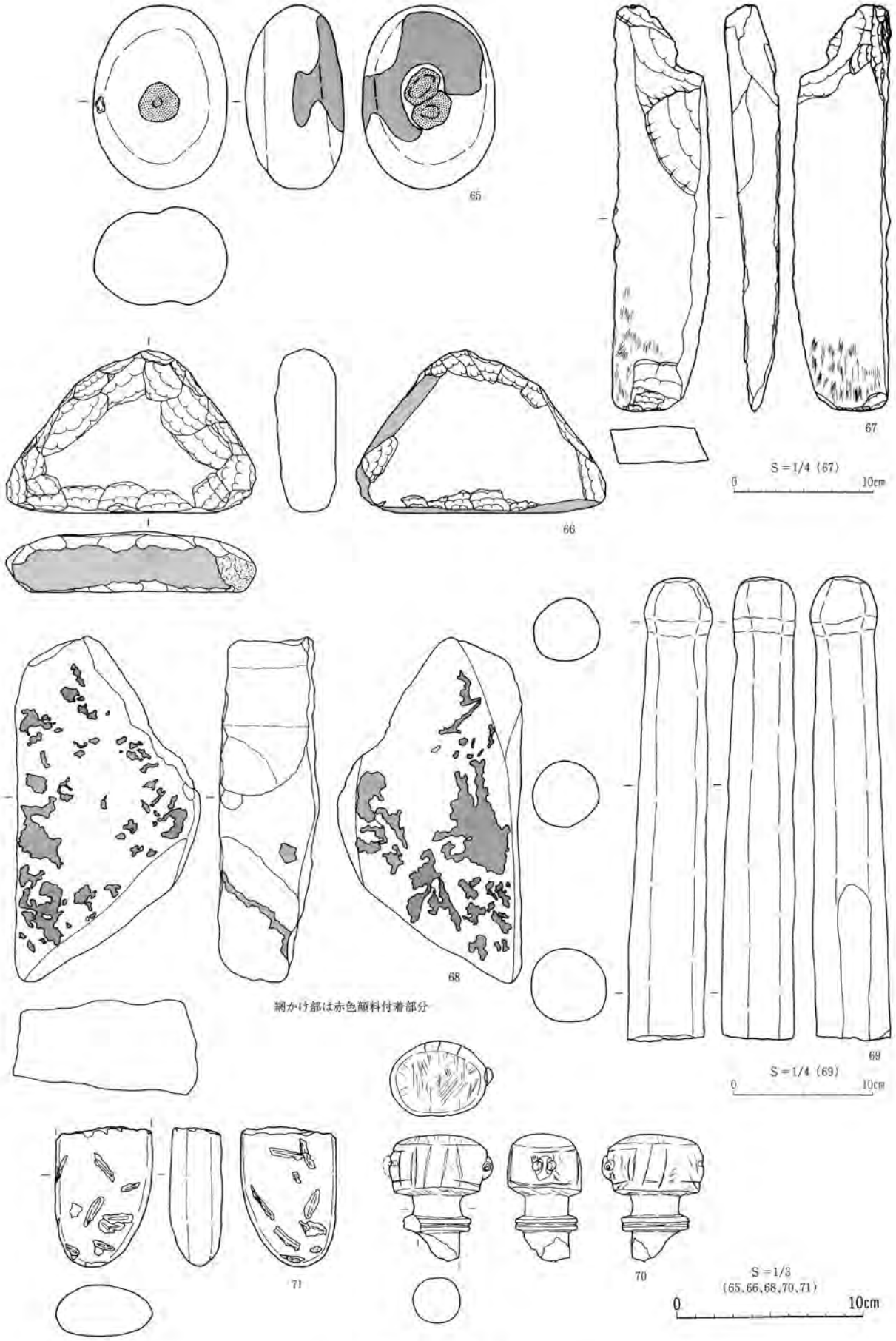

65
66
67
S＝1/4（67）
0　10cm
網かけ部は赤色顔料付着部分
68
69
S＝1/4（69）
0　10cm
71
70
S＝1/3
（65,66,68,70,71）
0　10cm

図63　B区出土石器(5)

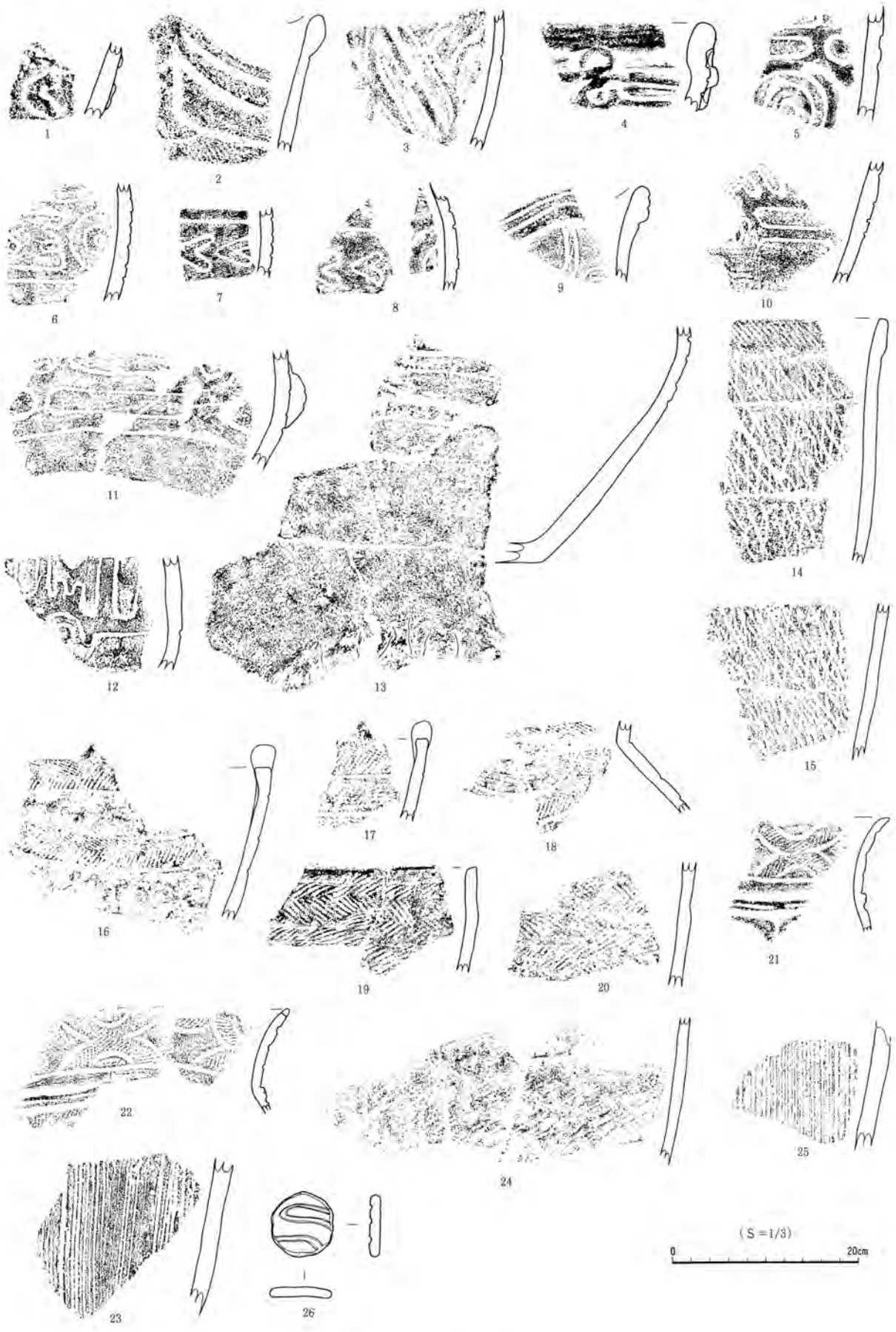

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
(S=1/3)
0
20cm

図64　C区出土土器

打製石器（67）

節理面にそって板状剥離したものを素材とし、硬質のハンマーによる直接打撃によって端部を両面加工している。片側端部両面には擦痕が残る。

石冠（66）

扁平な礫を素材とし、両面を打撃加工して三角形に成形している。縁辺には使用による磨り面と敲打痕が残る。

石棒（69・70）

69は頭部を円形に成形し、全面に磨り加工が施されている単頭石棒である。70は石棒の把手付き頭部である。把手を頭部に張り付けた後に把手の両側から穿孔し、かつ把手の上下に各１本の擦痕が施されている。把手は片側が欠損しているが、把手の穿孔の痕跡と把手の上に擦痕が施されていることから位置が推定できた。頭部には３・４本の擦痕が縦に施されている。頭部上下面には細かい擦痕が顕著である。上面の擦痕は多方向から付けられているが、下面は左上がりの斜方向と一定である。断面形状は胴部が円形で、頭部は楕円形である。

石皿・台石（68）

６点出土している。68は器面全体に赤色顔料が付着したものである。厚さ５～10cmの石英安山岩または安山岩を使用している。片面に弱いすり痕が残っているものがほとんどである。

（杉野森　淳子）

Ｃ区出土土器（図64）

Ｃ区から出土した土器は、整理箱９箱分、重量にして約42.7kgである（試掘調査分除く）。礫混じりの黒色土から出土し、細片が多かった。

縄文時代後期初頭～前葉の土器（1～15）　１は縦方向に曲線的な隆帯の施される口縁部である。後期初頭と思われる。2～13は半隆帯や沈線により文様を施す一群で、十腰内Ⅰ式に比定される。14・15は単軸絡状体5類を施すもので、十腰内Ⅰ式に伴う粗製土器と考えられる。14は折返し口縁に縄文を施すものである。

縄文時代後期後葉の土器（16～21）　16は口縁部文様帯に帯状の縄文帯が施される。縄文はRL・LR二種の原体を用いた羽状縄文である。縄文帯の施文位置から襷掛状文は形成せず、帯状の入組文様になると思われる。17は同一個体の可能性がある。19・20は羽状縄文を施す粗製深鉢である。口縁部の上面を軽くナデ付け面取りしている。

縄文時代晩期の土器（21・22）　21・22は同一個体と思われる。大洞Ｂ２式に比定される。

縄文時代後期～晩期の粗製土器（23～25）　24はLR縄文を施文する。器壁は薄く４～5㎜で、均一である。23・25は細かな条痕を縦方向に施すものである。

土製品　26は円盤状土製品である。土器片を再利用したもので、周囲は擦りによって整形した可能性が考えられるが、遺存状態が良好でないため不明である。胎土や文様から十腰内Ⅰ式に伴う可能性が考えられる。

（中村　哲也）

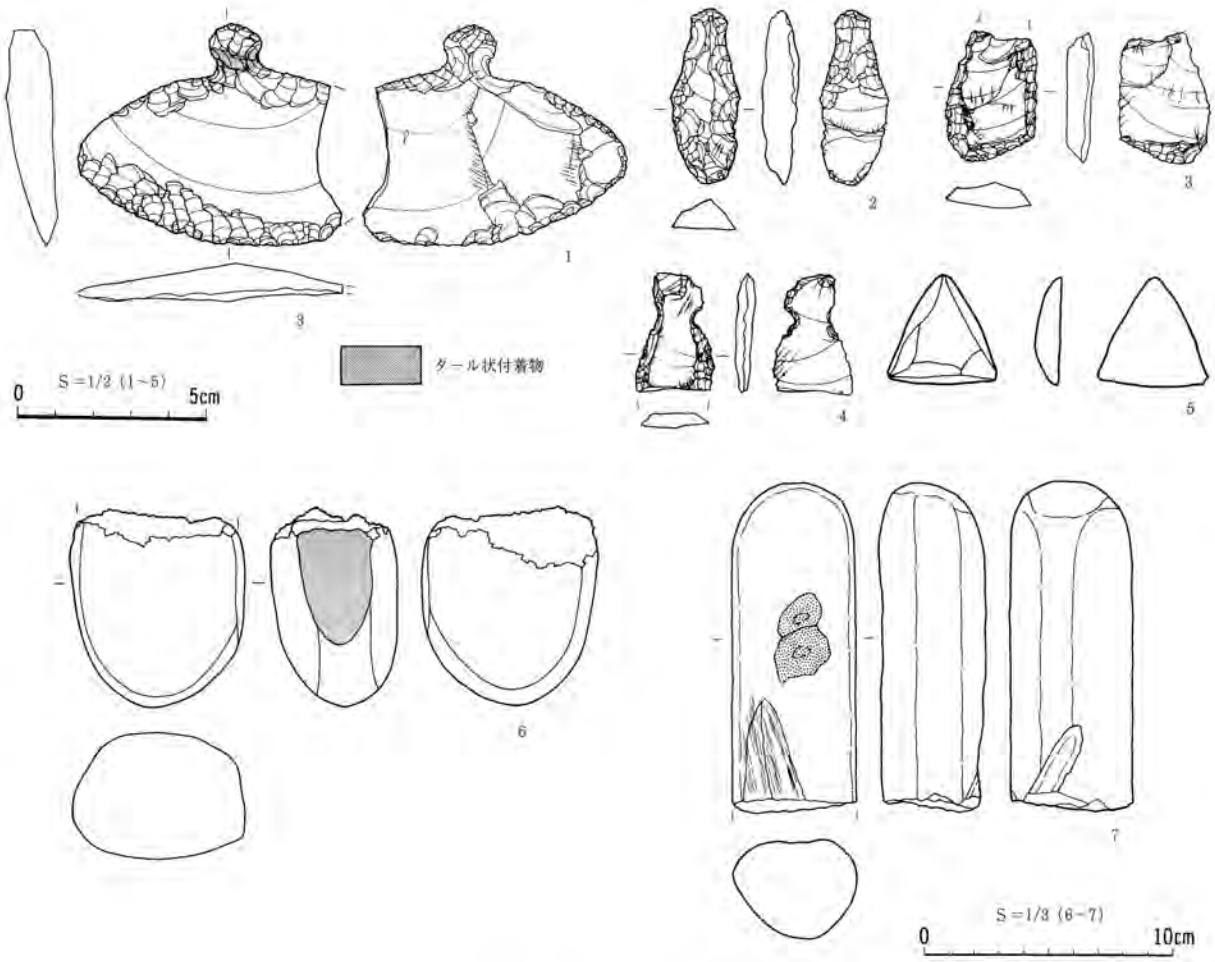


図65　C区出土石器

C区出土石器（図65）

C区から定形石器5点、不定形石器71点、敲磨器4点の計80点が出土している。グリットライン192～210間の主に第Ⅲ層から出土している。定形石器は197～201ラインの緩斜面に集中する。

石匙（1～4）　横型1点、縦型3点である。最も厚くなる素材剥片の打点まわりをつまみ部として作出している。表面は周縁加工が中心で、裏面は刃部とつまみ部に加工を行う程度である。刃部の調整は両面に施され、細長い連続した平坦剥離が施されている。2のような片面全面を覆う調整は稀である。調整はやや軟質の工具による押圧である。1では表面つまみ部にタール状の付着が見られる。

石製品（5）　断面が蒲鉾状となる三角形の石製品である。全面に磨き加工が施されている。

二次加工剥片　c類2点、d類4点が出土している。大きさ3cmのチャートと6cmの珪質頁岩の縁辺に片面調整を施したものである。

使用痕を有する剥片　5点出土している。珪質頁岩の背面側に微細剥離痕が数カ所みられるものと、安山岩の縦長剥片の縁辺に連続した微細剥離痕が残るものもある。

剥片　ｅ類１点、ｆ類56点、ｇ類３点の計60点出土している。素材となりうる剥片は１点のみで、1.5cm以下の小剥片が３点出土している。小剥片とｇ類の石材はチャートが多い。

敲磨器（６・７）　表裏面中央を丁寧に磨き、片側面に磨り面がみられるⅠａ類に属するもの（６）、直径４cmの棒状に磨り加工したもの２点（Ⅰｂ類）、中央に浅い凹みがあり、一部に砥石として使われたと思われる擦痕が顕著な敲磨器Ⅳ類が１点（７）出土している。　（杉野森　淳子）

第4章　まとめ

第1節　B区出土土器について

B区出土土器の大半は縄文時代後期後葉の比較的まとまった時期の土器と考えられる。その文様モチーフや施文手法から編年的位置付けを考えてみたい。

まず、その特徴をあげてみよう。①文様モチーフは一定の幅を持った入組文様、あるいは木葉文であるが、その幅は極端に太いものではない。②文様モチーフの1単位内にスリット状の沈線が施されるものが多い。③文様モチーフの屈曲点に瘤が貼り付けられる。④口縁部には瘤を貼り付ける縄文帯を数条巡らす壺・注口、二条の沈線間に瘤を貼り付ける深鉢がある。⑤口縁部やその他の場所に刻みが施されるものは図56－2を除いて認められない。⑥瘤は大小二つある。大きいものは三角錐を縦に二等分して切断面を上に向け、底面を器面に貼り付けたような形状を呈する。上面には縦方向の刻みが施される。

以下に十腰内遺跡の発掘調査報告書（今井・磯崎　1968：以下「十腰内報文」）に示された土器群との異同を示してみたい。②はPL66－22体部の文様に類例がある。③は十腰内報文Fig127－23に認められる（PL75－142・146もその類例か？）。⑤は、十腰内報文PL－74に示されたⅣ群土器には口縁部や胴部に二条の刻み目帯が施される例が多い。一方、Ⅴ群には刻み目を有するものはない。⑥のうち、大きな瘤は十腰内報文PL75－145に認められる。以上の点からB区出土土器は十腰内Ⅴ群に相当する要素をもっている。①については、B区出土土器が小片であることからモチーフ全体を復元するのが困難であること、また、十腰内報文においてⅤ群のモチーフを判断できる資料の少ないことから、十腰内Ⅴ群と類似するものと判断してよいかどうかわからない。Ⅳ群に示されたモチーフに類するものもある（図57－28・31）が、全容は不明である。

十腰内遺跡において示された土器群と対比する限り、B区出土土器はⅣ群を一部含む可能性があるが、Ⅴ群を主体とするものと判断される。

該期の土器は十腰内報文において細分の可能性が示唆されており、これをうけて幾つかの細分案が提出されている（岡田　1986、関根　1993、鈴木　1997・1998）。しかし、同一の資料に対する評価が異なるなど、なお問題も数多い。ここで詳細な検討を行う余裕はないが、いずれの編年案においてもより新しい段階で入組文モチーフの縄文帯の幅が細くなる傾向はよみとることができる。

当地域において瘤付土器の比較的良好な資料が出土している蛍沢遺跡（青森市蛍沢遺跡調査団編　1979）の土器との比較を試みるなら、類似モチーフが認められる（たとえば第122図－2の胴部文様上半のスリット状沈線の施された木葉状の文様）一方、B区出土土器に比べて入組文モチーフの幅が細くなり、流動的になっているものがある（第119図－18、129図－1・4など）。B区出土土器が小片であるため一概にはいえないが、上述した編年案から読みとれる一般的な傾向に照らせば蛍沢遺跡出土土器の方が新しい可能性が指摘できる。スリット状の沈線については他遺跡での類例を収集していない段階での評価は難しいものの、上述のような傾向を認めることが可能であるなら、縄文帯の幅が狭くなる端緒としてとらえられる可能性も考えられる。瘤の上面を刻む手法は岩手県北部の遺跡や青森県南部地方の遺跡には認められない。青森県西半部の地域性を示すものと考えられる。

（中村　哲也）

第2節　B区出土石器について

B区の石器はグリッドラインXⅡE～XⅡN間の東側の緩斜面を中心に分布している。剥片f類・g類が集中し、特に1cm前後の小剥片および微細剥片が目立つ。さらに、定形石器をはじめとし、石核・残核や礫石器も谷に集中している。このことと、土器の出土状態からB区では遺跡内で石器を製作し、B区の谷に廃棄したことが考えられる。石器製作が行われていた可能性が窺える。石器製作工程では以下のことが想定される。剥片g類にはチャートが大半を占めることと礫面を残した製品と石核が出土していることから素材となる原石を持ち込み、石核整形から行ったものと思われる。また、珪質頁岩は剥片g類が少ない点や小形の石核が多い点などから石核を持ち込んでB区で剥片剥離作業を行ったと考えられる。

石器の特徴としては石匙の製作方法が挙げられる。素材剥片の用い方が特殊で、特に横型石匙にその特徴が現れている。最も厚くなる素材剥片の打点まわりを利用してつまみ部を作出するのではなく、その部分が刃部の端にくるようにして石器を作り上げている点である。そのためこれらは、刃部が突然分厚くなったり、折損品のような不自然な外観を呈している。また、形態にかかわらず細長い連続調整で刃部を形成するものが多くみられる。全体的に石匙の加工は周縁部が中心で、片面全面を覆うような調整は見られない。刃部調整は両面に施される例も多く、腹面調整は奥にまで達する平坦剥離が大半である。調整は背面側と同様、やや軟質の工具による押圧である。つまみ部成形は簡略的である。また、中には器面の磨耗が大きいものや石匙を錐に再利用したものがあることから個体への執着の強い例も認められ、石匙以外の器種とは異なった様相を示していることが特徴である。

A区出土の石篦の成形方法は山下遺跡と類似し、形状により区別できる。棒状の石篦は押圧や間接打撃が駆使されているのに対し、撥形は直接打撃による平坦剥離の占める割合が大きい。刃部側面は、撥形が片刃や偏刃に傾き、棒状は両刃になる。刃部形状は棒状のものが丸刃、撥形は直刃になる。

石棒は2点出土している。1点は器面成形及び頭部成形が簡素な、縄文時代後期のものと考えられる石棒である（図63－69）。一方は頭部のみ出土し、装飾の施された石棒である。これまで、頭部に線刻し、強いくびれを有する石棒は東北・北海道に分布している。その中で頭部に把手を有するものは岩手県で出土している（上鷹生遺跡・叭屋敷Ⅰa遺跡）。把手付頭部の石棒は県内では初めての例である。把手の存在から石棒は紐を通して吊り下げておかれていたことも想定できる。今回出土した把手付きの石棒は頭部形状や断面形から、後期末の両頭石棒の可能性がある。

石器の時期については機種組成・石器の形態から縄文前期と後期に相当するものと思われる。

（杉野森　淳子）

遺構内土器

52－1	SK5	8層	RL・LR横位			P－7
52－2	SK5	2層	LR横位			P－9

A区土器

図版	出土位置	出土層位	外面調整等	内面調整等	胎土	備考
53－1	XA－209	Ⅱa層	隆帯 撚糸側面圧痕（L）		繊維微量	
53－2	XD－202	Ⅱa層	LR・RL羽状		砂礫含 骨針無	
53－3	XN－217	Ⅱa層	ボタン状貼付 橋状把手 撚糸側面圧痕（R）	ミガキ	砂礫多 骨針無	
53－4	XN－217	Ⅱa層	撚糸側面圧痕	ミガキ	砂礫含	
53－5	XⅠ－229	Ⅱa層	羽状結束1種（RL・LR）	ミガキ	砂礫含 骨針無	
53－6	XL－214	Ⅱa層	羽状結束1種（RL・LR）		砂礫含 骨針無	
53－7	XD－212	Ⅱa層	LR縦位		砂礫含 骨針無	
53－8	XF－228	Ⅰ層	沈線 LR充填		砂含 骨針無	
53－9	XⅠ－211	Ⅱa層	沈線 LR斜位		砂含 骨針無	
53－10	XⅠ－228		眼鏡状突起		砂含 骨針無	
53－11	XH－229	Ⅱa層	L縦位回転	ミガキ	砂礫含 骨針無	
53－12	XF－228	Ⅱa層	RL横位		砂含 骨針無	
53－13	XM－216	Ⅰ層	LR横位	ナデ	砂礫含 骨針無	
53－14	XM－216	Ⅰ層	O多 LR横位	ナデ	砂礫含 骨針無	
53－15	XE－228	Ⅱ層	口縁無文帯（1.3cm）RL横位	ナデ	砂礫含 骨針無	
53－16	XE－228	Ⅰ層	LR横位	ナデ	砂含 骨針無	
53－17	XⅠ－229	Ⅱa層	RL・LR羽状		砂含 骨針無	
53－18	XJ－230		RL横位	ミガキ	砂含 骨針無	
53－19	XE－228	Ⅰ層	RL横位	ミガキ	砂含 雲母含 骨針含	
53－20	XE－228		RL横位	ミガキ	砂含 骨針無	
53－21	XG－228	Ⅱa層	ミガキ	ミガキ	砂礫含 骨針無	
53－22	XG－228	Ⅱa層	条痕	ナデ	砂礫含 骨針無	
53－23	XG－228	Ⅱa層	条痕	ナデ	砂礫含 骨針無	
53－24	XL－228	Ⅱa層	条痕	ナデ	砂含 骨針無	
53－25	XⅠ－228		条痕	ナデ	砂含 骨針無	
52－26	XF－230	Ⅱa層	条痕		砂礫含 骨針無	
52－27	XF－230	Ⅱa層	条痕	ナデ	砂礫含 骨針無	

B区土器

図版	出土位置	出土層位	外面調整等	内面調整等	胎土	備考
56－1	XⅡG－230		磨滅顕著		砂含 骨針無	
56－2	XⅡI－232	Ⅲ層	隆帯上刻み 沈線間刻み	磨滅顕著	砂礫含 骨針無	
56－3	XⅡF－229	Ⅲ層	入組文 LR充填 貼瘤	ミガキ	砂微量 骨針無	
56－4	XN－217	Ⅲ層	入組文 LR充填 貼瘤	ミガキ	砂微量 骨針無	
56－5	XⅡI－232	Ⅲ層	入組文 RL充填 貼瘤	ミガキ	砂含 骨針無	
56－6	XⅡG－230	Ⅲ層	平行沈線 貼瘤	磨滅	砂礫多 骨針無	
56－7	XⅡG－230	Ⅲ層	平行沈線 貼瘤	磨滅	砂礫含 骨針無	
56－8	XⅡG－230	Ⅲ層	平行沈線 貼瘤	磨滅	砂礫多 骨針無	
56－9	XⅡE－229	Ⅲ層	RL・LR羽状縄文	ナデ ミガキ	砂礫多 骨針無	
56－10	XⅡE－229	Ⅲ層	RL・LR羽状縄文	ナデ ミガキ	砂含 骨針無	
56－11	XⅡI－232	Ⅲ層	RL・LR羽状縄文	ナデ	砂礫多 骨針無	
56－12	XⅡI－232	Ⅲ層	RL・LR羽状縄文	ナデ	砂礫多 骨針無	
56－13	XⅡF－230	Ⅲ層	RL・LR羽状縄文	磨滅顕著	砂含 骨針無	
56－14	XⅡE－230	Ⅲ層	磨滅顕著	ナデ	砂含 骨針無	
56－15	XⅡG－230	Ⅲ層	ナデ 沈線	ナデ	砂礫多 骨針無	
56－16	XⅡK－234	Ⅲ層	磨滅顕著	磨滅顕著	砂礫含 骨針無	
57－17	XⅡI－232	Ⅲe層	磨滅顕著	ナデ	砂礫多 骨針微量	
57－18	XⅡF－230	Ⅲe層	沈線 磨滅顕著	ナデ	砂礫含 骨針無	
57－19	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文	ナデ	砂含 骨針無	
57－20	XⅡG－230	Ⅲ層	口縁部突起 沈線 磨滅顕著	ミガキ	砂礫多 骨針無	
57－21	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 充填縄文（RL？） 貼瘤	ナデ	骨針無	
57－22	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 磨消縄文RL・LR	ナデ ミガキ	骨針無	
57－23	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 貼瘤	ナデ	砂含 骨針無	
57－24	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 LR充填	ナデ	砂礫多 骨針無	
57－25	XⅡI－231	Ⅲe層	木葉文 RL・LR充填 貼瘤	ナデ	砂含 骨針無	
57－26	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 貼瘤	ナデ 指押え	砂含 骨針無	
57－27	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 LR充填 貼瘤	ナデ	砂含 骨針無	
57－28	XⅡF－230	Ⅲ層	入組文 RL・LR羽状充填	ナデ	砂礫含 骨針無	
57－29	XⅡG－230	Ⅲ層	木葉文 RL・LR充填	ナデ	砂含	
57－30	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 RL・LR充填 貼瘤	ナデ	砂礫含 骨針無	
57－31	XⅡF－230	Ⅲ層	木葉文	ナデ	砂礫含 骨針無	
57－32	XⅡG－230	Ⅲ層	入組文 貼瘤	ナデ	砂含 骨針無	

図版	出土位置	出土層位	外面調整等	内面調整等	胎土	備考
57－33	XIIG－230	Ⅲ層	入組文　ミガキ　貼瘤	ナデ	砂含　骨針無	
57－34	XIIG－230	Ⅲ層	入組文　貼瘤	ナデ	砂含　骨針無	
57－35	XIIG－230	Ⅲ層	入組文　ＬＲ充填　貼瘤	ナデ	砂含　骨針無	
57－36	XIIG－230	Ⅲ層	平行帯縄文　ＲＬ・ＬＲ充填	ナデ　指押え	砂含　骨針微量	
57－37	XIIG－230	Ⅲ層	入組文　ＲＬ・ＬＲ充填	ナデ	砂含　骨針無	
57－38	XIII－232	Ⅲ層	入組文　ＬＲ充填　貼瘤	ナデ　磨滅顕著	砂礫含	
57－39	XIIG－230	Ⅲ層	入組文　ＬＲ・ＲＬ充填　貼瘤	ナデ	砂礫含　骨針無	
57－40	XIIK－234	Ⅲ層	入組文　貼瘤	ナデ	砂含　骨針無	
57－41	XIIK－234	Ⅲ層	入組文　貼瘤	磨滅顕著	砂含　骨針無	
57－42	XIIG－230	Ⅲ層	平行沈線　ＲＬ・ＬＲ充填　縄文　磨滅顕著	ミガキ　磨滅顕著	砂微量　骨針無	
57－43	XIIN－218	Ⅱａ層	ナデ　ミガキ	ナデ	砂礫微量　骨針無	
58－44	XIIG－230	Ⅲｅ層	ミガキ	ナデ	砂含　骨針無	
58－45	XIIG－230	Ⅲｅ層	ミガキ	ナデ	砂含　骨針無	
58－46	XIIH－230	Ⅲｅ層	ＬＲ横位～縦位	ナデ	砂礫多　骨針無	
58－47	XIIG－230	Ⅲｅ層	ミガキ（薄落多）	ナデ	砂含　骨針無	
58－48	XIIN－218	Ⅱａ層	沈線　粗いミガキ	ヘラ状工具によるナデ	砂礫少　骨針無	
58－49	XIIF－230	Ⅲｅ層	入組文（磨滅顕著）	ナデ	砂礫含　骨針無	
58－50	XIII－232	Ⅲ層	磨滅顕著	磨滅顕著	浮石様の粒子含　骨針無	
58－51	XIIF－230	Ⅲ層				ミニチュア土器
58－52	XIIF－230	Ⅲｅ層				人面土製品
58－53	XID－229	Ⅲ層	口縁部三又文　胴部ＲＬ横位	ミガキ	砂礫少　骨針無	

C区土器

図版	出土位置	出土層位	外面調整等	内面調整等	胎土	備考
64－1	XIIJ－198	Ⅲ層	隆帯		砂礫含　骨針無	
64－2	XII	Ⅲ層	隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－3	XIIJ－198	Ⅲ層	半隆帯　沈線	ナデ	砂礫含　骨針無	
64－4	XIII－197	Ⅲ層	隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－5	XIIJ－197	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂含　骨針無	
64－6	XIII－197	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－7	XIII－198	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－8	XIII－197	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－9	XIII－201	Ⅲａ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－10	XIIJ－197	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－11	XIII－197	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－12	XIII－197	Ⅲ層	半隆帯　沈線		砂礫含　骨針無	
64－13	XIIJ－197	Ⅲ層	沈線		砂礫含　骨針無	
64－14	XIIK－200	Ⅲ層	折返口縁　ＲＬ横位　単絡５類		砂含　骨針無	
64－15	XIIK－200	Ⅱ層	単絡５類		砂礫含　骨針無	
64－16	XIII－205	Ⅰ層	入組文　ＲＬ・ＬＲ羽状	ミガキ	砂礫含　骨針無	
64－17	XIII－205	Ⅰ層	入組文　ＲＬ・ＬＲ羽状	ミガキ	砂礫含　骨針無	
64－18	XIII－205	Ⅰ層	入組文　ＲＬ・ＬＲ羽状		砂礫含　骨針無	
64－19	XIIJ－206	Ⅲ層	ＲＬ・ＬＲ羽状		砂礫含　骨針無	
64－20	XIII－205	Ⅰ層	ＲＬ・ＬＲ羽状		砂礫含　骨針無	
64－21	XIII－201	Ⅱ層	入組文　ＬＲ充填		砂礫含　骨針無	
64－22	XIII－201	Ⅲａ層	入組文　ＬＲ充填		砂礫含　骨針無	
64－23	XIIK－202	Ⅰ層	条痕		砂礫含　骨針無	
64－24	XIII－201	Ⅲ層	ＬＲ横位		砂礫含　骨針無	
64－25	XIIK－202	Ⅲ層	条痕	ミガキ	砂礫含　骨針無	

遺構外石器

A区石器

図版	器種	出土地点	層位	石材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備考
54－1	石鏃	XG－211	Ⅱａ層	玉髄質珪質頁岩	24.0	13.0	4.0	0.8	Ⅱａ、アスファルト付着
54－2	石匙	XIJ－223	Ⅱ層	珪質頁岩	44.6	34.0	7.7	10.9	縦型、丸刃、表周辺調整
54－3	石匙	IXO－202	Ⅱ層	珪質頁岩	63.0	51.0	9.0	14.4	縦型
54－4	石匙	XQ－224	Ⅱａ層	珪質頁岩	37.0	42.0	4.2	5.6	縦型、表周辺調整
54－5	石匙	IXO－204	Ⅱ層	珪質頁岩	42.5	51.0	10.0	21.3	縦型、片面周辺調整
54－6	石匙	IXT－209	Ⅱ層	珪質頁岩	41.2	73.0	10.3	26.3	横型、両面調整
54－7	石錐	IXT－209	Ⅱａ層	珪質頁岩	(60.0)	38.4	16.3	17.0	
54－8	石錐	XID－229	Ⅲ層	珪質頁岩	109.2	43.3	14.2	69.7	撥形
54－9	二次加工剥片ａ	IXO－201	Ⅱ層	玉髄質珪質頁岩	23.0	19.0	5.0	1.1	五角形
54－10	二次加工剥片ａ	IXO－201	Ⅱ層	珪質頁岩	21.0	23.0	6.0	1.2	多角形
54－11	二次加工剥片ｂ	IXO－202	Ⅱ層	珪質頁岩	117.0	62.0	25.0	99.0	削器・掻器
54－12	二次加工剥片ａ	XL－215	Ⅱａ層	珪質頁岩	45.7	59.7	13.2	23.1	石匙未製
55－13	磨製石斧	XID－229	Ⅲ層	閃緑岩	105.0	41.0	27.0	174.5	片刃
55－14	敲磨器Ｉｂ	IXT－209	Ⅱａ層	流紋岩	103.5	35.0	20.0	103.2	全面研痕

図版番	器種	出土地点	層位	石材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備考
55－15	敲磨器Ⅱ	XIF－228	Ⅱa層	安山岩	135.0	85.0	54.0	785.2	両面に浅い敲打痕
55－16	敲磨器Ⅱ	XA－208	Ⅱb層	安山岩	40.0	38.0	34.0	67.2	敲打痕
55－17	敲磨器Ⅲ	IXO－202	Ⅱ層	凝灰岩	(112.0)	52.0	20.0	172.1	片面に凹み痕

B区石器

図版番	器種	出土地点	層位	石材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備考
59－1	石鏃	XIIE－230	Ⅲe層	珪質頁岩	(18.0)	13.0	4.0	0.6	Ⅱa、下部欠損
59－2	石鏃	XIIF－230	Ⅲe層	珪質頁岩	23.0	13.0	5.0	1.2	Ⅱa
59－3	石鏃	XIIJ－233	Ⅲe層	玉髄質珪質頁岩	(22.0)	11.0	5.0	0.8	Ⅱa
59－4	石鏃	XIIM－235	不明	玉髄質珪質頁岩	24.0	13.0	4.0	0.7	Ⅱa
59－5	石鏃	XIIF－230	Ⅲe層	珪質頁岩	(22.0)	15.0	4.0	1.0	Ⅱa、尖端部欠損
59－6	石鏃	XIII－232	Ⅲe層	珪質頁岩	29.0	10.0	4.0	0.9	Ⅲ
59－7	石鏃	XIIH－231	Ⅲb層	珪質頁岩	29.0	14.0	6.0	1.4	Ⅱa
59－8	石鏃	XIIF－229	Ⅲe層	珪質頁岩	(34.0)	14.0	8.0	3.3	Ⅲ
59－9	石鏃	XIIJ－233	Ⅲe層	珪質頁岩	(25.0)	12.0	4.0	0.8	Ⅱa、尖端部欠損
59－10	石鏃	表採	不明	珪質頁岩	40.0	13.0	5.0	1.3	Ⅱa
59－11	石鏃	不明	不明	玉髄質珪質頁岩	27.0	11.0	4.0	0.8	Ⅱb
59－12	石鏃	XIIJ－234	Ⅲc層	玉髄質珪質頁岩	27.0	9.2	2.9	0.6	Ⅰc
59－13	石錐	XIIH－231	Ⅱ層	玉髄質珪質頁岩	(17.0)	18.0	5.0	0.8	上部欠損
59－14	石槍	XIIF－230	間層	珪質頁岩	49.0	29.0	6.3	7.6	
59－15	石錐	XIII－231	Ⅱ層	チャート	55.4	56.2	10.5	35.4	
59－16	石錐	XIIL－235	Ⅲc層	珪質頁岩	58.5	38.2	7.1	10.6	
59－17	石錐	XIII－233	間層2	チャート	62.7	27.8	13.0	18.5	
59－18	石錐	不明	不明	珪質頁岩	59.0	38.0	10.0	20.4	
59－19	石錐	XIIE－230	Ⅲe層	珪質頁岩	(29.6)	18.0	5.7	2.3	
59－20	石錐	XIIH－231	Ⅱ層	珪質頁岩	35.0	44.0	12.0	16.1	
59－21	石匙	XIIJ－232	Ⅲc層	珪質頁岩	50.0	33.0	7.0	7.5	縦型、尖刃
59－22	石匙	XIIG－230	Ⅲe層	珪質頁岩	84.0	41.2	12.8	42.1	縦型
59－23	石匙	不明	不明	チャート	(37.0)	28.0	7.0	4.4	縦型、刃部欠損
59－24	石匙	XIIF－230	Ⅲe層	珪質頁岩	(43.0)	18.0	9.0	5.4	縦型、刃部欠損
59－25	石匙	XIII－232	Ⅲe層	珪質頁岩	35.0	22.0	5.0	3.1	縦型、刃部欠損
59－26	石匙	XIIE－229	Ⅲ層	珪質頁岩	33.0	14.0	5.0	1.7	縦型
60－27	石匙	XIIC－229	Ⅱ層	珪質頁岩	43.0	28.0	13.0	13.2	縦型
60－28	石匙	XIIE－230	Ⅲe層	珪質頁岩	47.0	27.0	6.0	7.9	縦型、平刃
60－29	石匙	XIIL－235	Ⅲc層	珪質頁岩	47.3	27.7	8.5	8.8	縦型、片面調整
60－30	石匙	XIIL－235	Ⅲc層	珪質頁岩	58.6	20.1	6.8	8.0	縦型、両面調整
60－31	石匙	XIIL－235	Ⅲc層	珪質頁岩	(50.0)	21.0	13.0	12.2	縦型
60－32	石匙	XIIF－229	Ⅲ層	珪質頁岩	56.2	32.2	9.5	14.0	縦型、両面調整
60－33	石匙	XIIN－235	Ⅲb層	珪質頁岩	34.0	51.2	4.8	6.9	横型、表片面周辺調整
60－34	石匙	XIII－232	Ⅲe層	珪質頁岩	57.8	77.5	10.0	38.6	横型、両面調整
60－35	石匙	XIIG－230	Ⅲe層	チャート	38.5	53.5	11.4	19.5	横型、両面調整
60－36	石匙	XIIB－224	Ⅱ層	珪質頁岩	35.0	66.4	6.8	12.7	横型、両面調整
60－37	石匙	XIIL－235	Ⅲc層	珪質頁岩	33.6	33.4	8.6	9.0	横型、両面調整
60－38	二次加工剥片a	XII－231	Ⅱ層	黒曜石	(22.0)	11.0	3.6	0.6	不定形
60－39	二次加工剥片a	XIIH－230	Ⅲ層	珪質頁岩	(23.5)	20.0	6.3	1.9	錐の未製品、上部欠損
60－40	二次加工剥片a	XIIF－230	間層	珪質頁岩	30.0	14.0	6.2	2.1	石鏃未製品
60－41	二次加工剥片a	XIIF－229	Ⅲe層	珪質頁岩	(23.5)	12.5	3.8	1.3	上下欠損
60－42	二次加工剥片b	XIIE－229	Ⅱ層	珪質頁岩	59.1	57.7	14.2	33.3	削器
60－43	二次加工剥片b	XIIB－227	Ⅱ層	珪質頁岩	102.0	52.0	15.3	45.3	削器
60－44	二次加工剥片b	XIIF－230	Ⅲe層	珪質頁岩	45.2	33.0	6.2	90.0	刃部欠損
61－45	二次加工剥片b	XIIE－230	Ⅲe層	珪質頁岩	46.8	62.2	12.0	30.3	削器
61－46	二次加工剥片b	XIIK－234	Ⅲa層	珪質頁岩	80.0	33.3	17.0	47.8	削器
61－47	石核	不明	Ⅰb層	珪質頁岩	4.0	33.5	20.4	32.4	
61－48	石核	XIIF－230	Ⅲe層	珪質頁岩	60.6	46.4	42.6	99.4	
61－49	石核	XIID－229	Ⅱ層	珪質頁岩	77.2	72.0	43.2	149.2	
61－50	石核	XIIH－231	Ⅲe層	珪質頁岩	51.3	43.4	32.5	77.7	
61－51	石製品	XIIE－230	Ⅲe層	緑色細粒凝灰岩	30.2	7.4	5.1	2.3	
61－52	磨製石斧	XIIL－235	Ⅱ層	緑色凝灰岩	(69.0)	54.0	14.2	89.1	両刃、上部欠損
61－53	磨製石製品	XII－232	Ⅲe層	砂岩	(55.5)	19.0	16.0	19.3	研磨・敲打痕、上部欠損
61－54	敲磨器Ⅰa	XIIA－223	Ⅱ層	安山岩	127.0	69.0	40.5	499.4	中央すり面
62－55	敲磨器Ⅰa	XIIM－235	Ⅲc層	流紋岩	233.5	53.5	45.0	423.0	上部すり面
62－56	敲磨器Ⅰa	XIIF－230	Ⅲe層	石英安山岩	84.0	67.0	25.0	184.5	両面中央すり面
62－57	敲磨器Ⅰb	XIIF－231	Ⅲb層	流紋岩	(128.5)	44.5	41.5	334.1	全面研磨
62－58	敲磨器Ⅰc	XIIC－229	Ⅱ層	安山岩	50.0	42.0	27.0	72.3	全面研磨
62－59	敲磨器Ⅱ	XIIK－234	Ⅲc層	流紋岩	(143.0)	50.0	34.6	354.2	全面に敲叩痕有り
62－60	敲磨器Ⅱ	XII	Ⅰb層	石英安山岩	87.5	101.5	56.0	614.8	周辺部に敲打痕有り
62－61	敲磨器Ⅱ	XIIG－230	Ⅲc層	安山岩	76.0	51.0	41.0	203.2	両端部に敲打痕有り

図版番	器　種	出土地点	層位	石　材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	備　考
62－62	敲磨器Ⅲ	XⅡI－233	Ⅲe層	凝灰岩	129.0	70.5	32.0	413.2	両面に凹み痕有り
62－63	敲磨器Ⅳ	XⅡG－231	Ⅲb層	凝灰岩	180.0	77.0	38.0	373.7	敲打・凹み痕
62－64	敲磨器Ⅳ	XⅡJ－231	Ⅱ層	凝灰岩	132.0	62.0	29.0	332.3	研磨・凹み痕
63－65	敲磨器Ⅳ	XⅡE－230	不明	砂岩	100.0	72.0	53.0	506.5	研磨・凹み痕
63－66	打製石器	XⅡE－230	Ⅲe層	安山岩	88.5	135.0	33.0	573.0	すり面
63－67	打製石器	XⅡG－230	Ⅲe層	流紋岩	294.5	71.0	40.0	762.4	擦痕顕著
63－68	石皿	XⅡE－231	Ⅲb層	安山岩	187.0	98.0	55.0	1320.2	
63－69	石棒	XⅡL－233	I層	流紋岩	(333.0)	56.0	52.0	1401.5	擦痕顕著、下部欠損
63－70	石棒		排土	粘板岩	(69.0)	56.0	41.0	157.5	把手付頭部、下部欠損
63－71	砥石	不明	Ⅰb層	凝灰岩	(75.5)	52.0	28.0	165.6	両面に擦痕有り

C区石器

図版	器　種	出土地点	層位	石　材	長：mm	幅：mm	厚：mm	重：g	499.4備　考
65－1	石匙	XⅢJ－198	I層	珪質頁岩	58.4	(71.1)	8.7	29.1	横型、タール状付着物有り
65－2	石匙	XⅢJ－197	I層	珪質頁岩	46.2	17.6	9.6	6.8	縦型
65－3	石匙	XⅢJ－197	不明	珪質頁岩	(35.0)	24.0	7.0	6.4	縦型
65－4	石匙	XⅢJ－199	I層	珪質頁岩	(32.0)	20.0	4.0	3.1	縦型
65－5	磨製石製品	XⅢI－207	I層	凝灰岩	29.0	29.0	7.0	4.3	
65－6	敲磨器Ⅰa	XⅢJ－200	I層	安山岩	(80.0)	70.5	51.0	375.3	片側面にすり面
65－7	敲磨器Ⅳ	XⅢJ－206	I層	流紋岩	(132.0)	49.0	42.0	409.1	凹み痕、擦痕顕著、下部欠損

引用・参考文献

青森県教育委員会　1975　『近野遺跡（Ⅱ）』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
1977　『水木沢遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
1978　『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
1979　『細越遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第49集
1982　『馬場瀬遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第70集
1993　『朝日山遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第152集
1996　『野尻（4）遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第186集
1998　『新町野・野木遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第239集

今井富士雄・磯崎正彦　1968　「第16節　十腰内遺跡」『岩木山』岩木山刊行会

（財）岩手県埋蔵文化財調査センター
1982　『萪内遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集
1983　『叭屋敷Ⅰａ遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第61集
1984　『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第71集
1986　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集
1995　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
1997　『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集
1998　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書　－第6次～第8次調査－』岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集

岡田康博　1986　「十腰内第Ⅲ群・第Ⅳ群・第Ⅴ群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』3

鈴木克彦　1998　a　「東北地方北部における十腰内土器様式の編年学的研究・2（上）―十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式土器の研究―」『考古学雑誌』83－2
b　「東北地方における十腰内土器様式の編年学的研究・4－十腰内1式と直前形式の研究－」『縄文時代』9　縄文時代文化研究会

工藤清泰　1989　「Ⅷ　浪岡城出土の瓦質土器とその考察」『浪岡城跡Ｘ』浪岡町教育委員会

八戸市教育委員会　1991　『風張（1）遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第42集

蛍沢遺跡調査団　1979　『蛍沢遺跡』

本間　宏　1987　「縄文時代後期初頭土器群の様相（1）―東北北部を中心に―」『米代考古』3
1988　「縄文時代後期初頭土器群の様相（2）」『米代考古』4

三浦　圭介　1990　「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」『シンポジウム　土器からみた中世社会の成立』
1994　「青森県における古代の土器様相」『特集シンポジウム　北日本における律令期の土器様相』第18回城柵官衙検討会資料
1995　「資料編1　考古編　第3章」『新編　弘前市史』

渡辺　誠　1998　「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』福島県良江町教育委員会

付　編　　自然科学的分析

付編　自然科学的分析

1.　宮田地区山下遺跡から出土した木製品・炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山下遺跡では、縄文時代および平安時代の遺構が検出されている。このうち、平安時代の溝からは土師器・須恵器・木器・鉄器等の遺物が検出されている。また、土坑や住居跡のカマドなどからは、燃料材などと考えられる炭化物が出土している。

本報告では、平安時代の溝から出土した木製品、土坑および住居跡のカマドから出土した炭化材の樹種を明らかにし、用材選択に関する資料を得る。

1．試料

試料は、出土した木製品10点（試料番号１～10）、土坑(SK3)と、住居跡(SI2)のカマドから出土した炭化材各１点の合計12点である。木製品試料については、いずれも切片の状態で送付されてきた。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

2．方法

送付されてきた切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

樹種同定結果を表１に示す。試料は確実な同定に至らず近似種としたものもあるが、針葉樹２種類（ヒノキ・アスナロ属）と広葉樹３種類（アサダ・クリ・カエデ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa(Sied. et Zucc.)Endlcher）　　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・アスナロ属(Thujopsis)　　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。晩材部には樹脂細胞が認められ、その水平壁にはじゅず状の肥厚が顕著に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

表1　樹種同定結果

番号	注記	出土地点	時　代	試料の質	製品名	樹　種
1	w- 1	12号溝覆土下	平安時代	生木	棒状木製品	アスナロ属
2	w- 2	12号溝覆土下	平安時代	生木	棒状木製品	ヒノキ
3	w- 3	12号溝覆土下	平安時代	生木	棒状木製品	アスナロ属近似種
4	w- 4	12号溝覆土下	平安時代	生木	板状木製品	アスナロ属
5	w- 5	12号溝覆土下	平安時代	生木	丸太半割材	アスナロ属近似種
6	w- 6	12号溝覆土下	平安時代	生木	板状木製品	アスナロ属
7	w- 7	12号溝覆土下	平安時代	生木	板状木製品	アスナロ属近似種
8	w- 8	12号溝覆土下	平安時代	生木	棒状木製品	アスナロ属
9	w- 9	12号溝覆土下	平安時代	生木	棒状木製品	アスナロ属近似種
10	w-11	12号溝覆土下	平安時代	生木	棒状木製品	アサダ
		12号溝覆土下	平安時代	炭化物	燃料材？	クリ
		12号溝覆土下	平安時代	炭化物	燃料材	カエデ属

切片が3断面観察できなかったり、切片の状態が悪く充分な観察ができなかった試料については、近似種とした。

・アサダ(Ostrya japonica Sarg.)　　カバノキ科アサダ属

送付されてきた試料には、柾目面が含まれていなかった。また、木口面の切片が厚く、透過光での観察が十分に行えなかった。散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはかすかにらせん肥厚が認められる。放射組織は1～4細胞幅、1～30細胞高。

・クリ(Castanea crenata Sied. et Zucc)　　ブナ科クリ属

試料は保存状態が悪い。環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外でやや急激～緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・カエデ属(Acer)　　カエデ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。木口面で不規則な紋様が認められる。

4．考察

12号溝覆土下から出土した木製品は、棒状木製品にヒノキとアサダが各1点認められた以外は、全てアスナロ属またはアスナロ属近似種であった。この結果から、12号溝において、板状や棒状を呈する木製品にアスナロ属を中心とした用材選択が見られたことが推定される。板状や棒状を呈する木製品にアスナロ属が多く認められた例は、稲垣村久米川遺跡でも報告されている（嶋倉，1994)。また、アスナロ属は、平安時代の製鉄や鍛冶の燃料材、住居構築材などとしても多く用いられていたことが明かとなっている（嶋倉，1982,1987；岡本ほか，1996)。アスナロ属が多く用いられた背景には、加工性や耐水性等が考慮されたことが推定される。しかし、今回の木製品は、形状などはわかるものの、

用途などの詳細は不明であり、現時点では詳細は不明である。

一方、土坑および竪穴住居跡のカマドから出土した、燃料材と考えられる炭化物は、クリとカエデ属であった。いずれも落葉広葉樹であり、12号溝の木製品とは用材選択が異なる。このうち、クリについては、これまで県内各地で行われた調査でも、同時期の住居構築材や燃料材に多く認められている（嶋倉，1980a,1980b,1987aなど）。また、カエデ属もクリなどと共に住居構築材や燃料材などに認められることがある（嶋倉，1987b）。このような住居構築材や燃料材などは、遺跡周辺に生育していた樹木など、容易に入手できるものが利用されたと考えられる。今回の結果についても、周辺に生育していたクリやカエデ属などを燃料材として利用したことが推定される。

引用文献

岡本　透・大丸裕武・池田重人・吉永秀一郎(1996)下北半島猿ヶ森ヒバ埋没林とそれを覆う砂丘の形成環境．日本地理学会予稿集，49，p.210-211.

嶋倉巳三郎(1980a)永野遺跡出土の炭化材．青森県埋蔵文化財調査報告書第56集「永野遺跡発掘調査報告書　昭和54年度」，p.370-371，青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1980b)板留(２)遺跡か出土した炭化材の樹種．青森県埋蔵文化財調査報告書　第59集「板留(２)遺跡　発掘調査報告書　昭和54年度」，p.1-2，青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1982)樹種同定．青森県埋蔵文化財調査報告書第67集「発茶沢遺跡　むつ小川原開発に係る新幹連絡道路建設及びパイプライン敷設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.383，青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1987a)山本遺跡出土の炭化木．青森県埋蔵文化財調査報告書第105集「山本遺跡－一般国道７号線浪岡バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.203-204，青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1987b)弥栄平(４)遺跡出土の炭化材樹種同定．青森県埋蔵文化財調査報告書第106集「弥栄平(４)(５)遺跡発掘調査報告書　－むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書－」，p.205-206，青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1994)久米川遺跡出土加工木の樹種（第２次分）．青森県埋蔵文化財調査報告書第163集「稲垣村久米川遺跡発掘調査報告書」，p.242-245，青森県教育委員会.

2. 放射性炭素年代測定

学習大学放射性炭素年代測定結果報告書

１９９８年３月１７日

青森県埋蔵文化財調査センター　殿

1997年12月12日受領しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてＬＩＢＢＹの半減期５５７０年を使用しています。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ＯＮＥ　ＳＩＧＭＡ）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは、３σに相当する年代を下限の年代値（Ｂ．Ｐ.）として表示してあります。また、試料の差のβ線計数率と現在の標準炭素（ＭＯＤＥＲＮ　ＳＴＡＮＤＡＲＤ　ＣＡＲＢＯＮ）についての計数率との差が２σ以下のときには、Ｍｏｄｅｒｎと表示し、δ^{13}Ｃ％を付記してあります。

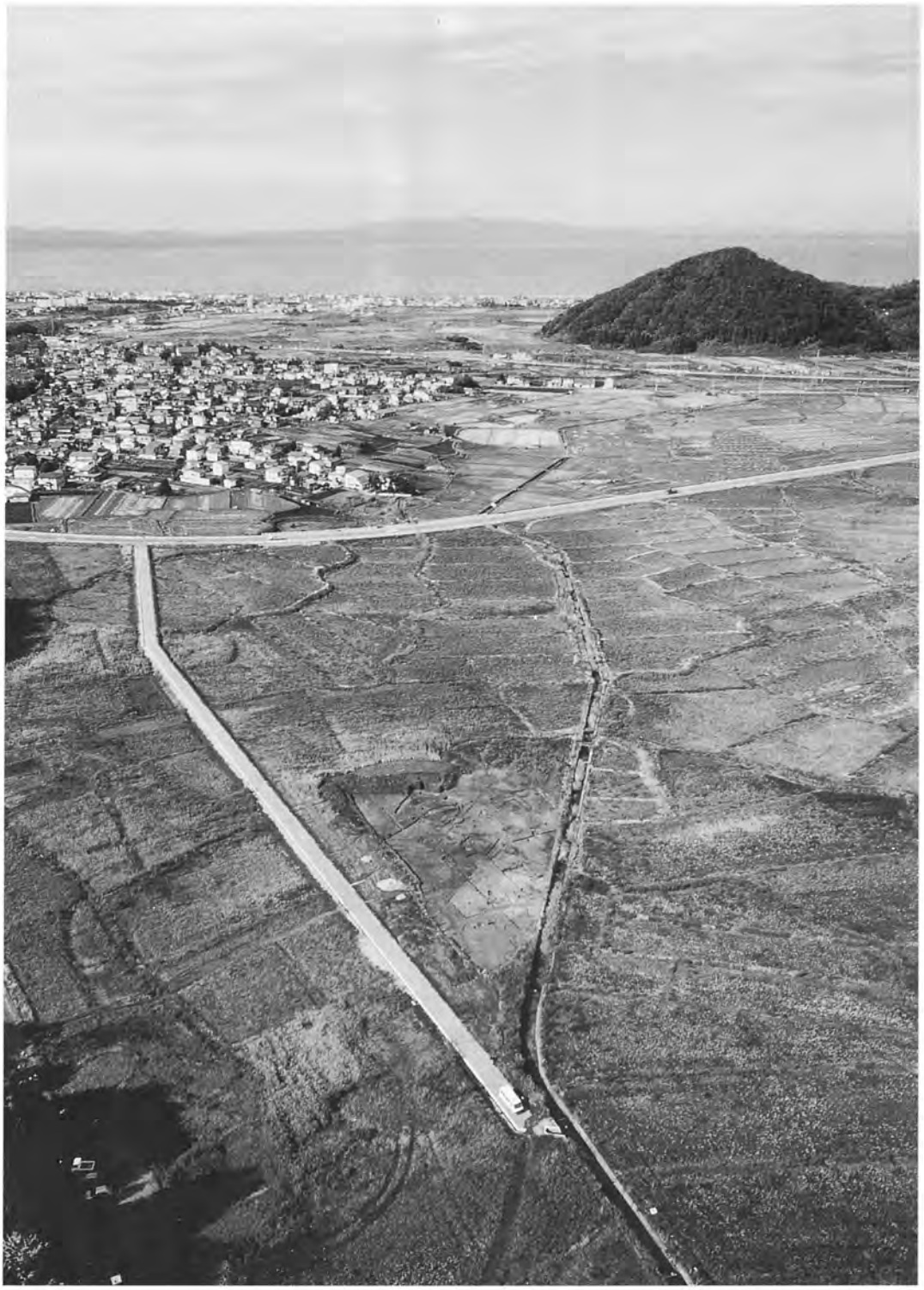
記

Code No.	試料	年代（１９５０年よりの年数）
Gak－19868	自然木　ｆｒｏｍ　山下遺跡 No．１　現在の水田面より約－１ｍ	１３８０ ± ６０ Ａ．Ｄ．５７０
Gak－19869	自然木　ｆｒｏｍ　山下遺跡 No．２　現在の水田面より約－１ｍ	１２５０ ± ７０ Ａ．Ｄ．７００

学習院大学　　木越邦彦

山下遺跡航空写真
（遺跡南西から・前方は東岳）

図　版　1



山下遺跡航空写真
（遺跡東側から。前方は陸奥湾、対岸は津軽半島）

図　版　2

A区住居跡・溝

A区ＳＩ１・ＳＤ８

1．B区基本層序

2．第8号土坑遺物出土状況

3．SK8完掘

4．A区基本層序

5．廃棄ブロック土層断面

6．廃棄ブロック1　近景

7．廃棄ブロック2　自然木出土状況

8．第1号住居跡完掘

図　版　4

1．第1号住居跡カマド検出状況

2．第1号住居跡カマド土層断面

3．第1号住居跡貼床土層断面

4．第2号住居跡

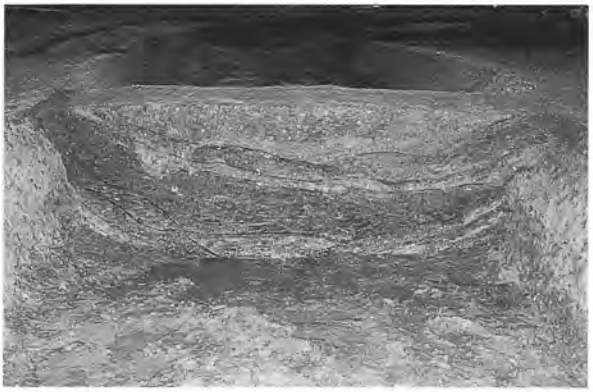
5．第2号住居跡完掘状況

6．第3号住居跡完掘状況

7．第4号住居跡完掘状況

8．第4号住居跡カマド

図　版　5



1．第12号溝跡土層断面（C－C′）

2．第12号溝遺物出土状況

3．第12号溝遺物出土状況

4．第１号埋設土器

5．第１号埋設土器掘り方土層断面

6．第１号カマド状遺構完掘状況

7．第３号土坑確認状況

8．第３号土坑完掘状況

1．第１号土坑完掘状況

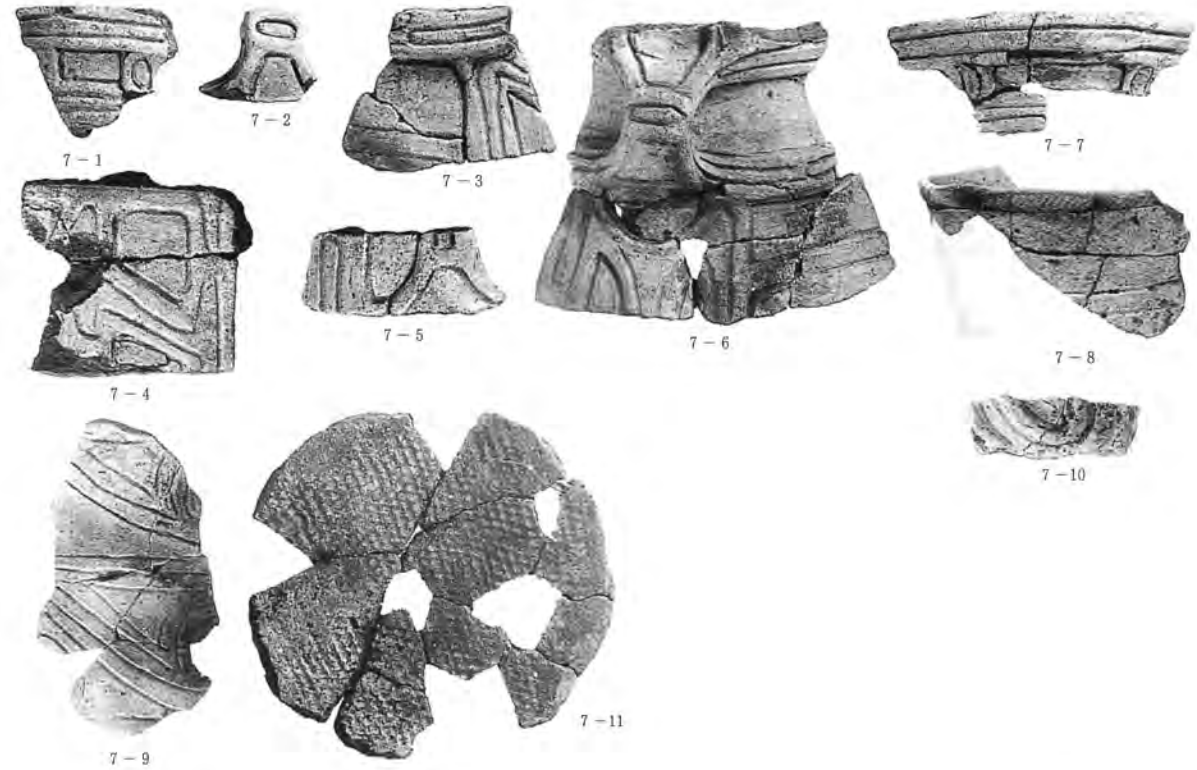
2．第10号土坑完掘状況

3．第11号土坑完掘状況

4．第２号配石

5．Ａ区　ⅢＮ－128遺物出土状況

6．Ａ区　ⅢＤ－112遺物出土状況


7－1
7－2
7－3
7－4
7－5
7－6
7－7
7－8
7－9
7－10
7－11

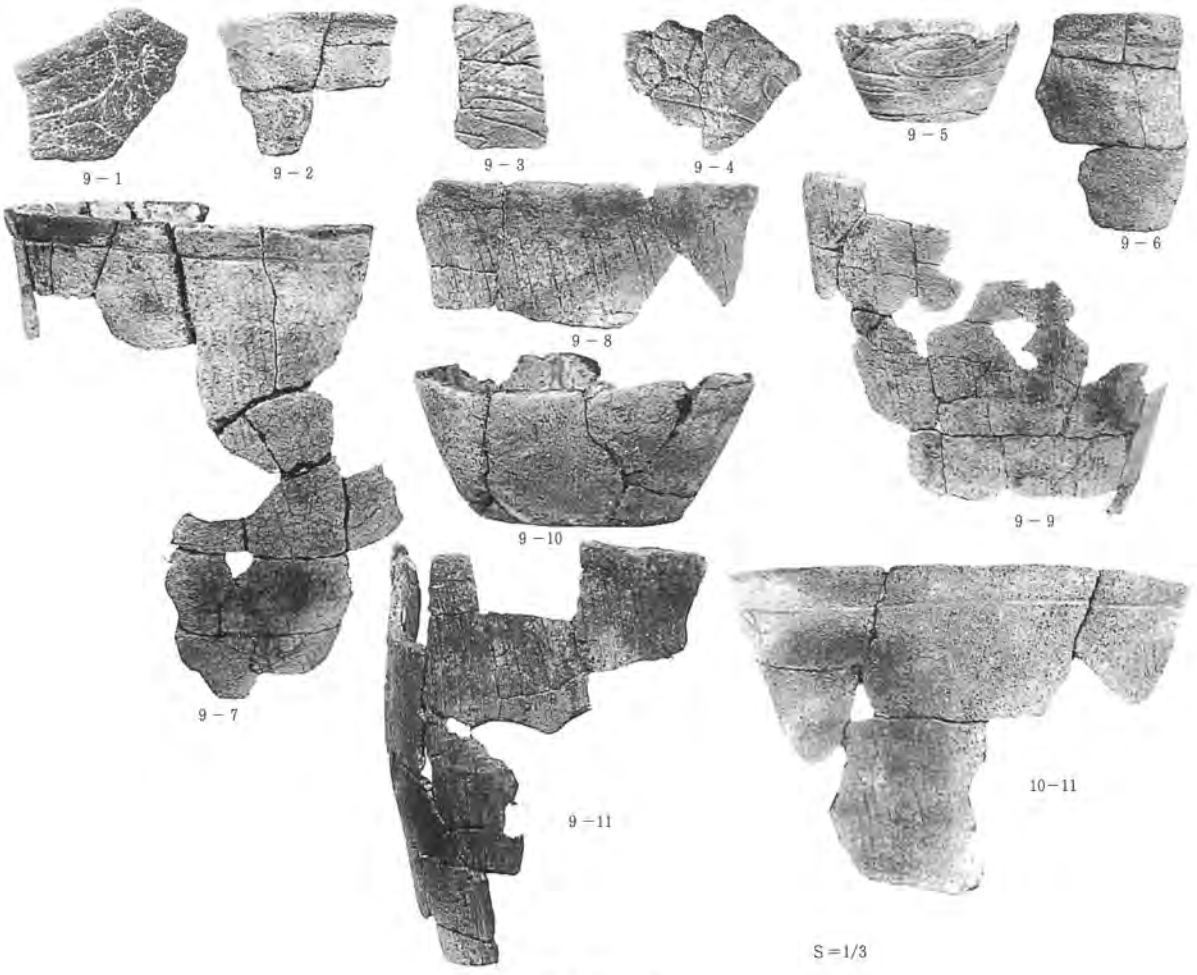

9－1
9－2
9－3
9－4
9－5
9－6
9－7
9－8
9－9
9－10
9－11
10－11
S＝1/3

図 版 8

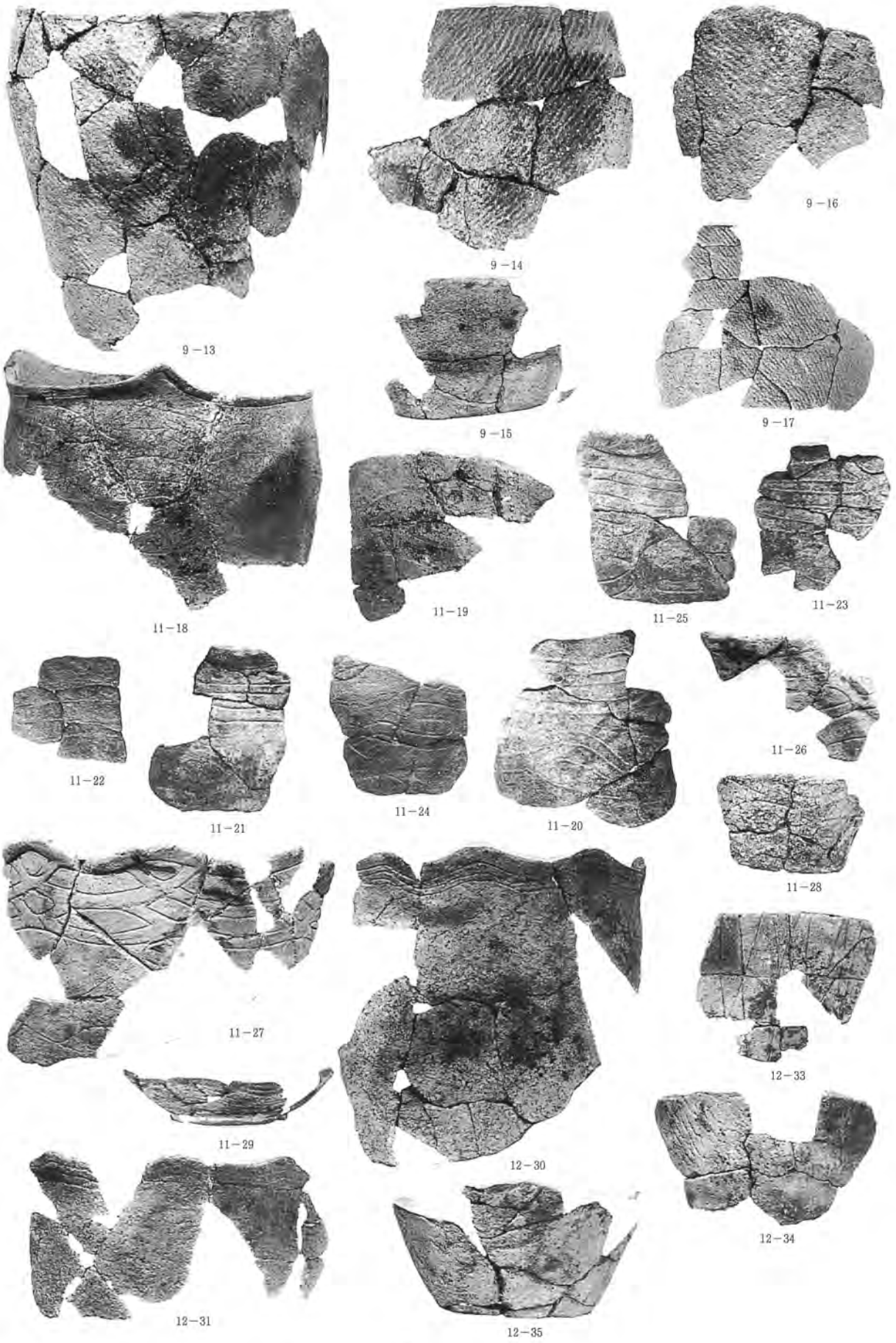
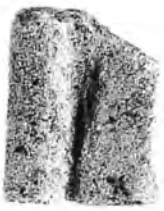

9－13
9－14
9－16
9－15
9－17
11－18
11－19
11－25
11－23
11－22
11－21
11－24
11－20
11－26
11－28
11－27
11－29
12－30
12－33
12－34
12－31
12－35

図　版　9

12－32

12－36

13－6


13－8

12－37

13－1

13－2

13－5

13－9

15－1

15－2

16－3

16－5

16－6

16－7

16－8

16－4

16－9

16－10

16－13

16－11

16－17

17－18

16－12

16－14

16－15

図　版　10

12－37、16－14、16－15、16－16、16－17　S＝1/3
17－1　S＝1/4　　その他　S＝1/3

20－1

20－2

20－3

20－4

20－5

20－6

20－7

20－9

20－11

20－12

20－10

24－2

21－1

21－2

24－1

24－4

24－3

24－5

24－6

24－7

24－8

24－9

24－10

24－11

24－12

24－14

24－15

24－18

24－16

24－17

25－1

29－1

25－2

21－1　29－1　S＝3/8　その他　S＝1/3

図　版　11

29－2

29－3

29－6

29－5

29－4

29－9

29－7

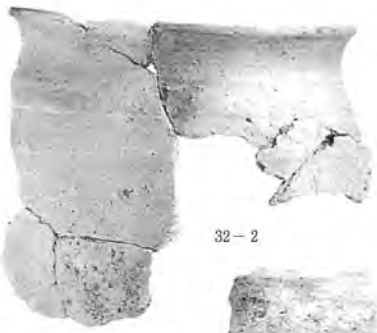
29－10

29－8

26－1

33

刻 書 拡 大


32－2

32－3

32－1

43－25

43－26

43－27

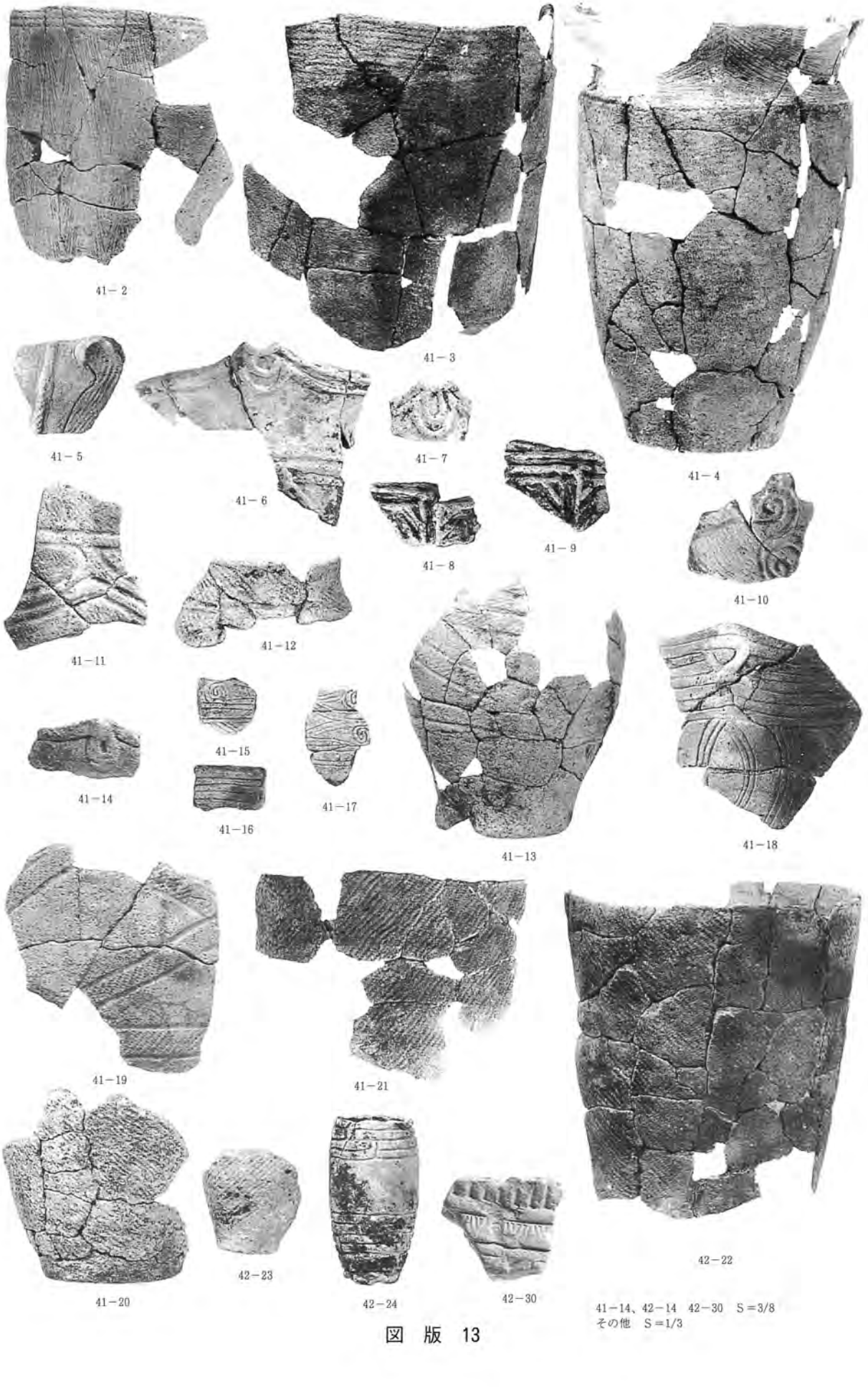
43－28

43－29

41－1

S＝1/3

図 版 12



41－14、42－14　42－30　S＝3/8
その他　S＝1/3

図　版　13

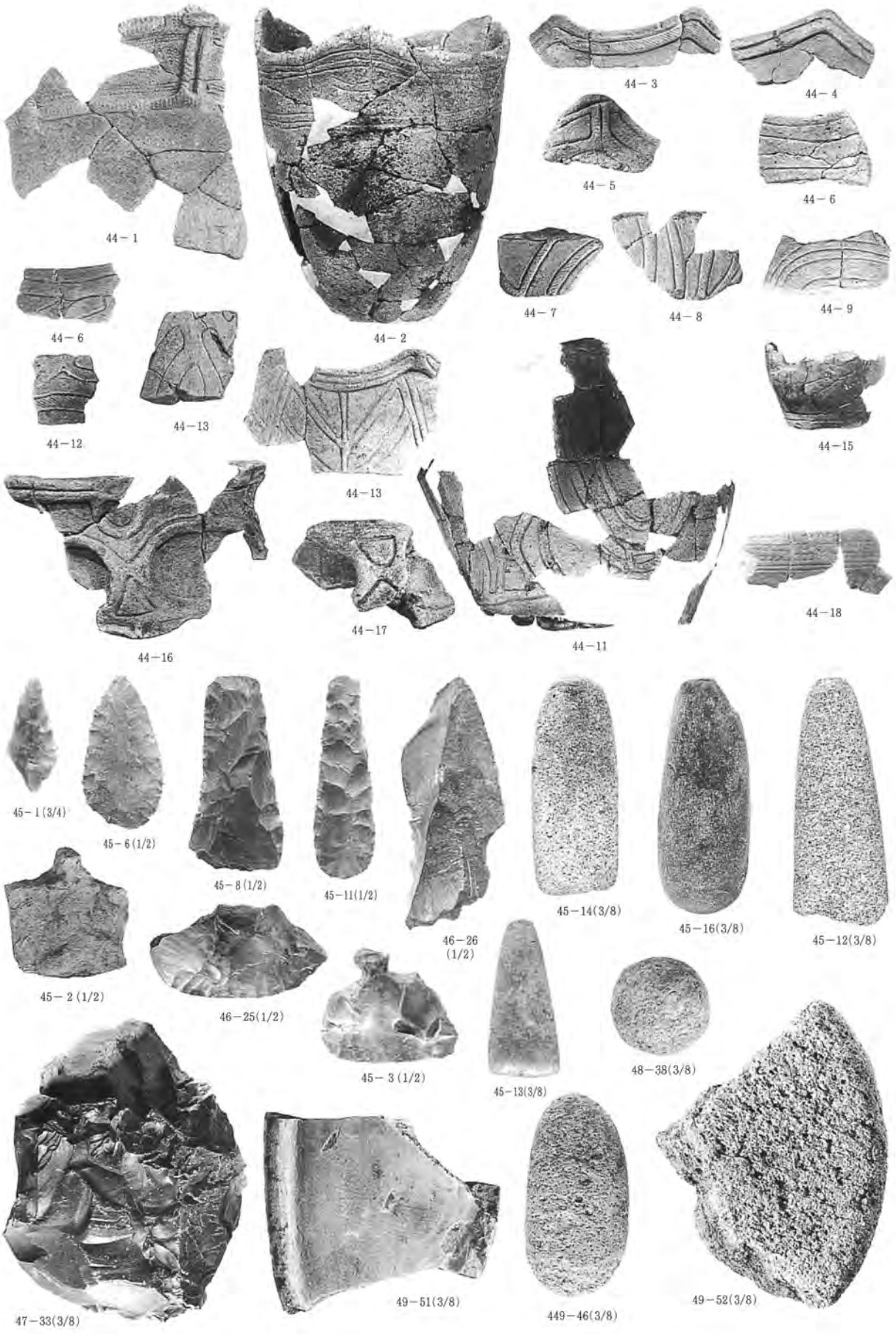

44－1
44－2
44－3
44－4
44－5
44－6
44－7
44－8
44－9
44－6
44－12
44－13
44－13
44－15
44－16
44－17
44－11
44－18
45－1(3/4)
45－6(1/2)
45－8(1/2)
45－11(1/2)
46－26
(1/2)
45－14(3/8)
45－16(3/8)
45－12(3/8)
45－2(1/2)
46－25(1/2)
45－3(1/2)
45－13(3/8)
48－38(3/8)
47－33(3/8)
49－51(3/8)
449－46(3/8)
49－52(3/8)

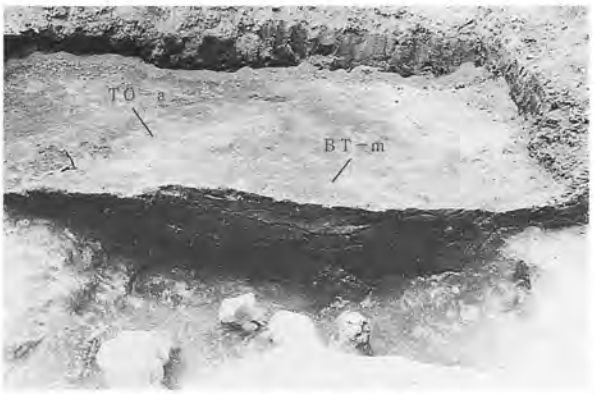
図　版　14

A区基本層序

第1号土坑土層断面

第1号土坑完掘

第4・5号土坑土層断面



第4・5号土坑火山灰堆積状況

第4・5号土坑完掘

B区基本層序

B区基本層序

図　版　15

1．B区遺物出土状況

2．B区遺物出土状況

2．B区遺物出土状況

5．B区遺物出土状況

6．B区遺物出土状況

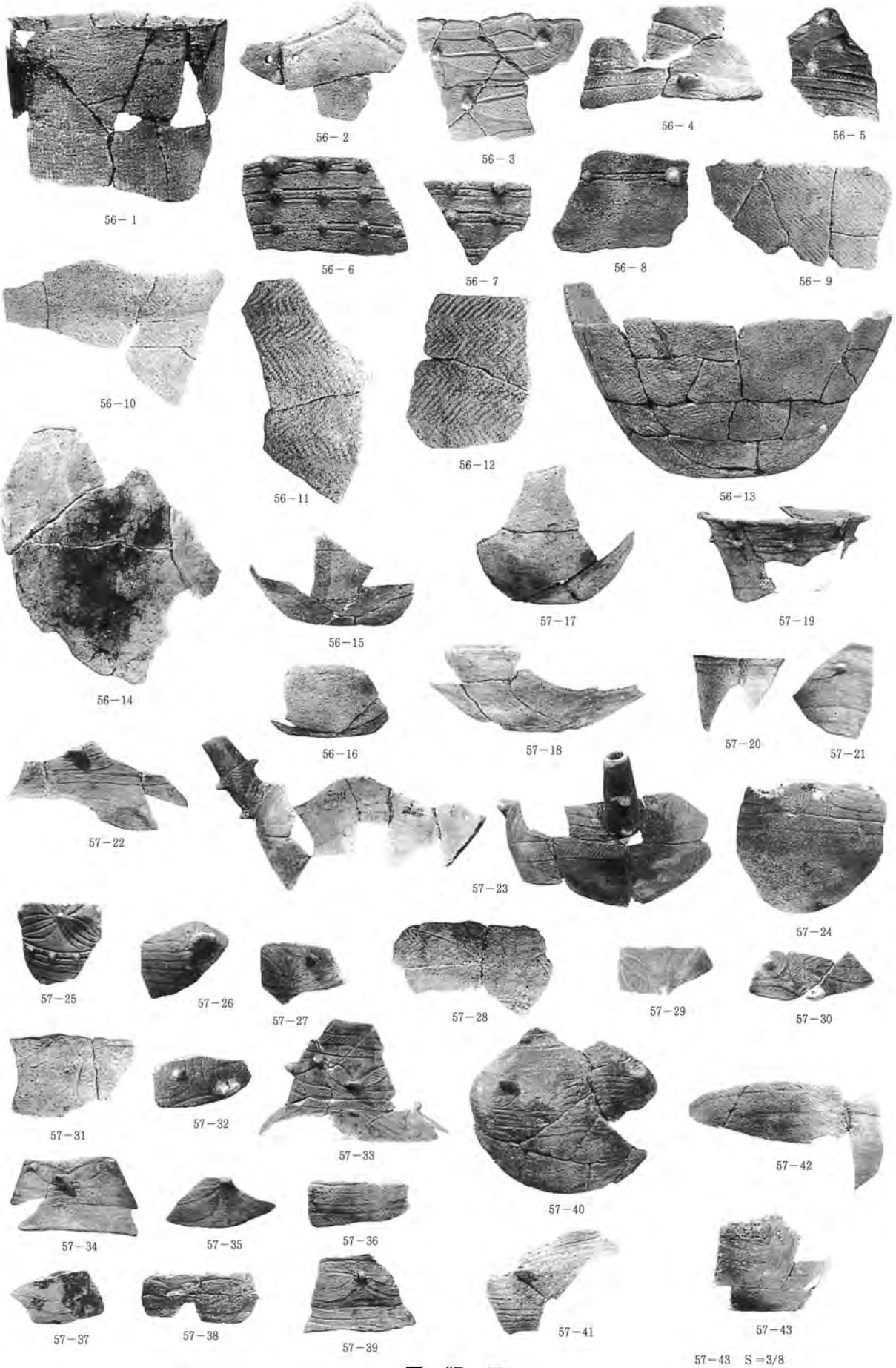
7．B区遺物出土状況

8．C区遺物出土状況

9．C区遺物出土状況

10．C区遺物出土状況

図　版　16



57－43　S＝3/8
その他　S＝1/3

図　版　17

58－44

58－45

58－46

58－47

58－48

58－52

56－10

58－50

58－49

58－51

54－5(3/8)

54－11
(3/8)

54－12(3/8)

54－8(3/8)

54－7(3/8)

54－2(3/8)

54－9(3/4)

54－10(3/4)

59－4(3/4)

59－5(3/4)

59－12(3/4)

59－10(3/4)

59－14(3/8)

59－16(3/8)

59－20(3/8)

55－13(1/2)

60－31(3/8)

60－28(3/8)

60－35(3/8)

59－17
(3/8)

土器はS＝1/3

図　版　18

60－34(1/2)

59－22(1/2)

60－42(1/2)

61－46(1/2)

60－37(1/2)

60－43(1/2)

60－44(1/2)

61－45(1/2)

61－51(3/4)

61－52(3/8)

60－53
(3/4)

61－54
(1/4)

62－58(3/8)

62－59(1/4)

62－61(3/8)

62－63(1/4)

63－66(3/8)

62－64(1/4)

63－69(1/4)

63－67(1/4)

63－70(1/2)

63－71(3/8)

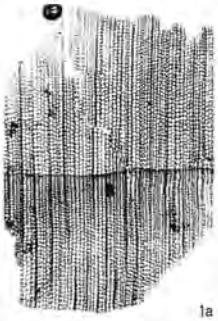
65－2
(1/2)

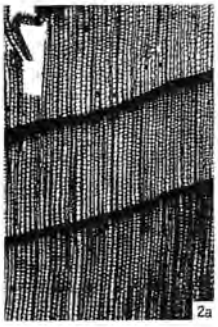
65－1(1/2)

65－5
(3/4)

65－7(1/4)

図 版 19

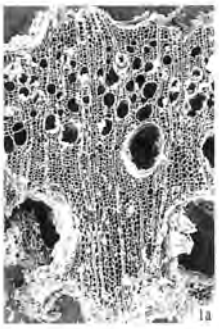


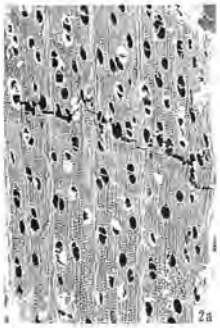


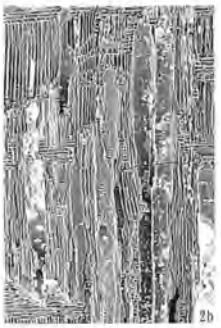
A．木　材

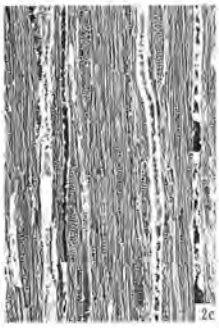
1．ヒノキ（試料番号２）
2．あすなろ属（試料番号８）
3．アサダ（試料番号10）
a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c









B．炭化材

1．くり（A区ＳＫ３）
2．カエデ属（S12カマド）
（a：木口、b：柾目、c：板目）

200μm：a
200μm：b、c

報告書抄録

書名（ふりがな）	山下（やました）遺跡・上野尻（かみのじり）遺跡
副書名	青森県新総合運動公園建設事業に伴う宮田地区埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第258集
編著者名	中村　哲也　　杉野森　淳子
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森市新城字天田内152-15　TEL 0177－88－5701　FAX 0177－88－5702
発行年月日	平成11年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山下（やました）遺跡	青森県青森市（あおもりけんあおもりし）大字宮田字玉水（おおあざみやたあざたまみず）340－1、外	02－201	01－277	40°50′15″	140°50′19″	980825 981031	4,500㎡	青森県新総合運動公園建設事業に伴う発掘調査
上野尻（かみのじり）遺跡	青森県青森市（あおもりけんあおもりし）大字矢田字上野尻（おおあざやだあざかみのじり）54、外	02－201	01－278	40°50′28″	140°50′58″	980701 980831	3,800㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山下遺跡	集落	平安時代 縄文時代後期	住居跡　溝　土坑 廃棄ブロック	土師器　須恵器 十腰内Ⅰ式土器 石器	外周溝付き竪穴住居跡
上野尻遺跡	集落 散布地	縄文時代後期 縄文時代前期～晩期	廃棄ブロック	瘤付き土器　石器	異形注口土器

青森県埋蔵文化財調査報告書第258集　山下遺跡・上野尻遺跡

―青森県新総合運動公園建設事業に伴う
青森市宮田地区埋蔵文化財発掘調査報告―

発行年月日　平成11年３月31日
発　　行　青森県教育委員会
〒030－0801　青森市新町二丁目３－1
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042　青森市新城字天田内152－15
TEL 0177－88－5701　FAX　0177－88－5702
印　　刷　不二印刷工業株式会社
〒030－0902　青森市合浦一丁目10－16
TEL 0177－41－5439　FAX　0177－41－2541

活彩あおもり

—輝くあおもり新時代—